

第46卷

ISSN 1348-5261
Vol. 46

帯広畜産大学
学術研究報告

RESEARCH BULLETIN

OF

OBIIHIRO UNIVERSITY

令和7年12月

December 2025

国立大学法人 帯広畜産大学

NATIONAL UNIVERSITY CORPORATION
OBIHIRO UNIVERSITY OF
AGRICULTURE AND VETERINARY MEDICINE
OBIHIRO, HOKKAIDO, JAPAN

帯広畜産大学学術研究報告 第46巻

目 次

自然科学分野

理学

クマイザサの一斉開花はヒメネズミの営巣場所選択に影響を及ぼすか？	
畠下真輝、佐々木乃莉、照内 歩、佐藤雅俊、押田龍夫	1
北海道の天然林における自動撮影カメラを用いたエゾモモンガの巣箱利用性の再検討	
小山七々子、照内 歩、押田龍夫	9
和歌山市で捕獲された移入クリハラリスの起源について	
押田龍夫、高野彩子、鳥居春己	20

環境科学

十勝地方を中心とした北海道におけるセミ科の分布記録	
山内健生	26

人文・社会科学分野

言語学

地名「樺太」の語源について	
落合いずみ	32

教育学

紛争地域におけるグローバルなマインドセットの育成と幼児教育：ミャンマーを事例として	
マーシャル・スミス	49

英語

ギャップを埋める：日本の中等学校における英語ライティング指導再考—シンポジウム報告	
寺内麻紀	54
ライティングサポートの再構築：オーストラリア・ニュージーランドのオンラインアプローチに学ぶ国際連携の可能性	
寺内麻紀	60

文学

ドイツ詩の文法（4）	
杉田聰	78

令和6年度帯広畜産大学大学院畜産学研究科修士学位論文題目	167
令和6年度帯広畜産大学畜産学研究科博士学位論文題目	173

RESEARCH BULLETIN OF OBIHIRO UNIVERSITY

CONTENTS

Natural Science

Physical Science

Does the simultaneous flowering of *Sasa senanensis* influence nesting site selection in the small Japanese field mouse (*Apodemus argenteus*)?

Masaki HATASHITA, Nori SASAKI, Ayumu TERUUCHI, Masatoshi SATO, Tatsuo OSHIDA 1

Re-examination of nest box utilization by the Siberian flying squirrel using automatic cameras in a natural forest in Hokkaido, Japan

Nanako KOYAMA, Ayumu TERUUCHI, Tatsuo OSHIDA 9

Origin of the invasive Pallas's squirrels captured in Wakayama City, Wakayama Prefecture, Japan

Tatsuo OSHIDA, Ayako TAKANO, Harumi TORII 20

Environmental science

Distributional records of cicadas (Hemiptera: Cicadidae) of Hokkaido (mainly Tokachi District), Japan

Takeo YAMAUCHI 26

Humanities

Linguistics

On the origin of the placename “karafuto” for Sakhalin

Izumi OCHIAI 32

Pedagogy

Cultivating a global mindset and early childhood education in conflict zones: a look at Myanmar

Marshall SMITH 49

English language

Bridging the Gap: Rethinking English Writing Instruction in Japanese Secondary Schools – A Symposium Report

Maki TERAUCHI HO 54

Reimagining Writing Support: Drawing Insights from Innovative Online Approaches in Australia and New Zealand for Global Collaboration

Maki TERAUCHI HO 60

Literature

Des deutschen Gedichtes Grammatik (4)

SUGITA Satosi 78

クマイザサの一斉開花はヒメネズミの営巣場所選択に 影響を及ぼすか？

畠下真輝¹・佐々木乃莉¹・照内 歩¹・佐藤雅俊²・押田龍夫¹

(受付：2025年4月30日，受理：2025年7月1日)

Does the simultaneous flowering of *Sasa senanensis* influence nesting site selection in the small Japanese field mouse (*Apodemus argenteus*)?

Masaki HATASHITA¹, Nori SASAKI¹, Ayumu TERUUCHI¹, Masatoshi SATO², Tatsuo OSHIDA¹

摘要

齧歯類では生息する環境や季節の変化に応じて、利用する採食資源や営巣資源の利用性が異なる種が存在する。多くの齧歯類にとって巣は生存を左右する重要な存在であり、営巣場所の選択は、行動圏内の資源利用性と関係する場合がある。そこで本研究では、齧歯類の営巣場所と採食資源の利用可能性に着目し、「より採食資源を得やすい環境にある巣を齧歯類が選択的に利用するか？」を検証した。

植物において、種子の豊凶に周期性が見られることは広く知られているが、ササ類は、数十年～百数十年という長いスパンの周期で一斉開花後、枯死して種子を大量に生産する。このため、枯死したササの群落が存在する場所は種子が大量に存在する環境へと変化する。2023年に北海道内でクマイザサ *Sasa senanensis* の一斉開花が確認され、数十年～百数十年ぶりに種子の大量生産が惹起された。ササの種子は齧歯類に資源として利用されることが知られており、本研究では、この貴重な機会を利用して、クマイザサの一斉開花と半樹上性のヒメネズミ *Apodemus argenteus* の営巣場所との関係を明らかにすることを目的とした。北海道富良野市に位置する東京大学北海道演習林のトドマツが優占し、林床にクマイザサが繁茂する針広混交林に調査区を設けて120個の巣箱を架設し、2023年の非積雪期（5～10月）に巣箱を利用するヒメネズミの観察および、2024年に巣箱架設木周囲の枯死したクマイザサの被度調査を行った。その結果、ヒメネズミに利用された巣箱と利用されなかった巣箱周囲の枯死したクマイザサの被度には有意な差が認められず、さらに、ヒメネズミの巣箱利用個体数が最も多かった7月において、1つの巣箱を利用する個体数とその巣箱周囲の被度には相関が見られなかった。これらの結果から、クマイザサの一斉

¹帯広畜産大学野生動物学研究室

¹Laboratory of Wildlife Biology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

²帯広畜産大学植生管理学研究室

²Laboratory of Vegetation Science, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

連絡先：押田龍夫，oshidata@obihiro.ac.jp

開花によってヒメネズミの営巣場所は影響されないことが示唆された。

キーワード : *Apodemus argenteus*, フェノロジー, 採食資源, 巣箱

緒 言

齧歯類では、同一種内においても、生息環境や季節変化に応じて利用する採食資源や営巣資源の利用性が異なる種が存在する。例えば、北海道の天然生広葉樹林に生息するタイリクモモンガ *Pteromys volans* の個体群は、大陸の針広混交林に生息する個体群 (Hanski et al. 1998) とは異なる採食資源利用性を示すことが報告されている (山口 2020)。さらに、種子を貯食することが知られているヒメネズミ *Apodemus argenteus* では、ミズナラ *Quercus crispula* とハリギリ *Kalopanax septemlobus* の種子豊作年において、豊富に存在する種子資源を日和見的に利用する可能性が示された (鈴木 2020)。また、資源利用性の変化に関連して、営巣場所を変化させる例も報告されている。例えば、ニホンリス *Sciurus lis* は主要な採食資源であるクルミ類の堅果を効率よく利用するため、季節によって営巣場所を変化させている可能性が報告されている (菊池ら 2016)。齧歯類にとって巣は休息、繁殖、捕食者および悪天候からの回避に利用される重要な場所である。このため、営巣場所を選択する際には、捕食リスク、採食資源の利用効率、および微気象等の要因間で最適な妥協点を見つける必要があると考えられている (Cudworth et al. 2011; Rosalino et al. 2011; Juškaitis et al. 2013)。これらの背景を踏まえて、本研究では、「齧歯類の営巣場所と採食資源の利用可能性」に着目し、存在量の変動が著しい採食資源を対象に、その変動に対する齧歯類の営巣場所の変化に関する検討を行う。

植物において、種子の豊凶に周期性が見られるることは広く知られているが (吉野 2003)、ササ類は、数十年～百数十年という長いスパンの結実周期を持ち、豊作年では広範囲に生育する多くの個体が一斉開花し、種子を大

量に生産した後、枯死することが報告されている (蒔田ら 2010)。ササ類の種子には、散布に有利に働く機能的な構造が特に認められず、結実後の種子は開花場所に落下する (北海道水産林務部 2023)。このため、枯れたササの群落が存在する場所はササの種子が大量に存在する環境へと変化する。

ササ類は、アカネズミ *Apodemus speciosus* やヒメネズミといった森林性齧歯類によって、種子は採食資源として利用され (Wada 1993; 三浦ら 2006; Sakamoto et al. 2012; Teixeira et al. 2017; Sato et al. 2018; Suzuki et al. 2023)，葉についてもヒメネズミが営巣資源として利用することが知られている (伊藤ら 2023)。また、ササ類は日本の森林において林床を優占することが多く (呉ら 2019)，その生育密度が高い場所ではヒメネズミやアカネズミによる落下したミズナラの堅果の利用性亢進がみられ、捕食者からの隠蔽効果を有すると考えられている (Wada 1993)。このようにササ類は森林性齧歯類の生態に様々な影響を与えることが知られており、「齧歯類の営巣場所と採食資源の利用可能性」を検討する本研究において恰好の研究対象であると考えることができる。2023年に北海道内においてクマイザサ *Sasa senanensis* の一斉開花が確認された。その開花範囲は広大で、南は函館近辺から北は稚内に至り、さらには利尻島、礼文島でも観察され、特に旭川から北では開花が顕著であった (明石 2024)。

そこで本研究では、この滅多に得ることができないクマイザサの開花状況を利用し、ヒメネズミによる営巣場所の選択性を検証することを試みた。ヒメネズミは日本の固有種であり、北海道、本州、四国、九州および、面積約 150km² 以上の島嶼部にまで広く分布し (阿部ら 2005)，低地から高山帯までの森林に主に生息する (藤巻 1970)。通常は地上で生活しており、草本層や低木層

が発達し、立木が近接した環境を選好すること（関島ら 2001）や、重要な営巣資源かつ採食資源と考えられるミズナラの木の根元に高頻度で巣穴を構えること（瀬戸口 1981）が報告されている。そして、繁殖期を中心として樹上での活動が活発となり、繁殖や休息場所として樹洞やその代替となる人工の巣箱を利用する（Sekijima 2001; Shibata et al. 2009; Suzuki et al. 2012）。また、小型かつ夜行性であるため直接観察は困難であるが、人工の巣箱を用いることで生態調査が可能となる（藤巻 1970; 安藤 2005）。加えて、ヒメネズミの行動圏は、およそ 871 ~ 1,242 m²であることが報告されており（瀬戸口 1981），ササ群落のような局所環境の変化の影響を検討する際に適した研究対象種であると考えられる。ヒメネズミは一斉開花によって、大量に生産されたクマイザサの種子を採食資源として利用する可能性が考えられ、‘地上に存在するササの種子がより多い環境に設置された巣箱を選択的に利用するかもしれない’。本研究ではこの仮説を検証することを目的として、ヒメネズミの巣箱利用とその巣箱周囲の枯死した（ササの実を供給した）クマイザサの被度との関係を調べた。

方 法

調査地及び調査期間

北海道富良野市に位置する東京大学北海道演習林内（面積約 22,717ha；北緯 43° 10' ~ 20'，東経 142° 18' ~ 40'；図 1）に調査区（51 林班内）を設定し、ヒメネズミの巣箱利用状況調査および枯死したクマイザサの被度調査を行った。本調査区は面積約 5.4ha のトドマツ *Abies sachalinensis* が優占する天然の針広混交林であり、林床はクマイザサが優占する。調査期間は非積雪期である 2023 年および 2024 年の 5 月～10 月とした。なお、2023 年については、ヒメネズミの巣箱利用状況に関する調査を行い、枯死したクマイザサの被度調査については、2023 年におけるササの開花（枯死）が明瞭に判別可能な 2024 年の春季～夏季の間に実施した。以下に調査方法の詳細を記す。

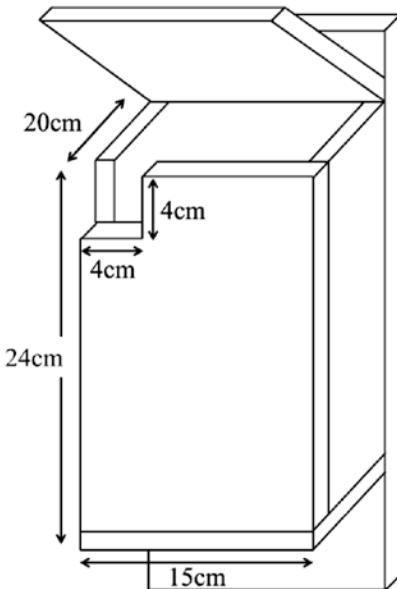


図 1. 調査で使用したヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) 用巣箱の構造および大きさ。

巣箱の設置

巣箱の大きさは柳川（1994）に従い、高さ 24cm、幅 15cm、奥行き 20cm とし、入り口を 4cm × 4cm とした。また、内部を観察するために天板の開閉を可能にした（図 1）。

本研究では、2010 年より本調査地に既設されている 120 個の巣箱を継続して使用した。巣箱架設木については、樹種を定めず、20 ~ 30m の間隔で 60 本の樹木（配列：20 行 × 3 列）が選択されている。これらの各架設木の樹幹に、2010 年 5 月に地上約 3m の高さに 1 個ずつ計 60 個の巣箱が方角を定めずに架設され、さらに、2015 年 5 月に同架設木の地上約 1m の高さにも 1 個ずつ計 60 個の巣箱が、上方の巣箱と同方向となる様に追架設されている（定樋 2017）（図 2）。架設された 3m（以下‘高所’）および 1m（以下‘低所’）の高さの巣箱にはそれぞれ 1 ~ 60 までの番号が付けられた。

ヒメネズミによる巣箱利用の観察

2023 年の調査期間中に、月に 1 回の頻度で日中に巣箱内部の観察を行った。ヒメネズミによる巣箱利用の有無を確認し、巣箱内にヒメネズミがいた場合は、捕獲後に、性別、体重、および齢を記録した。なお、齢区分に

については立石（2006）に従い、14.1g以上を成獣、10.1～14.0gを亜成獣、10.0g以下を幼獣と定義した。これらの作業後に個体は速やかに放獣した（帯広畜産大学動物実験計画承認番号：第23-67）。捕獲したヒメネズミの個体数については月ごとに集計を行った。

調査期間を通して、一度でもヒメネズミが捕獲された巣箱を‘利用された巣箱’とし、また、高所或いは低所に関わらず、利用された巣箱が設置された樹木を‘利用された巣箱架設木’として扱った。

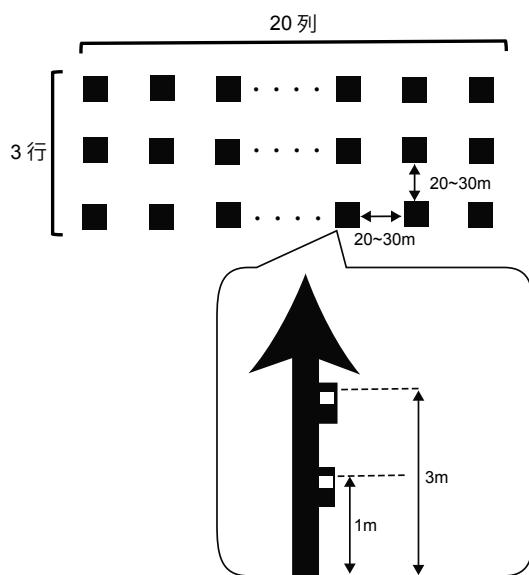


図2. 調査区に架設したヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) 調査用巣箱の配置および架設高。

ササの被度調査

2023年にクマイザサの開花が本調査区において認められたが、既述の通りその全体像を把握することは困難であった。しかしながら、2024年5月の調査において、開花した全てのササの枯死を確認することができた（図3）。各々の巣箱架設木を中心とした半径10m以内のエリアにおいて、巣箱架設木の東西南北の位置に計4ヶ所の方形区（1m × 1m）を設置し、方形区内の枯死したクマイザサの量を被度（%，目測）で記録した。被度の区分は、方形区の大きさに対して10%刻みでの評価とした。架設木ごとに4ヶ所の方形区の平均値を求め、この値を当該架設木周囲の枯死したササの被度として扱った。なお

ササの被度については、枯死したササに加えて、生残しているものや2024年に芽吹いた新芽も存在していたが、これらは扱わなかった。



図3. 調査区内における枯死したクマイザサ (*Sasa senensis*) の群落。

統計解析

ヒメネズミの利用があつた巣箱架設木となかった巣箱架設木の間で、枯死したササの被度をMann-WhitneyのU検定（有意水準5%）を用いて比較した。加えて、調査期間中、最もヒメネズミの捕獲数が多かった月において、各巣箱で捕獲された個体数とその巣箱架設木周囲のササ被度との相関をスピアマンの相関係数を用いて調べた。

結 果

2023年の調査期間を通して、120個の巣箱のうち44個（高所16個、低所28個）でヒメネズミが捕獲され、60本の巣箱架設木中、37本でヒメネズミの利用が確認された。ヒメネズミの捕獲個体数は計288個体であり、各月ごとの捕獲個体数は図4に示した通りである。捕獲個体数が最も多かったのは7月で、その数は68個体であった。また、利用された巣箱は19個で、これらの架設木は18本であった。

各巣箱架設木周囲の枯死したササの被度については、

10%増加ごとに分けて該当する巣箱数との関係を図5に記した。全体の平均は $15.3 \pm 15.6\%$ (平均 \pm 標準偏差) であり、ヒメネズミに利用された巣箱架設木では $14.7 \pm 16.3\%$ 、利用されなかった巣箱架設木では $16.1 \pm 14.3\%$ であった。Mann-Whitney の U 検定を用いて両者を比較した結果、有意な差は認められなかった ($P > 0.05$)。さらに、ヒメネズミの巣箱利用個体数が最も多かった7月において、巣箱ごとの捕獲個体数と枯死したササの被度の間には相関がみられなかった ($r = 0.1$, $P = 0.7$) (図6)。

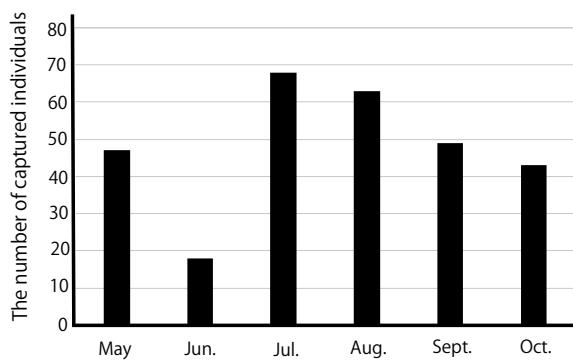


図4. 2023年における月別のヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の捕獲個体数。

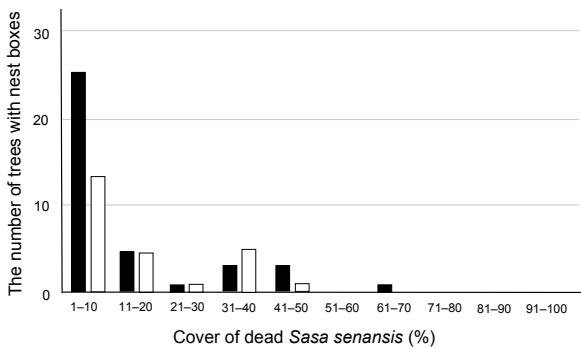


図5. 巣箱架設木とその周囲の枯死したクマイザサ (*Sasa senensis*) の被度との関係。被度が 10% 増加ごとに区分し、該当する巣箱数を示した。黒色バーはヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) による利用があった巣箱の架設木、白色バーは無かった架設木を示す。



図6. 巣箱架設木周囲の枯死したクマイザサ (*Sasa senensis*) の被度と 2023 年 7 月に各巣箱で捕獲されたヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の個体数との関係。

考 察

本研究では、採食資源利用性に焦点を絞り、クマイザサの一斉開花で地上に採食資源（クマイザサの種子）が大量に生産され、ヒメネズミはこれを効率よく利用するために、より資源入手しやすい営巣場所を選択するであろうと予測を立てた。しかしながら、ヒメネズミに利用された巣箱架設木と利用されなかった巣箱架設木において、それらの周囲の枯死したササの被度に違いは認められず、地上にクマイザサの種子が大量に存在する環境に架設された巣箱を本種が選択的に利用するわけではないことが示された。

ササの種子は、数十年～百数十年に一度という長い周期で大量生産されるが、通常ヒメネズミの生息地には存在せず、木本植物の堅果や果実等のように結実量の周期的変動はあるもののある程度安定的に得られる採食資源とは大きく異なる性質を持つ。このため、クマイザサの種子は存在すれば採食資源として利用される可能性はあるが、ヒメネズミはこれに依存して生活するわけではなく、その営巣場所の決定に影響を与えるほどの重要な採食資源ではなかった可能性が考えられる。

また、最も捕獲個体数が多かった7月の各巣箱の捕獲個体数と各巣箱周囲の枯死したササの被度には相関が見られなかった。関島（1997）は、ヒメネズミが初夏から秋にかけて繁殖のため活発に樹上を利用すると報告しており、本研究におけるヒメネズミの捕獲個体数も7月に

多かったと考えられるが、その営巣場所は枯死したササの被度に影響されなかった。このことからもクマイザサの種子資源の豊作は本種の営巣行動とは関係ないことが示された。

ヒメネズミの寿命は最長でも 27 ヶ月程であり (Nakata et al. 2015), 長期の結実周期を有するササ類が偶発的に提供する採食資源に対しては、適応を示さないことが示唆された。しかしながら、今回の研究では、ヒメネズミによる資源（ササの種子）そのものの消費量については分析することができなかったため、本種によるササ種子の日和見的な利用については検証できなかった。数十年～百数十年以上のスパンで供給される資源とヒメネズミによるその消費量との関係は今後の興味深い研究課題であろう。

植物のフェノロジーとこれに影響される小型哺乳類との関係についてはこれまでに様々な研究が行われている（例えば、奥村ら 2006; 鈴木 2020; Suzuki et al. 2023）。本研究では、数十年～百数十年に 1 回という希少な機会を利用してササの種子を調査対象としたが、今後ヒメネズミの営巣場所とその利用資源との関係を調べるためには、ヒメネズミが通常利用する採食資源の中から適当な指標となるものを選択して調査を行う必要があるだろう。

謝 辞

本研究を行うにあたり、東京大学北海道演習林の職員の皆様方に大変お世話になった。心より御礼申し上げたい。そして、研究に関して御指導を賜わった帯広畜産大学野生動物管理学研究室の柳川 久教授、浅利裕伸准教授、長沼知子助教、同保全生態学研究室の赤坂卓美准教授に心から感謝したい。また、同野生動物学研究室の大学院生、学生の皆様には多くの支援や助言、激励を頂いたことを心から感謝したい。

引用文献

- ・明石信廣. 2024. 渡島半島から宗谷岬まで：2023 年北海道におけるクマイザサの一斉開花. 日本生態学会第 71 回大会 自由集会 W21-1. <http://www.esj.ne.jp/meeting/abst/71/W21-1>
- ・阿部 永, 石井信夫, 伊藤徹魯, 金子之史, 前田喜司雄, 三浦慎吾, 米田政明. 2005. 日本の哺乳類（財団法人自然環境研究センター編）[改訂版], 206 pp. 東海大学出版会, 神奈川県.
- ・安藤元一. 2005. 樹上性齧歯類を対象とした巣箱調査法の検討. 哺乳類科学 45: 165-176.
- ・Cudworth LN, Koprowski LJ. 2011. Importance of scale in nest-site selection by Arizona gray squirrels. The Journal of Wildlife Management 75: 1668-1674.
- ・藤巻裕蔵. 1970. 日本の哺乳類 (9) : げつ歯目アカネズミ属ヒメネズミ. 哺乳類科学 19: 1-11.
- ・Hanski IK, Monkkonen M, Reunanen P, Stevens P. 1998. Ecology of the Eurasian flying squirrel (*Pteromys volans*) in Finland. Goldingay R and Scheibe J (eds), Biology of Gliding Mammals, pp. 67-86, Filander Verlag, Fürth.
- ・北海道水産林務部. 2023. 一生に一度出会えるかどうかのササの開花について. https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/1/0/5/5/7/8/2/3/_/%E3%80%90R5%E5%B9%B48%E6%9C%88%E3%80%91%E3%82%B5%E3%82%B5%E3%81%AE%E9%96%8B%E8%8A%B1%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6.pdf (2025 年 4 月 25 日確認)
- ・伊藤茉美, 佐藤雅俊, 押田龍夫. 2022. 北海道の山間部天然林においてヒメネズミ *Apodemus argenteus* が巣材に利用する植物種の選好性. 帯広畜産大学学術研究報告 44: 105-116.
- ・定梶さくら. 2017. 北海道山間部天然林における巣箱を用いたヒメネズミ *Apodemus argenteus* に関する基礎生態学的研究, 68 pp. 帯広畜産大学修士論文, 帯広.

- Juškaitis R, Balčiauskas L, Šiožinytė V. 2013. Nest site selection by the hazel dormouse *Muscardinus avellanarius*: Is safety more important than food? *Zoological Studies* 52:53.
- 菊池晏菜, 西千秋, 出口善隆. 2016. 盛岡市の都市近郊林に生息する二ホンシリスの営巣生態の季節変化. 哺乳類学会 56: 129-134.
- 岸 崇洋, 田中凌太, 藤好恭平, 服部一華, 赤路康朗, 廣部宗, 坂本圭児. 2019. ブナ林下層に生息するチシマザサ (*Sasa kurilensis* Makino et Shibata) の群落構造に影響を与える環境要因. 日本緑化工学会誌 45: 103-108.
- 蒔田明史, 鈴木準一郎, 陶山佳久. 2010. Bamboo- その不思議な生活史. 日本生態学会誌 60: 45-50.
- 三浦優子, 沖津進. 2006. ササ群落と岩塊地の境界部における野ネズミのミズナラ堅果運搬・貯蔵行動と実生の分布. 森林立地学会誌 48(1): 25-31.
- Nakata K, Saitoh T, Iwasa MA. 2015. *Apodemus argenteus* (Temminck, 1844). Ohdachi SD, Ishibashi Y, Iwasa MA, Saitoh T (eds), *The Wild Mammals of Japan*, pp. 178-179, Shoukadoh, Kyoto.
- 奥村みほ子, 安田雅俊, 福井晶子, 柴田鏡江, 中村徹. 2006. 埋没式巣箱でわかる森林性ネズミ類の冬季資源利用. 第117回日本森林学会大会 セッション ID: PF26. <https://doi.org/10.11519/jfsc.117.0.704.0>
- Rosalino ML, Ferreira D, Leitao L, Santos-Reis, M. 2011. Selection of nest sites by wood mice *Apodemus sylvaticus* in a Mediterranean agro-forest landscape. *Ecological Research* 26: 445-452.
- Sakamoto SH, Suzuki SN, Degawa Y, Koshimoto C, Suzuki RO. 2012. Seasonal habitat partitioning between sympatric terrestrial and semi-arboreal Japanese wood mice, *Apodemus speciosus* and *A. argenteus* in spatially heterogeneous environment. *Mammal Study* 37: 261-272.
- Sato J, Shimada T, Kyogoku D, Komura T, Uemura S, Saitoh T, Isagi Y. 2018. Dietary niche partitioning between sympatric wood mouse species (Muridae: *Apodemus*) revealed by DNA meta-barcoding analysis. *Journal of Mammalogy* 93: 952-964.
- 関島恒夫. 1997. 足跡法によるヒメネズミとアカネズミの垂直的ハビタット利用の評価. 日本生態学会誌 47: 151-158.
- 関島恒夫, 山岸学, 石田健, 大村和也, 澤田晴雄. 2001. 森林伐採後の植生回復初期過程におけるヒメネズミ *Apodemus argenteus* とアカネズミ *A. speciosus* の個体群特性. 哺乳類科学 41: 1-11.
- Sekijima T. 2001. Seasonal change in the nesting sites of *Apodemus argentens*. *Journal of Zoology* 254: 321-323.
- 濱戸口美恵子. 1981. ヒメネズミの巣穴利用とホームレンジ. 日本生態学会誌 31: 385-394.
- Shibata F, Kawamichi T. 2009. Female-biased sex allocation of offspring by an *Apodemus* mouse in an unstable environment. *Behavioral Ecology and Sociobiology* 63: 1307-1317.
- Suzuki K, Yanagawa H. 2012. Different nest site selection of two sympatric arboreal rodent species, Siberian flying squirrel and small Japanese field mouse, in Hokkaido, Japan. *Mammal Study* 37: 243-247.
- Suzuki H, Kajimura H. 2023. How much do field mice prefer dwarf bamboo seeds? Two-choice experiments between seeds of *Sasa borealis* and several tree species on the forest floor. *Ecology and Evolution* 13:10
- 鈴木野々花. 2020. 北海道の冷温帶落葉広葉樹林における樹上性小型哺乳類による種子貯食と種子の豊凶について, 帯広畜産大学学術研究報告 41: 54-60.
- 立石 隆. 2006. 尾瀬地域におけるヒメネズミの繁殖活

- 動. 哺乳類科学 46: 161-167.
- Teixeira D, Carrilho M, Mexia T, Kobel M, Santos MJ, Santos-Reis M, Rosalino LM. 2012. Management of *Eucalyptus* plantations influences small mammal density: Evidence from southern Europe. Forest Ecology and Management 385: 25-34.
- Wada N. 1993. Dwarf bamboos affect the regeneration of zoochorous trees by providing habitats to acorn-feeding rodents. Oecologia 94: 403-407.
- 山口 翠. 2020. 北海道の天然生広葉樹林に生息するタイリクモモンガ *Pteromys volans* の資源利用性. 帯広畜産大学学術研究報告 41: 40-53.
- 柳川 久. 1994. 小鳥用巣箱を用いたエゾモモンガの野外研究. 森林保護 241: 20-22.
- 吉野 豊. 2003. 15年間のケヤキ種子生産量の変動と豊凶に関与する要因. 日本森林学会誌 85: 199-204.

Does the simultaneous flowering of *Sasa senanensis* influence nesting site selection in the small Japanese field mouse (*Apodemus argenteus*)?

Some rodent species experience differences in the availability of foraging and nesting resources within their habitats, due to seasonal or constant environmental changes. For many rodents, nests are important for survival, and the selection of nesting sites may be influenced by the availability of resources within their home range. In this study, we investigated the relationship between rodent nesting sites and the availability of foraging resources, and examined whether rodents selectively use nests located in environments where foraging resources are more readily available.

Plants exhibit a certain cyclical pattern in seed production. *Sasa* species, in particular, produce large

quantities of seeds when they flower simultaneously and subsequently die, in a long cycle that occurs over several decades to more than a hundred years. Therefore, locations with dead *Sasa* plants contain a large amount of seeds. In 2023, a widespread simultaneous flowering of *Sasa senanensis* was observed in Hokkaido, Japan, leading to a large input of seeds into the forests. *Sasa* seeds are used as a food resource by rodents. This study aimed to use this valuable opportunity to clarify the relationship between the simultaneous flowering of *S. senanensis* and the nesting site selection of the small Japanese field mouse (*Apodemus argenteus*), a semi-arboreal rodent. We established the study site in an *Abies sachalinensis*-dominated mixed coniferous forest with *Sasa senanensis*-dominated forest floor at the University of Tokyo Forest in Furano, Hokkaido, Japan. In 2023, we installed 120 nest boxes, and observed the number of *A. argenteus* individuals using them. In 2024, we surveyed the ground cover of dead *S. senanensis* around the trees with installed nest boxes. We found no significant difference in the amount of dead bamboo around trees with nest boxes used by mice compared with those around trees with unused nest boxes. The highest number of mice using nest boxes was recorded in July. Furthermore, no correlation existed between the number of mice using a single nest box and the amount of dead bamboo around the tree where the box was installed. These results suggested that the nesting site selection of *A. argenteus* was not affected by the simultaneous flowering of *S. senanensis*.

北海道の天然林における自動撮影カメラを用いた エゾモモンガの巣箱利用性の再検討

小山七々子・照内 歩・押田龍夫

(受付 : 2025 年 4 月 30 日, 受理 : 2025 年 7 月 1 日)

Re-examination of nest box utilization by the Siberian flying squirrel using automatic cameras in a natural forest in Hokkaido, Japan

Nanako KOYAMA, Ayumu TERUUCHI, Tatsuo OSHIDA

摘要

樹上性小型哺乳類の生態調査において巣箱は有用な道具の一つであり、小型哺乳類によるその利用率を正確に把握することは、調査データの信憑性を示すために重要である。エゾモモンガでは、これまでに一定の調査頻度で巣箱内部を確認した結果からその利用率が算出されているが、巣箱を長期間観察した自然状態での巣箱利用率は明らかになっていない。そこで本研究では、先行研究で実施された一定頻度での巣箱の直接観察（捕獲調査）の結果から求めた巣箱利用率と自動撮影カメラを用いた常時観察結果による利用率を比較し、非積雪期におけるエゾモモンガの巣箱利用率の再検討を試みた。2024 年 5 月～9 月に北海道富良野市に位置する東京大学北海道演習林において、自動撮影カメラを用いた調査を行った。調査地内に設置されていた巣箱計 60 個のうち、直接観察による先行研究でエゾモモンガの利用が確認された 21 個の巣箱正面に自動撮影カメラを設置し（稼働時間 16:00～翌 7:00）、巣箱利用行動を観察した。本研究で求めた巣箱利用率とこれまでに得られた直接観察による巣箱利用率を調査期間全体で比較した結果、両者に有意差は見られず、巣箱利用率の調査は月に 1 度の頻度で十分であることが示唆された。一方、月ごとに比較してみると 6 月の利用率では直接観察の結果が有意に高くなっている。これは過大評価である可能性が示された。短期間のデータの扱いについては注意が必要であろう。今後、本調査方法で継続的に調査を実施することで、エゾモモンガの行動生態の包括的な解明へ繋がることが期待される。

キーワード : *Pteromys volans orii*, 巣箱利用率, トドマツ優占針広混交林

帯広畜産大学野生動物学研究室

Laboratory of Wildlife Biology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

連絡先 : 押田龍夫, oshidata@obihiro.ac.jp

緒 論

タイリクモモンガ *Pteromys volans* の一亜種であるエゾモモンガ *P. volans orii* (以下、本亜種) は、北海道の森林に広く分布する滑空性、そして夜行性のリス科動物である (藤巻 1963)。本亜種は、主に樹洞をねぐらとし (浅利ら 2008)，初春～夏の繁殖期には、育仔のためにこれを利用する (柳川 1999)。また、本亜種は行動圏内に複数の巣を持ち、頻繁に引っ越しをすることが明らかになっている (浅利ら 2008; Oshida et al. 2018; 菊池 2022)。これは、同じ巣の長期連続使用を避けることで、外部寄生虫の発生および増殖による巣内環境の悪化を防ぐための行動であると推測されている (Carey et al. 1997; 柳川 1999)。

一つの巣がどのくらいの頻度で本亜種に利用されるのかについては、樹洞の代替となる巣箱を用いた調査結果が報告されている (例えば、増田 2003)。本亜種は夜行性かつ小型であることから、野外での直接観察および捕獲といった調査手法は困難であるが、巣箱の架設により、個体の捕獲および巣の内部の観察を容易に行うことができる (山口ら 1995; 浅利ら 2008)。ただし、この手法で得られる情報は、調査者が調査地を訪れた際のデータに限定されており、営巣場所を頻繁に変える本亜種により 1 つの巣箱が実際にどの程度の割合で利用されるのか (以下、巣箱利用率) は不明である。しかしながら、近年自動撮影カメラの性能が向上したことで、野生動物へのストレスを最小限に抑えながら幅広く営巣に関するデータを集められるようになった (例えば、Tremaine et al. 2014)。例えば、イギリスでは自動撮影カメラを用いることによって、キタリス *Sciurus vulgaris* の巣箱の利用性およびその保全策としての巣箱の有効性を評価する研究が行われている (de Raad et al. 2021)。このように、自動撮影カメラを用いることで樹上性小型哺乳類の野外での活動を観察することが可能となり、本亜種においてもこれを利用した継続的な観察を行うことで巣箱利用率を明らかにすることが可能であると考えられる。

北海道富良野市に位置する東京大学北海道演習林にお

いて、月に一回の頻度で実施された複数の巣箱を用いた本亜種の捕獲調査結果から、本亜種により利用される巣箱には偏りが見られることが示された (村上 2023)。しかしながら、調査のために捕獲された個体は放逐後、その日のうちに捕らえられた巣箱から他の巣に移動する傾向があり (山口ら 1995)，捕獲調査による研究では捕獲時の刺激 (人為的ストレス) などによって本亜種の行動が変化する可能性が考えられる。また、既述の通り、本亜種は行動圏内に複数の巣を構え頻繁に引っ越しを行うため、調査の頻度が少ない場合、巣箱利用率を過大評価もしくは過小評価してしまう可能性がある。以上の理由から、捕獲調査によって求められた本亜種の巣箱利用率は、本亜種の自然状態での巣箱利用率とは異なることが考えられ、正確な巣箱利用率を把握することは、本亜種の生態を解明するために重要な課題である。

そこで本研究では、自動撮影カメラを用いた継続的な観察を行うことで、人為的ストレスを与えずに本亜種による自然状態の巣箱利用率を明らかにすることを目的とした。そして、その利用率を過去に行われた捕獲調査の結果から求めた巣箱利用率と比較し、本亜種の巣箱利用率の再検討を行った。これに加えて、自動撮影カメラの映像から本亜種が巣箱を利用する際の行動を記録し、巣箱利用時の行動学的特徴の解明を試みた。

方 法

調査地および調査区

北海道富良野市に位置する東京大学北海道演習林 (面積約 22,717ha; 北緯 43° 10' ~ 20', 東経 142° 18' ~ 41') 内において、約 5.4ha の面積を占めるトドマツ *Abies sachalinensis* 優占天然針広混交林 (97 林班) を調査区と定めた。

巣箱の設置

調査区内には、2007 年より、1 ~ 60 番までの通し番号が付いた計 60 個の巣箱が継続して設置されており、本研究においてもこれらを引き続き利用した。巣箱が設

置された樹木間の距離は約 20 ~ 30m であり、巣箱は樹種や方向は定めず樹幹に設置されていた。調査区における巣箱の配置は 1 列 20 個のライントランセクトが 3 列であり、その設置高は地上から約 3m であった。

設置した巣箱の大きさは、高さ 24cm、幅 15cm、奥行 20cm、入り口の大きさは 4 × 4cm であった (柳川 1994)。また、巣箱の内部を観察するため、天板の開閉が可能な構造であった。

自動撮影カメラの設置および調査期間

2021 年および 2022 年に行われた調査 (村上 2023) において本亜種による利用が確認された 4 ~ 8 番、17 ~ 22 番、24 番、28 ~ 30 番、34 番、46 ~ 48 番、54 番、58 番の計 21 個の巣箱の正面に、赤外線センサー付自動撮影カメラ (Ltl-Acorn6210PLUS 標準タイプ, Ltl-Acorn, China) を巣箱正面が画角の中心に映るように約 2 ~ 3m 離れた樹幹に設置し、本亜種の巣箱利用行動を観察した (帯広畜産大学動物実験届出番号: 第 24-26 更新)。

2024 年において、非積雪期である 5 ~ 9 月を調査期間とし、月に一度の頻度で、日中に自動撮影カメラの点検を行い、必要に応じてバッテリーおよび SD カードの交換を行った。本亜種は夜行性であることから (山口ら 1995)，日没から日の出までの時間帯をカバーするため、自動撮影カメラの稼働時間帯を 16 ~ 翌 7 時に設定した。また、1 動画あたりの撮影時間は 30 秒、インターバルは 0 秒に設定した。撮影期間は調査期間と同様に 2024 年 5 ~ 9 月とした。

データの収集

自動撮影カメラによって得られた動画データから、撮影日時および確認された動物種を記録した。そのうち、本亜種が確認された動画データについては、巣箱の出入りや行動を記録し、巣箱の出入りを行った場合のみ、本亜種による ‘巣箱利用’ として扱った。得られた結果について、各月の巣箱利用率を以下の式により算出した。

$$\text{巣箱利用率} (\%) = (\text{巣箱利用日数} / \text{自動撮影カメラ稼働日数}) \times 100$$

さらに、本研究で観察対象巣箱の選択に用いた村上 (2023) の捕獲調査の結果から得られた利用巣箱数とのべ観察巣箱数のデータに基づき、直接観察による本亜種の巣箱利用率を算出した。

本亜種の行動については以下の 9 つのカテゴリーに分けて記録し、季節ごとに各行動の割合を算出した (5 ~ 6 月を春期、7 ~ 8 月を夏期、9 月を秋期として分類した)。

行動カテゴリーとその定義

- ①巣材の搬入搬出…巣材を口でくわえて巣箱を出入りする行動
 - ②仔の搬入搬出…仔を口でくわえて巣箱を出入りする行動
 - ③不明物体の搬入搬出…口に何かをくわえて巣箱を出入りしているが、これが不明であった場合
 - ④訪問…巣箱へ訪問した個体が入口に興味を示す行動 (巣箱利用は無し)
 - ⑤確認…個体が巣箱全体を確認するような行動 (巣箱の入口には無関心で巣箱利用は無し)
 - ⑥休息…個体が巣箱の天板上に留まる行動
 - ⑦様子覗い…個体が巣箱入口から外の様子を伺う行動
 - ⑧複数個体…2 個体が同時に撮影され、少なくとも 1 個体は巣箱を利用 (2 個体とも巣箱を利用しなかった場合はカウントしなかった)
 - ⑨発声…動画内で本亜種による鳴き声を確認 (① ~ ⑧ の行動と同時に起こった場合は両方をカウントした)
- 自動撮影カメラを長期間使用する場合、バッテリーの消耗や故障等により、撮影できない期間が生じることが懸念される。全ての自動撮影カメラの撮影結果を同じ条件で比較・検討するため、1 台のカメラを 100 日間作動させた場合の撮影回数である撮影頻度指数 (以下、RAI : Relative Abundance Index) を以下の式により算出した (福田ら 2008 ; 水谷ら 2018)。
- $$\text{RAI} = (\text{撮影回数}[回] / \text{カメラ稼働日数}[日]) \times 100[日]$$

データの解析

全てのデータの解析には R ver. 4. 3. 1 (R Core

Team 2023) を使用した。

2024 年の 5 ~ 9 月の間に自動撮影カメラによって得られた巣箱利用確認動画数のデータを各月でまとめ、連続した月間で本亜種による巣箱利用日数に変化があるのかをフィッシャーの正確確率検定を用いて比較した。さらに、連続した季節間（春期－夏期、夏期－秋期）で、9 つのカテゴリーに分類された行動の頻度に変化があるのかを調べた。

村上 (2023) の捕獲調査の結果から求めた巣箱ごとの巣箱利用率および本研究の結果から求めた巣箱ごとの巣箱利用率の正規性をそれぞれ Shapiro-Wilk 検定を用いて確認した。その結果、正規性が見られず ($P < 0.05$)、かつ、データ中に複数の同値が含まれたため、ウィルコクソンの順位和検定を用いて両者を比較し、調査手法の違いによって巣箱利用率に違いが見られるのかを検討した (R による解析では、exactRankTests パッケージ内の wilcox.exact 関数を用いた)。また、村上 (2023) の捕獲調査の結果から求めた巣箱利用日数および本研究の結果から求めた巣箱利用日数をフィッシャーの正確確率検定を用いて月ごとに比較し、調査手法の違いによって月ごとの巣箱利用日数に違いが見られるのかを検討した。

結 果

本亜種による巣箱利用

調査期間を通して撮影された動画の総数は 2,206 本であった。そのうち本亜種が確認された動画数は 666 本 (30.19%) であり、本亜種による巣箱利用が確認された動画数は 285 本 (12.92%) であった。また、本亜種以外に撮影された動物とその撮影動画数は、鳥類 92 本 (4.17%)、エゾクロテン *Martes zibellina brachyura* 4 本 (0.18%)、コウモリ類 3 本 (0.14%)、不明 21 本 (0.95%) であった。各月における巣箱ごとの総撮影動画数は表 1 に示した。

各月における巣箱ごとの本亜種の撮影動画数および本亜種による巣箱利用が確認された動画数を表 2 に示した。調査期間を通して、4 番と 29 番の巣箱正面に設置し

た自動撮影カメラでは本亜種は撮影されなかった。また、5 番、17 番、20 番、28 番、46 番の巣箱正面に設置した自動撮影カメラでは、本亜種は撮影されたものの巣箱利用は確認できなかった。本亜種による巣箱利用が確認された動画数は、調査期間を通して 47 番 (98 本) の巣箱で最も多く、次いで 18 番 (60 本)、54 番 (28 本) の順であった。

月ごとに RAI を算出し表 3 に示した。動画撮影 RAI は 7 月 (141.78) に最も高い値を示したが、本亜種撮影 RAI (40.71) および本亜種の巣箱利用が確認された RAI (22.73) は 5 月に最も高い値を示した。

巣箱ごとに、本亜種による巣箱利用が確認された各月の日数を表 4 に示した。本亜種による利用日数が最も多かった巣箱は、5 月では 47 番 (26 日)、6 月では 18 番 (8 日)、7 月では 58 番 (5 日)、8 月では 54 番 (6 日)、9 月では 34 番 (5 日) であり、調査期間を通して継続的利用が確認された巣箱はなかった。また、各月の本亜種によるのべ巣箱利用日数は、5 月が 63 日、6 月が 26 日、7 月が 13 日、8 月が 8 日、9 月が 13 日であり、5 月が最多であった (表 4)。

5 月と 6 月および 6 月と 7 月では、本亜種の巣箱利用日数は有意に異なっており ($P < 0.05$; フィッシャーの正確確率検定)、両比較において巣箱利用日数の減少が認められた。しかしながら、7 月と 8 月および 8 月と 9 月では、巣箱利用日数に有意な違いが見られなかった ($P > 0.05$; フィッシャーの正確確率検定)。

本亜種による巣箱利用が確認された日数に基づいて、各月における巣箱ごとの巣箱利用率を算出し、表 4 に示した。本亜種による巣箱利用率が最も高かった巣箱番号は 5 月では 47 番 (83.87%)、6 月では 18 番 (26.67%)、7 月では 58 番 (16.13%)、8 月では 54 番 (19.35%)、9 月では 34 番 (16.67%) であった。また、調査期間を通して利用率が最も高かったのは 47 番 (18.95%) であり、次いで 18 番 (11.11%)、7 番 (10.46%) の順であった。各月の巣箱利用率の平均値は 5 月 (9.68% \pm 19.68) が最も高く、その後 6 月 (4.13% \pm 6.89)、7 月 (2.00% \pm 4.61) と減少を続け、8 月 (1.23% \pm 4.28) に最小

値を記録したが、9月は2.06% ± 4.77に增加了。

本亜種が撮影された巣箱数は5月に13個、6月に16個、7月に11個、8月に12個、9月に13個であり、本亜種の利用が確認された巣箱数は、5月と6月に9個、7月と9月に4個、8月に2個であった（図1）。

村上（2023）によって2021年と2022年に行われた捕獲調査で本亜種が確認された巣箱（なお、2022年8月は調査が行われなかった）、および2年間の結果から求めた巣箱ごとの各月の巣箱利用率を表5に示した。村上（2023）による捕獲調査では、本亜種捕獲巣箱数は2021年および2022年ともに6月（3個および4個）が最多で7月（0個および1個）が最少であった。

本研究で求めた巣箱利用率および村上（2023）による

捕獲調査の結果から求めた巣箱利用率を比較した結果、有意差は見られなかった（ $P > 0.05$ ； ウイルコクソンの順位和検定）。また、月ごとの推移を見てみると、5月は本研究で求めた巣箱利用率の方が高いが、6～9月は捕獲調査の結果から求めた巣箱利用率の方が高いという結果になった（特に捕獲調査では、6月に高い利用率が観察された）（図2）。2021～2022年の捕獲調査におけるべ巣箱利用日数と2024年の本調査におけるべ巣箱利用日数を月ごとに比較すると、6月では有意差が見られたが（ $P < 0.05$ ； フィッシャーの正確確率検定）、5月、7月、8月、9月では有意差が見られなかった（ $P > 0.05$ ； フィッシャーの正確確率検定）。

表1. 各月において、各巣箱ごとに撮影された動画数

Nest box ID	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Total
4	2	3	3	1	3	12
5	0	2	19	6	10	37
6	7	30	31	3	13	84
7	86	42	31	6	4	169
8	4	11	12	7	20	54
17	2	3	220	33	12	270
18	20	73	34	2	3	132
19	17	36	489	3	0	545
20	3	1	0	0	0	4
21	6	1	6	8	17	38
22	2	3	4	1	4	14
24	61	5	5	0	0	71
28	0	2	2	4	6	14
29	2	2	4	3	1	12
30	3	9	10	10	5	37
34	4	7	9	3	14	37
46	27	123	1	0	0	151
47	210	14	0	0	0	224
48	16	6	19	3	0	44
54	16	17	8	43	6	90
58	125	8	16	13	5	167
Total	613	398	923	149	123	2,206

表2. 各月における巣箱ごとのエゾモモンガ（*Pteromys volans orii*）の撮影結果（エゾモモンガによる巣箱利用が確認された動画数／エゾモモンガの撮影動画数）。

Nest box ID	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Total
4	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
5	0/0	0/0	0/6	0/3	0/7	0/16
6	1/4	6/20	5/16	0/1	5/9	17/50
7	20/53	6/33	0/18	0/2	0/3	26/109
8	0/0	0/3	0/5	0/3	3/11	3/22
17	0/1	0/1	0/0	0/4	0/6	0/12
18	5/11	35/51	20/23	0/0	0/2	60/87
19	5/9	2/6	0/0	0/1	0/0	7/16
20	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/1
21	0/0	0/1	0/1	0/4	5/14	5/20
22	1/1	0/1	0/0	0/0	0/2	1/4
24	19/41	1/2	0/0	0/0	0/0	20/43
28	0/0	0/0	0/0	0/1	0/4	0/5
29	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
30	0/0	2/4	1/5	2/9	0/3	5/21
34	0/2	0/3	0/3	0/2	5/10	5/20
46	0/0	0/1	0/0	0/0	0/0	0/1
47	92/125	6/10	0/0	0/0	0/0	98/135
48	0/3	1/3	0/6	0/0	0/0	1/12
54	2/9	0/12	0/3	26/38	0/2	28/64
58	3/5	1/4	5/10	0/7	0/2	9/28
Total	148/265	60/155	31/96	28/75	18/75	285/666

表3. 各月におけるRelative Abundance Index (RAI). 撮影された総動画のRAI, エゾモモンガ (*Pteromys volans ori*) が撮影された動画およびエゾモモンガの巣箱利用が撮影された動画のRAIを記した。

Month	RAI		
	Total videos	Videos captured <i>P. volans ori</i>	Videos shown nest box use by <i>P. volans ori</i>
May	94.16	40.71	22.73
Jun.	63.28	24.64	9.54
Jul.	141.78	14.75	4.76
Aug.	22.89	11.52	4.30
Sep.	19.52	11.90	2.86

表4. 各月において、エゾモモンガ (*Pteromys volans ori*) による利用が確認された巣箱ごとの利用日数、およびその利用率（% : 括弧内）。最下段に各月の利用率の平均値±標準偏差を記した。

Nest box ID	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Total
4	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
5	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
6	1 (3.23)	5 (16.32)	3 (9.68)	0 (0.00)	1 (3.23)	10 (6.54)
7	12 (38.71)	4 (12.90)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	16 (10.46)
8	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	3 (9.68)	3 (1.96)
17	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
18	5 (16.32)	8 (26.67)	4 (12.90)	0 (0.00)	0 (0.00)	17 (11.11)
19	4 (12.90)	2 (6.45)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	6 (3.92)
20	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
21	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	4 (12.90)	4 (2.61)
22	1 (3.23)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (0.65)
24	10 (32.26)	1 (3.23)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	11 (7.19)
28	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
29	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
30	0 (0.00)	1 (3.23)	1 (3.23)	2 (6.45)	0 (0.00)	4 (2.61)
34	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	5 (16.32)	5 (3.27)
46	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
47	26 (83.87)	3 (9.68)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	29 (18.95)
48	0 (0.00)	1 (3.23)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (0.65)
54	2 (6.45)	0 (0.00)	0 (0.00)	6 (19.35)	0 (0.00)	8 (5.23)
58	2 (6.45)	1 (3.23)	5 (16.32)	0 (0.00)	0 (0.00)	8 (5.23)
Total	63	26	13	8	13	123
Rate of nest box use (mean \pm SD)	(9.68 \pm 19.68)	(4.13 \pm 6.89)	(2.00 \pm 4.61)	(1.23 \pm 4.28)	(2.06 \pm 4.77)	(3.83 \pm 4.77)

北海道の天然林における自動撮影カメラを用いたエゾモモンガの巣箱利用性の再検討

表5. 村上(2023)による捕獲調査で、エゾモモンガ (*Pteromys volans ori*) が確認された月ごとの巣箱数(2021年／2022年)、およびそれらの結果に基づいて算出した巣箱利用率(％：括弧内)。最下段に各月の巣箱利用率の平均値±標準偏差を記した。

Nest box ID	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Total
4	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)
5	0/1 (50.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/1 (11.11)
6	0/1 (50.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/1 (11.11)
7	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	1/0 (50.00)	1/0 (11.11)
8	0/0 (0.00)	1/0 (50.00)	0/0 (0.00)	1/- (100.00)	0/0 (0.00)	2/0 (22.22)
17	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)
18	0/0 (0.00)	0/1 (50.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/1 (11.11)
19	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)
20	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)
21	0/0 (0.00)	0/1 (50.00)	0/1 (50.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/2 (22.22)
22	0/0 (0.00)	0/1 (50.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/1 (11.11)
24	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)
28	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	1/0 (50.00)	1/0 (11.11)
29	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)
30	0/0 (0.00)	1/0 (50.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	1/0 (11.11)
34	1/0 (50.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (16.32)	1/0 (11.11)
46	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)
47	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)
48	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/0 (0.00)
54	0/0 (0.00)	1/0 (50.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/1 (50.00)	2/0 (22.22)
58	0/0 (0.00)	0/1 (50.00)	0/0 (0.00)	0/- (0.00)	0/0 (0.00)	0/1 (11.11)
Total	1/2	3/4	0/1	1/-	2/1	8/7
Rate of nest box use (mean ± SD)	(7.14 ± 17.50)	(16.67 ± 23.57)	(2.38 ± 10.65)	(4.76 ± 21.30)	(7.14 ± 17.50)	(7.94 ± 7.78)

表6. エゾモモンガ (*Pteromys volans ori*) の各行動の月別撮影動画数。各行動が占める割合(%)を季節ごとにまとめて示した。

Behavior	Spring			Summer			Autumn			Total
	May	Jun.	Rate of behavior	Jul.	Aug.	Rate of behavior	Sep.	Rate of behavior		
Carrying in/out (nest materials)	2	2	2.11	4	5	13.04	0	0.00		13
Carrying in/out (youngs)	0	0	0.00	2	0	2.90	0	0.00		2
Carrying in/out (unclear)	4	4	4.21	0	2	2.90	0	0.00		10
Visiting	17	11	14.74	10	15	36.23	13	38.24		66
Confirmation	6	9	7.89	6	9	21.74	10	29.41		40
Resting	25	16	21.58	5	3	11.59	5	14.71		54
Looking outside from the inside of nest box	69	15	44.21	5	1	8.70	6	17.65		96
Pluriparous individuals	2	2	2.11	0	0	0.00	0	0.00		4
Vocalization	5	1	3.16	2	0	2.90	0	0.00		8
Total	130	60		34	35		34			293

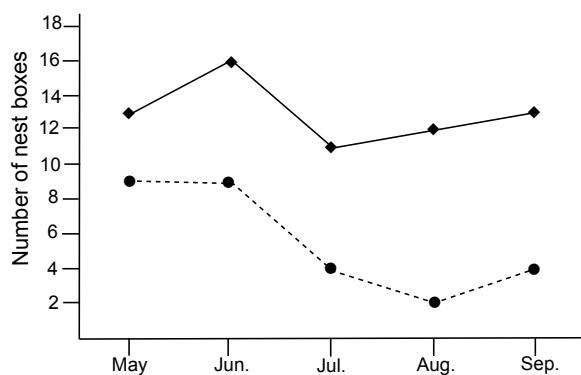


図1. エゾモモンガ (*Pteromys volans orii*) が撮影された巣箱数 (◆, 実線) およびエゾモモンガが利用した巣箱数 (●, 点線) の変化。

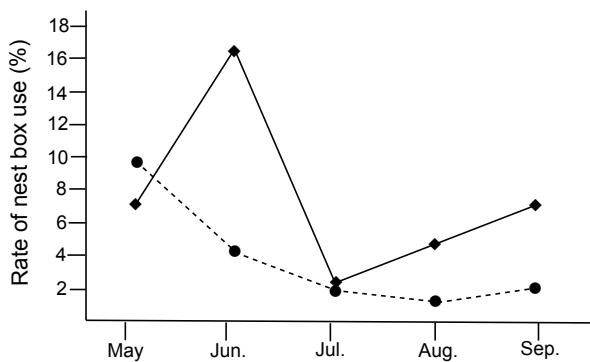


図2. 村上 (2023) による捕獲調査の結果から算出したエゾモモンガ (*Pteromys volans orii*) の巣箱利用率 (◆, 実線) および自動撮影カメラによる本調査の結果から算出したエゾモモンガによる巣箱利用率 (●, 点線) の変化。

観察された本亜種の行動

本亜種による各行動の撮影動画数を月ごとおよび季節ごとにまとめ、表6に示した。また、各行動が確認された季節ごとの割合についても表6に示した。調査期間を通して、合計293本の動画において、本研究で定義した9つのカテゴリーのうちいずれかの行動が確認された。各行動が撮影された動画数は、搬入搬出(巣材)が13本(4.44%)、搬入搬出(仔)が2本(0.68%)、搬入搬出(不明)が10本(3.41%)、訪問が66本(22.53%)、確認が40本(13.65%)、休息が54本(18.43%)、様子覗いが96本(32.76%)、複数個体が4本(1.37%)、発声が8本(2.73%)であった。9つのカテゴリーの行動が確認された合計動画数は5月(130本)が最も多く、6月(60本)、7月(34本)と減少した。その後、7~9月の3か

月間は大きな変化が見られなかった(表6)。本亜種による各行動が確認された動画数の合計は、春期190本、夏期69本、秋期34本であった。

得られたデータの数が、半数の行動カテゴリーで少なく、また秋期のデータが9月のみであったため、季節間の変化について統計解析を行うことができなかったが、春期は様子覗い(84本)が最多で、休息(41本)、訪問(28本)、確認(15本)がこれに続いた。夏期は訪問(25本)が最多で、次に確認(15本)が多かった。秋期も訪問(13本)が最多で、次に確認(10本)が多かった。

考 察

巣箱ごとの利用

21個の巣箱のうち、7個の巣箱(4番、5番、17番、20番、28番、29番、46番)は本亜種による巣箱利用が確認されなかったが、47番(98本)および18番(60本)では全体の20%以上を占める巣箱利用が確認された(表2)。このように本亜種により利用された巣箱には偏りが見られ、これは村上(2023)の結果と同様であった。本亜種は、特定の環境に置かれた巣箱に選択性を示すのかもしれないが、その環境要因、および理由については不明であった。今後の研究課題であろう。

北米のオオアメリカモモンガ *Glaucomys sabrinus* では、巣内環境の悪化を避けるために長期間連続して同じ巣を利用しないことが示唆されており(Carey et al. 1997)、本亜種についても同様の考察が先行研究で述べられている(柳川 1999)。今回の結果からも巣箱の長期継続利用は観察されず、本亜種は、営巣場所を変えるという習性を持つことが自動撮影カメラによる観察からも明らかになった。

巣箱利用の季節変化

本亜種による5月の巣箱利用率(9.68% ± 19.68%)および巣箱利用確認 RAI(22.73)は、6月の巣箱利用率(4.13% ± 6.89)および巣箱利用確認 RAI(9.54)に比べて高い値を示し(表3、表4)、巣箱利用日数および巣箱利用確

認動画数に有意差が見られた ($P < 0.05$)。このことから、本亜種の育仔期である 5 月には巣箱への出入りが活発になることが示唆された。授乳中のメス個体は泌乳のため多くの餌を摂取する必要があり、また、授乳のために餌場と巣を何度も往復することが報告されている（柳川 1999）。繁殖メスの育仔行動によって巣箱の利用回数が多くなったのかもしれない。

一方で、本亜種の 2 回目の育仔ピーク期である 7 月および 8 月の巣箱利用率 (2.00% \pm 4.61 および 1.23% \pm 4.28) は、6 月の巣箱利用率 (4.13% \pm 6.89) に比べて低い値を示した（表 4）。これは、亜成獣の出現が 7 月にピークに達し、巣箱利用個体数が 7 月に急増するという北海道帯広市内の二次林で実施された柳川（1994）による先行研究の結果と一致しない。しかし、本調査区での村上（2023）による捕獲調査の結果においても、今回の結果と同様の傾向が認められており、山間部のトドマツ優占天然混交林においては一般的な傾向であると考えられ、本亜種の巣箱利用性はハビタットの違いによって影響を受けるのかもしれない。これについては今後の検討課題であろう。

捕獲調査結果との比較

本研究で見られた巣箱利用率と村上（2023）による捕獲調査の結果から求めた巣箱利用率を比較した結果、有意な違いは見られなかった ($P > 0.05$)。このことから、本亜種の非積雪期全体の巣箱利用率の調査は月に一度の頻度で十分であることが示唆された。しかしながら、6 月の巣箱利用日数では、捕獲調査結果が有意に高くなってしまっており（図 2）、月ごとの巣箱利用率については過大評価の可能性があることが示された。本亜種は複数の巣を利用するため、調査日のデータのみに限られる捕獲調査では調査日によってデータに大きな偏りが生じる可能性が高いことが予測される。1 カ月という短期間のデータの扱いについては十分な注意が必要であろう。

従来のような捕獲調査は比較的安価で行うことができ、耳標による個体識別が可能なため、本亜種の繁殖行動や集団営巣を調査する際に有効である。しかしながら、

この方法ではデータが調査日のものに限定され、また、野生動物への人為的ストレスを避けられないという欠点がある。一方、本研究で行った自動撮影カメラによる調査では、個体識別は難しく自動撮影カメラ自体も高価だが、対象種に人為的ストレスを与えることなく継続して巣箱利用を確認することができ、巣箱利用に伴う行動も記録できるという利点がある。それぞれの調査方法の特性を知り、研究の趣旨や目的によって適切な調査方法を選択或いは組み合わせることで今後より有用なデータを収集することができるであろう。

巣箱利用行動

本研究では、本亜種が巣箱の出入口から顔を出し、外部の様子を覗った後に出巣する行動と巣にそのまま留まる行動を確認することができた。本亜種と同じ滑空性リス類であるホオジロムササビ *Petaurista leucogenys*においても、出巣前の外部の‘様子覗い’が確認されている（安藤ら 1982）ことから、この行動は、出巣前に巣の周囲状況を把握し、樹洞利用性リス類が出巣の可否を決定するために行う共通した行動であるかもしれない。様子伺いは、春期に記録された全行動の 44.21% を占めていたが（表 6）、夏期においても 8.70%、秋期においても 17.65% という高い値であった。春期には高い巣箱利用率が確認されており、多くの個体が出巣時に様子伺いを行ったため、結果的に高い行動割合を占めるに至ったのかもしれない。そして、全ての季節で観察される様子伺いは、本亜種にとって常時行われる一般的な行動であると考えることができるであろう。

本研究の結果、春期・夏期・秋期を通じて、‘確認’と‘訪問’の回数がほぼ一定であった（表 6）。一般に本亜種は、キツツキ類による掘削、枝抜け、凍裂などの要因で樹木に生じた樹洞を営巣に利用するが（Oshida 2015）、樹洞は森林内に存在する限られた資源である。営巣場所の引っ越しを頻繁に行う本亜種にとって、森林内における限られた営巣資源への訪問、そしてその確認は欠かせないルーティンワークの一つであるのかもしれない。また、フィンランドにおける研究結果では、幼獣の独立後、定

住したメスを見つけるためにオスが生息域の巡回を行うことが報告されている (Hanski et al. 2000)。本調査地においてもオスによるメスの探索行動があったのかもしれないが、これについては今後の研究課題である。

‘搬入搬出（巣材）’の回数は春期および秋期より夏期の回数が多かった（表 6）。北米のオオアメリカモモンガでは、夏期は気温の上昇により外部寄生虫の活動が活発になり、巣内環境が悪化しやすいため、頻繁に巣を移動することが示唆されており (Meyer et al. 2005)，本亜種も巣内環境の悪化を避けるため、引っ越しの頻度を高めるのかもしれない。

本研究では鳴き声とともに体や口唇部周囲の触毛の動きが確認できた場合に本亜種による‘発声’であると見做したが、撮影できた動画数は非常に少なく、最多であった春期においても 6 回であった。本亜種は繁殖期に盛んに鳴くことが報告されているが (柳川 1999)，春期に撮影回数が多かったのは繁殖期と関係があるかもしれない。‘複数個体’および‘搬入搬出（仔）’についても、繁殖に関係する行動であるため季節差が見られることを予想したが、本研究では、確認された動画数が非常に少なく、残念ながら考察を述べることは困難である。

本研究において確認された本亜種の行動については、統計的な評価に基づいて季節による違いを議論することができなかった。しかしながら、これらの行動データは従来の捕獲調査では全く得ることができなかつたものである。自動撮影カメラを用いることによって、断片的ではあるもののこれらの行動を記録することが可能であることが本研究によって示された。本調査方法を継続的に実施し、調査結果を蓄積することによって、本亜種の行動生態の包括的な解明へ繋がることが期待される。今後の大きな研究課題であろう。

謝 辞

本研究を行うにあたり、東京大学北海道演習林の皆様に大変お世話になった。心より御礼申し上げたい。そし

て、温かい御指導を賜った、帯広畜産大学野生動物管理学研究室の柳川 久教授、浅利裕伸准教授、長沼知子助教、保全生態学研究室の赤坂卓美准教授に心から感謝したい。また、多くの支援や助言、激励を頂いた野生動物学研究室の学生の皆様に深く感謝したい。

引用文献

- ・安藤元一、今泉吉晴. 1982. 狹小生息地におけるムササビの環境利用. 哺乳動物学雑誌 9(2): 70-81.
- ・浅利裕伸、柳川久. 2008. 分断された狭小森林に生息するエゾモモンガ *Pteromys volans orii* による巣の利用. 野生生物保護 11: 7-10.
- ・Carey AB, Wilson TM, Maguire CC, Biswell BL. 1997. Dens of northern flying squirrel in the Pacific Northwest. Journal of Wildlife Management 61: 684-699.
- ・de Raad AL, Balafaf F, Heitkonig I, Lurz PWW. 2021. Mitigating the impact of forest management for conservation of an endangered forest mammal species: drey surveys and nest boxes for red squirrels (*Sciurus vulgaris*). *Hystrix*, the Italian Journal of Mammalogy 32(1): 60-66.
- ・藤巻裕蔵. 1963. エゾモモンガの飼育観察. 哺乳類学雑誌 2: 42-45.
- ・Hanski IK, Stevens PC, Ihalempää P, Selonen V. 2000. Home-range size, movements, and nest-site use in the Siberian flying squirrel, *Pteromys volans*. Journal of Mammalogy 81: 798-809.
- ・福田秀志、高山元、井口雅史、柴田叡式. 2008. カメラトラップ法で明らかにされた大台ヶ原の哺乳類相とその特徴. 保全生態学研究 13: 265-274.
- ・菊池隼人. 2022. モモンガ属における集団営巣行動の生態学的意義, 121 pp. 帯広畜産大学大学院畜産学研究科博士論文, 帯広.
- ・増田泰. 2003. エゾモモンガ (*Pteromys volans orii*) に

- よる巣箱利用. 知床博物館研究報告 24: 59-62.
- Meyer MD, Kelt DA, North MP. 2005. Nest trees of northern flying squirrels in the Sierra Nevada. Journal of Mammalogy 86: 275-280.
- 水谷瑞希, 三ツ橋土郎. 2018. 志賀高原ガイド組合による自動撮影カメラを用いた中・大型哺乳類相調査. 志賀自然教育研究施設研究業績 55: 17-23.
- 村上 葦. 2023. 北海道のトドマツ優占天然針広混交林におけるDNAメタバーコーディングを活用したエゾモモンガ *Pteromys volans orii* の食性解析, 36 pp. 帯広畜産大学大学院畜産学研究科修士論文, 帯広.
- Oshida T. 2015. *Pteromys volans* (Linnaeus, 1758). Ohdachi SD, Ishibashi Y, Iwasa MA, Fukui D, Saitoh T. (eds). The Wild Mammals of Japan 2nd ed., pp. 204-205, Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
- Oshida T, Komoto A, Shibatani M, Yoshikawa Y, Sato D. 2018. Do Siberian flying squirrels reuse nest materials made by other individuals? Acta Zoologica Academiae Scientiarum Hungaricae 64(2): 185-192.
- R Core Team. 2023. R: A Language and Environment for Statistical Computing. Vienna: R Foundation for Statistical Computing. <https://www.R-project.org/>
- Tremaine G, Rueda FC, Deichmann J, Koplowski J, Alonso A. 2014. Arboreal camera trapping: taking a proven method to new heights. Methods in Ecology and Evolution 5: 443-451.
- 山口裕司, 柳川久. 1995. 野外におけるエゾモモンガ *Pteromys volans orii* の日周期活動. 哺乳類科学 34: 139-149.
- 柳川久. 1994. 小鳥用巣箱を用いたエゾモモンガの野外研究. 森林保護 241: 20-22.
- 柳川久. 1999. エゾモモンガの生態 (ビデオ発表) 一 北海道十勝平野における一年間の記録一. 哺乳類科学 39: 181-183.

Re-examination of nest box utilization by the Siberian flying squirrel using automatic cameras in a natural forest in Hokkaido, Japan

Nest boxes are valuable tools in ecological surveys of small arboreal mammals. Accurately determining the rate of nest box use is essential to ensure the credibility of survey data. In the Siberian flying squirrel (*Pteromys volans orii*), the rate of nest box use has been estimated based on direct observations of nest box interiors at regular interval, but nest box use under natural condition based on long-term observations remains unclear. In this study, we reexamined the nest box use rate in *P. volans orii* during the non-snow season by comparing data from previous periodic direct observations with that obtained through continuous observation using automatic cameras. From May to September 2024, we conducted a survey in the Hokkaido Forest of the University of Tokyo, Furano, Hokkaido, Japan. Among 60 nest boxes in the study area, we installed an automatic camera (operating hours: 16:00–07:00) in front of 21 nest boxes that had previously been confirmed as used by *P. volans orii*. We also observed nest box usage behavior using automatic cameras.

Throughout the survey period, nest box use rates determined via periodic direct observation did not significantly differ from those obtained through continuous observation using automatic cameras. However, a monthly comparison revealed that the nest box use rate via periodic direct observation was significantly higher than that obtained through continuous observation in June, suggesting overestimation. Caution is needed when handling data from periodic direct observations. The continuous survey method using automatic camera is expected to provide a more comprehensive understanding of the behavioral ecology of *P. volans orii* in the future.

和歌山市で捕獲された移入クリハラリスの起源について

押田龍夫¹・高野彩子²・鳥居春己²

(受付 : 2025 年 4 月 30 日, 受理 : 2025 年 7 月 1 日)

Origin of the invasive Pallas's squirrels captured in Wakayama City, Wakayama Prefecture, Japan

Tatsuo OSHIDA¹, Ayako TAKANO², Harumi TORII²

摘要

クリハラリスは、愛玩用のペットおよび動物園動物として飼育するために日本へ移入された外来種であり、1935 年に伊豆大島で飼育されていた個体が逃げたことにより最初の野外定着が始まったと考えられている。本種による農作物や造林木への被害が本州・九州で発生しており、加えて在来生態系への影響も懸念されることから、本種は外来生物法における特定外来生物に指定され、地域によっては駆除捕獲が実施されている。

和歌山県和歌山市の友ヶ島には、1954 年に伊豆大島から本種が移入された記録があるが、和歌山市の和歌山城公園でも移入個体が以前から定着しており、その移入起源が友ヶ島個体群と同様に伊豆大島であるか否かについては知られていない。近年では和歌山城公園の北側の地域でも本種の分布が確認されており、和歌山市内における分布の拡大が懸念されている。和歌山城公園およびその近隣の個体群が伊豆大島とは異なる起源から移入されていた場合、市内における分布拡大を抑えるためには、さらなる移入防止をも睨んだ対策を検討する必要があるかもしれない。そこで本研究では、既報の mtDNA コントロール領域塩基配列との比較結果に基づいて、和歌山市内に生息するクリハラリス個体群の国内起源の検証を試みた。和歌山城公園の 5 個体、梅原の 2 個体、雜賀崎の 5 個体、そして友ヶ島では、南垂水の 5 個体、蛇ヶ池の 5 個体のクリハラリス（計 22 個体）のコントロール領域塩基配列を分析した結果、既報の 2 つのハプロタイプ（1,081bp）が検出された。一つは伊豆大島個体群から報告されている CeJ2 であり、解析した 20 個体が本ハプロタイプを示し、全ての採集地点から検出された。従って和歌山城公園の移入起源も伊豆大島であることが明らかになった。もう一つは静岡県浜松市の個体群から最初に報告された CeJ5 であり、友ヶ島の蛇ヶ

¹帯広畜産大学野生動物学研究室

¹Laboratory of Wildlife Biology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

²奈良教育大学自然環境研究センター

²Center of Natural Environment Education, Nara University of Education

連絡先 : 押田龍夫, oshidata@obihiro.ac.jp

池で捕獲された 2 個体のみから検出された。このことから、友ヶ島には伊豆大島のみではなく、他の地域からも本種が過去に移入されていた可能性が示された。

キーワード: *Callosciurus erythraeus*, ミトコンドリア DNA コントロール領域, 特定外来生物, 友ヶ島, 和歌山城公園

緒 論

クリハラリス *Callosciurus erythraeus* は、インド西部、中国南部、インドシナ半島東部、マレー半島、および台湾に自然分布していたが (Corbet et al. 1992; Wilson et al. 2005)，ペットや動物園動物としての飼育を目的とした人為的な移入により、現在ではイタリア、オランダ、ベルギー、フランス、アルゼンチン、そして日本にも生息しており (Thorington et al. 2012)，農作物や造林木への被害および在来生態系への影響が懸念されている (例えば、鳥居 1993; 鳥居ら 2010; 安田 2010)。本種は戦前から日本国内で飼育されていたようであるが正確な記録は存在しない。1935 年に伊豆大島で飼育されていた個体が逃げたことにより最初の野外定着が始まったと考えられている (田村 2002)。その後本種は、茨城県 (坂東市)、東京都 (あきる野市)、埼玉県 (入間市)、神奈川県 (南西部)、静岡県 (伊豆半島東部・浜松市)、岐阜県 (金華山)、大阪府 (大阪城公園)、和歌山県 (和歌山城公園・友ヶ島)、兵庫県 (姫路城公園)、長崎県 (壱岐・福江島・島原半島)、大分県 (高島)、熊本県 (宇土半島)、宮崎県 (霧島) にも定着し (Tamura 2015), 2005 年には‘外来生物法’における‘特定外来生物’に指定されている (国立環境研究所侵入生物データベース <https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/10060.html>, 2025 年 4 月 10 日確認)。そして、ミトコンドリア DNA (mtDNA) のコントロール領域塩基配列を用いた分子系統学的解析結果から、日本のクリハラリスの移入起源は台湾であることが示されている (Oshida et al. 2006)。

和歌山県和歌山市の友ヶ島 (図 1) には、1954 年 12 月に伊豆大島から約 100 個体のクリハラリスが移入さ

れ、ケージ内で飼育されていたが、このうち約 80 個体が逃げて野生化したことが知られている (和歌山県の外来種リスト <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/032600/gairai/list.html>, 2025 年 4 月 10 日確認)。加えて、和歌山市の和歌山城公園 (図 1) でも移入個体が定着しているが、これらの移入起源が友ヶ島個体群と同様に伊豆大島であるか否かについては知られていない。そして近年では、和歌山城公園北部の‘梅原’でも本種の分布が確認されており、和歌山市内における分布の拡大が懸念されている。

伊豆大島に分布する個体群の mtDNA コントロール領域のハプロタイプは Oshida et al. (2007) によって報告されており、和歌山市の個体群の伊豆大島起源説を検討する際に有用な指標として利用することが可能である。これらと異なるものが検出された場合、和歌山市内の個体群は、複数の地域から移入されたものであると考えられ、市内における分布拡大を抑えるためには、さらなる移入防止を加味した対応策を検討する必要があるかもしれません。そこで本研究では、既報の mtDNA コントロール領域塩基配列との比較結果に基づいて、和歌山市に生息するクリハラリス個体群の国内起源の検証を試みた。

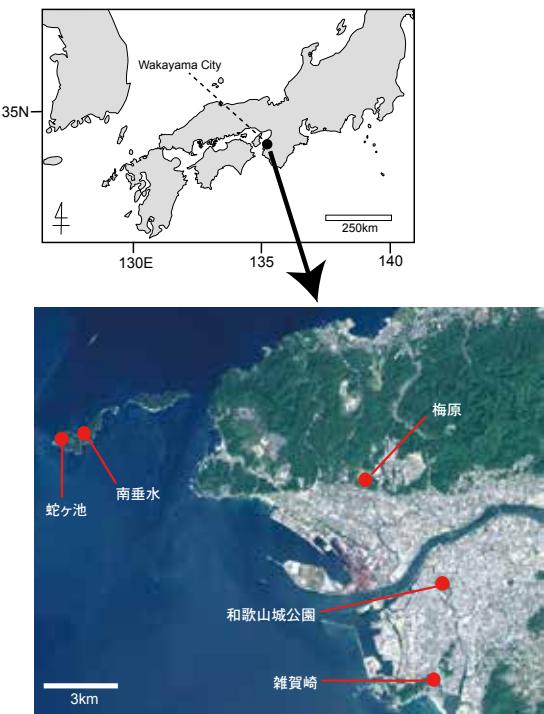


図1. 和歌山県和歌山市内におけるクリハラリス (*Callosciurus erythraeus*) の捕獲採集地点. 和歌山城公園, 雜賀崎, 梅原, 友ヶ島の南垂水, 友ヶ島の蛇ヶ池を赤丸にて示した(国土地理院地図を改変). 各地点の緯度・経度については本文中に記した.

方 法

調査地及び個体の捕獲

和歌山県和歌山市の和歌山城公園(北緯 $34^{\circ} 23'$, 東経 $135^{\circ} 17'$), 梅原(北緯 $34^{\circ} 26'$, 東経 $135^{\circ} 14'$), 雜賀崎(北緯 $34^{\circ} 11'$, 東経 $135^{\circ} 08'$) および友ヶ島の南垂水(北緯 $34^{\circ} 28'$, 東経 $135^{\circ} 01'$) と蛇ヶ池(北緯 $34^{\circ} 28'$, 東経 $135^{\circ} 00'$) の5地点において, 和歌山県環境生活総務課自然環境室自然環境班により, 2020年および2021年の間にクリハラリスの調査捕獲が実施された(図1)。なお捕獲にあたっては日本哺乳類学会で示されている‘哺乳類標本の取り扱いに関するガイドライン2009年度改訂版’(https://www.mammalogy.jp/guideline_2006_2015.html, 2025年4月10日確認)に従いリス個体へ安楽殺処置を施した[二酸化炭素ボンベ(CO₂エアバルブインフレーター, TNI)を用いた炭酸ガス吸入法で安楽殺処置を行った]。クリハラリス個体か

ら約5mm²の筋組織を採取し, 99%エタノール溶液にて固定後, 室温にて保存した。

DNA分析

DNA抽出キット(DNA Easy Blood & Tissue Kit, QIAGEN)を用いて筋組織からDNAを抽出し, 4°Cにて保存した。なお, 抽出方法については当該キットのプロトコールに従った。リス科齧歯類のmtDNAコントール領域全塩基配列を特異的に増幅するプライマーセット(L15933: 5' - CTCTGGTCTTGAAACC AAAAATG -3' およびH637: 5' - AGGACCAACCTTGTGTTATG -3')を用いてPCR法による増幅を行った(Oshida et al. 2001)。PCR反応液(50 μl)は, 減菌蒸留水38.5μl, DNA抽出産物100ng, 各プライマー0.25 μM, dNTPs 200 μM, Tris-HCl(pH 8.3) 10mM, KCl 50mM, MgCl₂ 21.5mM, rTaq DNAポリメラーゼ(Takara, Tokyo) 2.5ユニットから成り, サイクル反応の条件は, 热変性を94°Cで1分間, アニーリングを50°Cで1分間, 伸長を72°Cで2分間とし, 反応回数は40回とした(Oshida et al. 2007)。反応終了後は72°Cで10分間伸長し, PCR産物は4°Cで保存した。PCR産物精製キット(PCR Clean Up-M, Viogen)によってPCR産物を精製後, シーケンサー(PRISM 377-96 Sequencer and PRISM 3100 Genetic Analyzer Applied Biosystem, ABI)を用いてシーケンスを行い, 塩基配列を決定した(シーケンスにはPCRと同配列のプライマーを用いた)。なお, PCR産物の精製およびシーケンス業務については, Mission Biotech Co. Ltd. (Taipei)へ委託した。

データの解析

MEGA version XI (Tamura et al. 2021)を用いて塩基配列のアラインメントを行い, 得られたハプロタイプの塩基配列を, 伊豆大島からのものも含めOshida et al. (2007)およびIkeda et al. (2011)で報告されている計7つのハプロタイプ(CeJ1, CeJ2, CeJ3, CeJ5, CeJ7, CeJ8, CeJ9)の塩基配列と比較した。

結 果

調査期間中捕獲された個体より、和歌山城公園から 5 個体、梅原から 2 個体、雑賀崎から 5 個体、そして友ヶ島では、南垂水と蛇ヶ池から 5 個体ずつのクリハラリス（計 22 個体）のサンプルが提供され、本研究に用いられた（表 1）。mtDNA コントロール領域塩基配列の分析結果から既報の 2 つのハプロタイプ (1,081bp) が検出された。一つは、伊豆大島個体群から報告されている CeJ2 (Oshida et al. 2007) であり、20 個体が本ハプロタイプを持ち全ての採集地点から検出された。もう一つは、静岡県浜松市の個体群から報告されている CeJ5 (Oshida et al. 2007) であり、友ヶ島の蛇ヶ池で捕獲された 5 個体のうち 2 個体から検出された。

表 1. 和歌山県和歌山市において捕獲され、本研究で用いたクリハラリス (*Callosciurus erythraeus*)。

捕獲採集地点	個体番号	性	ハプロタイプ
和歌山城公園	S-1	メス	CeJ2
	S-2	オス	CeJ2
	S-3	オス	CeJ2
	S-4	オス	CeJ2
	S-5	オス	CeJ2
雑賀崎	T-1	オス	CeJ2
	T-2	オス	CeJ2
	T-3	メス	CeJ2
	T-4	メス	CeJ2
	T-5	メス	CeJ2
梅原	和-1	オス	CeJ2
	和-2	オス	CeJ2
友ヶ島(南垂水)	友-1	メス	CeJ2
	友-2	オス	CeJ2
	友-6	オス	CeJ2
	友-7	オス	CeJ2
	友-8	メス	CeJ2
友ヶ島(蛇ヶ池)	友-3	オス	CeJ5
	友-4	オス	CeJ2
	友-5	オス	CeJ2
	友-9	メス	CeJ5
	友-10	メス	CeJ2

考 察

和歌山市内の 5 地点においてクリハラリスを採集し、これらの mtDNA コントロール領域ハプロタイプを既報のものと比較した結果、多くの個体は伊豆大島個体群から報告されている CeJ2 ハプロタイプ (Oshida et al. 2007) を持つており、主な移入起源は伊豆大島であることが明らかになった。本種は、1954 年に友ヶ島へ移入されたことが記録されているが（和歌山県の外来種リスト <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/032600/gairai/list.html>, 2025 年 4 月 10 日確認），和歌山城公園にも過去に移入され、さらに、近年捕獲された梅原の個体は、これらが分布を徐々に拡大した結果であるかもしれない。今後も分布域の拡大が懸念されることから、駆除等の対策が必要であろう。

一方、これまで伊豆大島からクリハラリスが移入されたと見做されていた友ヶ島において、最初に浜松市から報告された CeJ5 ハプロタイプ (Oshida et al. 2007) が検出された。この結果から、友ヶ島のクリハラリス個体群には、伊豆大島のみではなく、少なくとももう一つ別の移入起源が存在することが考えられる。しかしながら、CeJ5 ハプロタイプは神奈川県内における最近の調査結果において横須賀市からも検出されており（江口ら 2024），友ヶ島への移入起源を特定することは困難である。今回の少ないサンプル数だけからでは断定できないが、友ヶ島の南垂水では CeJ5 が見られなかったことから、CeJ5 の移入は蛇ヶ池のみで発生し、その子孫が現在も蛇ヶ池地域に定着しているのかもしれない。これについては今後の検討課題であろう。

謝 辞

本研究の材料として用いたクリハラリスについては、遺伝子分析のための譲渡を和歌山県環境生活総務課自然環境室に許可いただいた。捕獲作業を担当した（株）KANSO テクノスには、捕獲個体の保存他をお願いした。

関係各位に心から感謝したい。

引用文献

- Corbet GB, Hill JE. 1992. The Mammals of the Indomalayan Region: A Systematic Review, 488 pp. Oxford University Press, Oxford.
- 江口勇也, 佐久間幹大, 舟越優実, 東典子, 篠本樹, 片平浩孝. 2024. 神奈川県に定着した特定外来生物クリハラリス *Callosciurus erythraeus* の地理的由来: 台湾を原産とする3系統の混在. 保全生態学研究: 2324 (早期公開). DOI: <https://doi.org/10.18960/hozan.2324>
- Ikeda H, Yasuda M, Sakanashi M, Oshida T. 2011. Origin of *Callosciurus erythraeus* introduced into the Uto Peninsula, Kumamoto, Japan, inferred from mitochondrial DNA analysis. Mammal Study 36: 61-65.
- Oshida T, Ikeda K, Yamada K, Masuda R. 2001. Phylogeography of the Japanese giant flying squirrel, *Petaurista leucogenys*, based on mitochondrial DNA control region sequences. Zoological Science 18:107-114.
- Oshida T, Lee J-K, Lin L-K, Chen Y-J. 2006. Phylogeography of Pallas' s squirrel in Taiwan: geographical isolation in an arboreal small mammal. Journal of Mammalogy 87(2): 247-254.
- Oshida T, Torii H, Lin L-K, Lee J-K, Chen Y-J, Endo H, Sasaki M. 2007. A preliminary study on origin of *Callosciurus* squirrels introduced into Japan. Mammal Study 32: 75-82.
- Tamura K, Stecher G, Kumar S. 2021. MEGA 11: Molecular Evolutionary Genetics Analysis Version 11. Molecular Biology and Evolution 38: 3022-3027.
- 田村典子. 2002. タイワニリス. 日本生態学会編, 外来種ハンドブック, pp. 66, 地人書館, 東京.
- Tamura N. 2015. *Callosciurus eryturaeus* (Pallas, 1779). Ohdachi SD, Ishibashi Y, Iwasa MA, Dai F, Saitoh T (eds), The Wild Mammals of Japan 2nd ed., pp. 196-197, Shoukadoh, Kyoto.
- Thorington RW, Koprowski JL, Steel MA, Whatton JF. 2012. Squirrels of the World, 459 pp. The Johns Hopkins University Press, Maryland.
- 鳥居春己. 1993. タイワニリスによるヒノキ被害. 静岡県林業技術センター研究報告 21: 1-7.
- 鳥居春己, 小寺裕二, 高野彩子 2010. 壱岐におけるクリハラリスによる造林木被害. リスとムササビ 24: 14-18.
- Wilson DE, Reeder DM. 2005. Mammal Species of the World: a Taxonomic and Geographic Reference, 3rd ed., 2142 pp. The Johns Hopkins University Press, Baltimore.
- 安田雅俊. 2010. 熊本県宇土半島で野生化したクリハラリス. リスとムササビ 24: 2-6.

Origin of the invasive Pallas' s squirrels captured in Wakayama City, Wakayama Prefecture, Japan

Pallas's squirrel (*Callosciurus erythraeus*), an invasive species, was introduced into Japan as a pet and zoo animal. This squirrel is thought to have been established in the wild in 1935, when individuals that were bred on Izu Oshima Island escaped. Currently, this squirrel causes serious damages to agriculture and forestry in Honshu and Kyushu, as well as concerns regarding its impact on native ecosystems. Therefore, *C. erythraeus* has been designated a Specified Invasive Alien Species under the Invasive Alien Species Act in Japan, and extermination trapping is being conducted in some areas.

This species was introduced onto Tomogashima Island

in Wakayama City, Wakayama Prefecture, from Izu Oshima Island in 1954. Although this squirrel has been established in Wakayama Castle Park, Wakayama City, it is unclear whether the origin of the introduction was Izu Oshima Island like the Tomogashima population. Recently, this species has been identified in the northern region of Wakayama Castle Park, creating concern that its distribution may be expanding in Wakayama City. If the origin of the population in Wakayama Castle Park and its vicinity differs from that on Izu Oshima Island, it may be necessary to consider preventative measures to further control the expansion of distribution within the city. In this study, we investigated the domestic origin of the *C. erythraeus* population in Wakayama City using mtDNA control region sequences. Control region sequence analyses of five individuals in Wakayama Castle Park, two in Umehara, five in Saigasaki, five in Minami Tarumi, Tomogashima, and five in Jagaike, Tomogashima (22 individuals) detected two haplotypes (1,081 bp) which were previously reported. One was haplotype CeJ2, which was reported from the Izu-Oshima Island population, and 20 individuals carried this haplotype which was detected at all collection sites. Therefore, it is clear that the Wakayama Castle Park population originated from Izu Oshima Island. The other was haplotype CeJ5, which was first reported from Hamamatsu City, Shizuoka Prefecture. Two individuals captured at Minami Tarumi, Tomogashima, had this haplotype. This indicates that this species may have been introduced to Tomogashima not only from Izu Oshima Island but also from other areas in the past.

十勝地方を中心とした北海道におけるセミ科の分布記録

山内健生

(受付 : 2025 年 5 月 20 日, 受理 : 2025 年 7 月 1 日)

Distributional records of cicadas (Hemiptera: Cicadidae) in Hokkaido (mainly Tokachi District), Japan

Takeo YAMAUCHI

摘要

帯広畜産大学に収蔵されている北海道産セミ科 6 種 (コエゾゼミ *Auritibicen bihamatus*, エゾゼミ *Auritibicen japonicus*, アブラゼミ *Graptopsaltria nigrofuscata*, エゾハルゼミ *Yezoterpnosia nigricosta*, ヒグラシ *Tanna japonensis*, エゾチッチゼミ *Kosemia yezoensis*) の標本を記録した。これらのうち、アブラゼミとヒグラシは北海道十勝地方における新記録となるが、両種とも十勝地方に定着していないと考えられる。さらに、2020 年 6 月に撮影されたミンミンゼミ *Hyalessa maculaticollis* の記録を報告した。これは、十勝地方においてもっとも古くに撮影されたミンミンゼミの生態写真である。

キーワード : セミ類, カメムシ目, 分布, ミンミンゼミ

緒言

セミ科 (以下、セミ類) は、カメムシ目頸吻亜目に属する一群で、日本に 36 種 1 亜種 (税所, 2019), 北海道からは 11 種が記録されている (中谷, 1999)。セミ類は、我が国では夏の風物詩ともいべき存在であり、市民参加型生物調査の対象とされることも多い。

北海道の道東地方では、以下の 7 種のセミ類が記

録されていた: ニイニイゼミ *Platycleura kaempferi* (Fabricius, 1794), コエゾゼミ *Auritibicen bihamatus* (Motschulsky, 1861), アカエゾゼミ *Auritibicen flammatus* (Distant, 1892), エゾゼミ *Auritibicen japonicus* (Kato, 1925), エゾハルゼミ *Yezoterpnosia nigricosta* (Motschulsky, 1866), ミンミンゼミ *Hyalessa maculaticollis* (Motschulsky, 1866), エゾチッチゼミ *Kosemia yezoensis* (Matsumura, 1898) (税所, 2001; 保

帯広畜産大学昆虫学研究室

連絡先 : 山内健生, tyamauchi@obihiro.ac.jp

Laboratory of Entomology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

Address correspondence : tyamauchi@obihiro.ac.jp

田, 2014; 田中, 2025). これらのうち, 広く分布するのはコエゾセミとエゾハルゼミの2種である(中谷・中村, 2011). セミ類は多くの人たちに親しまれている昆虫であるが, 道東地方におけるセミ類の情報は乏しい(中谷, 1999).

道東地方の帯広畜産大学昆虫学研究室(帯広市)には20万点以上の昆虫標本が収蔵されている(岩佐, 2002). 収蔵標本は主に北海道十勝地方(十勝総合振興局管内)で採集されたものであり, とりわけ東大雪地域の採集品が充実している. その他, 特殊なものとしては, 帯広畜産大学知床半島学術調査団による知床調査(高野・外崎, 1962)の際に得られた昆虫標本も保存されている. 昆虫学研究室収蔵標本の中にはセミ類の標本も多数含まれるが, 帯広畜産大学ではセミ類の多様性に関する研究を行った教員や学生は少なく, 収蔵されているセミ標本に関する報告もなされていなかった.

帯広畜産大学昆虫学研究室に収蔵されている北海道産セミ標本の同定を行ったので, 分布資料として報告する.

材料と方法

帯広畜産大学昆虫学研究室に収蔵されているセミ類の乾燥標本を形態学的特徴に基づいて同定した.

結果

十勝地方を中心とした北海道において1949~2021年に採集・撮影されたセミ科7種が同定された. これらのうち, アブラゼミとヒグラシは十勝地方における新記録となるが, 両種とも十勝地方に定着していないと考えられる. また, 十勝地方においてもっとも古くに撮影されたミンミンゼミの生態写真を記録した. 帯広畜産大学知床半島学術調査団の第一次調査(1960年)の際に採集されたと考えられるコエゾゼミの標本が現存することを確認した.

目録

以下の標本目録では, 各種の採集記録(採集個体数, 採集地, 採集年月日, 採集者の順で示す)を記述した. 特筆すべき点は備考としてデータの後に付記した.

採集記録は, 以下に記す地域の順に記述した: オホーツク総合振興局(オホーツクと略記), 釧路総合振興局(釧路と略記), 十勝総合振興局(十勝と略記), 上川総合振興局(上川と略記), 日高振興局(日高と略記), 空知総合振興局(空知と略記), 胆振総合振興局(胆振と略記), 後志総合振興局(後志と略記).

代表的な採集者の略称は以下のとおりである: ELOU(帯広畜産大学昆虫学研究室), HO (Hiroshi Ono 小野洋), MI (Mitsuhiro Iwasa 岩佐光啓), ST (Shuzo Takano 高野秀三).

1. コエゾゼミ *Auritibicen bihamatus* (Motschulsky, 1861) (図1A)

調査標本: 【オホーツク】1♂, 網走, 22 Jul. 1958, M. Tonosaki leg.; 1♂ 2♀ 1抜け殻, 斜里イワベツ, 27 Jul. 1960, M. Tonosaki leg.; 1♂, 遠音別, 3 Aug. 1984, MI; 1♂, 丸瀬布, 3 Aug. 1999, MI; 【釧路】1♂, 摩周, 5 Sep. 1955, ST; 1♀, 標茶町虹別, 8 Aug. 1960, M. Tonosaki leg.; 1♀, ホロカショロ, 25 Aug. 1984, 採集者不明; 【十勝】1♂, 足寄旭ヶ丘, 5 Jul. 1972, HO; 1抜け殻, 上士幌町糠平, 8 Jul. 1957, ST; 1♀, 上士幌町糠平, 8 Aug. 1957, ST; 1♂, 上士幌町糠平, 21 Jul. 1962, HO; 1♀, 上士幌町糠平, 13 Aug. 1963, HO; 1♂, 上士幌町糠平, 16 Aug. 1963, HO; 1♂, 上士幌町糠平, 8 Aug. 1964, HO; 1♀, 上士幌町糠平, 12 Aug. 1969, HO; 1♀, 上士幌町糠平, 14 Aug. 1969, HO; 1♀, 上士幌町糠平, 採集年月日不明, HO; 1♂, 上士幌町黒石平, 14 Aug. 1960, M. Tonosaki leg.; 1♀, 上士幌, 20 Jul. 1964, Y. Nishijima leg.; 1♀, 新得町オソウシ, 4 Aug. 1979, ELOU; 1♂ 2♀, 新得町サホロ, 7 Aug. 1987, T. Nakagawa leg.; 1♀, 新得町サ

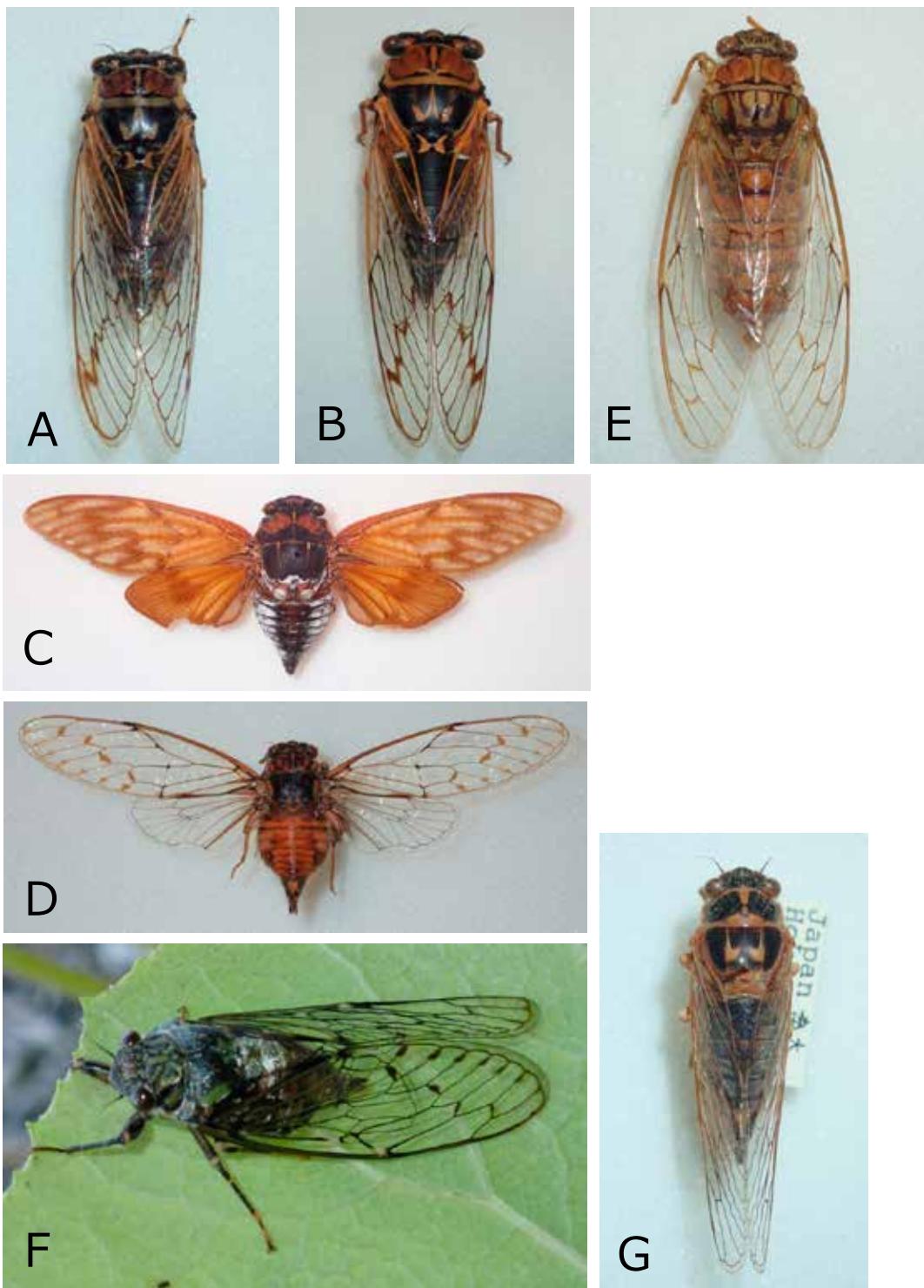


図1. セミ科成虫.

A コエゾゼミ *Auritibicen bihamatus* ♂ ; B エゾゼミ *Auritibicen japonicus* ♀ ; C アブラゼミ *Graptopsaltria nigrofuscata* ♀ ; D エゾハルゼミ *Yezoterpnosia nigricosta* ♀ ; E ヒグラシ *Tanna japonensis* ♂ ; F ミンミンゼミ *Hyalellia maculaticollis* ♀ ; G エゾチツチゼミ *Kosemia yezoensis* ♀ .

ホロ, 7 Aug. 1987, M. Kumagai leg.; 1♂, 新得町サホロ, 7 Aug. 1987, MI; 1♂, 帯広市帯広畜産大学, 2 Aug. 2021, T. Yamauchi leg.; 1♀, 帯広市岩内仙狭, 5 Aug. 1991, 後藤信 leg.; 1♂, 帯広, Aug. 1956, ST; 1♀, 帯広, Aug. 1956, ST; 1♂, 帯広, 28 Jul. 1962, Sogawa leg.; 1♀, 帯広, 21 Jul. 1963, HO; 1♂, 帯広, 17 Jul. 2000, MI; 1♀, 帯広, 採集年月日不明, ST; 1♂, 札内, 7 Aug. 1981, ELOU; 1♂, 中札内, 24 Aug. 1993, A. Kuromoto leg.; 【日高】1♂, 日方十文字, 30 Jul. 1972, K. Hori leg.; 【空知】1♂, ポンヤオロマップ, 28 Jul. 1984, MI; 【後志】4♂ 1♀ ニセコ, 23 Aug. 1979, ELOU.

備考: 本種は道東地方に広く分布し (中谷・中村, 2011), 帯広市市街地の都市公園にも分布する (伊藤, 2024). 1960年7月に「斜里イワウベツ」で採集された標本 (図1A) は, 帯広畜産大学知床半島学術調査団の第一次調査 (1960年7月25日～8月8日) の成果であり, 高野・外崎 (1962) で記録された個体であると考えられる. なお, 高野・外崎 (1962) には採集地「イワウベツ」は記述されているが, 標本の個体数や採集日は記されていなかった. 高野・外崎 (1962) には「これらの標本は現在帯広畜産大学糠平生物研究所に保存してある」と記述されているが, 後に糠平生物研究所から帯広畜産大学昆虫学研究室へ標本が移されたものと推測される.

2. エゾゼミ *Auritibicen japonicus* (Kato, 1925) (図1B)

調査標本: 【十勝】1♂, 浦幌, 29 Aug. 1977, Y. Harauchi leg.; 1♂, 上士幌町糠平, 30 Jul. 1963, HO; 1♀, 帯広市帯広畜産大学, 20 Aug. 2000, MI; 1♂, 帯広, Aug. 1956, ST; 1♀, 帯広, 30 Jul. 1961, HO; 1♂, 帯広, 18 Aug. 1962, Sogawa leg.; 1♂, 帯広, 採集年月日不明, ST.

備考: 本種は帯広市市街地の都市公園にも分布する (伊藤, 2024).

3. アブラゼミ *Graptopsaltria nigrofuscata* (Motschulsky, 1866) (図1C)

調査標本: 【十勝】1♀, 帯広, Aug. 1956, ST.

備考: 北海道においてアブラゼミは空知地方および上川地方よりも南西部に記録がみられるが分布が連続しているわけではない (西田・松本, 2014; 梶ら 2021). また, 網走市では飛び地的に, 移植苗に由来すると考えられる幼虫から羽化したアブラゼミ成虫が2020年に多数発生した (梶ら 2021). これまで十勝地方でアブラゼミが記録されたことは無く, 現在も分布していない可能性が高い. 今回記録した雌個体 (図1C) は1956年8月に帯広で採集されたものであるが, 移植苗などに由来して偶発的に発生した個体なのかもしれない.

4. エゾハルゼミ *Yezoterpnosia nigricosta* (Motschulsky, 1866) (図1D)

調査標本: 【釧路】1♀, 庶路地区シケルベ林道, 16 Jun. 1981, 採集者不明; 【十勝】1♂ 1♀, 新得町サホロ, 28 Jun. 1989, MI; 1♀, 新得山林, 19 Jun. 1949, M. Iwai leg.; 1♂, 帯広八千代牧場, 29 May 1990, 後藤信 leg.; 1♂, 帯広市岩内仙狭, 29 May 1990, 後藤信 leg.; 1♂, 帯広市岩内仙狭, 29 May 1991, 後藤信 leg.; 1♂, 帯広市岩内仙狭, 13 Jun. 1991, 後藤信 leg.; 1♂, 帯広, 2 Jun. 1963, HO; 1♀, 十勝川カンカンビラ, 23 Jun. 1992, S. Ito & M. Iwasa leg.; 1♀, 渋山川, 20 Jun. 2004, Oikawa leg.; 1♂ 1♀ 札内ダム, 15 Jun. 1982, ELOU; 1♂ 2♀, 札内川, 2 Jul. 1982, ELOU; 【日高】1♀, えりも町豊似湖, 21 Jul. 1986, MI; 1♀, えりも町目黒, 23 Aug. 1998, MI; 【胆振】1♂ 1♀, 登別温泉町, 採集年月日不明, T. Shibuya leg.

備考: 本種は道東地方に広く分布し (中谷・中村, 2011), 帯広市市街地の都市公園にも分布する (伊藤, 2024). 本種の成虫は5月中旬から7月下旬にかけて出現するとされる (税所, 2019). えりも町目黒にて8月23日に採集された雌個体 (図1D) は, 従来知られてよりも遅い時期に出現した個体だといえる.

5. ヒグラシ *Tanna japonensis* Distant, 1892 (図1E)

調査標本：【十勝】1♂ 1♀， 帯広， 採集年月日不明，
ST.

備考：これまで十勝地方でヒグラシが記録されたことは無く，現在も分布していない可能性が高い。今回記録した2個体は帯広で採集されたものであるが，偶発的に発生した個体なのかもしれない。なお，これらの個体の採集年月日は不明であるが，採集者が高野秀三博士であることから，高野博士が帯広畜産大学に勤務していた1947年8月～1962年3月の間に採集されたものと推測される。

6. ミンミンゼミ *Hyalellula maculaticollis* (Motschulsky, 1866) (図1F)

撮影記録：【十勝】1♀，帯広市戸蔵別川河川敷，13 Jun. 2020，山内健生撮影。

鳴き声の記録：【十勝】1♂，帯広市帯広畜産大学，9 Aug. 2024, ELOU.

備考：ミンミンゼミは，北海道では遠軽町以南の各地で記録されており（例えば，西田・松本，2014；奥寺，2018；山内ら，2025），北海道内の分布域が拡大傾向にあることが指摘されていた（原 1994；神田ら 2020；大表 2021）。十勝地方では，2024年8月2日に初めてミンミンゼミが確認された（田中，2025）。今回報告した撮影記録（図1F）は2020年のものであり，十勝地方においてもっとも古くに撮影されたミンミンゼミの生態写真である。この写真は、当時既にミンミンゼミが十勝地方に生息していた可能性を示唆するものである。

7. エゾチツチゼミ *Kosemia yezoensis* (Matsumura, 1898) (図1G)

調査標本：【十勝】1♀，帯広 売買川，Aug. 1971, K. Sato leg.；1♀，帯広市帯広畜産大学，25 Jul. 2004, 採集者不明；1♂，帯広，Aug. 1956, ST；1♂，帯広，30 Jul. 1961, HO；1♂，帯広，16 Aug. 1989, MI；1♀，帯広，18 Aug. 1992, MI.

謝 辞

標本の情報を入力してくださった森 理沙氏（帯広畜産大学），文献をお送りいただいた奥寺 繁博士（北海道教育大学）と税所康正博士（広島大学），ミンミンゼミについてご教示いただいた田中愛梨氏（ひがし大雪自然館），および長年にわたって帯広畜産大学の昆虫標本を管理してきた岩佐光啓名誉教授（帯広畜産大学）にお礼申し上げる。

引用文献

- 槐 真史，岩山航生，飯田 匠. 2021. 北海道網走市でアブラゼミが発生. 知床博物館研究報告 (43): 5-12.
- 原 俊二. 1994. ミンミンゼミ積丹半島での採集記録. *Jezoensis* (21): 78
- 伊藤彩子. 2024. 帯広市緑ヶ丘公園昆虫調査報告 (3) 一カメムシ目一. 帯広百年記念館紀要 42: 25-38.
- 岩佐光啓. 2002. 昆虫コレクション (11) 帯広畜産大学 昆虫学研究室. 昆虫と自然 37(1): 28-31.
- 神田正五，小林英男，村井雅之. 2020. 昆虫. 登別市 (編)，新登別市史，登別市. 153-162.
- 中谷正彦. 1999. セミ. pp. 119-122. 道東の昆虫（釧路昆虫同好会編）. 釧路市，釧路.
- 中谷正彦，中村 勇. 2011. カメムシ目. pp. 81-84. 釧路市春採湖の昆虫：釧路市春採湖昆虫類調査報告書：春採湖昆虫観察ガイド付き < *Sylvicola* 別冊 V> (中谷正彦・一条信明 編). 釧路昆虫同好会，釧路.
- 西田貞二，松本英明. 2014. 旭川市および近郊に産するセミ科昆虫—最近の確認情報を含めて. *Jezoensis* (40): 16-29.
- 奥寺 繁. 2018. 北海道芦別市におけるミンミンゼミの産地. *CICADA* 24: 35-36.
- 大表章二. 2021. 蘭越の昆虫 II. 自刊，蘭越.

税所康正. 2001. 北海道芽室町でニイニイゼミ. CICADA

16: 41.

税所康正. 2019. セミハンドブック. 文一総合出版,
東京.

高野秀三, 外崎 誠. 1962. 知床半島の昆虫類 (I).
pp. 61-76. 帯広畜産大学知床半島学術調査団報告
第1報 (高野秀三 編). 帯広畜産大学, 帯広.

田中愛梨. 2025. カメムシ類. pp. 13-17. 上士幌町生
物多様性データブック 2024 (節足動物など) (ひが
し大雪自然館 編). ひがし大雪自然館運営協議会,
上士幌町.

山内健生, 奥野雄太, 渋谷隆伸, 岩佐光啓. 2025. 北海
道の上川地方と胆振地方で採集されたアブラゼミと
ミンミンゼミ. 富良野市博物館報告 6: 7-10.

保田信紀. 2014. 大雪山昆虫誌. 北海道自然史研究会,
札幌.

**Distributional records of cicadas
(Hemiptera: Cicadidae) of Hokkaido
(mainly Tokachi District), Japan**

Specimens of following six species of cicadas
(Hemiptera: Cicadidae) collected from Hokkaido, Japan
preserved at Obihiro University of Agriculture and Veterinary
Medicine are recorded: *Auritibicen bihamatus*, *Auritibicen*
japonicus, *Graptopsaltria nigrofuscata*, *Yezoterpnosia*
nigricosta, *Tanna japonensis*, and *Kosemia yezoensis*. Of
these, *G. nigrofuscata* and *T. japonensis* are newly recorded
from the Tokachi District of Hokkaido, but are probably not
distributed in the Tokachi District. In addition, a photograph
of *Hyalessa maculaticollis* is reported. This is the oldest
record of *H. maculaticollis* in Tokachi, Hokkaido.

Key words: cicada, Hemiptera, distribution, *Hyalessa*
maculaticollis

地名「樺太」の語源について

落合いづみ*

(受付: 2025年4月28日, 受理: 2025年7月1日)

On the origin of the placename “karafuto” for Sakhalin

Izumi OCHIAI

摘要

日本語においてサハリンを指す語 *karafuto* と *karato* の語源を探った。古代日本語の *karapito*「唐人」に端を発した語であるが、これが早期アイヌ語に *karapito* として借用され、アイヌ語内部で第三音節の母音 *i* を脱落させる変化が起きて *karapto* に変わった。そしてアイヌ語における日本語借用形においても、古代日本語と同じく「異邦人」という意味を持っていただろうが、それがサハリン方面の人々を指すようになり、さらにサハリン方面を指す地名へと変わった。その後、サハリン方面を指す地名であるアイヌ語の *karapto* を日本語が借用することになる。この *karapto* は元々日本語起源であるから、日本語から見れば逆借用して、日本語に戻って来た語と見なせる。ただしアイヌ語 *karapto* を逆借用するにあたって子音連続 *pt* を解消するために二つの方法が採られた。一つが後部子音 *t* の脱落であり *karato* という形式に変わった。もう一つが母音 *u* の挿入であり *karafuto* という形式に変わった（アイヌ語 *karapto* における子音 *p* は *f* [ɸ] に変わった）。

Abstract

This paper examined Japanese words *karafuto* and *karato*, which refer to Sakhalin Island. These words originated with the Pre-modern Japanese word, *karapito* “foreigner.” This word, in turn, was borrowed into early Ainu as *karapito*. Later, it became *karapto* in Ainu through the deletion of the vowel *i* in the third syllable. The Ainu loanword *karapto* likely meant “foreigner” as with its Pre-modern Japanese source word. However, it was later applied to the people from Sakhalin, and became a placename for Sakhalin. Then, Japanese people borrowed the placename for Sakhalin from the Ainu loanword *karapto*. This Japanese origin word returned to Japanese with slightly different forms: *karato* and *karafuto*. A

*帯広畜産大学人間科学研究部門

*Department of Human Sciences, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

連絡先: 落合いづみ, i.ochiai@obihiro.ac.jp

phototactically disallowed consonant cluster *pt* in Ainu form *karapto* was resolved in two ways: consonant deletion and vowel insertion. The first form *karato* is obtained through dropping the consonant *p* in the Ainu source *karapto*. The second form *kafafuto* is obtained through inserting the vowel *u* between the consonant cluster *pt*. In addition, the consonant *p* later became *f*[ϕ] in the Japanese back-borrowed form.¹

キーワード：サハリン アイヌ語 日本語 借用語 唐人

keywords: Sakhalin, Ainu, Japanese, loanword, foreigner

1. はじめに

北海道のさらに北に位置する南北に細長い島に対して、現代日本語では「サハリン」と「樺太」という名称が用いられている。これら二つの地名の使い分けについて田村（2021：201）はその島を指す場合に「サハリン」を用いる一方で「樺太」を用いる場合は1905年から1945年の間に日本の植民地となったサハリンの南側（日本領樺太）を指すとする。本稿においてその島に言及する場合はサハリンと呼ぶことにする。ちなみに池上（2004：264）によるとサハリンという名称は満州語の *sahaliyan ula anga hada* に由来し、「黒い河の河口の崖」という意味だそうである²。ここでいう黒い河とはアムール側（別名黒竜江）を指す。

本稿の目的は樺太の語源を探ることである。吉田（1970：398-404）によると樺太は唐人に由来する³。しかし唐人に由来するのであればカラ「ヒ」トという名称

になりそうだが、カラ「フ」トというように第三音節の母音が *u* で現れる。これは日本語東北方言においてヒト「人」がフトと訛るためで、地名カラフトは日本語東北方言を導入した形式だと説明される。地名に対して「唐人」という表現を当てたということになるが、本来は部族を指すこの語を、その人々が住む土地を指す語として援用したのだろう（2.2節参照）。

本稿は地名カラフトについて、日本語に起源を持つが一旦アイヌ語を介して日本語に戻って来た語であると提案する。かいつまんで述べると樺太は古代日本語の *karapito* 「唐人」に由来するがこれがアイヌ語に借用されて *karapto* となり、それが日本語に逆借用されて *karafuto* [karaɸuto] および *karato* となった。ちなみに本稿において樺太を *karahuto* ではなくて *karafuto* [karaɸuto] と表記することにする。これはハ行の子音は [h] で代表されるが、母音が *u* の場合にハ行子音は [ɸ] になるという現代日本語の音声に基づくものであり、[ɸ]

¹ 本稿は言語学フェス2025（2025年2月1日、オンライン）における研究発表を基にしたものである。助言をくださった方々並びに草稿にコメントをいただいた白鳥詩織氏に感謝する。ただし本稿の不備は筆者の責任である。

² ただし池上（2004：264）は Du Halde (1735: 12-13) に記録された名称を引用し、それに満州語の注釈を与えた。

³ 吉田（1970：400）は「唐人」の他の民間語源も取り上げている。例えばウイルタ族は多来加湖に生息する蝦をカラフトと呼び、これが島名の由来となったという説、土着の言語（どの言語か明記していないがアイヌ語を指すと思われる）のカリブトウ（カリは「河口が塞がる」、トウは「破れる」トウは「沼」）がカラフトに転じたという説、土着の言語（どの言語か不明）で「鰯」を表すカラと「多い」を表すフトに由来するとする説、日本語のカラ「唐」と土着の言語（どの言語か明記していないがアイヌ語を指すと思われる）で水口を指すフトを組み合わせた日本語・土着語混成語であるという説を載せている。菱沼・西鶴・葛西（1930：9-15）はこれらに類似した語源説に加えこれら以外の語源説（モンゴル語由来など）も紹介している。

を文字 *f* で示すこととする。⁴

2 節では地名としての「唐人」の出現形式である *karafuto*、*karato*、*karako* の三つの交替形についてそれらの関係を述べる。3 節では地名 *karafuto* の漢字表記の変遷について概観する。4 節では日本語における「唐人」の音韻的変遷をその最小対である「稀人」の音韻的変遷を基に考察する。5 節ではカラフトという発音が日本語東北方言に拠るとする説について議論する。6 節では本節の主張であるアイヌ語からの逆借用説を展開し、7 節でまとめる。

2. 地名としての「唐人」の出現形式

地名「唐人」の出現形式は *karapito* ではなく、それに類似した形式として出現する。本節ではその出現形式に三つの交替形 *karafuto* と *karato* (2.1 節)、並びに *karako* (2.2 節) があることを見る。2.3 節では *karako* が *karato* を基に生じた形式であることを考察する。

2.1 *karafuto* と *karato*

『増補大日本地名辞典』(吉田 1970:399) における項目「樺太」の説明の一部を以下に引用する。太字は本稿筆者が強調のために加えたものである。

樺太は、本名カラト、又カラフトにいへるを、転声改定したるものにして、蓋、明治二年、北海道国郡命名の比

に在り。初め、江戸幕府は、文化中、北蝦夷と命名す、是れカラフトは、もと唐人の義に出でゝ、之を内域に唱ふるは、不祥なりとの觀念に因れるごとし。

これによると日本においてサハリンに対する名称は *karafuto* (カラフト) または *karato* (カラト) であったということである。後者カラトは前者カラフトから、第三音節の脱落によって生じた形式 (*karafuto* > *karato*) のように考えられるが、6 節でこれら二つの形式はアイヌ語 *karapito* を基に生じたことを議論する。

さらに *karafuto* という名称は唐人の意味であると述べている。これに対応する語として日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (2001a:1091) では「からびと」の項目を掲げ古形を「からひと」 (*karapito* に相当する) とした上で漢字表記を「唐人」もしくは「韓人」としている。意味としては「中国または朝鮮の人をいう」とあり、日本本土以外の土地の人を指す言葉として使われていることが分かる。⁵

そのため上記引用部分では異邦人を指す *karafuto* という語を、日本内域を指す地名として用いるのはよくないとの見解を示している。そのため文化年間に地名を *karafuto* から ^{キタエゾ}北蝦夷に変更したという⁶。榎森 (2023:19) によると北蝦夷への改称は文化 6 (西暦 1809) 年になされたが、1867 年に日本・ロシア間でカラフト島仮規則が締結され、それ以降は樺太州と改称した。

⁴ ちなみにハ行の母音が *i* である場合は /h/ が [ç] になる。

⁵ 上代語辞典編修委員会 (編) (1967:231) では中国系に「唐人」、朝鮮系に「韓人」と漢字表記を使い分けていた可能性を指摘しているが、本稿では「唐人」の表記を用いることにする。

⁶ これに関し金田一 (1944:382) には対ロシア政策との関連を示す記述が見られる。参考として以下に引用する。「嘉永 [1848-1854] のプーチアチン、安政 [1855-1860] のムラヴィヨフ、文久 [1861-1864] のイグナチーフ並びに皆樺太島の露領たることを主張し、殊に彼等が我国情を探って、「蝦夷とは日本の外国にして、唐人とは即ち外国人の謂にあらずや」と迫るに逢ひ、急遽之が言訳に腐心して俄かに之に対抗して「蝦夷は往古以来我国内に住む蛮民である。蝦夷の住む限り千島は勿論樺太も我が版図である。堪察加も我が版図である」と唱えて出して来た」(年号の後の年代は本稿筆者が加えた)。

2.2 karako

現在 *karafuto* に対して日本で用いられている漢字表記は 2.1 節の引用箇所に見られるように樺太であるが、吉田（1970：404）は「唐太^{カラヒト}は、唐人の仮借にして、もとカラトといへるに出づ。而して、カラトは唐子に同じ、五六百年來の旧称とす」とも述べている（太字は本稿筆者による強調）。これによると、*karafuto* に対して「唐太」という漢字表記が用いられていたことが分かる。また、*karafuto* と同義の *karato* は、*karako*「唐子」と同義だと述べている。「唐子」の意味は日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2001a：1066）によると中国風の衣装や髪型をしいている子どものことである。「唐人」「唐子」とも異邦人を指す語である点で共通している。

そして吉田（1970：404）は *karato* が五六百年前から既に用いられている地名だということにも言及しているようだが、これは *karato* の方ではなく *karato* と意味的に通じる *karako*「唐子」の方だと見なせる。というのも *karako* という形式が 1356 年成立の『諏訪大明神絵詞』（谷川・池田・宮田 1983：63）において「蝦夷が千島と云えるは、我国の東北に當て大海の中央にあり、日の本唐子渡党此三類各三百三十三の島に群居せりと…日の本唐子の二類は其他外國に連て、形体夜叉のことく變化無窮なり…」と述べられるように北海道方面における三種族（日の本、唐子、渡党）の一つとして挙げられているためである（太字は本稿筆者による強調）⁷。ただし『諏訪大明神絵詞』（谷川・池田・宮田 1983：63）では「唐子」はサハリン方面を指す地名としてというよりも北海道西部方面（サハリン方面も含むのだろうか）の部族名として用いられている。その方面に住む人々に対する呼称を地名として援用したと考えられる。

吉田（1970：404）による「唐子」についての言及は吉田（1911）が初出であると考えられる。初出の 1911

年から五六百年前ということになると年代的には 1311 年から 1411 年の間であり『諏訪大明神絵詞』の成立年代である 1356 年に當てはまる。そのため吉田（1970：404）による、*karako* は *karato* と同じ意味であり、それは五六百年前に遡る語であるという記述は、『諏訪大明神絵詞』における唐子族の記述を基に、*karako* という語の古さについて述べたものようである。

2.3 *karako* と *karato* との関係について

2.2 節で見た *karako* という形式は *karato* を基にして生じた類音牽引の形式ではないかと本稿は考える。元々 *karato* という語があり、この語が *karako*「唐子」に形的に類似しているため（最終音節の頭子音が *t* か *k* かの違いのみであり最小対を成している）、本来の形式 *karato* が、日本語話者によって *karako* のはずであると再解釈されたために *karako* が新たな形式として登場したのではないか。だとすれば地名 *karafuto* と *karato* は 14 世紀に記録された *karako* よりも早くに存在していたということになる。つまり遅くとも 14 世紀までには地名 *karafuto* と *karato* が使われていたと言える。サハリン方面（またはその居住者）を指す語として *karafuto*、*karato* の二つと、*karato* から類音牽引によって生じた *karako* の三つが見られるが、この三つの形式の中で現代日本語に残ったのは *karafuto* のみであり、残りの *karato* と *karako* は現代では用いられない（6.2 節参照）。

3. 地名 *karafuto* の漢字表記の変遷について

2.2 節で見たように吉田（1970：404）では *karafuto* に対して「唐太」という漢字表記が用いられていることから、「唐人」の二文字目の「人」を訓読の類似した「太」に変えたことが見て取れる。

⁷「日の本」という部族は日本國の住民を指すのではなくて、北海道方面における東方の住民という意味である（金田一 1944：390-391）。

次に吉田（1970：400）において地名 *karafuto* に宛てる漢字表記がさらに変遷したことを述べている箇所を見る（太字は本稿筆者による強調）。

此に於て、或は旧解を棄てゝ、**柯太**の文字を以て釈き…
而も、松浦判官、樺太の改名案を立て、遂にそれに落着す。岡本氏（前開拓判官）樺太探検日記曰、明治元年八月の比、余は松浦武四郎と屢論談したりしに…松浦曰く、彼地に樺の大樹多き故に、**樺太**と曰ふ何かあらんと、相争ひしことあり。

ここでの地名 *karafuto* の旧解釈というのは、唐人に由来するというものである。異邦人を指す語はよくないと2.1節の引用部分で述べられていた。そのため漢字表記「唐太」を *karafuto* の発音に類似した発音を持つ「柯太」に改めたらしい。この場合は一文字目の「唐」が「柯」に置き換えられた。この漢字表記「柯」は意味的に「柄」に通じる。「柄」は訓読みで *kara* とも読む。そのため「柯太」では「柯」に *kara* の音を宛てている。「柯太」にすることによって漢字表記「唐」に付随する異邦人の意味を取り去った。

上記引用部分後半によると北海道・樺太踏査で著名な松浦武四郎氏がサハリンには樺が多いので、「樺」を漢字表記に取り入れた「樺太」を提案してこれが今に用いられるに至る。「樺」の訓読みは *kaba* であるが、ここではこの漢字表記に *kara* という特殊な読み方を持たせている⁸。

以上をまとめると、サハリンの語源は「唐人」であることがわかった。4節では「唐人」は古代日本語においては *karapito* という発音であつただろうが、それが現代日本語において *karafuto* と発音されるようになるのが妥当かどうかを「唐人」の最小対である「稀人」を基に検討する。

4. 最小対「唐人」と「稀人」

サハリンの語源でもある「唐人」は「稀人」と最小対の関係にある。両者ともに『時代別国語大辞典上代編』（上代語辞典編修委員会 1967：231, 692）に挙げられた形式であり、上代から用いられる古い語である。「ひと」の最終母音は乙類であることから、上代日本語の形式はそれぞれ *karapito* と *marapito* である。オ列乙類の上代日本の音価を [ə] としたがこれは Miyake (2003: 262) に基づく。その後 [ə] は [o] に合流したため上古日本語の形式はそれぞれ *karapito* と *marapito* となる。

この中「稀人」について Ochiai (2025: 205-208) は上代日本語から中古日本語に至るまでの変化を *marapito* > *#marapito* > *#marabito* > *#maraβito* > *#marawito* (*marauto*) > *marodo/marooto* > *maroodo* と推定している（#が付された形式は文献に記録されていないが推定可能な形式という意味である）。上述の最終母音の [ə] > [o] への変化のほか、語中子音 *p* の *b* への有声化、閉鎖音 *b* から摩擦音 *β* への弱化、摩擦音 *β* から接近音 *w* への弱化、*w* の *u* への読み替え、母音連続 *au* から開音 [ɔ:] への変化とその後の [o:] への合流、語中子音 *t* の *d* への有声化など一連の変化を経て *maroodo* となり、これが現代日本語に受け継がれている。「稀人」の他にも複合語前項の最終母音が *a* で複合語後項に「人」を持つ語の中には、同様の音韻変化を経たために語尾に *oodo* を持つものが見られる。Ochiai (2025: 209-210) から例を挙げると *katoodo* 「方人」、*kuroodo* 「藏人」、*matoodo* 「全人」、*nakoodo* 「仲人」、*sirooto* 「素人」、*toodo* 「田人」、*wakoodo* 「若人」である。

本稿が扱う語「唐人」についてもその上代日本語の形式 *karapito* から上述の語例に起きたのと同様の一連の変化が起きたとすれば、現代日本語では *karoodo* に変化していると考えられる。しかしこの *karoodo* という形式

⁸ ただし、樺太をその訓読みのままに *kabafuto* と読ませることもあったようで、吉田（1970：398）ではカバフトとルビが振られている。

は現代日本語では見られない⁹。そのため現代にいたる間に廃れてしまったのだろう。サハリンに対する地名も *karoodo* とは言わずに *karafuto* という。この地名形式 *karafuto* は「唐人」が日本語内部（主に中央語）の一連の変化を経る過程において得られる形式ではない。このことから「唐人」の中央語における歴史的変化とは別の経路から来た形式であることが考えられる。別の経路の可能性の一つとして 5 節では *karafuto* が日本北部の方言に由来する形式であるとの説を検討する。

5. 日本語北奥方言起源説

2.2 節で見た唐子族について池上（2004：265）は大陸の文化の影響を受けた部族のことであろうと述べる。ここで言う大陸とはユーラシア大陸を指す。以下にユーラシア大陸とその対岸のサハリン、北海道（宗谷地方）との交易関係について述べた箇所を吉田（1970：404）から引用する。ちなみに高倉（1939：171）によると「樺太より齎された満州産物の交易の中心地は宗谷であった」ということである。

何を以てカラフトと称するといふに、彼より漢製の諸品を携来るものありて、宗との夷人と交易する事年久し、其齎す所の品物は、所謂「ダンギレ」、蟲巣玉、煙管の類、種々なり、漸々これを本地に伝ふ。これ我夷種とは異なる人々持来る故に、江差、松前の商賈ども聞き受けて、泛然としてカラフトと呼ぶ事となり、終に其北夷の地名の様になると見えたり¹⁰。

サハリンを指すのに唐人という意味のカラフトという語を用いるが、その理由はサハリン方面から漢製の品々（縷子、虫の巣玉、煙管等）が渡ってきて、それらを北海道北端の宗谷においてアイヌ民族と交易したためで、これらの品をもたらす部族はアイヌ民族とは異なるため、北海道南部の江差、松前方面の商売人（おそらく和人だろう）がそれらサハリン方面の人々を *karafuto*「唐人」と呼び、それがその地名ともなったと述べている。

唐人を *karahito* ではなくて *karafuto* と発音することに關し、日本語の北方における方言では「人」をフトと発音することについて吉田（1970：404）に高橋景保氏によるという以下の言及が見らえる。

高橋景保北蝦夷考証（文化六年著）曰、蝦夷地宗耶の北にあたり、海峡を隔る大地を唐太と称す、カラフトは唐人なり、我国愚俗、翼邦を汎称して「カラ」といふ、「フト」は北人「ヒト」という言の訛なり

引用部分にある「北人」は日本語を話す地域の中で北に居住する人々のことだろう。上述の引用部分（吉田 1970：404）では北海道南部の江差、松前における日本人商人がサハリン方面をカラフトと呼んだと述べている。江差、松前方面の日本人は、北海道対岸の北奥地域からの移住者が主であったと考えられるため、本稿では北奥地域に限定してこれら日本語方言における「人」の発音について検討する。

⁹ ただし同音異義語なら存在する。古代日本語 *karapitu*「唐櫃」は現代日本語の辞典（新村 1998:580）では「かろうど」として挙げられている。ちなみに *karapitu*「唐櫃」は *karapito*(> *karapito*)「唐人」と最小対の関係にある。そのため「唐人」から転じた *karoodo* は、「唐櫃」から転じた *karoodo* と同音衝突を起こし、*karoodo* の二つの意味から「唐人」が追いやられて、この形式が専ら「唐櫃」を意味するようになったのかもしれない。さらに言えば *karapitu*「唐櫃」はアイヌ語に *karawto* という形式で借用されている（萱野 1996：201、Ochiai 2025：215-216）。

¹⁰ 「宗耶」は宗谷を指すと見なせる。

5.1 北奥方言において「人」をフトと表記することについて

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (2001b : 355) には「ひと」(人)の項目にその方言形式が挙げられている。北奥地域に限定してその発音を挙げるとシト(青森、岩手)、スト(岩手)、ヒタ(岩手)、フト(青森、秋田、岩手)の四つが見られた。四つ目が当該形式のフトである。これにより北奥地域において「人」をフトと発音する場合があることが確認された¹¹。

「人」がフトと表記されることについて、北海道の対岸に位置する青森県において用いられる日本語諸方言(津軽方言と南部方言)に着目する。佐藤(2003 : 15)には津軽方言の母音 *i* の発音について、音節頭子音と結びつくと *Ci* が *Cu* の音色にも近くなることがあるとの記述がある。また、標準語引きの南部方言(青森県八戸市)の語彙集(大島他 2003 : 55-219)には国際音声字母が付されており、標準語の音節 *Ci* において南部方言で対応する母音の現れを調べてみたところ子音の種類によって相補分布を呈した。この母音は南部方言において [i] または [u] 現れたが、前者は *m, b, k, g, n, r, ɿ* の直後に、後者は *s, ɸ, t, d, z* の直後に見られた¹²。「人」について言えば語頭子音は *ɸ* で現れるため直後の母音は [u] で現れる。つまり [ɸuto] となる¹³。この音声を仮名で表記するならば「フト」というように書くことになるだろう¹⁴。

5.2 津軽方言において複合語後項がハ行子音で始まる場合の子音の現れ

北奥地域において単独で表れる「人」の発音の一つにフトが見られることを確認したが、「唐人」のように「人」が複合語の後項の場合もフトの発音で現れるのかどうかを確かめる必要がある。以下では北海道西部及びサハリン方面との関係においてその歴史が古いと考えられる津軽方言に焦点を当てて議論を進める。

津軽方言の語彙として先行研究にハヤフト「早い人」(藤原 1965 : 45)、オオフト「巨人」(松木 1982 : 68) という形式が挙げられていることから、複合語後項に用いられる「人」がフトと発音する場合があることが分かる。

ただし津軽方言のハヤフトやオオフトという表現において、複合語後項の語頭無声阻害音に起きるとされる連濁が生じていない。共時的観点から複合語後項の語頭がハ行のものについて連濁の規則を眺めると、複合語後項の語頭子音 *h*(または母音が *u* と *i* の場合はそれぞれ *ɸ, ɿ*) が *b* に置き換わる。以後はこの共時的音韻規則としての連濁が複合語後項において、津軽方言をはじめとする現代日本語諸方言に生じると見なして議論を進める。

フト「人」が複合語後項であるならば連濁が適応されてハヤブトやオオブトとなるはずである。連濁が生じていないということは、それぞれに独立性の高い内容語(どちらも前者は形容詞、後者は名詞)の組み合わせであつ

¹¹ ちなみに「人」の方言形式としてフトが挙げられているのは本文中の北奥方言の他に石川県、山形県、鳥取県、鹿児島県である。

¹² ただし大島他(2003)では [i] と [u] というように中舌母音を表す補助記号「・」を用いているのを本稿では、それぞれ [i] と [u] に書き換えた。

¹³ 岩手県の発音の一つに第一音節がサ行であるストが挙げられているがおそらく [suto] である。これは語頭の *ɸ* が *s* に変化したものであり [ɸuto] と同類と見なす。また、日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部(2001b : 355)に青森県、岩手県の「人」の発音の一つとしてシトも挙げられている。これは [çito] と見なせるが、この母音 [i] は標準語形の「人」に見られる母音 *i* に近づけようとしたための変化で、これら方言においては標準語の影響下で二次的に生成された形式ではないだろうか。

¹⁴ 菅沼(1975 : 124)には津軽方言と南部方言とともに「人」はフトと言うと述べ、フトには [ɸuto] の音声表記が当てられているが、これは本稿の [ɸuto] に相当する。

て、語と語の結合度合いが弱く複合語を成すに至っていないと考えられる。これは歴史的に比較的新しく作られた複合語であることを示唆するのではないか。

この見解が正しいかを確かめるためには北奥方言におけるハ行連濁の有無の実情を調べる必要がある。本研究では津軽方言の複合語と見なされる形式において、ハ行音がどの子音 (*h* 系列 [h, ɸ, ɸ̪] か、連濁を表す *b*、または歴史的子音 *p*) で現れるのかを、津軽方言の辞典（松木 1982）で調べた。複合語の中、後項初頭にハ行を持つものとして 65 例が得られた。表 1 では複合語の後項（標準語表記五十音順）ごとに松木（1982）に挙げられた形式を示す¹⁵。松木（1982）における各項目の表記は平仮名を用いており本稿もそれに従う。また松木（1982）ではガ行鼻音（子音が *ŋ* であることを表す）を「が、ぎ、ぐ、げ、ご」と表記しており本稿もそれに従う。また母音 *e* を

持つ平仮名の後ろにカタカナの小さいエ（エ）が添えられていることがある（例：ねエ）。この音価に対する記述は見られないが母音 [e] の開口度をより広くした [ɛ] を表していると判断した¹⁶。表 1 では平仮名で挙げた津軽方言の項目の隣にその後に相当する漢字仮名交じり表記を示し、さらに語釈を示す。漢字仮名交じり表記が困難な箇所はカタカナを用いて示す。松木（1982）において語釈の項目が複数に亘る場合は、最初に挙げられている語釈を示す。また表 1 に挙げた複合語は前項の語末音節が開音節のものに限り、語末音節が閉音節（促音または撥音をもつもの）を除いた¹⁷。後項のハ行子音を太字で強調し、両唇閉鎖音以外の子音で現れる場合は下線を付した。

¹⁵ ただし複合語後項が外来語であるもの、擬音語擬声語であるものは除いた。さらに、同じような意味分類の語を重ねた並列的表現（例：べっけはっけ「別家末家」（松木 1982:418）、うらはら「裏腹」（松木 1982:50））も除いた。このような並列的構成の複合語では連濁が起こらないとされるためである（平野 2021:5-6）。ちなみに松木（1982:328）に「ながペろえ」という語があり意味は細長く伸びているさまである。「ペろえ」の部分はひょろ長いという日本語のヒヨロに相当すると考えている。本稿ではヒヨロが擬音語擬声語的と考えて表 1 に含めなかつたが、表 1 の一例として挙げられる語かもしれない。

¹⁶ 此島（1961）においてエエは [ɛ] を表すとの記述を参考にした。

¹⁷ というのも、そもそも日本語において閉音節直後のハ行子音の出現は開音節直後のハ行子音の出現とは異なる様相を示すからであり、促音または撥音の直後ではハ行子音は *h* 系列子音ではなくて両唇閉鎖音で現れる傾向がある（高山 2024: 44）。ちなみに松木（1982）において閉音節直後に両唇閉鎖音が来る複合語を補足として以下に記す。複合語後項が「端（は）」であるものには表 1 に挙げたもの他に、「げっぱ」（「一番あと、びり」の意味で「下端」に由来する（松木 1982: 155））と「じやっぱ」（「料理した魚の頭や骨など」の意味で「雑把」または「雑端」に由来する（松木 1982: 220））が挙げられるが、これらは促音の直後にハ行が来る例である。促音の直後にハ行が来る例は他に「まっぱしめ」（「一番はじめ、最初」の意味で「最初」に由来する（松木 1982: 443））、「ぶっぱじす」（「勢いよく外す」の意味で「打外す」に由来する（松木 1982: 402））、「へっぷぐ」（「背が低く太っている女」の意味で「背低い」に由来する）、じょっぱり（「意地つ張り」の意味で「情つ張り」に由来する（松木 1982: 227））、「つっぱりかじ」（「柱を立てる」の意味で「突張りかつ」に由来する（松木 1982: 281））がある。複合語後項に「鉢」を持つものには表 1 に挙げたもの他に「ちやわんばじ」（どんぶりよりも大きい焼き物の鉢（松木 1982: 270））と「べんばじ」（瀬戸焼の大型の鉢（松木 1982: 420））があるが、これらは撥音の直後にハ行が来る例である。撥音の直後にハ行が来る例は他に「ごんげんばな（権現鼻）」（獅子鼻（松木 1982: 178））、「ぼんばな（盆花）」（「桔梗」の意味（松木 1982: 432））、「たんばら」（気が短いことの意味で「立腹」に由来する（松木 1982: 265））がある。

表1 津軽方言の複合語において後項がハ行で始まるもの

複合語後項	津軽方言	漢字仮名交語釈 じり表記	
端 (は)	おば	尾羽	尾、しっぽ
	たじはこ ¹⁸	立端こ	出立する間際や客の帰り際に、さらにつすめて飲ませる酒や食べもの
掃き (はき)	ごみばぎ	塵芥掃き	大掃除
挟み (はさみ)	くちばさみ	口鉗	人の対談に対し、横合いから口をさしはさむこと
端 (はし)	うらぱじ	末端	先端
	きぱじ	切端	切端
	くちぱし	口端	口、口の辺
箸 (はし)	しだりぱじ	左端	左利き
	とばし ¹⁹	ト端	飯の煮え具合を見るために鍋に突き刺す長い橋
疾し (はし)	きぱしこえ	気疾しこい	気が利いて動作が敏捷なさま
	きぱしねエ ²⁰	気疾しない	きぜわしい、気早い、うるさい
端 (はた)	けつぱだ	尻端	尻、尻のあたり
	くじぱだ	口端	---
裸 (はだか)	おびはだか	帯裸	帯も紐も締めずにいるさま
蜂 (はち)	かめぱじ	甕蜂 ²²	すずめばち
鉢 (はち)	さはじ ²³	サ鉢	皿の形をした大きな鉢
鼻 (はな)	つかみばな	攫鼻	手鼻をかむこと
花 (はな)	ねじりばな	ねじ花	ねじばな
	のぎばな	軒花	祭礼の際などに家の軒先に飾りつける造花
	みそばな	禊花	みそはぎ
弾き (はじき)	はなはつけ	鼻弾き	相手にしないこと
	めぱじき	目弾き	まばたき
弾ける (はじける)	しらぱつける	白弾ける	色が褪せ白っぽくなる

¹⁸ 松木 (1982: 251) によると複合語後項語末の「こ」は指小辞である。¹⁹ 松木 (1982: 318) は複合語前項の「と」について「斗」の可能性を示唆している。²⁰ 松木 (1982: 128) によると語尾の「ねエ」は甚だしいさまの形容詞的語尾ということである。²¹ この語は項目「けつぱだ」の中の説明文に類例として挙げられている。ここでの表記は「クジバダ」と片仮名である。語釈は付けられていないが「けつぱだ」(尻端)に挙げられた語釈を参考にすれば「口、口のあたり」という意味になるだろう。²² 松木 (1982: 112) では「甕」の漢字表記を「かめ」に宛てているが、本稿では「甕」とした。²³ 複合語前項の「さ」について松木 (1982: 187) は「浅 (あさ)」または「皿 (さら)」に由来する可能性を指摘している。

跳ね (はね)	しばね	尻跳ね	歩くときに着物の裾につく泥の跳ね
	なわはね	縄跳	なわとび
はやし ²⁴	さんべエし	桟ハヤシ	桟俵
腹 (はら)	したばらし	下腹する	お世辞を言う、おべっかする
	わきばら	脇腹	腹の横の方
原 (はら)	かがわら	カガ原	芝生、芝原
	たげわら	竹原	竹藪
	やぶわら	藪原	草藪になっている土地
張る (はる)	しょっきぱる ²⁵	ショ気張る	身体をうしろにそらして威張ること、もったいぶって威張ること
	ばじぱる ²⁶	バツ張る	怒鳴る、怒鳴りつける
日 (ひ)	なのがび	七日日	七夕祭の七日目
火 (ひ)	かばび	樺火	樺の木の皮を燃やす火
光 (ひかり)	いなぴかり	稻光	稻妻
引き (ひき)	ねびぎ	根引	床板を支える太い横木
櫃 (ひつ)	きしひじ	キシ櫃	米櫃
引っ掛け (ひっかけ)	はなぴかげ	鼻引っ掛け	着物の袖口で鼻汁を拭うこと
引っ込み (ひっこみ)	てふくみ	手引込み	ふところ手
人 (ひと)	おおふと	大人	岩木山に住んでいたという巨人
枚 (ひら)	かだぴら	片枚	片側、片面
放り (ひり)	くそぴり	糞放り	糞放り野郎
吹き (ふき)	さぶき	しわぶき	せき、咳嗽
袋 (ふくろ)	くそぶくろ	糞囊	鳥類の砂囊
蓋 (ふた)	かさぴた	瘡蓋	かさぶた
太い (ふとい)	のぶとえ	箆太い	岡太い、ずうずうしい
踏み (ふみ)	どんじぎふみ	土突き踏み	家を建てるために基礎を据える地面を突き固めること
	ゆぎふみ	雪踏	雪を踏み固めて道をつけること
振り (ふり)	もだへぶり	持たせ振り	思わせぶり
風呂 (ふろ)	しふろ	据風呂	据風呂
辺 (へ)	のどペ	咽喉辺	咽喉もと
	はなペ	鼻辺	鼻の辺

²⁴松木 (1982: 191) によると複合語前項の「ハヤシ」は「藁で作った円い扁平な台盤ようのもの」である。

²⁵松木 (1982: 226) によると複合語前項の「しょ」は動詞や形容詞などについてその意味を強める接頭辞である。

²⁶松木 (1982: 372) によると「ばじ」の部分はバツバツ (遠慮なくばばば言うさま) に由来する。

蛇 (へび)	くそふえび ²⁷	糞蛇	まむし
穂 (ほ)	いなぼ	稻穂	稻の穂が豊かに実ったさまにした小正月の飾りもの
星 (ほし)	しゃぐぼし	柄杓星	北斗七星
	はぎぼし	籌星	彗星
	ますぼし	杓星	酒杓星
	めぼし	目星	眼球に出来る白い斑点
欲しい (ほしい)	まつぼし	待ち欲しい	待ち遠しい
骨 (ほね)	からぼねやむ	空骨病む	骨惜しみをする
	しらぼね	平骨	肩甲骨
堀り (ほり)	かねほり	金堀り	ウスバカゲロウの幼虫
惚れる (ほれる)	ねほれる	寝惚れる	寝すごす
ほろぎ ²⁸	たましほろぎ	魂ほろぎ	びっくり仰天すること

5.2.1 後項ハ行子音が b で現れるもの

表 1において後項ハ行子音が b で現れるものは「ごみばぎ」「しだりばじ」など 23 語見られた。これらは期待通りに共時的な連濁の音変化 (h 系列子音 > b) を起こしたものである。

5.2.2 後項ハ行子音が p で現れるもの

表 1において後項ハ行子音が p で現れるものは「おば」「くちばさみ」など 25 語見られた。これらは 5.2.1 節でみた共時的な連濁の音変化とは似て非なるものである。本来なら h 系列子音が b に変わるところが、p に変わっている。しかも後項ハ行子音が b で現れる語数が 23 例だったのに対し (5.2.1 節)、p で現れる語数の方がやや多い。

これはハ行子音に関わる連濁について、津軽方言内部で再解釈が起きたためではないだろうか。例えば、タ行子音においては、連濁を起こした子音が d 系列に変わると、連濁を起こさない子音が t 系列で現れる。これは有声・無声が連濁における対立項となっている。しかし、

ハ行において連濁の対立項は、有声子音の b と無声子音の h 系列であるが、それら対立子音はタ行の場合がどちらも閉鎖音であるのとは異なり、調音方法が閉鎖音と摩擦音で異なっている。そのため、ハ行に関わる連濁において閉鎖音 (p または b) であるか摩擦音の h 系列であるかが対立項と再解釈され、連濁した場合の子音は閉鎖音であれば有声音の b でも、無声音の p でも構わないというように津軽方言において変化したのではないか。

これを裏付けるように同一の複合語後項「張る」と「骨」をもつそれぞれ二つの複合語では、p で現れるものと b で現れるものが併存している。「張る」には「しょきばる」に対して「ばじばる」があり、「骨」には「からぼね」に対して「しらぼね」がある (該当の仮名を太字で示して強調した)。

本小節で見た連濁におけるハ行子音の p は再解釈によって生じた二次的な由来を持つと考えられるが、これらの語も津軽方言の複合語における連濁の適応例に含めることにする。

²⁷ 松木 (1982: 139) は「ふえ」を古い発音の名残と述べている。この子音は [ɸ] であると推定されるが、ハ行が歴史的子音 p からɸに変わりさらにhにかわる変化において、へび「蛇」の語頭子音がhではなくて一段階前のɸで現れることを古い音の残存と見なしている。

²⁸ 松木 (1982: 258) によると複合語後項の「ほろぎ」は「振い落とすこと」という意味である。

5.2.3 後項ハ行子音が w で現れるもの

表 1において後項ハ行子音が *w* で現れるものは、後項が「原 (はら)」である語「かがわら」「たげわら」「やぶわら」に限られる。このハ行子音の *w*への変化はいわゆるハ行転呼と称されるものであり、单一語中に見られる変化とされている。そのため後項が「原 (はら)」である複合語は、複合的由来を持つ語でありながら、ひとまとめりの語として捉えられるようになったのだろう。後項が「原 (はら)」である語にのみ起きている限定的变化として扱う。

5.2.4 後項ハ行子音が h 系列で現れるもの

ハ行が *h* 系列で現れるのは「くそふえび」「おおふと」など 14 例ある。ただし連濁が生じない条件もわかつてきており、この 14 例の中にはその条件に当てはまるものが 9 つある。これら 9 つの複合語における連濁不適応には三つの条件が関わっていると考えられる。一つ目の条件は後項において語頭子音以外に有声閉鎖音を含むもの (ライマンの法則が適応されるもの)、二つ目の条件は前項、後項ともに動詞由来で複合動詞を成すもの (高山 2012: 112)、三つ目の条件は後項が動詞由来で、前項がその動詞の目的語の関係にあるもの (平野 2021: 8) である。

ライマンの法則が適応されるのは「くそふえび」であり、後件の音節「び」の音節頭子音が有声音 *b* であるために連濁は適応されず、後件の語頭子音はハ行子音で現れる。

後項ともに動詞由来で複合動詞を成すものには「どんじぎふみ」「ねほれる」が含まれる。それぞれ土突き+踏み、寝+惚れる、という二つの動詞 (句) から構成されている。そのために連濁は適応されず、後件の語頭子音はハ行子音で現れると見なせる²⁹。

前項名詞がその後項動詞の目的語の頭語関係にあるものは「はなはつけ」「なわはね」「てふくみ」「ゆぎふみ」「かねほり」「たましほろぎ」である。そのために連濁は適応されず、後件の語頭子音はハ行子音で現れると見なせる³⁰。

上述の連濁の非適応条件に含まれず、後件にハ行の語頭子音を持つ例は「たじはこ」「おびはだか」「さはじ」「おおふと」「しふろ」の 5 つである。連濁を起こした語例数は後項語頭が *b* で現れるもの (5.2.1 節) と *p* で現れるもの (5.2.2 節) を合わせて 48 例あった。それに比べれば、連濁を起こす条件に在りながら連濁が起きない例は 5 例とかなり少ないことがわかった。

これらの語について連濁が適応される条件にありながら連濁が適応されなかった背景は、前項と後項の結合が弱く、連濁を引き起こすまでに至っていないことがあるだろう。または連濁という音韻規則が徐々に廃れてきていることを示すものかもしれない³¹。いづれにしてもこれらは津軽方言において少数派であり比較的新しく生じた複合語と見なせるのではないか。

²⁹ ただし表 1 には動詞由来で複合動詞を成すものでないながら連濁を起こしている例外的な例として「まつぼし」が見られる。さらに松木 (1982) には後件に「張り (はり)」「張る (はる)」を持つものの中に「ふぱりすじ (引張り筋)」「よつぱり (夜突張り)」「とつぱる (ト突張る)」「ふぱる (引っ張る)」の語が挙げられている。これらは複合動詞を成しているが連濁が期待に反して適応されているように見える。しかしこれにおいて前項は「引き」「突き」であり、複合の結果前項語末は一旦促音に変化したと考えられる。そのため後項の *p*への変化を誘発し、その後促音を成す音節末子音が脱落したのではないか。促音化した可能性が高いために表 1 には含めなかつた (脚注 17 も参照されたい)。

³⁰ ただし、前項名詞がその後項動詞の目的語の頭語関係にあるものでも連濁を起こしている例「ごみばき」「くちばさみ」「めばじき」「くそびり」なども表 1 に見られる。

5.3 津軽方言内部における複合語の形成

津軽方言の複合語においてハ行子音を後項語頭子音にもつ場合、その出現は *p* または *b* で現れる語例が大半であることがわかった（65 例中 48 例）。上代日本語に見られる複合語「唐人」の、現代津軽方言での発音を推測すると、ハ行連濁を起こした *karabito* またはハ行連濁子音 *b* が無声化を起こして *p* に変わった *karapito* になりそうである。ちなみに 5.1 節で見たようにこれら仮定上の形式において両唇閉鎖音直後の母音は [u] ではなく [i] で現れると考える³¹。

しかしこれらの仮定上の形式は管見の限り津軽方言において見いだせない。古くは使われていたが廃れてしまった語だろうか。そうだとしても仮定上の形式の一つである *karabito* は、サハリンを表す形式 *karafuto* とは第三音節の子音と母音が異なるため、これらに由来する可能性は低い。もう一つの仮定上の形式 *karapito* が中央の日本語方言に借用されたとしたら *karapito* となるはずであり、ハ行音の *h* 系列への変化を経た場合は *karahito* に変わるだろう。この形式はサハリンを表す形式 *karafuto* と形式的類似性が高いが、第三音節における母音の違いが難点として残る。

津軽方言において「から（唐）」と「ふと（人）」から比較的新しく複合語が生じたのであれば、連濁を起こさずハ行がそのまま *h* 系列で現れる *karaɸuto* も可能であろう。ただし管見の限りこの仮定上の形式 *karaɸuto* は津軽方言において見いだせない。すでに廃れた語とも考えられるが、そうなると比較的新しく生じたとする前提と食い違う。仮に *karaɸuto* が津軽方言に一時的に生じていたなら、これがサハリンを表す形式 *karafuto* に繋がる可能性は高い。ただし問題となるのは、2.3 節で述べたように *karafuto* という地名は遅くとも 14 世紀には使われていたという点であり、比較的新しく生じた語とは言い難い。

ちなみに松木（1982：72, 191）には津軽方言の複合語において後項に「人」を持つ語として表 1 の「おおふと」の他に「おぐりと（送り人）」「さんと（産人）」「たちと（立人）」の 3 語が得られた³²。これら 3 語において「人」の第一音節が脱落して第二音節の「と」のみが現れる³³。これに従って津軽方言において「から（唐）」と「ふと（人）」から仮定上の複合語を作るなら「からと」となる。管見の限りこの仮定上の形式は津軽方言において見いだせないが、この仮定上の形式は 2.1 節でみたサ

³¹ これに関し平野（2021：109-112）は後項の形式的、意味的透明性を高めるために連濁を生じない（後項語頭子音の変化を伴わない）複合語も現代日本語に見られると述べる。

³² 後項の「人」において語頭 *b* の直後に [i] を持つとして、南部方言の語例ではあるが、大島ほか（2003：168）にハラビド [harabido]（「妊婦」の意味）がある。

³³ ちなみに大島ほか（2003）には南部方言において後項の「人」が「フト」以外の形式で現れる 3 例が見られたが、それらはスロード [suroodo]（素人）、ナカウンド [nakaundo]（仲人）、アギンド [agindo]（商人）である。この中、スロードは後項の「人」がウ音便、其他の語は後項の「人」が撥音便を起こした形式である。

³⁴ 複合語後項が「人」であるものにはこの他に「あしひと」（遊び人に由来し「遊びに来る人、お客様」の意味（松木 1982：23））も含まれるが、この語は *asibipito* から両唇音を音節頭子音に持つ連続した音節 *bipi* が重音脱落を起こしたものと考えられる。「あしひと」における「ひ」の音節は後項「人」の第一音節を残したもので、前項「遊び」の語尾が脱落したように見えるが、本文中に述べたように後項「人」の第一音節が脱落して「と」のみで出現する例がある。そのため本稿では「あしひと」における「ひ」は前項の最終音節に属し、後項の第一音節ハ行音節が脱落したと見なした。そのため表 1 に含めなかった。ただし前項「遊び」の最終音節の頭子音がこの複合語においては *b* ではなく *p* に変化している。これは重音脱落前の後項 *pito* の語頭子音による影響（無声化への同化など）を受けたことを示すだろう。

ハリンの名称の一つである「カラト」と一致する。そのため「カラト」の由来を北奥方言に求めたくなるが、上述のように津軽方言を、もう一つの名称「カラフト」と関連付けることができない以上、その交替形の「カラト」とも関連付けられない。

結果として北奥方言の代表である津軽方言において *karafuto* の語源を解くことが難しいことが明らかになった。日本語方言の側から *karafuto* の語源を解くことが難しいことから、次節では日本語からアイヌ語に借用された *karapto* 「唐人」という形式を通して地名 *karafuto* との関連性を探る。

6. アイヌ語からの逆借用説

アイヌ語北海道方言ではサハリンのことを *karapto* と言う（田村 1996 : 280）。これは明らかに古代日本語の *karapito* 「唐人」からの借用語である。これに関し、田村（2021 : 199）はカラフトの語源について諸説あるがアイヌ語の *karapto* に由来すると考えるのが最もわかりやすいと述べる。ただし田村（2021 : 199-200）ではアイヌ語の *karapto* が日本語 *karapito* からの借用語である点については言及がない。

本稿は、日本語地名カラフトはアイヌ語における日本語借用形 *karapto* からの逆借用であると主張する。古代日本語の *karapito* 「唐人」が早期アイヌ語に *karapito* と借用され、その後アイヌ語において第三音節の母音 *i* が脱落して *karapto* と変化したと考える（アイヌ語

karapito > *karapto*）。

この母音脱落と同様の変化は、アイヌ語が日本語から借用した *marapito* 「稀人」にも見られる。この *marapito* は4節でも見たように *karapito* 「唐人」の最小対である。Ochiai (2025) は古代日本語の *marapito* を早期アイヌ語は同一形式の *marapito* として借用したと考えた。アイヌ語借用初期の *marapito* はその後、知里（1973 : 210）に挙げられた形式である *marapto* に変化した。ここから分かるようにアイヌ語 *marapito* > *marapto* のように第三音節の母音 *i* が脱落する変化が生じた³⁵。そのため早期アイヌ語の *karapito* も並行的に第三音節の母音 *i* が脱落して *karapto* に変化したと考える。

アイヌ語が古代日本語から *marapito* を借用した時期を、Ochiai (2025 : 216-217) は借用形における子音 *p* の残存を根拠に9世紀より早い時代と推定した³⁶。しかし本稿では *p* から *ɸ* への変化が中古日本語初期（およそ1200年）に起き始めたとする Frellesvig (2010 : 311) を参照し、アイヌ語が古代日本語から *marapito* を借用した時期を12世紀より早い時代と推定し直すことにする。これは借用形最小対である *karapito* にも当てはまると言なせる。そのためこの語も12世紀より早い時代に借用されたと考える。

アイヌ語においてこの語の借用初期は、日本語と同様に異邦人を指す語であっただろうが、それがサハリン方面の人々を指す語として用いられるようになり、後にサハリン方面の地名として使われるようになったのだろう³⁷。アイヌ語において *karapto* (< *karapito*) の語が日本語から借用され、本来の意味である異邦人から異邦人

³⁵ この *marapto* は子音連続 *pt* の逆行同化により、田村（1996 : 378）に挙げられた形式である *maratto* へと変化する。

³⁶ この推定は、亀井他(1964:64)が古代日本語の子音 *p* は奈良時代(西暦710-784年)に *ɸ* に変わり長い間その音を保った後で *h* に変わったとする記述に基づいていた。

³⁷『アイヌ語方言辞典』(服部 1964 : 51) に「外国人」の項目があり多くのアイヌ語方言で *repunkur* の形式を有する。

田村（1996 : 574）による分析では *rep-un-kur* (沖・にいる・人) である。アイヌ語宗谷方言でもこの形式が挙げられるが注釈として *repunkur* (外国人) は「権太の人」と記されている。アイヌ語 *karapto* と *repunkur* は、語の成り立ちは違うが（前者が日本語からの借用語で後者は固有語）両方とも本来は異邦人を表す語であって、それがサハリンを指す語としても使われるという点で共通している。

の住む地域であるサハリンへと意味が移行した後に、日本語話者はアイヌ語話者との接触によって *karapto* という地名を取り入れたのではないか。つまり古代日本語 *karapito* からアイヌ語 *karapto* (< *karapito*) へ借用され、そしてアイヌ語 *karapto* から再び日本語に導入されたのだろう。日本語起源でありながら一旦アイヌ語を介し、また日本語に戻ってくるという経路をたどったと考えられる。6.1 節では日本語逆借用形式 *karato* に至るまでの過程、6.2 節では日本語逆借用形式 *karafuto* に至るまでの過程の二つの経路を考察する。

6.1 アイヌ語 *karapto* から日本語 *karato* としての逆借用

アイヌ語 *karapto* から日本語へ *karapto* を逆借用するにあたって解消しなければならない音配列規則がある。アイヌ語の形式の語中に見られる子音連続 *pt* は日本語では許容されない。この音配列は二つの方法で日本語の音配列規則に適応したと考える。一つの方法は子音連続 *pt* から子音の一つを脱落させて子音連続を解消するものである。2.1 節で見たようにカラフトを指す語して *karato* という形式が存在する。この形式はアイヌ語 *karapto* における子音連続 *pt* から全部子音の *p* を脱落させて日本語 *karato* としたと考えられる³⁸。

6.2 アイヌ語 *karapto* から日本語 *karato* としての逆借用

日本語において許容されない子音連続について、もう一つの解消方法は子音連続間への母音 *u* の挿入である。これによってアイヌ語 *karapto* から日本語 *karaputo* へと変わる。挿入母音としては狭母音の *i* または *u* が候補になるだろうが、ここでは *u* が選ばれたことになる。そ

れはこの直前の子音が両唇音の *p* であり、円唇（性を持っていたと考えられる）母音 *u* との親和性が高かつたためだろう³⁹。一旦、日本語に *karaputo* として逆借用された語であるが、これは現代日本語の形式が *karafuto* [karaɸuto] であるため、語中子音 *p* が *ɸ* へ変化したと見なせる。

子音 *p* が *ɸ* を経てさらに、母音 *i* と *u* の前以外で *h* になる変化は日本語の歴史上起きた変化である。子音 *p* を中心に考えると、日本語は12世紀以前にアイヌ語 *karapto* を日本語に逆借用していなければならないことになる。そうでなければ日本語の逆借用形式において *karaputo* から *karafuto* に変わる変化が起き得ないからである。

サハリン方面から来る人々についての記録が見えるのは『日本書紀』における阿部比羅夫の北方遠征（西暦660年）が初めだろう⁴⁰。この時代頃からアイヌ民族と日本人と接触が頻繁になり、早期アイヌ語が日本語から *karapito* という語を借用し、母音脱落を経て *karapto* を生じさせ、さらにその意味を異邦人（カラフト方面の人々）から地名へと変化させたのだろう。そして7世紀から12世紀までの間に、アイヌ語 *karapto* から日本語へ地名カラフトを借用したと考えられる。

もう一つの可能性として挙げられるのは、日本語において子音 *p* がすでに *ɸ* に変わっており（つまり13世紀以降であり）、アイヌ語の子音 *p* を取り入れる際にそれに近似した音である *ɸ* として取り入れたというものである。その場合はアイヌ語 *karapto* から直接日本語 *karafuto* なったと言える。そしてこの日本語への逆借用は2.3節で見たように遅くとも14世紀には起こっていなければならない。この場合、日本語への逆借用は13世紀から14世紀の間に起きたことになる。

³⁸ これに関して田村（2021:199）もアイヌ語 *karapto* における子音 *p* が「日本語話者には聞き取りづらかったと見え、近世には「カラト」などと記録されている」と述べている。

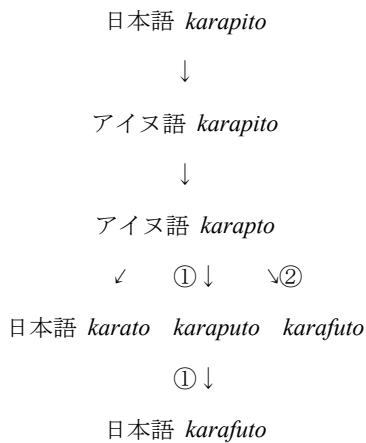
³⁹ 仮に挿入母音として *i* が選ばれていたならアイヌ語 *karapto* から日本語 *karapito* になり、得られた形式 *karapito* は古代日本語の形式と同一になってしまう。

⁴⁰ 濱川（2016:92-104）におけるオホツク人の記述を参照した。

図2に古代日本語 *karapito* からアイヌ語借用語 *karapito* を経て逆借用するまでの流れをまとめた。日本語への逆借用によって生じた形式は二重子音を排除した *karato* と二重子音間に母音を挿入した *karaputo/karafuto* の三つである。その中 *karato* は後に類音牽引によって *karako* 「唐子」という形式を生じさせこれがカラフト方面から来る人々に対する名称として使われた。残りの *karaputo/karafuto* は日本語へ逆借用された推定年代によって区別

される。12世紀以前に逆借用された場合は *karaputo* として導入され、その後 *karafuto* へのハ行音の変化 ($p > \phi$) が起こった (図2の①)。一方、ハ行音の変化 ($p > \phi$) がすでに起きた13世紀以降に逆借用された場合はアイヌ語の *p* を近似音の ϕ に変えて、直接 *karafuto* として導入されたと考えられる (図2の②)。最終的に *karato* と *karafuto* の二つの形式が生じたが現代日本語に残った形式は *karafuto* の方である。

図2 日本語 *karapito* からアイヌ語借用語 *karapto* を経ての逆借用



7. おわりに

日本語においてサハリンを指す語 *karafuto* と *karato* の語源を探った。古代日本語の *karapito* 「唐人」に端を発した語であるが、これが早期アイヌ語に *karapito* として借用され、アイヌ語内部で第三音節の母音 *i* を脱落させる変化が起きて *karapto* に変わった。そしてアイヌ語における日本語借用形においても、古代日本語の「異邦人」という意味を持っていただろうが、それがサハリン方面の人々を指すようになり、さらにサハリン方面を指す地名へと変わった。その後、サハリン方面を指す地名であるアイヌ語の *karapto* を日本語が借用することになる。この *karapto* は元々日本語起源であるから、日本語から見れば逆借用して、日本語に戻って来た語と見なせる。ただしアイヌ語 *karapto* を逆借用するにあたって子音連続 *pt* を解消するために二つの方法が採られた。一つが後部子音 *t* の脱落であり *karato* という形式に変わった。

もう一つが母音 *u* の挿入であり *karafuto* という形式に変わった(アイヌ語 *karapto* における子音 *p* は *f* [ɸ] に変わった)。古代日本語「唐人」はアイヌ語を経て日本語に戻ってきた語である。「唐人」の経歴は古代から中世における日本語とアイヌ語の関連の深さを物語る。

参考文献

知里真志保（1973）「呪師とカワウソ—アイヌの創造神
コタンカルカムイの起源的考察」岡正雄（編）『知
里真志保著作集第二巻』193-222. 東京：平凡社。[初
出は 1952 年]

Du Halde, Jean-Baptiste (1735) *Description géographique, historique, chronologique, politique et physique de l'empire de la Chine et de la Tartarie chinoise, Vol. 4.* Paris: P.G. le Mercier,

- imprimeur-libraire.
- 榎森進 (2023) 「日本領「樺太」時代の同地の住人とアイヌの人々に関する一考察」『東北文化研究所紀要』55 : 19-44.
- Frellesvig, Bjarke (2010) *A History of the Japanese Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤原与一 (1965) 「津軽方言の研究—「方言研究」考—」『広島大学文学部紀要』24 (3) : 36-69.
- 服部四郎 (編) (1964) 『アイヌ語方言辞典』東京: 岩波書店.
- 菱沼右一・西鶴定嘉・葛西猛千代 (1930) 『樺太の地名』 豊原: 樺太郷土會.
- 平野尊識 (2021) 『連濁の規則性を求めて』. 東京: ひつじ書房.
- 池上二良 (2004) 「ことばの上からみた東北アジアと日本」 池上二良 (著) 『北方言語叢考』 259-271. 札幌: 北海道大学図書刊行会.
- 上代語辞典編修委員会 (編) (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』 東京: 三省堂.
- 亀井孝・大藤時彦・山田俊雄 (編) (1969) 『日本語の歴史 5—近代語の流れ』 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』 東京: 三省堂.
- 金田一京助 (1944) 『アイヌの研究』 東京: 八洲書房.
- 此島正年 (1961) 「方言の実態と共通語化の問題点 2—青森」 東条操 (編) 『方言学講座第二巻』 127-148. 東京: 東京堂.
- 松木明 (1982) 『弘前語彙』 弘前: 弘前語彙刊行会.
- Miyake, Marc H. (2003) *Old Japanese: A phonetic reconstruction*. New York: Routledge.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (2001a) 『日本国語大辞典第二版第三巻』 東京: 小学館.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (2001b) 『日本国語大辞典第二版第十一巻』 東京: 小学館.
- Ochiai, Izumi (2025) "Guest" in Old Japanese and its loanword in Ainu: A history of *marapito* and *maratto*. *Northern Language Studies* 15 : 203-221.
- 大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・平澤洋一 (2003) 「方言基礎語彙: 調査地点: 八戸市」 佐藤和之 (編) 『青森県のことば』 55-219. 東京: 明治書院.
- 佐藤和之 (2003) 「総論」 佐藤和之 (編) 『青森県のことば』 1-41. 東京: 明治書院.
- 瀬川拓郎 (2016) 『アイヌと縄文』 東京: ちくま新書.
- 新村出 (編) (1998) 『広辞苑第五版』 東京: 岩波書店.
- 菅沼貴一 (1975) 『青森県方言集』 東京: 国書刊行会.
- 高倉新一郎 (1939) 「近世に於ける樺太を中心とした日満交易」 『北方文化研究報告』 1 : 163-194.
- 高山倫明 (2012) 『日本語音韻史の研究』 東京: ひつじ書房.
- 高山知明 (2024) 「規則性・自然性から見たハ行音の変化」 『音声研究』 28 : 38-51.
- 田村将人 (2021) 「解説『あいぬ物語』とその時代」 山辺安之助 (著)・金田一京助 (編) 『あいぬ物語』 191-121. 東京: 青土社. [初出は 1913 年]
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京: 草風館.
- 谷川健一・池田末則・宮田登編 (1983) 『神社縁起』 東京: 三一書房.
- 吉田東伍 (1911) 『大日本地名辞書第六巻 (北海道・樺太・琉球・台湾)』 東京: 富山房.
- 吉田東伍 (1970) 『増補大日本地名辞書第八巻 (北海道・樺太・琉球・台湾)』 東京: 富山房.

Cultivating a global mindset and early childhood education in conflict zones (a look at Myanmar)

Marshall SMITH

(Received:21 APRIL, 2025) (Accepted:1 JULY, 2025)

紛争地域におけるグローバルなマインドセットの育成と幼児教育
(ミャンマーを事例として)

マーシャル・スミス

Introduction

The road to a global mindset most effectively starts in early childhood education.¹ Yes, there are strategies and methodologies for promoting global thinkers and actors at the tertiary level,^{2,3,4} and these tools must be discussed and utilized as effectively as possible; but genuine and sustainable globalization in education happens most powerfully when the student is still young and impressionable.⁵ A subtheme of the 73rd Tohoku-Hokkaido Higher Education Research Meeting, held at Akita University in 2024, was "The Role of Higher Education in Cultivating a Global Mindset". This paper is

derived from a presentation made at this meeting.

According to a Save the Children report, one in six of the world's children live in a conflict zone. In 2022, 468 million children worldwide lived in areas affected by armed conflict, a sharp increase over the past 20 years⁶. Most people would recognize and agree with the World Health Organization (WHO) Statement that (effective) early childhood education in conflict-affected countries is key to life-long health, wellbeing and prosperity.⁷ The WHO Statement goes on to say that the early years in a child's life are critical in building a foundation for optimal development through a stable and nurturing environment. However, for

¹ World Conference on Early Childhood Care and Education, Tashkent 2022. Education starts early: Progress, challenges and opportunities. Conference Background Report. UNESCO. Retrieved from <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000383668>

² Cabezudo A, Christidis C, da Silva MC, Demetriadou-Saltet V, Halbartschlager F and Mihai GP. 2010. Global Education Guidelines – a Handbook for Educators to Understand and Implement Global Education. North-South Centre (NSC) of the Council of Europe. Retrieved from <https://www.developmenteducation.ie/media/documents/GEguidelines-web.pdf>

³ Globethics. Ethical Leadership through Higher Education and Global Engagement: Strategy 2023-2027. Retrieved from https://globethics.net/sites/default/files/media/document/2024-03/Globethics_Strategy_2023-2027-reduced.pdf

⁴ Žalénienė I and Pereira P. 2021. Higher education for sustainability: A global perspective. Retrieved from https://www.researchgate.net/publication/351750122_Higher_Education_For_Sustainability_A_Global_Perspective

⁵ Rana L. 2012. Globalisation and its implications for early childhood education. Retrieved from <https://www.hekupu.ac.nz/article/globalisation-and-its-implications-early-childhood-education>

⁶ Save the Children. 2023. 468 million children live in conflict zones, new figures from save the children reveals. Retrieved from <https://www.savethechildren.org.uk/news/media-centre/press-releases/new-figures-millions-of-children-live-in-conflict-zones>

⁷ World Health Organization. 2021. Early childhood development in conflict-affected countries is key to life-long health, wellbeing and prosperity, says WHO and partners. Retrieved from <https://www.who.int/news/item/13-01-2021-early-childhood-development-in-conflict-affected-countries-is-key-to-life-long-health-wellbeing-and-prosperity-says-who-and-partners>

infants and young children living in humanitarian settings, risks such as forced displacement, migration, malnutrition, limited access to health services and insecurity threaten their chances to survive and thrive. A “humanitarian setting” has been defined as a setting in which an event (e.g. armed conflict, natural disaster, epidemic, famine) or series of events has resulted in a critical threat to the health, safety, security and well-being of a community or other large group of people where the coping capacity of the affected community is overwhelmed and external assistance is needed.⁸

Case study: Myanmar

With this in mind, the author has been involved in a project of developing self-sustaining preschools in designated areas of Myanmar. Myanmar was selected because insurgencies have been ongoing there since 1948, when the country, then known as Burma, gained independence from

the United Kingdom. It has largely been ethnic conflicts, with ethnic armed groups fighting Myanmar’s armed forces for self-determination, and has been deemed the world’s longest ongoing civil war.⁹ But there has also been unrest and uprisings among the people, in general, against the military coup and suppression of democracy leading to further bloodshed. According to ACLED (Armed Conflict Location and Event Data), which monitors armed conflict around the world, the warfare in Myanmar currently ranks as the most intense violent conflict, on the heels of Palestine, among the top 50 countries it is monitoring.^{10 11} However, Myanmar has garnered little international attention. The powerful March 2025 Myanmar earthquake has only intensely exacerbated this critical situation.

The author’s connection with Myanmar goes back to his early college years, when he was involved in refugee work along the Myanmar/Thai border. At that time, he and his family worked in refugee relief efforts and in developing education systems. Later, while working on his doctoral



Fig. 1 Myanmar Veterinary Association First International Conference in 2014.

⁸Khasnabis C et al., editors. 2010. Community-based rehabilitation: CBR Guidelines. Geneva: World Health Organization. Retrieved from <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/books/NBK310955/>

⁹ Wikipedia. 2024. Myanmar conflict. Retrieved from https://en.wikipedia.org/wiki/Myanmar_conflict

¹⁰Hein YM. 2024. Nine things to know about Myanmar’s conflict three years on. United States Institute of Peace. Washington, DC. Retrieved from <https://www.usip.org/publications/2024/04/nine-things-know-about-myanmars-conflict-three-years>

¹¹ ACLED Conflict Index: Ranking violent conflict levels across the world. July 2024. Retrieved from https://acleddata.com/conflict_index/#:~:text=The%20extremely%20violent%20countries%20account,since%20the%20coup%20in%202021.

studies, he was supported by WHO to assist with education/health projects in Cambodia. While still in Cambodia, he and an NGO friend from Australia brainstormed to start an agriculture school/orphanage project in Cambodia which

still thrives today.¹² These experiences, along with volunteer work in Laos, Indonesia and Taiwan, have been eye-opening experiences to better understand and see the global needs and importance of good education.



Fig. 2 Author with children at SALT Ministry school in Cambodia.

Myanmar, as opposed to Japan, has the “advantage” of being a multicultural country, a land of enormous ethnic diversity, claiming officially 135 ethnic groups that encompass over a hundred languages.¹³ So, in daily life, diversity is a “given” and is naturally encountered and assimilated into the wider society and culture, making the globalizing component of formal education arguably less critical, in a sense, than it would be in more homogeneous countries like Japan. Accordingly, rather than emphasizing the globalization context, that students would naturally acquire through general daily life and experience, students need to be instructed how to live cooperatively and peaceably in their already globalized environment. And, this type of education, is especially crucial during this extensive time of major political turmoil and conflict engulfing much of Myanmar, compounded by major natural disasters. As I just mentioned, this is a major difference in the educational needs compared to homogeneous Japan where globalization still does not

exist in most places. Accordingly, this model of diversity and personal experience that the author has procured from Myanmar has become an impactful teaching tool for students in Japan.

Model preschool project

Accordingly, this presentation focuses on the author’s experiences in setting up a preschool in Yangon, Myanmar, as a model to be replicated, and following up with additional preschools in other areas of the country. This project started in 2014, when the author was invited to be a guest speaker at the “First International Conference and Annual Meeting” of the Myanmar Veterinary Association. While in Myanmar, and with a background in international health and development, the author talked with local counterparts, made acquaintances, and learned of the educational needs

¹² SALT Ministries. 2008. Retrieved from <https://saltmin.org/wp/about-us/>

¹³ Ekeh C and Smith M. 2007. Minorities in Burma. Minority Rights Group International. Retrieved from <https://minorityrights.org/app/uploads/2024/01/download-424-minorities-in-burma.pdf>

of street children. He then identified a suitable local liaison to cooperate with that would provide a sense of community ownership and sustainability to the envisioned project. Together, innovative solutions to the educational challenges in the given community were brainstormed, and through some feasibility study and planning, the process of opening a small preschool was begun. The designated site was a bedroom community of lower-class day laborers who daily commuted into the large metropolitan city of Yangon, leaving their children to fend for themselves on the streets under the “supervision” of neighborhood aunties. Planning for this

project led to deciding to remodel a local Protestant church to accommodate a small 3-year preschool for children ages 4 to 6. The author provided the seed money for the project. A year after opening the school, six students were able to graduate. This model was then used to seek out reliable local partners in other parts of Myanmar and replicated. Four more schools were later opened in communities near Mandalay, in the north of the country. The schools were structured to become self-sustainable through affordable school fees and strong local community support and sense of ownership.



Fig. 3 First graduation ceremony at preschool started in Yangon, Myanmar.



Fig. 4 Sageing preschool destroyed by March 2025 earthquake in Myanmar.

In conclusion

The COVID years and worsening internal political and ethnic conflict have both caused major setbacks; but as setbacks become learning experiences, the projects are actively able to move forward with the goal of bringing impactful early childhood education to those in need, especially in areas of conflict.

As an update, the preschool building in Sagaing (near Mandalay) was destroyed in the March 2025 earthquake, but no children or staff were killed or seriously injured. Assessments for rebuilding the school are currently being carried out.

These projects in Myanmar are not only providing improved educational opportunities for young children, but also yielding invaluable educational resources and models for helping students in Japan learn and cultivate a more meaningful global mindset.

Bridging the Gap: Rethinking English Writing Instruction in Japanese Secondary Schools – A Symposium Report

Maki Terauchi HO

(Received:30 APRIL, 2025) (Accepted:1 JULY, 2025)

ギャップを埋める：日本の中等学校における英語ライティング指導再考
— シンポジウム報告

寺内 麻紀

Abstract

This symposium examined the current state and future potential of English writing instruction in Japanese secondary education, with a focus on bridging the gap between high school and university-level writing. Thirteen Assistant Language Teachers (ALTs) from the Tokachi area shared insights on writing practices in their schools, revealing that writing is rarely emphasized due to limited time, resources, and lack of exam requirements. Presentations covered key topics such as the benefits of writing and phonics instruction, second language acquisition theories, and practical lesson plans. Findings indicate that while writing is undervalued, ALTs recognize its importance in fostering critical thinking, language development, and academic preparedness. The symposium also emphasized the evolving role of ALTs, highlighting the need for flexibility, collaboration, and familiarity with language acquisition theories. Promoting writing from the elementary level and integrating it into the broader English curriculum can significantly enhance language proficiency and better prepare students for higher education. This project is funded by the Japan Society for the Promotion of Science, Research-in-Aids for Scientific Research, 23K18896.

Keywords: Academic writing, secondary education, assistant language teachers, English education in Japan

Introduction

Purpose of the symposium

This symposium explored the need for English writing practice in secondary education, aiming to bridge the gap between pre-college and university-level English instruction. To understand the current state of writing education, the researcher surveyed Assistant Language Teachers (ALTs) in the Tokachi area, central-eastern Hokkaido, Japan, regarding writing practices in elementary, junior high, and high schools. Additionally, the symposium highlights key areas that should be emphasized in English writing instruction from the perspective of ALTs. The symposium took place on October 26, 2024, at Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine. The participants were assistant language teachers working at Japanese public schools in the Tokachi area.

Topics

1. Fostering excellence in English through writing by
Maki Terauchi Ho
2. Who is ALT? by Dan Bernhardt
3. Phonics supplemental curriculum by David Wilson
4. Research summary for language teachers by Chris Andrade
5. Practical English Lesson Plans for Japanese Schools
by Kimberly Newcomb

1. Fostering excellence in English through writing

In Japan, approximately 62% of high school students advance directly to tertiary education institutions, such as universities and junior colleges, upon graduation (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, 2024). This data indicates a significant portion of Japanese students pursue higher education, underscoring the importance of university-level studies in the country's educational landscape.

English is becoming increasingly important even

at undergraduate levels, in addition to the graduate level and for international students in higher education. Most undergraduate programs taught in Japanese do not always mandate English proficiency. However, the number of English-medium programs in Japanese universities has been increasing, reflecting a growing emphasis on internationalization in higher education. Graduate programs, especially, more commonly require English proficiency, often demonstrated through tests like TOEFL, IELTS, or TOEIC, or sometimes a "Medium of Instruction" certificate.

Academic writing in English holds growing importance as well in Japanese universities, particularly as higher education institutions strive to internationalize and enhance their global reputation. The ability to write academically in English is crucial for Japanese students and researchers to communicate effectively with the international academic community, publish research, and achieve academic goals. However, several challenges exist due to the traditional focus of English education in Japan on grammar and translation rather than composition or critical writing.

Many Japanese students enter university with limited experience in academic writing, even in their native language, which makes writing in English particularly difficult. High school education often emphasizes translation and grammar-exercise over writing skills, leaving students unprepared for the demands of university-level academic writing (McCarthy, 2021). As a result, university writing instruction often starts at a beginner level, focusing on basic essay structures and sentence fluency.

Cultural differences and linguistic barriers remain significant obstacles for Japanese students and researchers (McCarthy, 2021; Okamura, 2006; Sato & Hodge, 2015). Many struggle with vocabulary, grammar accuracy, and adapting to Western academic conventions (Sato & Hodge, 2015). Addressing these challenges requires integrating comprehensive academic writing education into curricula and fostering an environment that values writing alongside other

language skills like speaking and listening.

Although English writing has been undertaught in Japanese English education, writing in English improves overall language skills, including vocabulary, grammar, and reading comprehension (Wang et al., 2024). Writing forces learners to actively use new words and sentence structures, reinforcing their retention and practical application. This process also helps build familiarity with complex sentence patterns, which enhances both reading fluency and speaking confidence.

Current situation: Questionnaire results and analysis

Thirteen ALTs from the Tokachi area attended the symposium. Among them, four teach at high schools, while the remaining participants teach at elementary schools, junior high schools, or both.

As anticipated by the researcher, the participants confirmed that they do not frequently teach English writing. More than half reported that they teach writing either rarely or on a monthly basis. When writing instruction does occur, it primarily focuses on sentence construction, with limited attention given to writing flow or coherence. Only two participants indicated that they include creative writing or letter writing in their instruction.

The reported reasons for the limited writing instruction included lack of instructional time, an emphasis on other language skills, insufficient resources—including inadequate teacher training for writing instruction—and low motivation among both teachers and students, as writing is not a required component in higher education entrance examinations, the main focus of English education in Japan.

However, many ALTs agreed that writing is beneficial for their students. They believed that engaging in extensive writing alongside reading could enhance language acquisition. Additionally, they noted that writing activities help students develop critical thinking skills, which are

essential for success in higher education, including at the university level.

2. Who is ALT? – Guidance for new assistant language teachers (ALTs)

Although ALTs have become common in Japan since English education was made mandatory at the elementary level in 2011, their roles appear to vary depending on the individual school and the expectations of the Japanese English teachers. The only consistent aspect of their role is participation in team teaching alongside a licensed Japanese teacher. Experienced ALTs have advised that the role should remain flexible, with the exception that they should not teach alone in the classroom, as this clearly violates legal regulations.

Japanese teachers, including those who teach English, are often not fluent in the English language and may feel intimidated working alongside ALTs, who are typically native English speakers. It is therefore important for ALTs to remain mindful of the challenges these teachers face in teaching a foreign language in front of a native speaker. Demonstrating empathy and providing supportive collaboration can help foster a more positive and productive teaching environment.

3. Phonics supplemental curriculum – Teaching English phonics in Japanese schools Benefits of phonics instruction

Phonics instruction in Japanese schools offers several significant benefits for students learning English, such as improving reading ability, enhancing pronunciation, supporting overall language proficiency (Takeda, 2002). Phonics help students connect letters with their sounds, enabling them to read English words more accurately and fluently. This is particularly important for Japanese students who may struggle with the unfamiliar alphabet and sound system of English. Also, by teaching letter-sound relationships, phonics instruction helps students develop

better English pronunciation, reducing reliance on katakana-based pronunciation which can create counter-productive speaking habits (Takeda, 2002). Furthermore, it contributes to the development of listening, speaking, and comprehension skills, supporting overall English language proficiency (Yamato, 2015).

Challenges specific to Japanese learners

One of the primary challenges of implementing phonics instruction in current Japanese schools is the lack of appropriate teaching materials. Phonics instruction is not emphasized in the curriculum, and many teachers are unfamiliar with the phonics system itself. The participating ALTs confirmed that phonics instruction is currently not implemented in their schools. It is therefore essential to promote the importance of phonics instruction in English language classrooms. Additionally, there is a need to establish a feasible and structured phonics curriculum, particularly in the early stages of language education.

Suggested phonics instruction

To effectively teach young learners, it is important to integrate phonics instruction with physical movement, as this multimodal approach can enhance memory retention. Introducing phonics gradually—from individual sounds to combined sounds—can also provide a foundation for more advanced activities such as dictation.

4. Research summary for language teachers: Second language learning theory Research in second language acquisition

Although a substantial body of research exists in the field of second language acquisition (SLA), many ALTs are either unfamiliar with this research or perceive it as irrelevant to their classroom practice. However, gaining familiarity with SLA theories can significantly enhance ALTs' teaching effectiveness. Understanding these theories can inform their

instructional strategies, guide their interactions with students, and support the provision of appropriate corrective feedback.

Application of theories in English teaching

Both motivation and role models play crucial roles in language acquisition, influencing students' engagement and learning outcomes. Motivation theory is regarded as a key component of language acquisition (Dörnyei, 2001). Research suggests that competition can enhance student motivation during the learning process. By fostering a competitive environment, students may be encouraged to improve their language skills more effectively. Additionally, role model theory posits that learners benefit from exposure to successful language users, inspiring them to strive for similar achievements. Teachers, peers, celebrities, and parents can all serve as role models, though their influence varies based on their linguistic competence and personal attributes (McCarthy & Farr, 2022). As an ALT and a native speaker, one should serve as a role model to motivate learners.

5. Practical English lesson plans for Japanese schools

Several sample lesson plans were introduced, demonstrating their application across different age groups. Following the presentation, teachers from elementary, junior high, and high school were grouped separately to evaluate the implementation of the lesson plans and engage in discussions with their peers.

Conclusion

The consensus among all teachers present was that English instruction in Japan lacks adequate focus on writing skills, a crucial aspect of English learning, especially for students aiming to pursue higher education. Several factors contribute to this deficiency in writing instruction. Limited

resources and time constraints are significant barriers, while the emphasis on other language features also plays a role.

Moreover, educators must cover additional language components alongside writing, such as phonics instruction. The participants identified numerous areas that could be addressed to maximize the effectiveness of English language instruction in Japan.

Future Directions for English Writing Instruction in Japan

Teaching English writing skills in earlier education is crucial for students' academic and personal development. This emphasis on writing, alongside conversation skills, provides numerous benefits: foundation for academic success, critical thinking and learning tool, improved reading comprehension, communication and self-expression. Writing provides children with a vehicle to express themselves, actively engage in daily life, which foster enhanced language proficiency.

By emphasizing both writing and conversation skills in elementary education, we provide students with a strong foundation in English that will serve them well throughout their academic careers and beyond. This early focus on writing helps students become effective communicators, critical thinkers, and lifelong learners. By exploring these areas, educators can develop more comprehensive and effective teaching strategies that better support students in achieving their academic goals.

概要

本シンポジウムでは、日本の中等教育における英語ライティング指導の現状と今後の可能性について、高校と大学レベルのライティングのギャップを埋めることに焦

点を当てながら検討した。十勝管内の13名の外国語指導助手(ALT)が、各学校におけるライティングの実践について見識を共有し、限られた時間やリソース、試験要件の欠如のために、ライティングがほとんど重視されていないことを明らかにした。発表では、ライティングやフォニックス指導の利点、第二言語習得理論、実践的な授業プランなど、主要なトピックが取り上げられた。その結果、ライティングが過小評価されている一方で、ALTは、クリエイカルシンキング、言語発達、学問的準備の育成におけるライティングの重要性を認識していることが示された。このシンポジウムでは、ALTの役割に柔軟性、協調性、言語習得理論への精通の必要性が議論された。初級レベルからライティングを促進し、より幅広い英語カリキュラムに組み込むことで、言語能力を向上させ、生徒の高等教育への準備をより整えることができる。本研究は、JSSP 科研費(23K18896)の助成を受けたものです。

キーワード：アカデミックライティング、中等教育、外国語指導助手、日本の英語教育

References

- Dörnyei, Z. (2001). *Motivation and Second Language Acquisition*. Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawai'i at Mānoa
- McCarthy, J. E. (2021). Critical thinking in academic writing: Challenges for Japanese students preparing for English-medium universities. *Showa Women's University Repository*, 965, 13-27.
- McCarthy, A., & Farr F. (2022). Role models and motivators in English language learning in the Japanese high school context. *TESL-EJ*, 26(2). <https://doi.org/10.55593/ej.26102a2>
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (2024). 令和6年学校基本調査 確定値について。[R6 basic school survey - Finalized] <https://www.mext.go.jp>

- go.jp/content/20241213-mxt_chousa01-000037551_01.pdf
- Okamura, A. (2006). How do Japanese researchers cope with language difficulties and succeed in scientific discourse in English?: Interviews with Japanese research article writers. *The Economic Journal of Takasaki City University of Economics*, 48(3), 61-78.
- Sato, T., & Hodge, S. R. (2015). Japanese exchange students' academic and social struggles at an American university. *Journal of International Students*, 5(3), 208-227. <https://doi.org/10.32674/jis.v5i3.417>
- Takeda, C. (2002). A feasibility study for the application of phonics teaching in junior high school English classes in Japan. *The Language Teacher Online*, 26(4), 165-170.
- Yamato, R. (2015). Importance of phonics and its prerequisites: What is necessary for Japanese students? *Bulletin of the Faculty of Education, Kagoshima University*, 66, 1-12
- Wang, J., Li, W., Lu, M., & Chen, Y. (2024). Enhancing English writing proficiency in TESOL: Integrating traditional and technological approaches for a multifaceted learning experience. *SHS Web of Conferences*, 185, 01014. <https://doi.org/10.1051/shsconf/202418501014>

Reimagining Writing Support: Drawing Insights from Innovative Online Approaches in Australia and New Zealand for Global Collaboration

Maki Terauchi HO

(Received:30 APRIL, 2025) (Accepted:1 JULY, 2025)

ライティングサポートの再構築：オーストラリア・ニュージーランドの
オンラインアプローチに学ぶ国際連携の可能性

寺内 麻紀

Abstract

This paper examines writing support practices in Australian and New Zealand universities, comparing them with models in the United States and Canada. Drawing on institutional visits, interviews, and existing research, it explores how these institutions address the academic writing needs of diverse student populations through integrated, student-centered approaches. While not all institutions use the term “writing center,” many provide comprehensive services that include writing instruction, academic skills development, and discipline-specific support. Key strategies include embedding resources into learning management systems, employing AI-powered tools, offering peer support, and conducting regular student feedback surveys. Particular emphasis is placed on supporting multilingual and first-year students, whose academic literacy needs are often unmet by secondary education. The paper also discusses the challenges of integrating writing instruction into the curriculum and highlights the importance of institutional support. Finally, it argues for increased international collaboration among writing centers and academic support services to share best practices and address common challenges in supporting student writing globally. This project is funded by the Japan Society for the Promotion of Science, Research-in-Aids for Scientific Research, 23K18896.

Keywords: Writing Centers, academic writing support, higher education, international collaboration

Introduction

Writing is a fundamental aspect of academic discourse. Researchers and scholars rely heavily on publications to disseminate their significant findings. Indeed, even the most groundbreaking discovery, if left unpublished, may effectively not exist. Therefore, students and scholars must develop proficient writing skills to succeed in the research domain. Writing serves as a crucial link within the academic community.

As a former beneficiary of writing center support at a Canadian university, I firmly believe that Japanese students would similarly benefit from access to such resources. In an effort to establish a writing center at my current institution, I have undertaken research to determine the most effective structure for such a facility.

Given the number of universities and colleges in Japan, the presence of writing centers remains insufficient. As of 2024, Japan has 811 universities serving approximately 3 million students (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology [MEXT], 2024). According to MEXT, only 13.4% of universities were equipped with a writing center or a facility aimed at improving language (Japanese) use as of 2020. However, the exact number of centers actively supporting students' writing activities remains unclear. Inquiries made by the researcher to numerous universities yielded few responses confirming the existence of a writing center or a similar support structure.

Furthermore, while most students at Japanese universities are required to write a bachelor's thesis in order to earn their degree, they often receive minimal support for undertaking such a critical task (McCarthy, 2021; Yamada, 2015). At my current institution, there is no writing center in place. Through my interactions with students, I have observed a substantial need for writing support. This observation led me to investigate the availability of writing support services at other Japanese universities, where I found that only a small

number of institutions offer any form of structured assistance.

This realization prompted me to examine writing centers in other countries to identify forms of support that could be beneficial for my institution and others in Japan. During a conference trip to Iceland, I had the opportunity to visit the University of Helsinki and the University of Iceland. These visits highlighted the diverse forms that writing centers can take. As my research progressed, I encountered a wide range of models and approaches to writing support, each adapted to its respective institutional and cultural context.

Focus on AU/NZ writing center practices

In the course of my research on writing centers, it became clear that these institutions are deeply influenced by the cultural contexts in which they operate (Gally, 2010). Cultural factors shape student characteristics, needs, and expectations (Okuda & Anderson, 2018), as well as the requirements and priorities of educational institutions (Boscari et al., 2018). Furthermore, societal perceptions of the purpose of writing are also shaped by cultural norms, which in turn influence how educators respond to the needs of both students and institutions.

Although both the University of Helsinki in Finland and the University of Iceland initially adopted the American model of writing centers, they have since adapted their support systems to better reflect local student needs, physical space limitations, and institutional expectations (Ho, 2024). These observations underscore the importance of understanding cultural influences when designing and implementing an effective writing center (Gally, 2010).

Therefore, examining a single writing center is insufficient for identifying effective practices. Instead, it is essential to explore diverse models of writing centers across different cultural and institutional contexts. These centers vary widely in their structures and approaches, each offering

distinct and innovative strategies to support student writing effectively.

These insights led me to focus my research on writing centers in Australia and New Zealand. Although English is the primary language in both countries, their geographical proximity to Asia and the significant population of international students—particularly from Asia, including Japan (Australian Government Department of Education, 2023)—make their approaches especially relevant to Japanese universities. Furthermore, the cultural influences in Australia and New Zealand differ from those in other major English-speaking countries such as the United States, Canada, and the United Kingdom. Therefore, studying writing center models in Australia and New Zealand is just as valuable as examining those in North America.

This paper explores how universities in Australia and New Zealand implement strategies to support a broad and diverse student population, offering insights into adaptable practices that could inform writing support systems at Japanese universities.

Research Methodology

Literature review

There is a wealth of research on writing centers in the United States and Canada (Bielinska-Kwapisz, 2015; McLean, 2022; Williams, 2004); however, studies from other parts of the world suggest a limited understanding of writing center practices outside these regions. The body of literature specific to Japan remains relatively sparse (Yamamura & Nakatake, 2023). Much of the existing scholarship is concentrated in North America, reflecting the historical and institutional significance of writing centers in that context. Although no definitive number is available for writing centers in Europe, there is a growing demand for "language centers" that offer similar functions (Girgensohn, 2012).

Survey and networking efforts

To gain insights into writing center practices within Japan, I distributed a questionnaire to writing center staff, seeking information about their operations and their willingness to participate in follow-up Zoom interviews. For a novice researcher like myself, distributing a questionnaire proved to be an effective method. Many respondents were highly supportive, generously sharing their experiences and offering encouragement for my initiative to establish a writing center at my institution. They also expressed empathy for the potential challenges I may encounter throughout this process.

Through informal Zoom meetings, I gained a clearer understanding of the various types of writing centers operating in Japan and the strategies they employ. These conversations also yielded valuable recommendations for additional contacts, enabling me to gradually expand my network to include professionals in the United States and Canada. As a result, I was able to deepen my understanding of effective practices for writing center development.

Analyzing writing center websites

As an initial step in my research, I analyzed the websites of university writing centers to examine the range of services they offer. By using search terms such as "writing center" in combination with specific university names, I was able to access these sites directly, as their organizational affiliations were often unclear. Writing centers were variously housed within student services, library services, or English departments, reflecting their diverse institutional structures. This analysis provided valuable insights into how writing centers are embedded within university frameworks and the types of support they offer to students, establishing a critical foundation for the subsequent phases of my research.

Reaching out to universities:

Simultaneously, I began contacting universities in

Australia and New Zealand via email to inquire about their writing centers and to request permission to ask follow-up questions. Identifying the appropriate contact person was sometimes challenging due to differing departmental structures. Nevertheless, most responses were welcoming and enthusiastic, with many staff members eager to share insights into their practices.

When contact was established, I arranged Zoom calls, which proved highly productive. These face-to-face conversations not only provided detailed information but also led to unexpected discoveries about writing center operations and practices. Although I had initially assumed that writing centers in these English-speaking countries would resemble those in the United States and Canada, many institutions did not identify themselves as having a "writing center." Moreover, their approaches to writing support varied significantly, reflecting different institutional priorities and cultural contexts.

Visiting writing centers in person

While modern technology enables close collaboration through virtual meetings, in-person visits to writing centers offer distinct advantages. One significant benefit is the opportunity to observe the physical setting and layout of the center. The location of a writing center on campus can substantially influence student engagement. Centers located in hard-to-reach or low-traffic areas may experience reduced student participation, while those in central or highly visible locations often attract students who might not otherwise seek writing support—sometimes out of curiosity or convenience.

In-person visits also allowed me to examine the physical environment in greater detail, including furniture arrangement, spatial design, and the availability of resources and materials. These elements contribute to creating a welcoming and functional space, which is critical for encouraging student engagement and supporting effective learning.

Moreover, face-to-face conversations provide a level of comfort and spontaneity that is often absent in virtual meetings. Whereas Zoom calls tend to follow structured agendas, in-person discussions allow for greater flexibility and unplanned insights. For example, informal observations of the building, office setting, or signage during a visit often led to spontaneous discussions that revealed aspects of the writing center's operations not initially considered. This organic exchange of ideas enriched my understanding of writing center practices in a more holistic and nuanced way.

After visiting the University of Helsinki and the University of Iceland, the value of in-person visits became evident. While traveling to another country can be both financially and time-restrictive, I was fortunate to receive a research grant that enabled these visits. Being on-site allowed me to closely observe the operations of the writing centers and gain a deeper understanding of their physical setups, workflows, and resources. Additionally, these visits facilitated the formation of personal relationships with staff, fostering more meaningful and open exchanges of ideas and practices.

In addition to these observations, I conducted in-person interviews with writing center staff in an informal, conversational manner. To respect participants' privacy, no recordings were made; instead, I assured them that any information discussed would be confirmed before inclusion in any publication. Although I prepared a set of common questions relevant to most institutions, the informal nature of the interviews encouraged spontaneous dialogue, which often led to unanticipated insights and fresh perspectives on writing center practices.

These firsthand interactions underscored the value of observing physical environments and engaging in open, face-to-face conversations. Such encounters revealed nuances and contextual details that might otherwise be overlooked in virtual settings, thereby broadening my understanding of how writing centers function within their specific institutional and cultural contexts.

Scope of the Research with Emphasis on Australia and New Zealand

This study examines writing centers—or equivalent services such as academic skills centers and student support units—in Australia and New Zealand. Although some institutions do not explicitly refer to these services as “writing centers,” they perform comparable functions by providing comprehensive writing support and are therefore included in this analysis. The study focuses on practices observed during site visits conducted in February 2024, while acknowledging that writing center operations continue to evolve in response to institutional needs and have undergone notable changes in the post-pandemic context.

Comparative Element: Contrasting AU/NZ and US/Canada Models

To contextualize the findings, this study draws comparisons between approaches in Australia and New Zealand and the common features of writing centers in the United States and Canada (Ho, 2024). Although the core purpose remains the same—supporting student writing—there is considerable variation in writing center models. Some centers in Australia and New Zealand may lack elements traditionally viewed as essential in North American contexts, such as peer tutoring. However, these differences highlight alternative methods of achieving similar goals, making the comparison both valid and insightful.

Findings

Misconceptions about writing centers in English-speaking countries

A common misconception is that writing centers are universally established across all English-speaking countries.

However, this is not the case. Writing centers are more prevalent and institutionalized in the United States and Canada, where most universities offer dedicated writing support services. These services often include a designated director—either full-time or part-time—and a variety of support options, such as tutoring, workshops, and even social media engagement.

In contrast, the United Kingdom holds a different perception of writing ability. According to Franklin (2019), writing support is less common in the UK because it is assumed that students have already mastered academic writing skills during their secondary education. As a result, UK universities typically provide minimal writing support, expecting students to be well-prepared for academic writing tasks. Additionally, Kempenaar & and Murray (2019) suggest that many academics, university staff, and lecturers believe writing ability is an innate talent rather than a skill that can be learned. However, as the number of international students has increased over the past decades, English for Academic Purposes has received growing attention in the UK as the international students (Jordan, 2002).

In Australia and New Zealand, academic support services extend beyond writing to encompass a broader range of academic skills aimed at promoting student success and retention (Garcia Marrugo et al., 2023; McLean, 2022). These services are typically delivered through academic skills centers or student support units rather than traditional writing centers. The primary focus is on equipping students with a comprehensive set of academic competencies, including time management, critical thinking, and effective study strategies, rather than addressing writing in isolation.

Although writing centers in the United States and Canada have a longer history than those in other regions (Carino, 1995), a common misconception is that they are universally well-established with stable funding and staffing. In reality, their operational security is often less assured than assumed (Harris, 1985). Many centers struggle with

inconsistent funding, as annual budget allocations can be uncertain. Moreover, shifts in government policy or university administration can significantly influence their structure and sustainability (Brooks-Gillies et al., 2021). Consequently, despite their long-standing presence, writing centers in North America frequently contend with challenges that undermine their perceived stability.

Evolving academic support services

As my research into various writing centers deepened, it became clear that no two writing centers are identical, and all are in a continuous state of evolution. This adaptability often stems from shifting demands, such as those brought about by the COVID-19 pandemic, which forced many centers to transition rapidly from face-to-face consultations to remote support (Brooks-Gillies et al., 2021).

Institutional changes also play a significant role in shaping writing centers (Brooks-Gillies et al., 2021). The perceived value of these centers varies widely among university administrators. While some regard them as essential to student success and advocate for their expansion, others may deprioritize writing support in favor of different services, especially in the context of constrained budgets. In such environments, increased investment in one area often requires reductions elsewhere.

Additionally, faculty concerns about students' writing proficiency can prompt calls for enhanced writing support at the university level (Carter & Harper, 2013; Ginting &

Barella, 2022). In response, some centers shift focus toward workshops and embedded classroom instruction, potentially at the expense of one-to-one consultations that have traditionally characterized writing center practice (Bassett, 2021).

These varied and evolving influences underscore the importance of resisting rigid definitions or assumptions about the role and function of writing centers.

Unique aspects of AU/NZ writing centers

At the outset of my research, I assumed that writing centers in Australia and New Zealand would closely resemble those in the United States and Canada, given their shared status as English-speaking countries. However, site visits revealed notable differences in how academic support is conceptualized and implemented in these contexts.

In Australia and New Zealand, many institutions do not use the term "*writing center*" or even identify themselves as such. Instead, academic support is often provided under different names, such as *Academic Skills* in Australia and *Student Learning Center* in New Zealand (see Table 1). During visits to the University of Sydney, Macquarie University, Griffith University, and Auckland University of Technology, I observed that while these institutions are familiar with the concept of writing centers, they have developed distinct support systems tailored to their institutional needs and student populations.

Name of the center	Name of the university
Academic Skills and Learning Centre	Australian National University
Academic Skills Centre	University of Western Australia
Academic Skills Centre	University of Canterbury
Academic Skills Support	University of New South Wales
Academic Skills Unit	University of Melbourne
Centre for Learner Success	Massey University
Learning and Academic Engagement	Auckland University of Technology
Learning Hub	University of Sydney
Learning Skills	Monash University
Learning, Teaching, and Library Services	Lincoln University

Libraries and Learning Services	University of Auckland
Student Learning Development	University of Otago
Student Learning Support Services	Waikato University
Student Learning Te Taiako	Victoria University of Wellington
Study and Learning Centre	RMIT University
Study Skills and Learning Advice	University of Queensland
Writing Centre	Macquarie University
Writing Centre (Student Academic Skills & Support)	University of Adelaide

Table 1: The names of centers provide writing supports

Since the 1970s, Australian educators have sought to integrate academic writing instruction into the curriculum through an embedded approach. However, these efforts have not led to the development of sustained or comprehensive support systems. Instead, writing support often defaults to remedial assistance aimed at helping struggling students attain college-level writing proficiency (Thomas, 2021). Australian institutions tend to diverge from the American and British models of writing instruction, which are often considered the mainstream approaches in English-speaking contexts (Thomas, 2021). This divergence reflects Australia's unique educational environment and the significant influence of systemic functional linguistics and genre-based pedagogy on writing instruction over the past four decades.

Despite ongoing efforts, foundational writing instruction in Australian education remains insufficient. The limited time allocated to writing instruction is inadequate for fostering the development of students' writing skills (Thomas, 2021). Furthermore, there is a lack of integrated approaches that combine writing instruction with subject-specific content (McLean, 2022; Thomas, 2021). These shortcomings are reflected in national assessment results, which show consistently low or unchanged writing performance among students in Years 3 and 5, and a moderate decline in writing proficiency among those in Years 7 and 9 over the past decade (Thomas, 2021).

Although there is ongoing debate about the type of writing instruction best suited to prepare students for

university education, the universities I visited in Australia and New Zealand demonstrated a strong commitment to student success through their academic support services. What stood out most was their dedication to addressing the evolving needs of both students and institutions by continually adapting and refining their support offerings. Individual interviews revealed that these institutions adopt a data-driven approach to ensure the effectiveness of their services. They regularly conduct student surveys to collect feedback and assess the impact of their programs. For example, as Garcia Marrugo et al. (2023) note, some universities compare the academic performance of students who participated in writing workshops with those who did not, offering valuable insights into the efficacy of these interventions. This adaptive model enables institutions to remain responsive to shifting student needs and institutional priorities. By systematically evaluating and improving their services, they ensure that academic support remains relevant, effective, and aligned with the dynamic landscape of higher education. This commitment to continuous improvement and evidence-based practice offers a compelling model for writing centers and academic support services worldwide.

They have also adopted a proactive approach to academic support, moving beyond the traditional model of simply welcoming students who seek assistance. This shift reflects a growing recognition of the need to reach a broader student population and to challenge the stigma often associated with seeking academic help. Rather than

framing their services as remedial "help" or "support," which some students may be hesitant to pursue, many institutions now present them as "pathways to success" for ambitious students. This reframing helps dispel the notion that academic support centers are only for those who are struggling, instead promoting them as valuable resources for all students aiming to excel. The nomenclature of these centers reflects this broader approach, emphasizing holistic academic development rather than focusing solely on writing. While systems exist for faculty to refer students who may be underperforming, these centers generally avoid using the term "help" in their outreach and marketing. Instead, they adopt language that encourages all students to engage with their services to achieve academic success. This approach aligns with contemporary educational research that emphasizes student agency and holistic development, and it marks a notable departure from earlier models of writing support in the United States, which were sometimes labeled "clinics," implying a remedial or corrective function (Carino, 1995).

To enhance accessibility, these institutions consistently seek ways to make their academic support services more readily available to students. For instance, Macquarie University offers an online chat support system staffed by trained student tutors, enabling students to receive immediate assistance without the need to visit the center in person. By adopting a proactive, success-oriented approach and continually improving accessibility, universities in Australia and New Zealand aim to ensure that a greater proportion of their diverse student populations can benefit from academic support services.

Case study of successful NZ writing center initiative

One approach to supporting as many students as possible can be illustrated by the example of Auckland University of Technology (AUT), where I had the opportunity to meet several members of the writing center staff. As one

of New Zealand's largest universities, with nearly 30,000 students enrolled, AUT has implemented multiple strategies to provide comprehensive writing support. AUT uses Canvas as its online learning management system for undergraduate programs. To enhance writing support within this platform, the university has integrated a variety of resources directly into Canvas, making them easily accessible to students.

Through comprehensive investigations and student feedback, AUT discovered that students prefer a "one-stop-shop" for all their academic needs (Bassett et al., 2023; Bassett & Wattam, 2024). This insight revealed that while university websites often contain an abundance of information, the sheer volume can make navigation challenging for students. In response, AUT implemented a streamlined approach by integrating essential writing support resources directly into the Canvas learning management system for individual courses. This strategy ensures that students can access all necessary information and support tools within the context of their specific assignments and coursework.

Another innovative approach to teaching academic writing is through the use of annotated essay samples (Bassett et al., 2023; Bassett & Wattam, 2024). This method goes beyond simply providing example essays; it offers a detailed, visual breakdown of essay structure and function. In these annotated samples, different parts of the essay are color-coded and accompanied by marginal notes explaining their purpose. For instance, sentences might be highlighted with comments like "recurring theme" or "outline of the second study." This approach provides students with a clear, visual representation of how various elements contribute to the overall structure and argument of an academic essay.

While similar resources exist in academic writing textbooks and websites, AUT's integration of annotated samples directly into course materials significantly enhances the students' accessibility and relevance (Bassett et al., 2023; Bassett & Wattam, 2024). This approach addresses several

key challenges. First, it eliminates the need for students to piece together information from disparate sources, a task that can be overwhelming for novice writers. Additionally, by embedding these samples into specific course materials, AUT ensures that the examples are directly relevant to the assignments students are working on, rather than relying on generic examples that may not apply to their field of study. Finally, this integration ensures that all students have equal access to these valuable resources, regardless of their prior knowledge or research skills.

Analysis of AU/NZ Approaches

Inclusivity and accessibility

One of the notable strengths of the Australian and New Zealand educational approaches is their emphasis on inclusivity and accessibility (Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority, 2019). These systems aim to provide comprehensive support for all students, including those who excel in most subjects and wish to further enhance their performance, as well as those who may struggle to meet course requirements. The educational frameworks in these countries are designed to accommodate the diverse needs of their student populations.

Many writing centers are strategically located in easily accessible areas to maximize student engagement. For example, positioning writing centers within library facilities takes advantage of existing student traffic and reinforces the connection between research and writing processes. Additionally, placing centers in high-visibility areas increases awareness and reduces barriers to access. To encourage student visits, the use of welcoming and informative signage can help reduce psychological barriers and create a more approachable atmosphere (Mckinney, 2013). Furthermore, incorporating visits to the writing center into new student orientations familiarizes students with the space and services early in their academic journey. Conducting workshops,

classroom visits, and collaborative events with other campus departments can further increase visibility and demystify the role of the writing center.

Many institutions have implemented digital strategies to address student reluctance and improve accessibility. These approaches leverage technology to create more approachable and convenient support systems. Macquarie University's implementation of a chat system is a prime example of how to reduce barriers for students seeking writing support. This system allows students to engage with tutors in a low-pressure environment, ask questions without the perceived intimidation of face-to-face interactions, and receive immediate responses to writing-related queries.

Efficiency in resource allocation

Many writing centers have recognized the need for scalable solutions to address common student inquiries. This approach not only enhances efficiency but also provides students with readily available resources they can access at their convenience. Another example is AUT, as mentioned earlier. AUT has adopted a strategy of embedding crucial writing resources directly into their learning management system, Canvas (Bassett et al., 2023; Bassett & Wattam, 2024). One of the most frequent challenges students face in academic writing is proper citation. To address this, writing centers have developed comprehensive online resources, such as citation style guides and video tutorials. These tools enable students to learn and apply citation skills independently, while also helping writing center staff reduce the workload associated with repetitive inquiries.

By integrating these resources into the course environment, students can seamlessly access writing materials within a familiar platform. This eliminates the need to navigate external websites, which can be cumbersome for many students. Furthermore, this approach increases the likelihood of student engagement with writing support materials.

Integration with curriculum

The third strength of the AU/NZ model is the integration of writing instruction into the curriculum (Bassett et al., 2023; Bassett & Wattam, 2024; Macnaught et al., 2022). This integration is crucial for developing discipline-specific writing skills in higher education. While academic writing shares common features across disciplines, significant variations exist in rhetorical conventions, citation styles, discourse patterns, and vocabulary. These differences make it challenging for students to apply general academic writing guidelines to specific disciplinary contexts (Bassett et al., 2023; Bassett & Wattam, 2024; Hyland, 2004). Integrating writing instruction within the curriculum enables tailored guidance on discipline-specific writing norms, contextualized learning of writing skills, and alignment with subject-specific learning outcomes.

Curriculum-integrated writing instruction also offers several advantages for teachers and instructors (Wingate et al., 2011). First, by addressing writing skills within the curriculum, educators can dedicate more attention to subject matter expertise. Additionally, understanding the writing skills taught in the curriculum enables instructors to set appropriate assignment criteria for new students. Often, there is a discrepancy between the expectations of new students and instructors regarding assignment quality. Integrating writing instruction helps to prevent such misunderstandings of course expectations. Furthermore, collaborating with learning advisers facilitates the development of constructive lesson plans that balance content knowledge and writing skills. Course lecturers may not necessarily be academic writing experts, but learning advisers can design lesson plans tailored to the students' level of proficiency.

Challenges faced by AU/NZ writing centers

The integration of writing instruction into the curriculum, while beneficial, faces several challenges in implementation (Bassett & Macnaught, 2024). Some faculty members resist this approach, viewing writing instruction as unnecessary or peripheral to their core subject matter. This perspective may arise from the belief that their established teaching methods are sufficient or that writing skills should be developed independently of disciplinary content. Time constraints often exacerbate this reluctance, as faculty members may perceive collaboration with learning advisers as an additional burden on their already demanding schedules. Moreover, the concept of collaborative lesson planning with writing specialists may be unfamiliar to some instructors, leading to hesitation or skepticism about its value. Wingate (2018) notes that this resistance can be particularly pronounced in disciplines where writing is not traditionally viewed as a core competency. These attitudes can create significant barriers to the successful implementation of integrated writing instruction, potentially limiting students' opportunities to develop discipline-specific writing skills.

The successful implementation of integrated writing instruction across the curriculum requires substantial institutional support, which is often influenced by broader governmental policies and budgetary constraints. Writing centers and academic support services frequently operate within complex organizational structures that can either facilitate or hinder their efforts. Institutional decisions are often shaped by governmental policies, particularly those related to higher education funding and assessment, which can significantly impact an institution's ability to support comprehensive writing initiatives (Wingate, 2018). These policy changes may lead to budget reductions for writing centers, limiting their capacity to collaborate effectively with faculty across disciplines.

Moreover, the implementation of school-wide writing workshops or the integration of writing instruction into various courses often requires institutional approval and technical infrastructure. Technological solutions, such as embedding writing resources within learning management systems or implementing online tutoring platforms, require not only financial investment but also IT support and administrative authorization.

Comparison with key features of US/Canada model

Writing supports

The Australian and New Zealand higher education sectors clearly recognize the importance of comprehensive writing support, offering a diverse range of services to cater to their heterogeneous student populations, much like their US/Canada counterparts. According to Thomas (2021), although higher education institutions require students to write and communicate effectively, there are no standardized writing and communication courses in the curriculum. Therefore, writing support services, such as writing centers or academic support centers, play a crucial role in enhancing students' writing abilities.

However, the standard model of not providing direct grammar instruction or editing papers, as seen in the US/Canada model, differs significantly in Australia and New Zealand due to the substantial presence of international students and Indigenous students for whom English may not be the first language. According to the Australian Government Department of Education (2023), international students accounted for 27.6% of all higher education enrollments in 2023, underscoring the need for specialized writing support. Providing writing support for English as a Second Language (ESL) learners often requires approaches that diverge from traditional writing center practices. Contrary to the standard writing center advice to avoid grammar instruction, ESL

students frequently require explicit guidance on language structures and conventions.

One-to-one consultation

Most universities in Australia and New Zealand offer one-on-one consultation services for academic support, closely mirroring the model commonly found in the United States and Canada. Students typically schedule appointments within available time slots and can meet either in person at the center or online via platforms such as Zoom.

The nomenclature for these consultants varies across institutions. Common titles include:

- **Learning Adviser**: Used at AUT, the University of Queensland, Australian National University, University of Adelaide, Victoria University of Wellington, Massey University, University of Canterbury, and Lincoln University.

- **Academic Skills Adviser**: Employed at the University of Western Australia and RMIT University.

- **Writing Mentor** at the University of Melbourne, **Peer Mentor** at the Australian National University, and **Writing Consultant** at Massey University.

In the Australian and New Zealand context, the scope of support extends beyond writing-related assistance. As indicated by their titles, these advisers view writing as an integral component of broader academic skills. Their support encompasses time management, academic reading skills, note-taking strategies, and subject-specific assistance (e.g., mathematics, physics, and engineering).

However, challenges persist in meeting the demand for these services. In interviews, some educators expressed concerns about insufficient staffing to adequately support the large student populations at many universities. This issue of resource allocation echoes findings from Harper and Vered (2017), who highlighted the ongoing tension between the demand for individualized support and the constraints of institutional resources in Australian higher education contexts.

Student tutors

Some Australian and New Zealand universities have adopted a peer tutoring model similar to that found in North American institutions, extending support not only for writing but also for other subject areas. This approach involves both graduate and undergraduate students providing comprehensive academic support to their peers. Student tutors are trained to facilitate group work, offer one-on-one writing support, provide mentorship, and assist with subjects such as mathematics and other discipline-specific areas. Similar to the US/Canada model, these student tutors undergo thorough training before commencing their roles to ensure the quality and consistency of the support provided. The training typically includes workshops on communication strategies, academic support techniques, and understanding the diverse needs of students.

Messaging

Many Australian and New Zealand universities have integrated their academic support services with Learning Management Systems (LMS) such as Moodle, Canvas, and Blackboard. This integration enhances accessibility and streamlines the learning experience for students. For instance, at AUT, learning advisers collaborate with faculty members to create model assignments, which are then distributed directly through the Canvas course pages, providing students with a centralized access point for academic resources.

The adoption of AI-powered tools is becoming increasingly prevalent in higher education institutions. For example, the University of Melbourne has developed an AI learning assistant that integrates with their LMS (University of Melbourne, 2024). This chatbot, set to be available for staff use from July 29, 2024, offers two modes: a chat function for subject-related queries and a Socratic tutor mode to guide students through topics. Such innovations aim to provide 24/7 support and personalized learning experiences.

The use of online communication tools like Zoom

and Microsoft Teams, which became essential during the COVID-19 pandemic, remains popular among students. According to interviews, many students continue to prefer online meetings due to their convenience, even after the return to in-person instruction. This trend reflects a broader shift towards more flexible, technology-enhanced learning environments in higher education.

Workshop

Australian and New Zealand universities place significant emphasis on academic workshops as a central component of their support services (Thomas, 2021). These workshops efficiently introduce large cohorts of students to fundamental aspects of academic writing and related skills. Typically scheduled at the start of the academic year, they are primarily aimed at first-year students, providing a strong foundation in academic writing practices. The content of these workshops goes beyond traditional writing instruction, encompassing a broader range of academic skills. Topics often covered include time management, critical thinking, research methodologies, as well as academic writing conventions and referencing guides. Throughout the academic term, institutions offer more specialized workshops, delving into specific aspects of academic writing or addressing the unique needs of different disciplines.

Physical space

The location and design of academic support centers in Australian and New Zealand universities are strategically planned to maximize accessibility and effectiveness, as observed during my visits to various institutions. Some universities position these centers within or adjacent to libraries, capitalizing on the natural flow of students seeking academic resources. Others opt for placement within student centers, creating a centralized hub for various support services. These centers typically include a standard reception counter for initial inquiries and triage. However, recognizing

the need for privacy during certain consultations, many institutions also provide individual cubicles or private meeting spaces.

Global Implications and Recommendations

Lessons from AU/NZ for global writing center practices

The assumption that academic skills, including academic writing, should be taught at the university level is widely acknowledged across various countries, including Australia, New Zealand, the United States, and Canada. This shared challenge arises from the reality that many first-year students are not adequately prepared for the demands of university study. The skills essential for success in higher education go beyond academic writing to include critical thinking, academic reading, research methodologies, time management, collaboration, and communication. As Wingate (2018) notes, these skills collectively contribute to what is referred to as "academic literacy across the curriculum."

The level of academic skills acquired in high school varies significantly depending on students' educational backgrounds. However, most students do not receive explicit instruction in these skills during their secondary education (McLean, 2022). Recognizing this gap, Australian and New Zealand universities generally operate under the assumption that incoming students may not possess the necessary academic skills at the required level.

In response, these universities have adopted a proactive approach to academic support, moving beyond the traditional model of waiting for students to seek assistance voluntarily. This shift reflects a growing recognition of the need to reach a broader student population and overcome the stigma often associated with seeking academic "help."

Rather than framing their services as remedial "help," which some students may be hesitant to seek, many institutions in Australia and New Zealand position their

support as "pathways to success" for ambitious students. This reframing helps dispel the notion that academic support centers are solely for struggling students, instead promoting them as resources for all students aiming to excel in their studies. For example, the University of Sydney refers to its services as "academic language development," a program that is designed to benefit all students.

Potential for adapting AU/NZ strategies in other regions

The strategy of continuous improvement through regular student feedback and adaptation is crucial for writing centers and academic support services. Many universities in Australia and New Zealand have adopted this approach, recognizing the dynamic nature of student needs and preferences.

The case of AUT exemplifies an innovative solution to this challenge. While most writing centers maintain websites with extensive resources, some students may struggle to navigate through multiple pages or locate specific information, which can lead to frustration and disengagement. By integrating writing resources directly into their Learning Management System (LMS), AUT has made these materials more readily accessible to students. This integration is a step toward enhancing accessibility, but it also highlights the importance of continually collecting student feedback to ensure the resources align with their needs and preferences.

By consistently seeking to understand and meet student needs, writing centers in Australia and New Zealand demonstrate a commitment to student-centered support. This approach not only enhances the effectiveness of writing support services but also contributes to overall student satisfaction and academic success.

The model of continuous improvement exemplified by these institutions is one that can be adapted and applied across various educational contexts, regardless of geographical location or institutional type. While student populations may vary from country to country or institution

to institution, many of their fundamental academic needs and challenges remain similar.

However, it is essential to recognize that wholesale adoption of these practices may not always be feasible or appropriate in all contexts. Cultural differences, institutional resources, and specific student demographics all play a role in shaping the most effective support strategies. As Harper and Vered (2017) emphasize, academic support practices must be responsive to local contexts and student needs.

Instead, institutions can selectively adapt and implement tools and strategies that align with their specific circumstances. For example:

1. Regular student surveys to gauge evolving needs and preferences.

2. Integration of support resources into Learning Management Systems.

3. Reframing support services as "pathways to success" rather than as remedial help.

4. Proactive outreach strategies to encourage voluntary engagement with support services.

The key lies in maintaining a flexible, student-centered approach that prioritizes continuous improvement and responsiveness to student needs. By doing so, writing centers and academic support services worldwide can enhance their effectiveness and better serve their diverse student populations.

Importance of cross-regional collaboration and idea sharing

While the nomenclature varies across institutions, many academic support centers in Australia and New Zealand share common features with the writing center model prevalent in the United States and Canada. Some institutions may not explicitly identify themselves as writing centers, reflecting the diversity in approaches to academic support. This diversity, however, is a strength, as it allows for tailored responses to specific institutional and student needs.

Regardless of their official designation, centers that provide support for students' academic success across disciplines should view themselves as part of a broader community of practice. This perspective fosters collaboration and the exchange of ideas, benefiting both staff and students.

Despite geographical differences, writing centers and academic support services worldwide face common challenges. A prime example is the growing need to support students writing in English as an additional language. This is a shared concern not only in traditionally English-speaking countries like the US, Canada, New Zealand, and Australia, but also in many other nations where English is increasingly used in higher education.

The commonality of these challenges presents an opportunity for international collaboration. By recognizing shared goals, writing centers and academic support services can engage in meaningful exchanges, sharing best practices and innovative approaches to supporting student success. This collaborative approach can lead to more effective strategies for addressing issues such as supporting multilingual writers, integrating technology into writing instruction, and promoting academic integrity. It can also contribute to the professional development of writing center staff and the advancement of writing center pedagogy on a global scale.

Conclusion

Summary of key findings from AU/NZ research

The proactive outreach methods employed by Australian and New Zealand universities offer valuable models that institutions in other countries could adapt to enhance student engagement with writing support services. While many of these centers are not explicitly labeled as writing centers, the support they provide responds to student needs that are not unique to the AU/NZ context. Notably, their ongoing efforts to improve services through regular student feedback are particularly commendable. The case of AUT illustrates

how close attention to student feedback can reveal that even seemingly minor adjustments may significantly influence student engagement and perceptions of support.

Call for increased global collaboration in writing center practices

The demand for English academic writing skills has become a global phenomenon, extending far beyond traditionally English-speaking countries. With the rise of English-medium instruction programs at many international universities, there is an increasing need for academic writing support in English across diverse educational contexts. This trend underscores the potential for greater international collaboration and knowledge sharing among writing centers and academic support services worldwide. While the specific challenges may vary across institutions and regions, many of the core issues—such as helping students navigate academic writing conventions, supporting multilingual writers, and integrating critical thinking into writing—are shared globally. However, the emphasis and strategies for addressing these issues often reflect local needs and institutional priorities. By acknowledging these common challenges and fostering a spirit of collaboration, writing centers can benefit from shared best practices and innovative approaches, ultimately enhancing their effectiveness in supporting student success.

Future directions for writing center research and practice

Writing centers worldwide—regardless of their official designation—should reconsider both their identity and their potential for collaboration. The diversity and ongoing evolution of writing support services offer a unique opportunity for broader cooperation among institutions that share similar educational goals. By adopting a more inclusive and expansive perspective, these institutions can foster meaningful partnerships and engage in productive knowledge exchange.

This collaborative approach is especially pertinent for writing centers that may feel professionally isolated. For example, Emma Björg Eyjólfssdóttir, Director of the University of Iceland Center for Writing, described feeling alone in facing challenges and expressed a desire for colleagues with whom she could consult (Ho, 2024). Her experience likely resonates with many writing center professionals across the globe.

Recognizing the common challenges and aspirations shared among writing support services can lead to the creation of a more interconnected and supportive international network. Such collaboration not only benefits the practitioners involved but also contributes to enhancing the quality and effectiveness of writing support provided to students in diverse cultural and linguistic contexts.

Acknowledgements

I would like to express my sincere gratitude to Ms. Kate Absolum, the senior manager of the Learning and Academic Engagement at Auckland University of Technology (AUT) for graciously granting me an interview and for offering invaluable insights into their academic supports. I am also deeply appreciative of her efforts in coordinating meetings with other staff members, which allowed for further discussion on writing support practices and challenges. I am also thankful to Dr. Mark Basset, the learning adviser, at AUT for sharing their practice of embedded program. I am also greatful to Ms. Alex Garcia Marrugo, Learning Hub Lead, at Academic Language and Learning, University of Sydney for her hospitality and for providing me with the opportunity to visit her esteemed institution, which greatly enriched my understanding of writing support in Australia.

Additionally, I extend my appreciation to Dr. Joseph Franklin at New York City College of Technology for his time and expertise during the Zoom interview and subsequent

consultations, which significantly contributed to the development of this research.

Their generosity and expertise have been instrumental in shaping the direction and depth of our study.

概 要

本稿では、オーストラリアとニュージーランドの大学におけるライティング支援の実践を、米国やカナダのモデルと比較しながら検証する。大学訪問、インタビュー、既存研究をもとに、これらの大学が学生中心の総合的なアプローチを通じて、多様な学生のアカデミック・ライティングのニーズにどのように対応しているかを探る。すべての教育機関が「ライティング・センター」という名称を使用しているわけではないが、その多くは、ライティングやアカデミックスキル指導、分野別サポートを含む包括的なサービスを提供している。主な戦略としては、学習管理システムへの資料の組み込み、AIを活用したツールの採用、ピアサポートの提供、定期的な学生フィードバック調査の実施などが挙げられる。特に、中等教育ではアカデミック・リテラシーのニーズが満たされないことが多いため1年生や、多言語を話す学生のサポートに重点を置いている。また、ライティング指導をカリキュラムに組み込む際の課題について論じ、組織的支援の重要性を強調している。最後に、ライティング・センターやアカデミック・サポート・サービス間の国際的な連携を強化し、最善の支援を共有し、学生のライティング支援における世界共通の課題に取り組むことを主張している。本研究は、JSSP 科研費 (23K18896) の助成を受けたものです。

キーワード: 学術論文サポート、ライティングセンター、高等教育、国際協力

References

- Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority. (2019). International Comparative Study: The Australian Curriculum and the New Zealand Curriculum. Retrieved from <http://www.australiancurriculum.edu.au>
- Australian Government Department of Education. (2023). Key findings from the 2023 Higher Education Student Statistics. <https://www.education.gov.au/higher-education-statistics/student-data/selected-higher-education-statistics-2023-student-data/key-findings-2023-student-data>
- Bassett, M. (2021). *Learning Advisor and Lecturer Collaborations to Embed Discipline-Specific Literacies Development in Degree Programmes* [Thesis, ResearchSpace@Auckland]. <https://researchspace.auckland.ac.nz/handle/2292/58275>
- Bassett, M., & Macnaught, L. (2024). Embedded approaches to academic literacy development: A systematic review of empirical research about impact. *Teaching in Higher Education*, 0(0), 1-19. <https://doi.org/10.1080/13562517.2024.2354280>
- Bassett, M., Chapman, E., & Wattam, C. (2023). 'I don't know the hierarchy': Using UX to position literacy development resources where students expect them. *ASCILITE Publications*, 286-290. <https://doi.org/10.14742/apubs.2023.462>
- Bassett, M., & Wattam, C. (2024). 'We didn't need to know about everything all at once': Using UX to give students easy access to relevant assessment resources. *ASCILITE Publications*, 23-33. <https://doi.org/10.14742/apubs.2024.1081>
- Bielinska-Kwapisz, A. (2015). Impact of writing proficiency and writing center participation on academic performance. *International Journal of*

- Educational Management, 29*(4), 382-394. <https://doi.org/10.1108/IJEM-05-2014-0067>
- Boscari, S., Bortolotti, T., Netland, T. H., & Rich, N. (2018). National culture and operations management: A structured literature review. *International Journal of Production Research, 56*(18), 6314-6331. <https://doi.org/10.1080/00207543.2018.1461275>
- Brooks-Gillies, M., Bell, L., Dembsey, J. M., & Theobald, Duane. (2021). Writing Center Administrator Guidance in Response to the COVID-19 Pandemic: The Progression of a Position Statement. *The Peer Review, 5*(1). <https://thepeerreview-iwca.org/issues/issue-5-1/writing-center-administrator-guidance-in-response-to-the-covid-19-pandemic-the-progression-of-a-position-statement/>
- Carino, P. (1995). Early Writing Centers: Toward a History. *The Writing Center Journal, 15*(2), 103-115.
- Carter, M. J., & Harper, H. (2013). Student Writing: Strategies to Reverse Ongoing Decline. *Academic Questions, 26*(3), 285-295.
- Franklin, J. (2019). The transnational underdog and institutional change: Stories from a U.K. writing center. *WLN: A Journal of Writing Center Scholarship, 44*(3-4), 10-16.
- Gally T. (2010). The Cultures of Writing Centers. *Komaba Journal of English Education, 1*, 61-84.
- Garcia Marrugo, A. I., Olston, K., Aarts, J., Moore, D., & Kaliyadan, S. (2023). SCANA: Supporting Students' Academic Language Development at the University of Sydney. *JANZSSA - Journal of the Australian and New Zealand Student Services Association, 31*(2), 102-108. <https://doi.org/10.30688/janzssa.2023-2-01>
- Ginting, D., & Barella, Y. (2022). Academic writing centers and the teaching of academic writing at colleges: Literature review. *Journal of Education and Learning (EduLearn), 16*(3), Article 3. <https://doi.org/10.11591/edulearn.v16i3.20473>
- Girgensohn, K. (2012). Mutual Growing: How Student Experience can Shape Writing Centers. *Journal of Academic Writing, 2*(1), Article 1. <https://doi.org/10.18552/joaw.v2i1.68>
- Harper, R., & Vered, K. O. (2017). Developing communication as a graduate outcome: Using 'Writing Across the Curriculum' as a whole-of-institution approach to curriculum and pedagogy. *Higher Education Research & Development, 36*(4), 688-701. <https://doi.org/10.1080/07294360.2016.1238882>
- Harris, M. (1985). Theory and Reality: The Ideal Writing Center(s). *The Writing Center Journal, 5/6*(2/1), 4-9.
- Ho, M. T. (2024). Fostering Writing Excellence: Learning from University of Helsinki and University of Iceland to Expand Writing Centers in Japanese Universities. *Research Bulletin of Obihiro University, 45*, 37-48.
- Hyland, K. (2004). *Disciplinary Discourses, Michigan Classics Ed.: Social Interactions in Academic Writing*. University of Michigan Press.
- Jordan, R. R. (2002). The growth of EAP in Britain. *Journal of English for Academic Purposes, 1*(1), 69-78. [https://doi.org/10.1016/S1475-1585\(02\)00004-8](https://doi.org/10.1016/S1475-1585(02)00004-8)
- Kempenaar, L., & Murray, R. (2019). Widening access to writing support: Beliefs about the writing process are key. *Journal of Further and Higher Education, 43*(8), 1109-1119. <https://doi.org/10.1080/0309877X.2018.1450964>
- Macnaught, L., Bassett, M., Ham, V., Milne, J., & Jenkin, C. (2022). Sustainable embedded

- academic literacy development: The gradual handover of literacy teaching. *Teaching in Higher Education*, 29, 1-19. <https://doi.org/10.1080/13562517.2022.2048369>
- McCarthy, J. E. (2021). *Critical Thinking in Academic Writing: Challenges for Japanese Students Preparing for English-Medium Universities*. 965, 13-27.
- Mckinney, J. G. (2013). *Peripheral Visions for Writing Centers*. University Press of Colorado. <https://doi.org/10.2307/j.ctt4cgk97>
- McLean, E. (2022). Writing and writing instruction: An overview of the literature. *Analysis & Policy Observatory*. <https://nla.gov.au/nla.obj-3126575941>
- Okuda, T., & Anderson, T. (2018). Second Language Graduate Students' Experiences at the Writing Center: A Language Socialization Perspective. *TESOL Quarterly*, 52(2), 391-413. <https://doi.org/10.1002/tesq.406>
- Thomas, S. E. (2021). Writing Instruction in Australia. *Composition Studies*, 49(3), 176-181.
- Williams, J. (2004). Tutoring and revision: Second language writers in the writing center. *Journal of Second Language Writing*, 13(3), 173-201. <https://doi.org/10.1016/j.jslw.2004.04.009>
- Wingate, U. (2018). Academic literacy across the curriculum: Towards a collaborative instructional approach. *Language Teaching*, 51(3), 349-364. <https://doi.org/10.1017/S0261444816000264>
- Wingate, U., Andon, N., & Cogo, A. (2011). Embedding academic writing instruction into subject teaching: A case study. *Active Learning in Higher Education*, 12(1), 69-81. <https://doi.org/10.1177/1469787410387814>
- Yamada, K. (2015). Cross-Disciplinary Variations: Japanese Novice Writers' Socialization into the Undergraduate Thesis. *The Asia-Pacific Education Researcher*, 25(2), 207-217. <https://doi.org/10.1007/s40299-015-0252-3>
- Yamamura, K., & Nakatake, M. (2023, September 15). *The Realities and Challenges Faced by Writing Centers in Japan and the Path Forward Through the Thirteenth Symposium on Writing Centers in Asia*. Connecting Writing Centers Across Borders. <https://wlnconnect.org/2023/09/15/the-realities-and-challenges-faced-by-writing-centers-in-japan-and-the-path-forward-through-the-thirteenth-symposium-on-writing-centers-in-asia/>

ドイツ詩の文法 (4)

杉田 聰 (帯広畜産大学名誉教授)

Des deutschen Gedichtes Grammatik (4)
SUGITA Satosi
(受付 : 2025 年 4 月 30 日, 受理 : 2025 年 7 月 1 日)

目次

はじめに	
第 1 章 ドイツ詩のしらべ (音韻論)	
第 1 節 韻律・押韻	第 2 節 弱音の省略
第 3 節 弱音の付加	……以上 (1)
第 2 章 ドイツ詩のことばとその成り立ち (形態論・語彙論)	
第 1 節 ドイツ詩のことばの成り立ち (形態論)	……以上 (2)
第 2 節 ドイツ詩のことば (語彙論)	……以上 (3)
第 3 章 ドイツ詩文の成り立ち (統語論)	
第 1 節 格の用法	……以上本号 (4)
第 2 節 語順の転換	第 3 節 語の省略
第 4 章 ドイツ詩語句・詩文のふくみ (意味論)	

本号詳細目次

凡例	79	謝辞	79
第 3 章 ドイツ詩文の成り立ち (統語論)	80		
第 1 節 格の用法	80		
1, 第 1 格	80		
提示の 1 格	80	〔1〕 破格	81
〔2〕 同格	87		
2, 第 2 格	94		
〔1〕 部分の 2 格	94	〔2〕 状態の 2 格	97
〔3〕 ザクセン 2 格	100		
3, 第 3 格	117		
〔1〕 利害の 3 格	118	〔2〕 関心の 3 格	122
〔3〕 所有の 3 格	124		

〈4〉 分離の3格…138 〈5〉 具格的3格…147

4. 第4格 ……151

〈1〉 場所の状況語…151 〈2〉 時間の状況語…154

動画「ドイツリートの花束」について……157

動画の公開実績……158

文献一覧……159

引用・言及詩一覧……160

凡 例

- 1、詩の作者、題もしくは簡略化した題を、引用の後に記した（題はイタリック表記とした）。引用・言及した詩は、簡略化した題を含めすべて末尾の「引用・言及詩一覧」で示した。
- 2、詩を引用する際は、次のような工夫をした。
 - a) 改行を示すために「/」を、改詩節を示すために「//」を用いた。
 - b) 音韻の省略箇所にはアポストロフ「'」を置いた。多くの場合私がつけた。版にもよるが、これが入らないテキストも多い。
 - c) 2006年の「新正書法」ではなく、原詩の綴りを尊重した。ただし、*gibt, Thränen, die Todten* 等の歴史的な綴り（例えば *Schiller, Des Mädchens Klage*）は、現代表記にあらためた（それぞれ *gibt, Tränen, die Toten*）。
 - d) 各詩行の冒頭を大文字で記す習慣には従わなかった。そのために、「,」「;」「:」等で区切られた文を独立文（副文を含めて）とみなすかどうかで難題が生じたが、基本的に原詩に従いつつも時にはそれらを「.」と見なして、次行の冒頭を大文字にした。
 - e) 主項目として問題にした単語には実線の下線を、関連して言及した単語には破線の下線を引いた。例えば *Under der linden/ an der heide,/ dâ unser zweier bette was,...* (*Vogelweide, Under der linden*) のように。ただし、必要に応じて下線+太字、下線+イタリック体等を用いた場合もある。その場合は、そのつど必要箇所で注記した。
- 3、ドイツ詩に关心をもつ学生が読めることも重視し、すべての作例に訳（ポイントを2つ下げた活字による）をつけた。訳にも記号「/」「//」を用いたが、これは日独両語の統語法上の違いから便宜にすぎない。
- 4、必要に応じて略号を用いた。「Ahd.」は古高ドイツ語、「Mhd.」は中高ドイツ語、「Nhd.」は新高ドイツ語の意である。

謝 辞

本稿執筆の過程で、今回も佐々木洋子氏（帯広畜産大学教授・オーストリア近現代史）から、貴重な資料を提供いただいた。記して感謝の気持ちとしたい。

第3章 ドイツ詩文の成り立ち（統語論）

本稿「ドイツ詩の文法（4）」では、（1）音韻論、（2）形態論、（3）語彙論にひきつづいて統語論を論ずるつもりでいたが、その全体の執筆は、予想外に作成・公開に時間のかかる動画「ドイツリートの花束」の配信（2024年10月から；→杉田③327p, 本号157p）と同時進行となつたため、残念だが実現できなかつた。

今号（4）では、第3章第1節として、統語論のうち「格の用法」を扱う。他に統語論として論すべきは「語順の転換」と「語の省略」である。これは次号で、第2、3節として論ずる。

第1節 格の用法

本稿においてこれまで、音韻および語のレベルで、ドイツ詩の特徴を見てきた。だが詩の本領は、音や語のレベルでの抽象的な単位ではなく、それらの組み合わせによって意味のある文を組み立てることである。そのために、詩人は母語である言語の統語規則に従うが、他面で、日常語ではほとんど用いられない、あるいは、一般には限られた仕方でしか用いられない、詩に特有な統語法（部分の2格、ザクセン2格等）が、用いられることがある。あるいは一般に文語の、もしくは古風な印象の統語法として用いられたとしても（所有の3格）、一種独特な詩的ニュアンスとともに使われることがある。

こうした統語法のレベルに位置する詩の文法を、格に視点をおいて論ずるのが、本第3章第1節「格の用法」の目的である。以下、1格～4格の順に論じる。

1, 第1格

提示の1格——[1] 破格, [2] 同格

提示の1格——これは一般にドイツ文法学で認められた用語ではないが、桜井和市氏が言う、1格で提示された語句を2～4格で受ける「破格」（桜井419）を含む表現を概念化するのに必要であり、しかも「破格」と熟語化したのでは1格で受ける場合（後述のように「同格」と呼ぶ）への注目が後退することを考慮して、この用語を導入する。

「破格」とは桜井氏によれば、「文の強調する成分をまず1格として文頭におき、これを文中に別の格で受け止める」（同上、強調杉田）表現であるが、ここでは焦点が、文頭の1格語句ではなく、それを受け止める代名詞におかれていた。だが、冒頭の第1格名詞が提示的な性格をもつという特質が、まず問われるべきであろう。その上で、同1格が、直後の代名

詞を介し、4つの格として用いられると概念化した方が、実際に見られる多様な表現を、より包括的にとらえうる。

さて、「提示の1格」は、日本語における「は」の用法からヒントを得た名称である。日本語では、格助詞「は」は——長らく主語を示すと見なされたが——むしろ広く話題を提供する働きを有すると考えられる（詳細は略）。ここで桜井氏が「破格」と呼ぶ2～4格代名詞によって受けられる冒頭の1格名詞（句）が、まさに同様の働きを有する。

そのような提示の1格を、それにつづく代名詞（一般には人称代名詞、指示代名詞）の格によって分類し、以下、本小節「1, 第1格」では、4格～1格(*1)の4項に分けて論ずる。なお提示の1格に続く代名詞が1格の場合を、「[1格名詞と]同格」(*2)、2～4格の場合を、桜井にしたがって「破格」と呼ぶ。(*3)

(*1) 1格の作例は破格の場合よりはるかに多いが、韻文として感じられる味わいが落ちるのを考慮して——だからこそ桜井氏は、第4～3格の「破格」の例だけをあげたのであろう——、本小節ではこの順序で記述する。

(*2) 「同格」とは一般には、「文法で、一つの文の中において、語あるいは文節が他の語あるいは文節と、文の構成上の機能が同一の関係にあること」の意である（大辞泉「同格」，s. 成田他 129）。だが本小節では、提示の1格を受ける第2～4格「破格」に対して、提示の1格と同じ格である1格で受ける場合を、便宜的に「同格」と呼ぶ。

(*3) 古代ギリシャ語・ラテン語などでは、1格＝主格（時に呼格を含む）に対して「斜格」という言葉を用いることが多いが、ひとまず桜井に従って「破格」と呼んでおく。ただし破格は単に斜格をではなく、提示の1格と対になった斜格を意味すると見なしうる。すなわち「破格」は、提示の1格との関係において見られた第2～4格の意である。

[1] 破格

①破格としての4格

まず桜井が言う「破格」の例をあげる。そう多くの作例があるわけではないが、4格の例は時々目にする。最初は4格＝人称代名詞の例をあげてみる。（以下、提示の1格には下線を引き、破格・同格は下線を引いた上で太字にした。対応する日本語のそれも同様にした）。

(1) Uns're lieben vier Wände, du hast sie bereitet, (Dehmel, *Befreit*)

私たちの家、君はそれを用意してくれた、

ここで提示の1格として置かれた名詞句は複数形である。だから仮に sie がなかったとしても、du hast という語の並びから、意味は明瞭である。その限りここで sie は冗語とも言えるが、その場合は、規範文法からすれば、...Wände の後にカンマも（は）不要であり、また定動詞が倒置されるのが一般的であろう（ちなみに作例中の vier Wände 「4つの壁」とは住居の意である）。

(2) Frisch aufgeblühter Rosen Glanz,/ vergleich' ich ihn dem deinigen? (Daumer, *Wie*

bist du...)

あらたに咲き出でたバラの輝き / 私はそれをあなたの輝きと比較しましょうか？

一般に提示の1格の後にカンマが置かれるが、それに続く文は定動詞正置がふつうである。ここで *ich vergleich'* とせずに *vergleich' ich* という倒置の形がとられたのは、第2行が疑問文だからであるが、そうでなくとも韻律の都合が優先されることも多い。この作例は、1行目末尾のカンマがなければ通常の文に近いが、やはり *ihn* が置かれている事実からは、提示の1格 / 破格の例と判断される。

なおこの詩の詩脚は *Jambus* であり、どの詩行も強勢終止をもつが、2行目 *deinigen* の詩脚は、—| ～—である。本来の発音では *deinigen* 「あなたのもの [輝き]」は—～—であるが、最終音節は軽強音として読まれる（この詩に何度もでる *wonnevol* 「歓喜に満ちた」の場合も同様である）。

なお(1)(2)では、4格代名詞は縮約されることなく用いられている。だがそれは縮約形で現れる場合がある。

(3) ein Hemd von Seiden so weiß und fein, / meine Mutter bleicht's mit Mondenschein. (Herder, *Herr Oluf*)

とても白く細やかな絹の肌着 / 母はそれを月の光で漂白します。

語順について言えば、先の(2)では、提示の1格後の破格を伴う文は定動詞倒置であったが、それは上記のように、文法的にはその文が疑問文だからであった。だがそうでなくとも、定動詞倒置となる例が見られることがある。

(4) Die Blümlein, mit Tränen rein/ hab' ich sie all' begossen (Spee, In *heiliger Nacht*)
花、清い涙を / 私はそのすべてに注いだ。

この作例では、提示の1格がカンマで区切られた後に、これに続く文の一要素となる副詞句 *mit Tränen rein* (*rein* は後置形容詞と読むのが自然であろう) が文頭に置かれたために、規範文法にしたがって、その後の主語・動詞が定動詞倒置の形をとったと考えられる。

指示代名詞の場合

以上では、提示の1格を受ける代名詞は人称代名詞だが、指示代名詞がおかれる場合もある。提示の1格で重要な語句をまず行頭に提示した以上、それを受ける語も、おのずとアクセントの置かれる強調された語であるべきであろう。その限り、人称代名詞のよりも指示代名詞の方が、表現の趣旨にかなっている。桜井が「破格」としてあげた例（3格および4格のわずか2例だが）で、指示代名詞が使われているのは、そのためであろう。

だが、指示代名詞が当該名詞の直後に置かれた場合には、それを含む文は外見的に関係節との区別がつきにくく（詩では関係節において定動詞が後置されるとは限らない〔→本第3章第2節「語順の転換」〕）、ために提示の1格としての性格が曖昧になる。この種の表現なら、数多く見出されるようである。

(5) Die Heide, die heiß' ich die Liebesnot: / Mein Schatz hat's Jagen so gern. (Müller,
Die liebe Farbe)

荒野, それを僕は愛の苦しみと呼ぶ: / あのは狩りが好き。

もっとも die 以下が関係節なら、これによって修飾された冒頭の 1 格名詞 die Heide を主語とする文が見いだされるはずであるが、(5) にはそれはない。引用した 2 行の間にコロンが置かれているが、2 行目の「's」は Jagen にかかる定冠詞 das の縮約形である。したがって冒頭の 1 格は、提示の 1 格であると判断される。

複雑な提示の 1 格・破格——分詞構文・関係文が入る場合

以上は文としての比較的単純であり、提示の 1 格も外見的に明らかだが、1 格名詞句が複雑な場合もある。

例えば、分詞による副文的な状況語句、つまり 分詞構文(*) が付隨し、関係節の場合と同様にその修飾・被修飾関係を通じて、提示の 1 格としての 1 格名詞句が、複雑な様相を呈する結果になる。次の作例では、後にザクセン 2 格においてふれる「行またがり」(→ 109p 以下) が見られる(それは 4 行に及ぶ)。以下それを明示する。

(6) Dies Augenzelt

この眼の天幕

von deinem Glanz

君の輝きで

allein erhellt,

だけ照らされた〔天幕〕,

o füll es ganz.

ああそれをいっぱいに満たしておくれ.

(Rückert, *Du bist die Ruh'*)

ただしここで 1 格名詞は中性であり、そのかぎり、提示の 1 格か否かの判断以前に 1 格か 4 格かの区別はつかず、また後続する文が命令文ゆえに間にカンマが置かれ、かつ定動詞が倒置されているため、平常文の場合と異なり、冒頭の名詞(句)とその後に続く文との関係が不明瞭である。

なお Augenzelt 「目の天幕」について言えば、人の目の上辺の線は、遊牧民が用いる大きな天幕 Zelt のように弧をなしているために、この種の造語がなされたのであろう。シラーの *An die Freude* には Sternzelt 「星の天幕」 という語が出るが、これは、伝統的な天文学に見られ、多かれ少なかれ中世人の宇宙観に反映した「天球」を意味するようである。

(*) 述語的付加語(桜井 337,345) と術語化する人もいるが、英文法で言う「分詞構文」(塩谷 251-2) の方が、まだしもわかりやすいように思われる。

複雑な提示の 1 格・破格——一般的文章内に置かれる場合

次の例は、提示の 1 格が一般的な文のただ中に置かれている例である。この場合は、「文の強調する成分をまず 1 格として文頭にお(く)」という、提示の 1 格の機能(桜井 419)が、若干後退する。

(7) Schaff', das Tagwerk meiner Hände,/ hohes Glück, daß ich's vollende! (Goethe, *Hoffnung*)

助けよ、わが手になる日々の仕事〔を〕、/ 高き幸運〔の女神〕よ、私がそれを完遂するのを！

この作例では、提示の1格が文頭を占めないのみか、呼びかけ (hohes Glück) が1格名詞・破格代名詞間に挿入され、代名詞が副文 (daß...) の中に置かれ、またそれが縮約の形で現れる等、文の構造が比較的複雑である。少々凝ったゲーテのこの作例は、非母語話者にはなかなか難しい。

この作例の冒頭に出る schaffen は難しい単語である。一般には「創造する」という意味で使われることが多いように思われるが(哲学を学んできた私は少々偏っているかもしれない)、日常的には「やり遂げる」といった意味と思われる。この詩では、幸運の女神に対して、「私」が日々の仕事を完成する vellenden のを成し遂げよ schaffen と書かれるが、訳のように「完遂するのを助けよ」くらいが分かりやすいと判断した。

なお(7)は、散文としてなら、Schaffe, hohes Glück, daß ich das Tagwerk meiner Hände vollende! と書かれるであろう。

なおこれまでの作例でもそうだったが、ここで提示の1格を一般的な4格名詞句と見る方が、意味理解上、宙ぶらりんな状況に置かれずにつむため、非母語話者には意味が取りやすい。それゆえ訳では、「…仕事〔を〕」と、4格を示唆する語を便宜的に補っておいた。

次の例は、提示の1格の前に wie で導かれる直喻表現が来るなどを別にすれば、(7)以上に際だつ特徴はないが、ドイツ詩文の語の並びにおける、提示の1格 / 破格のレトリックとしての機能について考えさせる、興味深い例である。

(8) Wie die Wellen sanfter Lüfte/ Mondenglanz und Blumendüfte,/ send' es der Gebieterin! (Rochlitz, *An die Laute*)

優しい風の波のように、/ 月の輝きと花の香り、/ これを女主人に送っておくれ！

これが散文ならば、ドイツ語として自然な形で、Wie die Wellen sanfter Lüfte,/ sende der Gebieterin/ Mondenglanz und Blumendüfte! と表現できるが、詩であり、かつ押韻の都合で Lüfte · -düfte と続けなければならなかつたために(*1)特異な語順となつたと判断される。だがその場合、原詩の第2, 3行目は Mondenglanz und Blumendüfte,/ send der Gebieterin! とすることも可能だが（第3行目に注意）、そうなると、いわゆるレーマ（提題〔主題〕）(*2)をテーマ（主題〔背景〕）より前に置くことになり（河崎74）、少々レーマが重すぎるくらいがある。とすると、提示の1格を置いて、それを次行で代名詞で受ける現在の形が、最も自然な表現かもしれない。

(*1) Luft (Lüfte) と Duft (Düfte) の押印は好まれる（杉田③ 165, 153）。

(*2) Rhema は、文の話題である Thema（主題）に対して、際立たされるべき事柄をさす。

ここでは一般的の訳に従い「提題」するが、それぞれをむしろ「背景」「主題」と訳したいという思いもある。

提示の1格・破格の連続

提示の1格が続けて用いられ、それを受けける破格（ここでは4格）がそれぞれに続く作例も見られる（詩文全体の構造自体はそう複雑ではない）。こうした作例は民謡に比較的多いと感じられる。これは、多かれ少なかれ、口語における「提示の1格」の用いられ方を、暗示しているように思われる。

(9) Deine großen Hunde, die fürcht' ich nicht/...//Deine hohen, weiten Sprünge, die kennen sie wohl. (Volkslied, *Es blies ein Jäger...*)

あなたの大きな犬, そんなのを私は恐れません!...//君のすばやい走り, それを犬らはよく知らないんだよ.

この種の破格は、詩行中・詩行冒頭の弱拍で使われやすいようである。指示代名詞には本来、人称代名詞のと異なりアクセントが置かれるが、詩ではそれが強調されない傾向がある。それでいて指示代名詞は、人称代名詞以上に指示性が強く、特にたった今語られた言葉を受ける場合によく使われる。印象にも残りやすい。だからおのずと破格として用いられるのであろう。なお(9)の民謡では、以上に先立って提示の1格と同格が出る。

②破格としての3格

次に破格としての3格の例をあげたいが、ドイツ詩のうちから、ふさわしい作例を見つけることができなかつた。そのためここでは、『ドイツ広文典』が紹介する同破格の作例（訳を含む）を借りることにする。

(1) Ein Mann wie du, was kann dem daran liegen?

お前のような男, そういう男にこれは何の関係があるというのか [?] (桜井 419)

これは模範的な例文である。小説中の登場人物の対話の1部であろうか。人称代名詞よりも指示代名詞を使うことでそこにアクセントが置かれ、おのずと提示の1格の特徴が際立たせられている。

ここでは、非人称構文 *es liegt ihm+不定数詞* [代名詞] +*daran* 「彼にとってそれは ... 重要である」(大 'liegen' I-6c) が、使われている。そして *was* は「なに」と訳されているが、これは正確には疑問詞ではなく不定代名詞の *etwas* の簡略形ではないであろうか(*)。

(et)*was* は一般には文中に置かれるが、(1)では、口調を重視して文頭に置かれたのであろう。したがって原文に即せば、(1)は、「お前のような男, そういう男にこれはいったい大事ですか?」といった意味になるはずである (*können* は推量を示す)。*viel* を使えば「とても大事か」と、*nichts* を使えば「大事ではないな」と聞いていくことになる。(et)*was* ならば、程度はともあれ「大事なのか」と漠然と尋ねるニュアンスであろう。

この言い回しをめぐる独和大の記述は少々簡略的である。言い回しの要素としてあげられた「不定数詞」は、不定代名詞を含む広義で使われていると判断される。実際独和大でも、不定数詞ではなく不定代名詞 (*etwas, nichts* 等) を用いた例があげられている(同前)。

(*) なお疑問詞 *was* と不定代名詞 *was* は、混同されやすい。例えば有名なクリスマス・キ

ヤロル「モミの木」Tannenbaum には、dein Kleid will mich was lehren! 「お前の服〔緑の葉〕は私に何かを教えようとする!」という歌詞があるが、ヴィーン少年合唱団は、この was を行頭に移して、was will dein Kleid mich lehren? 「お前の服は私に何を教えようとするのか?」と歌っていた。

提示の3格？

付隨的に、提示の1格の例ではないが、それに類似する表現として興味深い作例、いわば「提示の3格」の例をあげておきたい。女性・中性では第1, 4格が同一であるため、「提示的4格」について論ずるのは困難だが、「提示の3格」なら論じうる。

(2) Ach, nur dem halbgetrock'neten Auge,/ wie öde, wie tot die Welt ihm erscheint!
(Goethe, *Wonne der Wehmut*)

ああ、半分閉じられた目にだけ、/世界は何と荒涼とし、何と死んだように、[この目に] 写ることか！

ここで冒頭の3格は、後に同じ3格の人称代名詞 ihm が来るることを前提にして、おそらく意図的に選ばれている。これがもし Ach, nur das halbgetrock'nete Auge となつていれば、ach という感嘆詞がつき、また nur が先立つ点をのぞけば模範的な提示の1格であり、また後の ihm もまた模範的な破格であるが、そうせずに冒頭の名詞自体をすでに3格とした事情は何であろうか。

一面では、3格がもつ機能、つまり己と他者、行為者と他者・対象との一定の関係性を呼び起こす機能を通じて、詩句の印象をより強めることではなかつたろうか。たしかに、提示の1格は力強く語を際立たせるが、常に1格で提示されるために、格によって示される意味が希薄かつあいまいになる。それを避けるためには、(2)の場合は、後続する人称代名詞をまたずに、直截に3格を用いるのが的確だと判断されたのであろう。

また、当該語句の前に nur が置かれ、これが、当該語句が単なる1格語句ではなく、一定の文の一部となっているという事情にも関連があるのかもしれない。

提示の前置格？

次の作例は、一般的な提示の1格ではない。提示すべき重要な語を含む名詞句を詩節の冒頭におき、ここではそのうちに、前置詞句内の3格の形で、後に指示代名詞で受ける重要語を置いている（ただしこれを受ける代名詞は1格である）。

(3) Der Gruß der Liebe von dem Treuen,/ der.../der... (A.Schlegel, *Wiedersehen*)
誠実な者の愛の挨拶、/ その者は.../その者は...

これに先立つ詩節には——(3) は2詩節中の第2詩節である——der Gruß der Liebe 「愛の挨拶」という語がすでに登場する。(3) はしたがって、この句の特質をさらに示そうとした箇所なのだが、指示代名詞 der は、どちらも dem Treuen を受けるのであって、der Gruß を受けるのではない。

それは内容的に明らかと思われる。(3) では、長くなるために2つの der に引き続く文を

略したが、後者の省略部分では、「その者」*der* は、あなたに永遠に崇拜を捧げる、いつも船乗りのように北極星をひとり眺め、耳をそばだてている、と記されるからである。また他面では、一文に同性名詞が複数出る場合、指示代名詞は「最も近いもの」を指すのが一般的だからであろうか（大‘*der*’II 2 a）。

③破格としての2格

上に4格と3格の例をあげたが、2格の例は少ないと感じられる。そもそも2格は、規範的なドイツ語において使用頻度がかなり限られる、という事情が関係しているのである。思い返せば「破格」をとりあげた桜井和市氏も、3, 4格の作例を上げるのみである（桜井 419）。それはともあれ、1例をあげれば――

(1) Die Sterne, die begehrt man nicht, / man freut sich **ihrer Pracht**, ... (Goethe, *Trost in Tränen*)

星, それを人はを欲しがらない, / 人は**その壯麗さ**を楽しむものだ, ...

ここで1行目には、先だって「破格」としての *die* が出るが（詩では定動詞の位置だけでは *die* が指示代名詞か関係代名詞は特定できないが、内容的にこれは関係代名詞とは読みにくい）、第2行目 *ihrer* が破格としての2格である。*sich freuen* は文語（大）として2格をとることがあるが、これはその作例である。

ここで *ihrer* は所有代名詞だが、人称代名詞のとしての用法もありうる。私自身は破格としての人称代名詞の2格の例に出会ったことはないが、*Meine selige Mutter, ich gedenke oft ihrer* のような表現は常に可能である。指示代名詞を用いれば、..., *ich gedenke oft deren* となるであろう。もちろん、強調のために、..., *ihrer [deren]* oft gedenke ich と続けてよい。

[2] 同格

以上、「破格」の例（提示の1格を受ける代名詞が2～4格の例）をあげたが、これに比べると、提示の1格の後に「同格」の1格代名詞が来る例は、高い頻度で見られる。

この表現は、話題となる語（むしろレーマと言うべきか）を行頭で提示でき、詩的効果も大きい上に、韻律上の問題も部分的に解消できるという利点がある。

次は、提示の1格を——指示代名詞ではなく——人称代名詞で受けている。

(1) die schwebende Welle, dort eilt **sie** dahin (Rellstab, *Frühlingssehnsucht*)

[小川の] 漂う波, それは 谷へと急ぐ

提示の1格は主文の行頭に置かれる例が多いようである（だからこそ桜井和市氏は提示の1格の位置を「文頭」と書いたのである〔桜井 419〕）。次例のように、その前に副文がつくこともあるが、主文中の語句である点は変わりがない。例えば――

(2) Und wüßten's sie mein Wehe, / die goldenen Sternelein, / sie kämen aus ihrer Höhe, und sprächen Trost mir ein. (Heine, *Und wüßtens...*)

僕の悲しみを〔仮に〕知つていれば, / 金の星々, それは空からやって来て, / 僕に慰めを吹き入れてくれるだろう.

第1行におかれた sie は、(2) に先立つ詩節に出る die Nachtigallen ともとれるが、文脈からすれば、第3行目の sie と同じく、第2行目の die goldenen Sternelein を受ける。もし die goldenen Sternlein が詩行の冒頭におかれ、これに(2)の第1, 3行が続ければ、ふつうの「提示の1格」の例となるが、代名詞が先立つ点で(*), (2) は少々変則的である。

なお第1行目を副文と見るのは、wenn が省略された形だからである。また(2)の冒頭に置かれた und については、杉田② 219p を参照のこと。

次は、提示の1格が、従属接続詞 wie の支配を受けて実質的に副文のうちに置かれているのに、wie が後置されているため、副文としての構造が少々不明確になっている例である。

(3) Sonnenstrahlen / durch die Tannen, / wie sie fallen, / zieh'n von dannen / alle Schmerzen, (Bruchmann, *Im Haine*)

太陽の光線 / それがモミの木を通して / 落ちるよう, / 全て苦しみが / 流れ去る,

ここでは、Sonnenstrahlen が提示の1格である。せめてその直後に wie が置かれれば文の構造はまだしも分明となつたはずだが、fallen にかかる副詞句 durch die Tannen が直後に置かれ、しかも wie はさらにその後に置かれているため、意味がとりにくものとなっている。そして1～3行目を受けて、4行目以下に主文が続く。

これを通常の散文で記せば、Wie Sonnenstrahlen durch die Tannen fallen, [sol] ziehen alle Schmerzen von dannen である。あるいは(3)に見られる副文-主文の順序にこだわらなければ、Alle Schmerzen ziehen von dannen, wie Sonnenstrahlen durch die Tannen fallen, という明瞭な文に転換できる。

なお von dannen は「そこから去つて」の意だというが(ア)、一般には「そこから」の意を失つて、fort, weg と同様に「去つて」の意である(大)。ただしここでは、ちょうど代名詞の先行(→本第3章第2節「語順の転換」)の場合と同様に、先に副詞 da を先行させて、その場所をその後に示すという手法である可能性もある。実際(3)の後に Herz という語が登場するが、von dannen の da- はこれを意味しているとも解しうる。

(*) 代名詞の先行については、本第3章第2節「語順の転換」で論ずる。

提示の1格 / 破格・同格の連続

以上は比較的単純であるが、異なる提示の1格を並列し、かつその間に破格代名詞が置かれた、より印象深い作例をあげる。ここには提示の1格が3つ見られる(→「提示の1格・破格の連続」85p(9))。このうち第1, 2のその後に続く2つの代名詞 sie が破格(ここでは4格)の例だが、第3のそれは同格である。なお第1, 3の例において提示の1格の語句

は同一であり、連語よりなる（連語はふつう冠詞を欠く）。

(4) Eisen und Stahl, man schmiedet **sie** um, / Unsere Liebe, wer wandelt **sie** um? /
Eisen und Stahl, **sie** können zergehen, ... (Wenzig, *Von ewiger Liebe*)

鋼と鉄, それを人は焼き直す, / 私たちの愛, それを誰が変えられる? / 鋼と鉄, それは溶けるかもしだい, ...

ここでは3行の引用にとどめたが、実際はこの3行の前にさらに提示の1格（続く代名詞は同格）が2つ置かれている。「ヒバリ, いまそれも押し黙っている! ... / 私たちの愛, それは決して切り離されない！」、と。

ただし同種の言い回しを多用した場合、表現としての効果は漸減する。さすがに5つも提示の1格をならべたのでは、印象も弱まる。だが、ひょっとすると詩人Wenzigは、詩作のレトリックとして、あえてそうしているのかもしれない。恋に関する素朴な思い、一途さの印象を強めるためにである。なおこの詩に付したプラームスによる付曲も、そうした印象を強めている。

要求話法の作例

提示の1格を「同格」で受けた代名詞が、要求話法の主語となる場合がある。その場合には、提示の1格による名詞の強調が、さらに際立つと感じられる。ここで提示の1格は「要求」の結節点であり、この詩行にとってのレーマ（提題）であるから。

(5) Dies Denkmal, ... / ... / **das** richte mich und dich! (K.Schmidt, *Lied der Trennung*)

この記念品, ... / ... / それが僕と君をさばいてくれるように!

(6) Eine Lilie, eine Rose, / nach dem Schlafe werd' **sie** dir zum Lohn (anonym, *Wie-genlied*)

ユリ, バラ, / 眠った後はそれがお前の贈り物となりますように

ここでは要求話法の観点がボケないように略したが、(5)の省略部分には、Denkmal「記念品」について、unter Küssem/ auf meinen Mund gebissen「口づけしながら / 僕の口元にかまれ〔て残され〕た」という長い後置形容詞句（分詞構文）が置かれている。これに注目すれば(5)は、分詞構文ないし関係節がくる、「同格」の複雑な作例（後述）となりうる。

後者の(6)はいわゆる「シューベルトの子守歌」である。ここでは定動詞が倒置されている。先に、破格に関して、提示の1格の後に副詞句がくることで、その後に同倒置が見られる作例をあげたが（→82p(4)）、ここでも事情は同じである。nach dem Schlafeが先立つことで、動詞が第2位置に立っている。あるいは、一般に3人称に対する要求話法は定動詞正置の例が多いにもかかわらず、強弱格 Trochäusをとる詩脚にとって、sie werd'よりも werd' sieの方がよりふさわしいと判断されたのかもしれない。ここでは sie が提示の1格の後に置かれた「同格」であり、これは「冗語」として弱音の位置に置いた方が無難と思われるからである。この詩には民謡的な印象があるが、こう見ると少なくとも詩人による作と感じられる。

提示の1格としての関係節

提示の1格が、wasによる関係代名詞節だけで示される場合もある。

(7) Ihr glücklichen Augen, / was je ihr geseh'n [habt] / es sei was es wolle, / es

war doch so schön! (Goethe, *Lynkeus der Türmer*)

お前たち幸運な眼よ、お前たちがそれぞれ見たもの、それが何であろうと、それは何しろとも美しかった!

was..., das... 構文 もっともこの表現は、先行詞なしの was で導かれる「was..., das...」構文として知られているものと類似する。だがこの種の提示の1格+代名詞の構文は、「Was... das...」構文よりも語の配列が自由である。

例えは(7)は、単純な「was..., das...」構文では、...was je jhr gesehen [habt], / [das] war doch so schön, sei es(*1) was es wolle! となるはずである。加えて同格の1格代名詞は省略されずに、(あくまでその意味で) 強調されるべきである。(7)が提示の1格を——dasではなく——esで受けたのは、(7)が単なる Was..., das... 構文ではないからではないからであろう。それは次の例においてより明瞭であろう。

(8) Was aber schön ist, selig scheint es in ihm(*2) selbst. (Mörike, *Auf eine Lampe*)

だが美しいもの、それはそれ自体のうちにあって至福に満ちたように輝く.(*3)

「Was..., das...」構文ならば、とりうるのは Was... ist, [das] scheint selig in ihm selbst という形だけ(*4)であろうが、(8)はそれとは異なる。was 関係節は独立し、その後は selig が強調されて第1位置を占め、その後は通常のドイツ語どおり動詞が第2位置を占めている。

(*1) es sei... は sei es... とも言う(s. ア‘kosten’). 譲歩節ならその方が一般的でさえある。また譲歩節後の語順は定動詞倒置にしないことが多い(桜井 454)。

(*2) in ihm は私が調べ得た限り、すべて「それ自体で」「それ自体のうちに」といったニュアンスで訳されている。だがそういう意味を表すためには、むしろ in sich が使われるのではないか。文法的に見れば、むしろここで ihm は、主語である Was... schön ist をではなく、その前行に見られ ein Kunstgebild' der echten Art 「真の匠による芸術作品」を指すのではないだろうか(Artの「匠み」という訳は生野等編による)。ただし私はそうだとまで断言はできない。文法的にはともあれ、in ihm は文脈的には確かに in sich の意味と取るのが自然に思われるからである。なお、『ドイツ文学案内』の手塚も同じくとるが——「それ自身の幸のうちに」と訳している(手塚 181)——、だがそもそもここで「美しいもの」は自然美・人工美のいずれについての言及なのか。人工美についてのものなら(実際人工美が語られているのではないか)、「真の匠による芸術作品」のうちに輝くという言い方は、なりたつのではないか。

(*3) scheinen を「見える」「輝く」いずれの意と解するかは難題だが(宮下 113)、私は後者の意味でとった。

(*4) 謳に限られるが、48個の例について見た限り、例外はなかった(野本 123-7)。

wer..., der... 構文 Was..., das... 構文で作例があれば、構造的に同構文と類似した wer..., der... 構文でも同様の例は見られる。

(9) Und wer dir seine Brust erschließt, / o tu' ihm [=dem], was du kannst, zulieb'!

(Freiligrath, *O lieb...*)

お前にその胸の内を打ち明ける者, / その人のために, お前ができる限りのことをしなさい!

ただし(9)は、上の Was..., das... 構文の例と比べて少々微妙な印象がある。やはり、Wer..., der... 構文でも、カンマの後に直ちに、(ふつうは) 指示代名詞がくる。それが3格ならば、Wer..., dem zulieb'...(*) となるのが普通である。だが詩であるだけに、紋切り型に傾くとした定形的・単純な類型をつかってすませる詩人は少ない。

念のため注記すれば、zulieb(e) は3格支配の後置詞で「...のために」の意である。

(*)Novalis では、Wer..., der... 構文が、[Der]..., wer... の形で使われている。すなわち、[Der] Nun weint an keinem Grabe, / ..., wer liebend glaubt 「どの墓にあろうと今なげくことはない, / 愛しながら〔愛を〕信ずる者は」 (*Nachthymne*)。本稿第3章第2節「語順の転倒」(次号)を参照のこと。

後置形容詞・分詞構文・関係節等

提示の1格と「破格」(4格)の項において、詩行の冒頭で提示の1格が置かれた直後に、統語法上の他の要素——例えば英文法で言う分詞構文、あるいは長い後置形容詞句——が置かれ、提示の1格とそれを受けた代名詞が離れてしまう例、しかも行を何行にもまたいで離れる例に、ふれた(→ 83p(6), Rückert, *Du bist die Ruh'*)。

ここでは、提示の1格と「同格」について、同様の作例をあげてみる。

(10) Der Erde und der Luft Dämonen, / von deines Auges Huld verjagt, / sie können bei uns wohnen. (Scott (Storck), *Ave Maria*)

地と天の悪霊, / 汝〔マリア〕の眼の慈しみによって追い払われて, / それは私たちのもとに住まうことはできないのです。

この後取り上げるが、提示の1格のうちの der Erde und der Luft と、第2行の deines Auges はザクセン2格である。そして、第2行の分詞構文 von deines Auges Huld verjagt は、関係節 die...Huld verjagt wurden の簡略形とも解釈できるが、とするとこの分詞構文には、関係節の場合と同様に(藤田133-4)、多かれ少なかれ、例えば weil 等で示される関係性が含意されている。つまり、次のような意味となるはずである。

地と天の悪霊, / 〔それは〕汝の眼の慈しみによって追い払われたから, / 私たちのもとに住まうことはできないのです。

もっと明確に、関係節でこうした含意を示したのが、次の作例である。

(11) Der Mond, der ist ihr [<Lotusblume] Buhle, / er weckt sie... (Heine, *Die Lotosblume*)

月, それはハスの花の恋人, / 月はハスの花を目覚めさせる...

最初に言えば、ここでは、指示代名詞 *der* と人称代名詞 *er* とが、提示の 1 格をうける「同格」代名詞なのではない。そうではなくて、*der* はむしろ関係代名詞と判断しうる。規範文法に従えば、関係節において定動詞は後置されるが、詩では、関係節で定動詞が後置しない例はめずらしくない。

だがこれは不可能性を否定しただけのことであり、あえてこの *der* を積極的に関係代名詞と解する事情はあるのか。

月 *der Mond* は本来、少なくとも日常語のレベルでは（天文学用語でなければ）、この世の唯一無二の存在であり、関係節が月を限定的に記述する必要はないはずだが、一方関係代名詞の限定的用法では、(10) に見るように、関係節が先行詞と一定の関係性を含意していることがやはり少くない。そしてそれは、あるとすればやはり理由 *weil* の関係性であろうか。つまりここでは、「月はハスの恋人なので……」と読むことは十分可能である。そしてそれによって、引き続く *er* の文法的位置、すなわち「同格」（破格に対する意での）としての意味も明瞭になる。

なおここで *Buhle* を「恋人」と訳したが、これはもともと「愛人」という意味である。だがこれを「恋人」の意味で使う例は、時々見られる（*Goethe, Es war ein König* ; *Uhland, Die Nonne*）。詩における「意味の転移」の格好の例である（杉田③ 150, 152-3p; 本稿第 4 章第 3 節「意味の転移」）。なお、詩にしばしば登場する *Geliebte(r)* も、一般には「愛人」の意と解される。ただし、古語の印象があるようだが、確かに「恋人」「好きな人」の含意もあるようである。

難解な作例

これまで出会った中で、提示の 1 格をめぐる一番難しいのは次の作例である。提示の 1 格以下の構文がではなく、長い提示の 1 格（句）自体の意味内容についての難しさである。これは、シーベルト没後に出版人によって編集・出版されたいわゆる『白鳥の歌』の第 3 曲としてよく知られた詩である。

(12) Säuselnde Lüfte wehend so mild,/ blumiger Düfte atmend erfüllt!/ wie haucht ihr mich wonnig begrüßend an! (Rellstab, *Frühlingsehnsucht*)
 さらさら流れる空気がとてもまろやかに吹き、花々の芳香が息をしつつ満ちて！なんとお前たちは僕に、至福の挨拶をしつつ息吹を吹きかけるか！

ここでの訳は、一般に流通している訳とほぼ同じである。だがむしろこれは次のように訳すべきである。訳に付けた破線部と丸数字は、訳の直後に置く原文にも加えてある。

② とてもまろやかに吹き、③【香りを】発散しつつ【発散によって】満たされた花の芳香をもつ〔の〕① 流れる空気！お前たちは僕に、至福の挨拶をしつつ、息を吹きかける！〔息を吹きかけて至福の挨拶をくれる！〕

① Säuselnde Lüfte ② wehend so mild,/ ③ blumiger Düfte atmend erfüllt!/ wie haucht ihr mich wonnig begrüßend an!

筆者は、この提示の1格（1～2行目）の文法的構造ならびに意味について長らく悩んだが、理解を難しくしているのは、1行目末尾にカンマが置かれ(*1)、2行目冒頭に2格名詞が置かれている点である。ちまたで見るどの訳も2格の *blumiger Düfte* を1格のように解しているが（少なくとも訳からはそう読める）(*2)、そうではなくこの2格は文法上は1行目の *säuselnde Lüfte* にかかり（他に可能性はない）、現在分詞・過去分詞よりなる修飾語句（*wehen so mild* ならびに *atmend erfüllt*）は、後置形容詞句として、それぞれその前の名詞句（*säuselnde Lüfte* ならびに *blumiger Düfte*）に、かかるのであろう。つまり冒頭の、提示の1格の中心をなす *Lüfte* は――

- ①前置された形容詞 *säuselnd* と、
- ②後置形容詞句 *wehen so mild* とが、かかるのみならず（ここまで誤解はない）、
- ③それ自体、前置された形容詞 *blumig* と後置形容詞句 *atmend erfüllt* をもつ2格名詞 *Düfte* によって、修飾されているである。

ここでの2格の意味は、いわゆる「所有の2格」（桜井421）である。つまりここで *Lüfte* は、*blumige Düfte* 花の芳香をもつ。そしてその意味で――①②を略して記す――...*Lüfte blumiger Düfte*（2格）という基本的・骨格的なつながりがはっきりしている。そしてそれは...*Lüfte von blumigen Düften*（前置詞格）と言いかえることができる。

少々提示の1格部分の説明が長くなつたが、こうして長い名詞句が提示された後に、それを1格（同格）の *ihr* が受けている。（12）では提示の1格は、単に重要な文言を提示することだけが目的ではない。この長い1格部分を、その後に *ihr* で受けることで初めて文の構造が分明なものになるが、これもまた提示の1格に期待されている。

したがって正確には、提示の1格の末尾に感嘆符をおく必要は必ずしもない。ただしこれが置かれたことで、別の読みもまた可能である。提示の1格部分を、あたかも独立した文であるかのように、つまり「絶対的1格」（桜井419）であるかのように、読むことができる。その場合は、こう訳すこと出来る。

①流れる空気は ②とてもまろやかに吹き、また③発散しつつ満たされた花の芳香をもつてゐる！お前たちは僕に、至福の挨拶をしつつ、息を吹きかける！

なお、(1)を含む *Rellstab, Frühlingssehnsucht* は、現在分詞が何度も使われた例として興味深い。(1)の3行目にも、*wonnig begrüßend* という現在分詞句が見られる（この詩では全30行中に現在分詞が16回も出る）。ここでは紹介できないが、*Rellstab* は、現在分詞の名詞化（名詞化現在分詞）もしくはそれに近い形を、不気味なほどに、18回も連ねた詩 *In der Ferne* も書いている。

(*1) 比較的目にしやすい訳を、5つほどあげてみる（3～5番目はインターネット・サイト）。

「そよ風がやわらかく吹きわたり、あたりには花の香が立ち込めている！」（西野茂雄訳）

「そよぎやさし そよ風/立ちこむる 花の香」（同前）

「ざわめく風が/穏やかに吹き/花の香りが/放たれ いっぱいになる！」（Taubenpost）

「...花々の匂いがにじみ出る」...exuding the fragrance of flowers (OISF)

「...花の香が息を満たし！」...floral scents filling the breath!」(SST)

(*2) 2格名詞句の前にカンマが置かれている点について注記する。一般に2格名詞とその被修飾語（句）との間にカンマを置くことはまずないが、この文ほどに複雑になるとカンマが必要になる（カンマを置かなければ、完全に意味を取り違えるであろう；もっともカンマがあつても難解なのだが）。カンマの使い方については、ドイツ語では、日本語の場合と異なり明瞭な正書法が確立しているが、それでも複雑な文意を正確に理解するためには、正書法以外の工夫が不可避なのである（2格の作例ではないが、後置形容詞句と被修飾語の間にカンマを置いた例は、例えば *einen Freund, geprüft im Tode* [Schiller, *An die Freude*] などに見られる）。

（補）日本語での「破格」の例

以上の提示の1格とそれを受けける「破格」あるいは「同格」の表現は、ドイツ語に限らず見られる。日本語でも、日本語の助詞の用い方がドイツ語の格と対応すると仮定すれば、そうである。

ここでは、比較的格式の高い文語の例をとりあげると、たいていは提示の1格（ドイツ文法に合わせて仮に1格という名称を用いる）の後には、指示代名詞「これ」および助詞「を」とともに、ドイツ文法風に言えば4格の語が続くのが、ふつうである。

例えば日本国憲法第9条。「……武力の行使は……永久にこれを放棄する」、「陸海空軍その他の交戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」。日本国憲法には、これと同じ言い方が78か所ある。いずれも「…は、これを」の形をとるが、この「は」は、主語を示すのではなく、話題を提示する「は」である。

2, 第2格

以下、2格の用法を論ずる。それは、3格と比べると、いや4格と比べてさえ、そう多様ではない。ここではドイツ詩を読む際に踏まえるべき「部分の2格」および「状況（様態）の2格」を論ずるにとどめる。

だがそれとは別に、2格が被修飾語に先置される2格、いわゆる「ザクセン2格」を、その後に詳しく取り上げる。ザクセン2格が日常的な場面で用いられるることは多くはないが、詩では頻出する。これなしにドイツ詩は成り立たないと言ってよいほどである。

〈1〉部分の2格

2格の表現法のうち、一般には意味が取りにくい表現法として、「部分の2格」と呼ばれる用法がある（桜井422）。

2格が名詞の場合には、まずその2格名詞が置かれ、その後に不定代名詞・数詞（不定数

詞)・不定冠詞類などが来るのが一般的のようである。日常的に使われる表現ではなく古語の印象が強いが、人の口の端にのぼる諺などに残る。例えば Aller guten Dinge sind drei 「よいことが 3 つある」(成田他 130, ア ‘Ding’ に諺としてのる)。部分の 2 格は、詩にも見られる(以下、部分の 2 格は太字に下線を、被修飾語には下線をほどこす)。

(1) Neben der Mauer im Schatten, / da steh'n **der Studenten** drei (Kugler, *Ständchen*)
 陰になった壁の側には / 学生が 3 人立っている

これは、drei Studenten と言えば事足りるようであるが、まず例えば Studenten と述べて一定の集団を想定し、そのうち 3 人がいる、という含みがあり、単に drei Studenten というのとはニュアンスが異なるようである。例えば Studenten と言うことで、ある営み・行動にかかわる集団がクローズアップされるように思われる。

まず Studenten と言うことで、言及される何か(ここでは *Ständchen* を歌う行動)がその集団のものという含みが、感じられる。

確かに、「学生が 3 人いる」と「3 人 [の] 学生がいる」とは、日本語ではほとんど違ひがないとは言えるが、ドイツ語の場合は drei Studenten と der Studenten drei との違いは、日本語の場合よりも大きい。後者は古風な印象が強く、少なくとも今日の日常の言葉とは、コロケーション的につながらない。

もちろん一面では、詩ではこの表現は、韻律の都合からこそ選ばれたのであろうが、18~19 世紀の詩人にとっては、今日われわれが感じるほどには古風な印象は少なかった可能性がある。頻度はそう高いとは言えないが、この種の表現が詩で見られるという点は、知っておく価値がある。さらにいくつかの作例をあげてみる。

最初の作例は、数詞ではなく不定数詞が用いられている。

(2) Zwar Wintertage haben / wohl auch **der Freuden** viel (Overbeck, *Sehnsucht...*)
 冬の日にも / たしかに 楽しいことが いっぱいあるんだ

先に見た(1)もそうだったが、(2)でも、部分の 2 格と被修飾語が続いているおかげで、意味はとりやすい。だが間に他の語が入ると、少し不分明になる。

(3) Der Worte sind genug gewechselt, / laßt mich auch endlich Taten seh'n! (Goethe, *Vorspiel auf dem Theater*)

十分な 言葉が [言葉は十分に] 交わされた, / 最後に私に行動をも見せてくれ!

特に部分の 2 格を用いざとも、これと同じことを Worte sind genug gewechselt と表現できる。この場合 genug は gewechselt にかかるが、der Worte genug では Worte にかかる。

2 格代名詞の例 以上は 2 格名詞の例だが、2 格の代名詞(例えば人称代名詞)が用いられる場合もある。

(4) Vor lauter hochad'ligen Zeugen/ kopuliert man **ihrer** zwei; (Mörike, *Bei einer Trauung*)

ただただ偉そうな連中の前で/ そのうちの 2 人が結び付けられる；

ここで sie(詩中では 2 格 ihrer) は、「人々」くらいの意だが、正確には——特に記載はないが——適齢期にある人々を意味するのだろう。そして zwei... という表現よりは、ihrer zwei の方が、先行する形容詞に修飾された名詞のように、「2 人」に意識の焦点が結びやすいかもしない。

今ふれた ihrer はなかなかよい語である。zwei の後には、ドイツ語では来るべき「男女」に当たる単語がない。おそらく Jüngling, Leute などが用いられるであろうが、そのように対象を特定するより、一般的な sie (ihrer) だとより深みが増すように感じられる。この詩は、あまり心の通じていない 2 人が、なげやりな結婚式でむりやり結びつけられる様を歌うが、sie (ihrer) が使われると、そうした結婚式の雰囲気が強調されるようである。

民謡に見られる部分の 2 格

部分の 2 格は、前記のように一般の詩にも見られるが、むしろ民謡に多いと感じられる。民謡を大事にしたリート作曲家も多いが、詩人もまた、19 世紀初頭、ナショナリズムの高揚のさなか、みずからの出自としてのドイツ（まだ政治的統一はなかったが）の歴史、ひいては民衆・民族の歌 Lieder (ヘルダー) を重視したのである。作曲家では、ことにブラームスやマーラーにその傾向がある。彼らが付曲した例を含めて、民謡からいくつか引用してみる。——

(5) Darum hab' ich der Neider viel. (Volkslied, *Mir ist...*)

だから僕には多くの 姫む人がいるんだ。

そして有名な、シュヴァーベンの民謡「ムシ・デン（じゃあ僕は行かなければならぬ）」

(6) Sind au draus', sind au draus', der Mädele viel,/ lieber Schatz, i bleib dir treu,

(Volkslied, *Muss i denn*)

世の中にも、世の中にも、女の子はたくさんいるけど、/ 大好きな君、僕は君に誠実でいるよ、

ここで私は Mädele は Mädel の複数形と解したが、独和大辞典にはその記載がない（大 ‘Mädel’）。縮小辞 -le を付けた語 Mädle (意味は Mädchen) はシュヴァーベン語として知られているが、あくまで単数中性である（河崎 171）。すると Mädele は、詩脚に合わせるために、弱音 e が挿入された形と理解して良いように思われる。1 行目の au draus' は Nhd. では auch draußen で、「外にも」「世の中にも」といった意味である。

2 格(代)名詞の後にどのような語がくるかに関して、ドイツ語として面白いのは、むしろ次の例かもしれない。ここでは部分の 2 格が安定した表現法として用いられている。

(7) Da ritten ihrer [=der Schneider] neunzig,/ ja neunmalneunundneunzig/ auf ei-
nem Gokkelf [=Gockel] hahn. (Volkslied, *Die Regensburger...*)

そこ [=教会の塔の上] で 仕立て屋の 90 人が,/ いや 9 かける 99 人が / 雄鶏 [=塔上の風見鶏]
の上に（馬乗りに）またがった。

この作例でも、先立つ箇所に出る複数名詞 (die Schneider) が、人称代名詞複数 2 格 ihrer

で受けられているが、いく人の Schneider と名詞をくり返すのに比べてはるかに、代名詞の発達したドイツ語らしい印象を強める。ihrer... と、部分の2格を用いた方が言葉の経済にもかなうし、また表現が引きしまる。さらに、ここでは、2格名詞部分は代名詞で表わされているにすぎないが、それでもそれが先に置かれた方が、特に(7)のような思わず言いよどむ不明確な数量に関する場合には、事態が明瞭になる。

〈2〉 状態の2格—および2格支配について

2格には、時間や場所等の状況を表す作例がある。これまでのように名詞にかかることなく、単独で、des Morgens 「朝に」、seines Wegs gehen 「[自らの] 道に行く」(*) などのように使われる。

一方、2格は同じ状況語として、他にも行動の状態・様態を表す副詞として、日常的にも用いられる。例えば、gesenkten Hauptes 「頭をうなだれて」、meines Wissens 「私の知るかぎりでは」。ここでは何らかの意味で人間の身体・心理状況を表すために用いられているが、それを離れた言い方もなされるようである。例えば、zweiter Klasse fahren 「2等車で行く」等 (以上は中島 77)。

この手の表現は、「方法の状況語」とよばれることがあるが (桜井 427)、これは必ずしも分かりやすいことばではない。ここでは、「状態の2格」と呼ぶことにする。

(*) 行為がなされる場所は4格でも示せるが、2格をつかった場合には、「新たにその道に就くこと」が、4格にすると「従来の道を歩みつづけること」が意味されるという (相良① 191)。あくまで原則であって例外もありえようが、これは参考になる。

身体・心理状態を表す2格

状態の2格の作例はそう多くはないが、まず身体・心理状態を示す例を、いくつかあげてみる。

(1)Der König stieren Blicks da saß,/... (Heine, *Balsazar*)

王はぼんやりした目でそこに座っていた,/...

(2)O gerne im Grünen...[ich] habe.../ und glühenden Herzens mich selig genannt,
(Reil, *Das Lied im Grünen*)

僕は...緑の中で好んで.../そして燃える心で自分を好運な者と呼んだものだ,

時代的に少し古い作例もあげてみる。次はルター派で歌われた集讃歌からのものである。

(3)Heut'soll alle Welt fürwahr/ voller Freude kommen dar (Lutheraner, *Joseph*...)

今日は誠に世のすべての人が / 喜びに満ちあふれつつ やって来てほしいものだ

人間の活動の状態

前記のように、人間の身体・心理的な状態とは関係の薄い例もある。

(4) Alcidens Siegesschreiten/ sollt' ihrer Macht entrauschen! (Anakreon (Bruchmann), *An die Leier*)

ヘーラクレースの勝利の歩みが/リラの力で響き始めるように!

ここで Alcidens は、Alcides——ギリシャ神話に登場するヘーラクレース——の 2 格（ザクセン 2 格）である。Siegesschreiten の基礎語 Schreiten は、名詞化動詞であり、したがって単数である。entrauschen の ent- は「開始」を含意すると解した（後に分離の 3 格を論ずるさいには ent- の「分離」の意味を強調するはずである）。そして問題の ihrer は、女性名詞を受ける所有代名詞（形容詞）の 2 格だが、(2) の直前に出るこの詩の主題である die Leier 「リラ」をさす（*）。なおここでは「状態の 2 格」と言うより、「方法の 2 格」と呼ぶ方が分明となるかもしれない。

(5) Nein, der Strom wird immer breiter,/ Himmel bleibt mir immer heiter,/ fröhlichen Ruderschlags fahr' ich hinab,... (Tieck, *Wie soll ich die Freude*)

いえ、流れはますます広くゆったりとし、/私には空はますます明るくなります、私は上機嫌なストローク〔波打ち〕で〔上機嫌にこいで〕川を下って行きます、...

この作例に見る fröhlichen Ruderschlags は、こった言い回しに見えるが、これ自体は特に物めずらしい表現ではない。船での移動が一般的であった時代の一般的表現のようである。

ちなみに 2 小節目の mir は「利害の 3 格」（後述）で、実質的に 1 行目にもかかると見るべきだと思われる。景色の移ろいはいろいろに表現できようが、「私」には川のゆったりした流れと空の明るさが、意識されるようである。

（*）Leier とは、当時の楽器としては、シューベルト『冬の旅』の最終曲 *Leiermann* に出るようハーディガーディをさすようだが、ここではギリシャが話題に上がっているため、たて琴 = リラと解した。

形容詞の 2 格支配

状態の 2 格の作例として私が出せるのは以上であるが、ここで付隨的に 2 格支配について一言記したい。

2 格支配前置詞 (statt, wegen, um...willen) は、比較的わかりやすいが、2 格支配形容詞にとまどうことが多い。今日なら前置詞格を支配する形容詞が、詩では 2 格を支配することがある。これはドイツ詩一般のというより、主に 18~9 世紀の詩を読む際の問題である。

(6) Ach, ich bin des Treibens müde, (Goethe, *Wandrers Nachtlied*)

ああ、私は活動に飽いた、

(7) Wär' ich Affe sogleich/ voll neckender Streich'. (Goethe, *Liebhaber in...*)

僕ががすぐにでも猿になれたなら/戯れるいたずら好きの〔猿に〕。

前者の(6)は、現代のドイツ語では前置詞格をとつて *vom Treiben müde* とするのがふつうである。今日でも2格が使われることはあるが、文語・雅語の印象が強いようである。*Treiben* は *treiben* の名詞化であるが、*Betreiben* (<*betreiben*) 「営み」の縮小形と考えるとよいかもしない。詩では、限られた音節内で、このように語を縮小させて用いることが少なくない (→杉田② 132p 以下)。

後者(7)の *voll* は古くは、名詞に規定詞——冠詞・所有代名詞(所有冠詞)・形容詞——がついて2格であることが明示される場合に、*voll + 2格* の形をとつたというが(桜井426)、今日ではやはり前置詞格を支配する *voll von...* がふつうである (*voll von neckenden Streichen*)。

動詞の2格支配

今日、目的語として前置詞格や4格を支配する動詞が、詩では2格をとることがある。

(8) *Hier sitzt'ich, forme Menschen/...ein Geschlecht, das mir [darin] gleich sei,...dein nicht zu achten*, (Goethe, *Prometheus*)

私はここにいて、人間をつくる/...お前 [=ゼウス] を気に留めない点において私に似るべき一族を、*achten* は、目的語として2格、4格のいずれをも支配する。だがどちらをとるかによって、意味が変わる。4格なら「尊敬する」の意であり、2格なら「留意する」の意だという(桜井424)。

総じて目的語としての2格は、4格と比べると、「動詞の行為の受け方が軟弱である」というが(同前)、これが、通時的に見たとき、少なくない動詞において2格支配から4格支配へ、あるいは2格支配から、意味が明瞭になる前置詞格支配へと転じた事情であろうか。

なお、*das* 以下の関係節に見られる接続法1式(*sei*)は、おそらく要求話法である(三浦140)。

denken 「考える」, *gedenken* 「思い出す」, *vergessen* 「忘れる」

次によく知られる作例を3つ引く。最初の2つは人称代名詞2格の例である。最後は2格名詞の例をとりあげる(人称代名詞の2格目的語については、杉田② 109~110pを参照のこと)。

(9) *Ich denke dein, wenn mir der Sonne Schimmer/ vom Meere strahlt.* (Goethe, *Nähe des Geliebten*)

太陽のかすかな光が海からさしこむ時、私はあなたを 想う。

(10) *Es ruft eine Stimme: "Gedenke mein!"* (Lorenz, *Lorelei*)

叫び声が聞こえる:「私を 思い出して!」

(11) *Nun aremes Herz, vergiß der Qual!* (Uhland, *Frühlingsglaube*)

あわれなお前、苦しみを 忘れよ!

上例のうち、(9)の *denken* は、今日なら *jn* ~あるいは *an jm* ~が普通である。(10)の

gedenken は、今日でも 2 格支配と解されているようであるが、ただしそれは文語ないし雅語としての用法である。

最後にあげた(11)の 2 格支配動詞 vergessen は、今日では 4 格とともに用いることが多いが、18～19 世紀においてもすでに 4 格をとる作例が知られている。2 例あげてみる。

(12)...vieleicht auf ewig vergißt Luisa mich! (K.Schmidt, *Lied der Trennung*)

…きっとルイーザは僕を永遠に忘れてしまうだろう！

(13)ich will's mein Lebtag nicht vergessen. (Mörike, *Selbstverständnis*)

私は私の人生を忘れたりするものか。

なお後者(13)における縮約語 's は定冠詞 das である（縮約については杉田① 149 以下、杉田② 271-2）。

〈3〉 ザクセン 2 格

a, ザクセン 2 格

〈1〉 〈2〉 のように、意味上・用法上、異なる類型と見なしうるのではないが、詩の文法として特に論じなければならない統語法上の類型がある。

ドイツ詩を読んでいると、2 格名詞（句）が被修飾語を、前から（後ろからではなく）修飾する例に、しばしば出会う。日常語ではこの種の用法——ザクセン 2 格 (*1)——は極めて限られているが（使われる場合でも固有名詞やそれに類する語の場合がふつうである）(*2)、詩ではそのようには限定されない。また詩ではザクセン 2 格が登場する頻度は、きわめて高い。ザクセン 2 格なしには詩はありえない、と言っても過言ではない。

(*1) ザクセン 2 格とは、英文法で、所有を表すために後置される of + 名詞に対し、前置される 's をさす用語だったが、それがドイツ語の、前置される 2 格をさすために用いられたのだという。ドイツ語では sächsischer Genitiv もしくは angelsächsischer Genitiv と呼ばれる（浜崎他 62-3; angelsächsisch は「アングロサクソン」にあたるドイツ語）。日本のドイツ語学では「ザクセン 2 格」と言う。

(*2) 例えば Goethes Werke, Vaters Geburtstag

ザクセン 2 格と詩——いくつかの実例

ザクセン 2 格は詩では非常に重要である。これを用いない詩はないと言ってよいほどである。時には短い一編の詩に、これが何度も登場することがある。例えばシーベルトの友人で詩人だったブルッフマンの詩「湖畔にて」。この 4 行詩の最終詩節 4 行には、ザクセン 2 格が 3 回も登場する（以下ザクセン 2 格は下線つきの太字で示す）。

(1) In des Sees Wogen Spiele/ fallen... in der Seele Wogen Spiele/ fallen aus des Himmels Pforten,/ Sterne, ach, gar viele, viele. (Bruchmann, *Am See*)

湖による波の戯れへと/落ちてくる...魂による波の戯れへと,/ 天国の門から落ちてくる,/ 星が, あ

あ, とても多くの,多くの〔星が〕 .(*1)

ザクセン2格が頻出する例は少なくない(次の作例では、第1行の被修飾語 *Lächeln* に *hold* という形容詞がつくが、未説明のため、当面、略して読まれたい。この点は後述する)。

(2) Der Frühlingssonne holdes Lächeln/ ist meiner Hoffnung Morgenrot;/ Mir flüsst in des Westens Fächeln/ der Freude leises Aufgebot. (A.Schlegel, *Wiedersehen*)

春の太陽の穏やかな微笑は,/ 私の希望の朝焼け;/ 西風のそよぎのうちで,/ 喜びの静かな予告が.
私にささやく./

ここではたった4行の詩行に、ザクセン2格が4つも出る。(1)も含めて、そのほとんどが、固有名詞ともそれに類する語(上述)とは無関係である。詩でのザクセン2格の広範囲の使用が、十分にかいまみられる。

ザクセン2格では、被修飾語には冠詞類をおかないのがふつうである。一方、一般の2格では、2格名詞の前に冠詞類がつくと仮定すると、違いは音韻上わずか1もしくは2音節である。だがこの違いは、詩人にとって小さくない。

ザクセン2格を用いれば、音韻上わずか1・2音節であろうと、詩人にとって自由度が増すと同時に、冗漫さを欠いたきびきびとした印象、言いかえれば、非散文的な印象が強まる(*2)。また、文脈の影響も多いとはいえ、修飾語を被修飾語の前におくことによって、後につづく被修飾語への、また時には先行する2格語=修飾語自体へ焦点があてられる(その効果は前述の「部分の2格」と似たところがある)ことなどが、ザクセン2格が広範に使われる理由だろうか。

(*1) この詩は Bruchmann の「白い鳥」(宮沢賢治作)である(杉田② 125-6p)。

(*2) Arnim および Brentano による共編の民謡集、『少年の魔法の角笛』の原題は、*Des Knaben Wunderhorn* である。一般の2格を用いて *Das Wunderhorn des Knaben* と表現することも可能だが、わずかな音節数の違いとはいえ、後者では散文的で冗長な感じが否めない。

(参)ことわざとザクセン2格

簡潔できびきびした表現となるだけに、ザクセン2格はことわざによく用いられる。2つだけ例をあげる(いずれも下宮 98)。

(3) Der Katzen Spiel ist der Mäuser Tod.

猫の遊びはネズミの死。

(4) Des einen Tod, des andern Brot. (*)

ある人の死,他の人の利益 [パン].

(*) 繫辞(コプラ)としての *sein* には、時に散文的な印象が伴う。この2例を見てもそれが理解しやすい。いずれの例も前後の句の対比が強調されるが、*sein* をもつ前者(3)は、理づめ

で事柄を説明するかのような、術学的な印象がぬぐえない。

無冠詞のザクセン2格

さて、前述のように、日常語の場合でもザクセン2格に類する表現法はある。例えば Goethes Werke(*1), Vaters Geburtstag のような表現がそれである。すなわち、「固有名詞もしくはこれに準ずる名詞の2格」（桜井452）は、被修飾語の前におく。後者の場合、固有名詞との類推から、冠詞をつけないことがある。

神 Gott が固有名詞に準じて、定冠詞なしで用いられることが多い。

(5) Wohl weinen Gottes Engel(*2),/ wenn Liebende sich trennen. (Kosegarten, *Luisens Antwort*)

愛する人たちが分かれるなら、/きっと神の天使が泣くでしょう。

Gott は形容詞その他の修飾語がつかないかぎり、普通は無冠詞で用いられる。これは Gott が固有名詞化しているからとも解せるが、一神教的なヨーロッパ文化の背景からと言ってもよい。ただし Gott の複数形 Götter には、呼びかけを別にすれば、定冠詞を付けるのがふつうである。Götter は、ギリシャ・ローマ神話の、あるいは想像上の神々を意味する。

(6) vom Meere dampfet dein besonnter Strand/ den Nebel, so der Götter Wange feuchtet. (Mörike, *Gesang Weylas*) (*3)

お前の日のあたる岸は海から霧をたちのぼらせ、/ 神々の頬をぬらす。

(*1) ただし Goethes Werke という表現において、特に Werke を「あの著作」というニュアンスで記す場合は、die Werke Goethes と言う（成田他126）。被修飾語に冠詞がつけられない点は、ザクセン2格の制約になる（後述）。

(*2) この詩は、モーツアルトの付曲で知られた「別れの歌」*Lied der Trennung* のパロディであるが、前者では神について一般の2格が用いられて、Die Engel Gottes weinen...「神の天使は涙を流します...」と書かれている。

(*3) 題中の Weyla は、メリケが創作した理想郷の女神の名前で、Weylas は通常の2格。

一般名詞の場合さえ 次の例では、わずか4行の詩行にザクセン2格が4つも出る。しかもそのうち3つは無冠詞である。1つは Gottes だが、あたかもこれにつられたかのように、うち2つは無冠詞で用いられている（最後の Gedanke(n) に定冠詞がつけられたのは、韻律上の都合を別とすれば、この語が抽象名詞だからであろう）。

(7) Windes Rauschen, Gottes Flügel,/ [schwingt sich] tief in kühler Waldesnacht,/ wie der Held in Rosses Bügel,/ schwingt sich des Gedankens Macht. (F.Schlegel, *Im Walde*)

風のざわめきは、神の翼は、/涼しい夜の森で深く〔揺れる〕、/ 馬の鎧（あぶみ）に足をかけた英雄のように、/ 思考の力は揺れる。

そもそも詩では、ザクセン2格が無冠詞で用いられる例が確かに見られる。多かれ少なかれ詩における自由な語法の帰結であろう。その点は実はおそらく、定冠詞のついた、4行目の *Gedanke(n)* の例にも当てはまるだろう。これに冠詞がつくのは、それが抽象名詞だからと先に記したが、規範文法からはそうだったとしても、詩人は、文法それ自体から自由に詩文をつづるのがふつうである。

無冠詞ザクセン2格と冠詞の問題 次の例では、「祖国」 *Vaterland* が、人名でも親族等の呼称でもないのに無冠詞で用いられている。ここでは祖国が、人にとっての固有の属性の一つと見なされているかもしれない。少なくとも語り手と受け手（子と両親）との間で、「祖国」の場所は明瞭である。

(8) Vaterlands Felsental / wird mir zu eng, zu schmal, (Leitner, *Drang in die Ferne*)
祖国の岩谷は/僕には狭すぎます、やせすぎています、

一般に話し手・聞き手の双方にとって明らかな物事については、定冠詞を付すのが普通である。ある辞典は記す、「言及されているものがその状況下では一つしか考えられない場合；話し手・聞き手の双方が了解している物事に付けて」（ア ‘der’）、と。だが逆に言えば、そのように明らかな物事については、冠詞を省いても了解可能なわけである。ヘルダーによる冠詞の省略に関する議論（*）は、おそらくこの点とも関連がある。

だが冠詞の省略もまた、詩人としての自由な語法の結果でありうる。冠詞には、「他の語に対する関係を示す」という基本的な役割がある（相良① 41）。ここで「関係」とは主に性・数・格のことだが、その明示が不要ならば、明示が必要だったとしても書法の工夫で（話し手・聞き手の状況理解への考慮も含む）それが実質的に示されるならば、特に冠詞の利用は必須とは言えないわけである。

韻律の都合が重視されれば（自由詩の場合でさえいわば内的リズムが詩に求められる）、さらにその傾向は強まる（ただし文脈によって逆もありうる）。（8）は「民謡詩節」よりなり、全体としてほぼ 一 一 | 一 | 一 の韻律が支配する。*Vaterlands Felsental* もそうである。これに基づく詩文としては、行頭に（一般には）弱音である定冠詞を置くことはできない。だからザクセン2格を示す定冠詞 *des* は省略されたのだが、前記のようにこの省略は、ザクセン2格のもともとの構文法（冠詞を用いない Goethes Faust, Vaters Geburtstag 等）から言っても、さほど不自然ではない。

（*）「名詞はかう [=冠詞を省く] すれば一層詩的な実体性と個性とをもつ様になります」（ヘルダー 80）。

読者に知られた絵画の例と無冠詞 詩中の状況は少々特異だが、同様に理解できそうな他の作例をあげてみる。次の詩では、メリケはある聖母子像について語っている。

(9) In grüner Landschaft Sommerflor, (*)/.../ schau', wie das Knäblein sündelos/
frei spielt auf der Jungfrau Schoß! (Mörike, *Auf ein altes Bild*)

真夏の緑の風景の下で,/.../ 罪のない幼子イエスが聖母〔マリア〕の膝の上で/ 戯れるのを見なさい!

これは、とある美術館に飾られた聖母子像についてのものだが、その絵を知る読者との間で、「緑の風景」*grüne Landschaft* がいかなるものかの知識は共有されている。その限り、*grüne Landschaft* は、書き手・聞き手（読み手）によって、固有名詞のように明らかであるため、冠詞が略されているのであろう。

そもそもこの詩は上拍 *Auftakt* をもつ *Trochäus*（強弱格）のため、行頭の *in* の後に *der* は置けない。*in* の後に来るのが中性・男性名詞なら *in* は *im* とできるが、女性名詞について *ir* という縮約形はない。だから、仮に *grüne Landschaft* が固有名詞のような自明さをもたなかつたとしても、詩としてのそうした制約から、ここでは冠詞が省かれた可能性が高いように思われる。

一方、4行目に見られるザクセン2格 *der Jungfrau* は聖母マリアを意味しており、その限りこの語はすでに固有名詞に近い役割を果たす。だがこれは女性名詞でありかつ修飾語句を欠いており、無冠詞では格がはつきりしないために、ザクセン2格の定形どおり *der Jungfrau...* としたものであろう。前述のようにこの詩の詩脚は *Trochäus* であり、*der* の挿入はその点でも要請されたのではあるが（この点は *spielt* が *spieler* とされている事実からも確認できる）。

(*) ここには意味の転移がある（→本稿第4章「意味論」）。In *grüner Landschaft Sommerflor* を佐々木庸一氏は「緑の景色の夏の盛りの中で」ではなく、「真夏の〔咲き誇った〕緑の景色のうちで」という意味と解する（佐々木218）。私はこれに賛成である。（9）は、幼児イエスが登場するある絵について語られており、絵中の *grüne Landschaft* は、この絵を見る者にとって明らかである。

ザクセン2格・被修飾語が2語の場合

さて、一般のザクセン2格はまだしも比較的分かりやすいが、非母語話者、特に初学者がとまどいるのは、次のような作例である――

(10) Der Erde und der Luft Dämonen,... (Scott (Storz), *Ave Maria*)

大地と空の悪霊が,...

これはザクセン2格が2つならぶ例だが、これとは逆に、被修飾名詞が2語の場合がある（ここでは被修飾語をイタリックとした上で下線をほどこす）。ただし次の作例では、2格名詞に冠詞類がつかないおかげで、かえって分かりやすいかもしれない。

(11) Ich sing' ihn [jenen Traum] in der Weite,/ auf Eises Läng' und Breite,... (Goethe, *Musensohn*)

僕は〔あの夢を〕を遠くで,/ 氷の野原〔氷原〕で歌い,...

ザクセン2格に形容詞(句)が付く場合

問題は、ザクセン2格に形容詞(句)がつく場合である。それだけでも非母語話者には難しさが増す(形容詞(句)を明示するために、それのみに下線を引く)。(*)

(12) des muntern Fischleins Bade (Schubart, *Die Forelle*)

元気な魚の泳ぎ

(13) des heiligen Stromes Well'n (Heine, *Auf Flügeln...*)

聖なる流れの波

男性および中性の定冠詞2格 *des*, 同不定冠詞 *eines* は形態が明瞭であり、他の語との差異が際立つ。だから2格であることは直感的に分かりやすい。だが、女性形の *der*, *einer* となると、3格との混同がおきことがある。定冠詞の例と不定冠詞の例をあげてみるが、後者(ここでザクセン2格に付されたのは序数詞)は、3格をとる前置詞 *in* によって導かれるだけに、文の構造が不分明になりやすい。

(14) Nun schimmert der blinkenden Sterne Gold. (Rellstab, *Abschied*)

いま輝く星の金色がほのかに光る。

(15) die, sich verschleiernd, überfließt/ in einer zweiten Schale Grund; (Meyer, *Der römische Brunnen*)

ローマの噴水は、ヴェールをまといつつあふれ出る / [噴水の] どこか 2番目の皿の底に;

(*) なお、本論文「ドイツ詩の文法」のドイツ語名は、*Des deutschen Gedichtes Grammatik* である。すでにお分かりの通り、*des deutschen Gedichtes* は、形容詞つきのザクセン2格である。また筆者は2024年10月から、前号の第2章第2節「語彙論」(杉田③327p)で予告したとおり、ドイツリートを詳しく解説する動画「ドイツリートの花束」を公開しているが(→本号157pを参照のこと)、このドイツ語名も同上のザクセン2格を用い、*Der deutschen Lieder Strauß*とした。

ザクセン2格に形容詞(句)以外の修飾語がつく場合

形容詞以外の修飾語という点では、厳密には上の序数詞の例も入るが、次のような被修飾語句の場合には難しい。

(16) Des Antonius von Padua Fischpredigt (Arnim usw., *Des Antonius...*)

パドゥアのアントニウスによる魚への説教

序数詞ならば、形容詞と同様に変化語尾がつくために類推が働く。だがここでは、人名に前置詞句 *von Padua* がつくために、構造が分かりにくくなっている。2格名詞は定冠詞つきの固有名詞であるために類推は働くが、けっして分かりやすい例ではない。

またここでは人名に *des* がつくために基本構造は分かりやすいが、冠詞がないとまず理解しがたい。本来は *Antonius* の2格は *Antonius'* である。ただし発音上は両者は同じである故(アポストロフは省略されることも多い)ため、(17)のように、見た目にも違いが認識されないことがある)、格を示すために人名に定冠詞を付ける例はたまに見られる(→杉田③249)。

なおここで被修飾語は *Fischpredigt* とあるが、これは、規定語 *Fisch* が基礎語 *Predigt* (動詞的意味に由来) の対象を意味するとすれば、「魚への説教」の意のようである。

被修飾語に形容詞(句)が付く場合

ザクセン 2 格の被修飾語に形容詞が付く場合もある (ここでは被修飾名詞およびそれにつく形容詞に下線を引いた)。

(17) Was frommt des Maien holde Zier[de] (Chésy, *Romanze*)

五月の優美な飾りは何の役に立つのか

(18) des Verräters feindlich Lauschen...mit der Töne süßen Klagen (Rellstab, *Ständchen*)

告げ口屋が意地悪く聞き耳をたてても... 甘い嘆きの声で [声の甘い嘆きで]

前者(17)に見られる出だしの *was* は、*frommen* の 3 格目的語ではあるが、ふつう *was* の 3 格 *wem* は用いられず、1・4 格の *was* で代用される(大 ‘*was*’)。Ich sehne mich, und weiß nicht nach was: (Mörike, *Im Frühling*)「私は憧れるが、何に対してだか正確には分からない」

後者(18)は少し難しい。ここではザクセン 2 格が 2 つ出る。前半は名詞化動詞に形容詞がついているが、名詞化動詞は中性であるため、その 1,4 格につく形容詞には変化語尾を付けないことが少なくない(杉田① 143)。なお(17)の後半は、先に見た *in grüner Landschaft Sommerflor* (→ 104p) と同様に「意味の転移」の作例である。文字通りには「声 [= ナイチンゲールの] の甘い嘆きで」の意であるが、ここで詩人が意味しているのは、「甘い嘆きの声で」ということだと思われる。これについては本稿第 4 章「意味論」で論ずる。

形容詞に副詞が加わると、むずかしさが増す。

(19) Es dringt der Sonne gold'ner Kuß...in golden grüner Zweige Dämmerung...

(Mörike, *Im Frühling*)

太陽の金の口づけが... 黄金(こがね)緑の枝の陰で...

ここにはザクセン 2 格が 2 つ出るが、前者は特に問題はない。問題は後者である。そこではザクセン 2 格に付された形容詞 *grün* に副詞 *golden* がつくため、一見しただけでは構造が見えにくい(ただし *golden grün* は、*goldengrün* という複合語と解す余地はある。実際、同じメリケの *Auf eine Lampe* には *goldengrün* という単語が出る)。

ザクセン 2 格・被修飾語のいすれにも形容詞が付く場合

ザクセン 2 格およびその被修飾語それぞれに形容詞が付くことも多い(それぞれの形容詞に下線を引いた)。

(20) Fern dämmert wogender Wälder/ beschatteter Saum. (Rilke, *Mittelböhmische Landschaft*)

遠くで明け染める、波うつ森の / 陰のある [木陰の] 縁(ふち)が。

(21) grüßender Sonne spiegelndes Gold,/ hoffende Wonne bringest du hold./ Wie labt

mich dein selig begrüßendes Bild! (Rellstab, *Frühlingssehnsucht*)

挨拶する[顔を出した]太陽の輝く金色よ,/ 希望をもつ私にお前は心地よい喜びを与えてくれる。/

挨拶で人を幸福にするお前の姿は、僕を元気にしてくれる！

この作例のいずれも、ザクセン2格自体に冠詞類を欠く。そのため難しさが増す。ザクセン2格が無冠詞となるのは、固有名詞に準ずる語の場合が多いが(*1)、ここではそのいずれの要件も欠いている。

なお後者は難しい詩である。grüßendは「挨拶する・している」という意味である。「顔を出した」とした方が実感がわくが、3行目に begrüßendという言葉が出るために、「挨拶」という意味を残しておいた。原詩2行目の hoffendは「希望をもつ私」と訳した。なぜと驚かれるかもしれないが、この語は「転移修飾語」と判断されるからである。つまり形式的には Wonne にかかるが、実質的に「私」(3行目に mich が出る)にかかっている(*2)。そして上にふれた begrüßendという語がその後に用いられるが、この部分は直訳すれば「幸福に挨拶するお前の姿」だが、「幸福に」という副詞は少々あいまいで、むしろ挨拶によって人を幸福にするという意味だと解すべきと思われる。いずれも、能動・未完了を意味する現在分詞の例である。なおレルシュターブは現在分詞を好んだ詩人である(前述)。

(*1) 固有名詞に準ずる語だからといって、ザクセン2格が常に無冠詞となるわけではない。

特に詩では、韻律の都合によって決まることが多い。o du, des Vaters Zelle, / ach, zu schnell/ erloschner Freudenschein! 「ああお前, お父さんの小部屋よ,/ああ, とてもはやく / 消えてしまった / 愛おしい光！(Rückert, *Wenn dein Mütterlein*)

(*2) 転移修飾語は詩の解釈にとって重要である。本稿第4章「意味論」を参照のこと。

被修飾語に形容詞が2つつく例

以上の作例では、ザクセン2格・被修飾語について形容詞は1個だが、被修飾語に形容詞が2つづいた例もあげてみる。ザクセン2格を含む句が長くなるため、さらに分かりにくい。

(22) Des Fensterleins(*) trübes, verschimmerndes Licht (Rellstab, *Abschied*)

窓の [に写る] くもった、ぼーっと輝く光

(23) Du Ring an meinem Finger, /da hast du mich erst belehrt, / hast meinem Blick

erschlossen/des Lebens unendlichen, tiefen Wert. (Chamisso, *Du Ring...*)

私の指を飾る指輪よ,/ [そこで]お前は私に初めて教え/ 私のまなざしに開いてくれた/ 人生が
もつ無限の深い価値を。

(*) どの版も Des Fensterlein... となっているが、Des Fensterleins... の誤植であろう。

前置詞を伴う場合

2格名詞を含む名詞句が全体として前置詞句の場合には、前置詞が支配する格の冠詞(例えれば dem)と、前置詞の直後にくる2格冠詞(例えれば des)等のズレに目が向きやすい。

例えば in (3・4格支配) の後に、それが支配する定冠詞がくるとすれば、その定冠詞は、男性・中性ならかならず **dem** (3格), **den, das** (4格) のいずれかであるが、2格の **des** が続くと異様な感じを否めない。in des Mondes Licht (Rellstab, *Ständchen*) のように、形容詞がつかない単純な形ならまだしも理解しやすいが、形容詞がつくと難しく感ずる。例えば（前置詞と2格冠詞を太字・下線とした）――

(24) **in des** sinkenden Tages Goldgewölken (Matthisson, *Adelaide*)

沈み行く日の金の雲のうちに

とはいえズレが明瞭であるだけに、かえって分かりやすいと言えるかもしれない。

次例も同様である。durch は4格支配であるため、次に **der** が来るのは奇妙に見えるが、詩ではザクセン2格が多いと知れば、識別は比較的容易になるであろう。

(25) **durch der** Menschen stille Brust (Collin, *Nacht und Träume*)

人々の秘めた胸によつて

一方、例えば auf は3, 4格支配であるが、次例に見るように、その後にザクセン2格が続いたとしても、それが女性名詞であれば、3格との区別がつかないことがある。

(26) **auf der** Freude sanftschimmernden Wellen (Stolberg, *Auf dem Wasser...*)

喜びのほのかに光る波の上で

ザクセン2格に限らないとは言えるが(典型的なのは、シラー「喜びに寄せて」の *Diesen Kuß der gnzen Welt!* これは、「この口づけを全世界に！」なのか「全世界〔すべての人々〕の口づけを！」なのか?)、特にザクセン2格ではその後の表現が一般的な場合より若干複雑になるため、女性定冠詞 **der** が2格なのか3格なのかは、時に不分明になる(*。もちろん詩の場合には、ザクセン2格の可能性を常に考え、引き続く語の格等を意識するなら、じょじょに間違わずに2, 3格を区別できるようになるものであろう。

(*) コロケーション的に見て、前置詞 **auf** に、3格の **Freude** が来るのは奇妙とも言えるが、転移を図るのは詩人の特性である。詩では、**auf** と3格の **Freude** の結びつきは決してありえないことではない。

(参)ザクセン2格に類する修飾語句の前置

ザクセン2格そのものではないが、意味上それに類似する **von...** という修飾語句が、ザクセン2格と同様に、被修飾語の前につく例がある。一般に「前置詞格の付加語はすべて名詞の後におかれる」(桜井452) が、そうではない例が詩で見られることがあるのである。

これは格(ザクセン2格)の問題ではないが、便宜的にここに置く(→次号第3章第2節「語順の転換」)(ここでは前置詞格に実線を引き、被修飾語句はイタリックにした)。

(27) Und mir bringt sein leises Flüstern/ von dem Freunde tausend Grüße (Willemer, *Was bedeutet...*)

そして私に彼の静かなささやきは/ 喜びにあふれた その挨拶を、私に届けてくれる

(28) Ihm [=dem Ewigen], aller Wesen Quelle, werde/ von allen Wesen Lob gebracht

...! (Uz, *Gott der Weltenschöpfer*)

永遠なる者に,すべての被造物の源泉〔である永遠なる者〕に,/あらゆる被造物による称賛がもたらされますように...!

前者の詩脚は *Trochäus* であり、後者のそれは上拍つき *Trochäus* である。いずれの場合でも、ザクセン 2 格では詩脚に合わない。そのために、*von* 前置詞格がザクセン 2 格に代わって用いられたものと思われる。

たが、ある種の例に関しては、一般的な文法的規則があることが知られている。桜井和市氏によれば、性質の 2 格の代わりに「規定詞のない名詞は *von* または *aus* であらわされることが多い」(桜井 421) のだという。

(29) *Der Spiegel dieser treuen, braunen Augen/ ist wie von innern Gold ein Widerschein; (Mörike, *Peregrina I*)*

その誠実な茶色の目の鏡は,/内なる金の反射〔内なる金を反射するか〕のようです;

この例では、明確な規定詞(形容詞 *inner*)があるのに、2 格的表現(性質の 2 格)が *von* によってなされている。だが作例をいろいろ見ると、形容詞は、冠詞・所有代名詞(所有冠詞)と比べて、規定詞としての性格は弱いようである。桜井自身が以上の説明の際に、*aus echtem Gold* 「純金の」という語句をあげているほどである(同前)。あるいは形容詞一般というより、*aus echtem Gold* という熟語の問題かもしれない。*echt* はここでは、それを欠く *aus Gold* がおそらくもつ「純然たる金でできた」という意味を明示する機能をもつのかかもしれない。

最後に民謡の例を見るが、これは、完全に規定詞を欠く点で、桜井が記した特徴にあたはまる。

(30) *Was zog er aus seiner Tasche fein?/ Mein Herz, von Gold ein Ringelein!*

(Volkslied, *Feinsliebchen...*)

彼はポケットから、どんなすばらしいもの取りだしたかしら?/ あらあなた, [本物の] 金の指輪じゃない!

なお 1 行目の *fein* は、後置形容詞として直前の *Tasche* にではなく、おそらく行頭の *was* にかかっており、両者で *was Faines* 「どんなすばらしい物を」という意味であろう。2 行目は論理的位置が不明瞭だが、*Mein Herz* という呼びかけからすると、女性がその「彼」に言った、あるいは空想中で語ったことだと解される。(*)

(*) あるいはひょっとすると *mein Herz* は、感嘆詞的に用いられているのであろうか? もし そうなら、2 行目は女性の独り言かもしれない。だがその可能性はきわめて薄いだろう。

「行またがり」の場合

以上のように、ザクセン 2 格・被修飾語の構造において複雑さを増すと、確かに分かりにくくなるが、理解が特別に困難になるわけではない。だが、ザクセン 2 格が、被修飾語と異なる行に置かれる場合には(「行またがり」 *Enjambement, Zeilensprung*)、注意が必要

要である。

比較的単純な例と複雑な例をあげる。いずれも行またがりを実感してもらうために、可能なかぎり詩行ごとに改行する（訳は可能なかぎり詩行の右におく。ザクセン2格には下線をほどこし、被修飾語には下線を引いて太字とする）。

(31).../ und [wenn] macht auch des Alltags... .../ たとえ 〔平凡な〕日々の
Gedränge dich bang! 雜踏がお前を不安にするとしても!
(Fläschchen, *Hab' Sonne im Herzen*)

1行目の des Alltags は時間を示す副詞ではない。Alltag はもともと「平日」の意だが、比喩的に「日常」、「日々の単調（平凡）な明け暮れ」を意味するという（大）。この語がザクセン2格となって、次の行の Gedränge にかかり、主語として機能している。

だがこの場合、まだしも構造はそう難しくない。次の例では少し複雑さが増す。行またがりの上に、被修飾語が2語あることがその大きな要因である。

(32)...weil sie der Heimatlosen ... なぜなら雲は故郷喪失者の
Schwestern und Engel sind 姉妹であり天使だからである
(Hesse, *Weiße Wolken*)

なお sie は題に見るよう雲を指すが、詩中では die Weißen, Losen 「白い者、解き放たれた者〔白い喪失者〕」とも言われており、それが、ザクセン2格中の「Heimatlosen」に通じている。

1行の行またがり

例を段階を踏んでいくと煩雑になりすぎるため、少々先走るが、次の例はザクセン2格に所有代名詞（順次所有冠詞）と形容詞がつくばかりか、被修飾語が2行目および3行目に、形容詞とともに置かれている（被修飾語は2,3行目に置かれるが、3行目は2行目と同形である）。また、2行目の被修飾語 Gefühl は中性1格であるために、形容詞の変化語尾が略されている。

(33).../ deiner ewigen Wärme .../ 汝の永遠のぬくもりの
heilig[es] Gefühl, 聖なる感情,
unendliche Schöne! 無限の美は!
(Goethe, *Ganymed*)

2行にわたる行またがり

だが、單に行またがりが起こっているだけならまだしも、ザクセン2格と被修飾語とが、より離れた位置に置かれている場合がある。そうなる要因はいくつかあります。次の例は、ザクセン2格の被修飾語（Gewald）にかかる形容詞句は長く、2行にわたる。

(33)にも、2行にわたる行またがりが見られるが、直接目に入るのは1～2行目の行またがりであり、3行目は2行目の同形の延長とすれば、次の例ほど不明瞭ではない。

(34) Und ich fühle dieser Schmerzen, 私は感じています, この苦しみの [が有する],
 still im Herzen/ 知らず知らずのうちに心の内で [にあって]
 heimlich bildende Gewalt 密かに形成する力を
 (Goethe, *An Mignon*)

この詩を難しくしているのは、以上の行またがりに加え、ザクセン2格 *der Schmerzen* の後にカンマがつけられている点である。これは、ザクセン2格を、続く被修飾語にかかる形容詞句から際立たせるという目的でつけられたものと思われるが、一般にザクセン2格の後にカンマはつけないため、読みにくさを増す要因にもなっている(*1)。

これを一般的な文章にパラフレーズするとすれば、*Und ich fühle die Gewald dieser Schmerzen, die still [sich] im Herzen heimlich bildet* (分詞を用いれば *Und ich fühle die Gewald dieser Schmerzen, still [sich] im Herzen heimlich bildend* か) となるであろう。なお、16～18世紀頃——それまでこうした表現が一般的だったにもかかわらず——「人文主義者」たちにより、ラテン語の影響の下に、(34)に見るような表現法が用いられるようになったのだという (ポーレンツ 106)。もちろん、その作者ゲーテ自身は、自らの詩的直感にもとづいて(34)の詩句を選んだのだろうが。

なお3行目の *bilden* の意味はむずかしい。三浦鞠郎氏が言うように「働いている」(三浦 81) という意味に解すべきなのか (その場合「形成する」→「働く」と意味を転移させる根拠が不明確ではないか)、あるいは自分を「形成する力」と言っているのか。(*2)

(*1) 一般的の2格の場合でも、被修飾語との間にカンマが置かれているため、思いの外分かりにくい場合がある。前にも引用した Rellstab の *Frühlingssehnsucht* の場合がそれである (→ 92-94p)。もっともカンマがなければ、理解はより困難かもしれない。

(*2) あるいは現在分詞 *bildend* は、いわゆる未来受動分詞で *zu bildend* の意味なのか (その場合には「形成される力」という意味になる。ただしこの意味での *zu* を省略した例を私は見たことがない)。

関係代名詞が入る例——関係節による行またがり

行またがりによるザクセン2格の複雑な表現として関係節が伴う例となると、ドイツ語をある程度勉強した人でさえ、とまどうだろう。

(35) Ihr kommt, Winde, [von] fern herüber, 風よ,お前たちは遠く [から] やって来る,
 ach! von des Knaben, ああ! あの少年の,
 der mir so lieb war, 私が愛した あの少年の,
 frisch grünendem Hügel. 新芽の出た 丘 [墓] から.
 (Mörike, *An eine Äolsharfe*)

非母語話者にとっては難しいが、この種の複雑な構文は、人間の思考力が発展すれば、

おのずと、しかも自然に用いられるものである。

最近読んだある新聞記事で、「近くで寝ていたはずの家族の恐怖でゆがんだ顔が見えた」という文に出会ったが（2025年3月26日付朝日）、戯れにこれをドイツ語で表現するなら、「近くで寝ていたはずの」は、「家族」にかかる関係節（あるいは分詞構文）で表現されるが、「家族の」（ドイツ語のザクセン2格に対応）は「顔」にかかる。そしてその「顔」には、「恐怖でゆがんだ」という修飾語がついている。関係節は、(35)の場合と異なり同性名詞——(35)ではKnabeとHügelはともに男性名詞——は使われてはいないため、文を中断する位置にではなく文末（3行目）に置くこともできるが、あえて(35)に合わせてみた。

Ich sah meiner Familie,
die nahebei muß schlafen haben,
vor Furcht verzerrt[es] Gesicht!

(参)一般の2格がかもし出す新鮮さ

以上、詩に見られるザクセン2格の諸例を見てきたが、こう見えてくると詩ではむしろ一般の2格の方がめずらしいとさえ感じられる。例えば、先にザクセン2格に関して先に引いた、F.シュレーゲルの次の詩(102p(7))では、最初の4行中の毎行にザクセン2格が出た。わずか4行に4度という頻度は、相当に高い。しかも各行はわずか4hebigである。これはまるで、ザクセン2格による表現の実験をしているかのごとくである（ザクセン2格の数が多く煩雑になるので、ザクセン2格に下線を引くだけにとどめる）。

(36) Der Frühlingssonne holdes Lächeln 春の太陽の穏やかな微笑は,
ist meiner Hoffnung Morgenrot; 私の希望の朝焼け;
Mir flüstert in des Westens Fächeln 西風のそよぎのうちで,
der Freude leises Aufgebot.… 喜びの静かな予告が。私にささやく…
(F.Schlegel, *Wiedersehen*)

ところで、ザクセン2格についてかなりの数の作例を見てきた私には、一般の2格の方が新鮮に見えることがある。それは、ただの接触機会の少なさによる新鮮さではない。そうではなく、ザクセン2格では決して併用されない冠詞類が被修飾名詞につけられる新鮮さであろうか。

先に、von...という性格を表す熟語の先置にふれた際に記したように、この表現は、被修飾語に不定冠詞がつけられていた（→109p(29)）。つまりザクセン2格がもつ、簡潔な表現を可能とし、詩人の韻律上の配慮に寄与し、そして非散文的な印象を強める側面をこれまで強調したが、他面でザクセン2格が有する表現の限界と言うべき側面をも、常に見る必要があるようと思われる。

次の例に見るように、一般の2格では、被修飾語に所有冠詞（ここではmein）をもつけて、ニュアンスをより豊かにことができる（先に、日常語の場合でも、Goethes Werke

に対して die Werke Goethes という表現を紹介した (→ 102p)。

- (37) Du sicherst meine Brust あなたは私の想いを守って下さいます,
des angestammten Erbes; 幼い頃から伝わる [想いを];
 (Seidl, *Bei dir allein*)

(参)一般的な2格の複雑な例

ここで付隨的に、一般的な2格に関わる作例について一つ論じておきたい。

- (38) Jeden Nachklang fühlt mein Herz どの余韻をも 僕の心は感じている
froh- und trüber Zeit 喜ばしくそして哀しい時の [どんな余韻をも]
 (Goethe, *An den Mond*)

ここにおいて froh- und trüber Zeit は一見時間を表す2格のように見えるが、一般に同2格としては、男性および中性名詞が、冠詞 des, eines および語尾 -(e)s とともに用いられるようである (z.B. des Morgens, eines Tages; 女性名詞にこの微表を付して Nachts などという言い方もある)。ここではむしろ froh- und trüber Zeit は、前行の jeden Nachklang にかかっている。2格が、行をまたいで2行目に置かれ、かつ主語・動詞によって2格とその被修飾語とが離れているため、学習者には分かりにくさが増している。

次の作例もそうである。

- (39) Hast du die Schmerzen gelindert 汝はかつて 苦しみを和らげたことがあるか
je des Beladenen? 重荷を背負った者の [苦しみ] ?
Hast du die Tränen gestillt 汝はかつて 涙をしずめたことがあるか
je des Geängsteten? 不安におののく者の [涙] ?
 (Goethe, *Prometheus*)

ここでも文は2行よりなる。(38)と同様に、前半では2格が2行目におかれ、1行目にかかるが、かつその間に文の他の構成要素が挿入されている。そしてここでは、2格名詞と被修飾名詞とが2組続けて出る。ただし1-2行目と3-4行目とは文の構造が同形のため、一方が分かれば類比的に他方も了解可能である。

この語順は韻律上の都合から選ばれているとはいえ、現在完了に伴う枠構造を無視し、jeとともにに入る des Beladenen 「重荷を背負った者」、des Geängsteten 「不安におののく者」を浮き上がらせている。

もっと複雑な例としては、先に提示の1格に関連して引いた Rellstab の例をあげることができる (→ 92p)。一般的な2格に関しても重要な詩句なので、冒頭部を再度引用する (訳は原文に行ごとに対応しにくいため、原文の右に置かなかった)。

- (40) Säuselnde Lüfte wehend so mild,
blumiger Düfte atmend erfüllt! (Rellstab, *Frühlingssehnsucht*)

とてもまろやかに吹き、[香りを]発散しつつ[によって]満たされた花の芳香をもつ 流れる空気！

blumiger Düfte には分詞（現在分詞ならびに過去分詞）による後置形容詞句がつき、また1行目の säuselnde Lüfte にも分詞（ここでは現在分詞のみ）による後置形容詞句がつくが、基本的な構造は、2格である blumiger Düfte が、1格（提示の1格）である säuselnde Lüfte にかかる形である。すなわち、säuselnde Lüfte blumiger Düfte がその基本的な構造であるが、säuselnde Lüfte der blumigen Düfte のように、2格名詞に冠詞でもつくなら、少しほ理解しやすくなっていたであろう。

いずれにせよ、ここまで複雑になると——非母語話者には——ほとんどの場合、解読がとても難しく感じられるであろう。

b, ザクセン2格由来の独自の表現

「ザクセン2格+所有冠詞（代名詞）+被修飾語」

論題をザクセン2格に戻す。

民謡に多いようだが、特殊なザクセン2格が見られることがある。2格にも、2格の被修飾語に対する関係によっていろいろなタイプを区別できるが（主語的2格・目的的2格、説明の2格、性質の2格等）、2格が被修飾語に対する所有者を表す場合がある。この2格はふつう「所有の2格」と言われ（以上桜井419-21）、人を表す語が来ることが多い。例えば der Mut des Helden 「英雄の勇気」（同420）。（*1）

そして興味深いのは、これがザクセン2格（相良②145）の形で用いられ、かつその後に、その人物の性に応じた所有代名詞がさらに置かれる例である。つまり「ザクセン2格+所有冠詞（代名詞）+被修飾語」という作例に出会うことがある。

以下、民謡の例を2つあげてみる（*2）——

(1)Dort oben am Berg in dem hohen Haus!/ In dem Haus!/ Da gucket ein fein's lieb's Mädel heraus!...Es ist des Wirts sein Töchterlein! (Arnim usw., *Wer hat ...*)
山の上のあっち、高い家で！その家で！かわいい娘が外を眺めている！...娘は〔宿屋の〕主人の娘！

des Wirts はザクセン2格である。だがその後に被修飾語が直ちに置かれるのではなく、所有代名詞（sein）が挿入されている。これが男性形なのは、それが des Wirts を受けているからである。

奇妙に見えるかもしれないが、これは書き手の恣意にもとづくのではなく、ある地域言語にとって規範的な表現である。

次の作例（民謡）でも、同じ表現が見られる。ただし(1)よりも少々むずかしい。

(2)Und schwimmt es, das Ringlein,(*3)/ so frißt es ein Fisch!/ Das Fischlein soll kommen/ aufs Königs sein' Tisch! (Arnim usw., *Rheinslegendchen*)
指輪は流れて〔泳いで〕行き！魚がそれを食べる！魚は王様の食卓に！のぼるでしょう！

ここに典型的な縮約が見られるが(杉田① 149 以下, 杉田② 271-2)、ここで *aufs* は、一般に見られる *auf das* のではなく、*auf des* の縮約形である。つまりここでは *des Königs* というザクセン 2 格が隠されている。そして被修飾語は、*auf* の前置詞格であるため 3 格もしくは 4 格のいずれかだが、内容的には 4 格と判断される。だから文法的に言えばこの *sein*’ は *seinen* の省略形である (s. 杉田② 80)。

なお、一般の文章では、この「ザクセン 2 格 + 所有冠詞 + 被修飾語」という表現に出会うことは、まずないと思われるが、この表現は小説や劇などにも出てくるという (桜井 420)。当初、その指摘に接した時、私は、方言を用いた登場人物間での会話に臨場感を出すために、例えばこの種の表現が用いられるということなのであろうと想像したが、あげられた実例 (わずか 2 つだが) からは、そのような印象は感じられない。そればかりか例文は、むしろ格調高い文章とさえ読める。(*4)

さて、小節や劇まで検討することはできないが、この表現は、詩でも目にすることがある。

(3) **Des Wassermanns sein Töchterlein/ tanzt auf dem Eis im Vollmondschein,/ sie singt und lachet sonder Scheu.** (Mörike, *Nixe Binsefuß*)

水の精の娘が 満月の光の下、氷の上で踊っている、恥ずかし気もなく歌い笑っている。

これは詩の作例であるとはいえ、おとぎ話風の印象がかもしだされている。作者のメリケがこの特殊な形のザクセン 2 格を用いたのは、そのことと関連があるのだろうか。あるいはやはり詩人は地域性を喚起するために、あえてこの種の表現を用いたのであろうか。

また、民謡を含む以上の諸例にあって、いずれも弱音の位置に所有代名詞 (所有冠詞) が置かれているのを見ると、多かれ少なかれ韻律上の配慮が働いた結果かもしれない。つまりこれは、多様な表現法のなかから、韻律上の自然さをかもしだすために有効な表現として、詩人 (作詞者) によって選ばれたのであろうか。

なお(3)末尾に見られる *sonder Scheu* の *sonder* は、*ohne* の意味である (杉田③ 215)。これは日常語でも慣用表現として使われることがある。

(*1) 所有の 2 格は、比喩的に自然物・人工物について使われることもある。例えば *die Strahlen der Sonne, die Straßen der Stadt* (桜井 420)。

(*2) 以下、作例としてあげる民謡は、*Des Knaben Wunderhorn* 『少年の魔法の角笛』と題された民謡集 (発行は 1806-08 年) におさめられているが、厳密な文献批判がなされず、また編者の一人であるアルニムの手が入っている部分もあると伝えられている。だがひとまずここでは「民謡」と見なしておく。

(*3) *es* は、これに先立つ詩節にすでに出て *Ringlein* を受けている。だから *es, das Ringlein* という表現は、それを単に確認しただけである。だが意味が明らかな *es* を出した上で、確認のためにそれが受ける名詞を明示してみせるのは、韻律上の必要がおそらく

背後にあるからとはいえ、表現としてはめずらしい。

(*4) 念のためあげると、Es gibt kein langweiligeres Ding als eine Braut, besonders eines Freundes seine [Braut]。「婚約者、特に友人の〔婚約者〕ほどつまらない者はいない。」，Nimm meinen Ring und gib mir des Majors seinen [Ring] dafür。「わたしの指輪をはずして、その代りに少佐の〔指輪〕をおくれ。」（桜井 420, 訳は杉田による）。寡聞にして私には、この出典がなにかは分からぬ。

前項に類似した「3格+所有冠詞〔代名詞〕+被修飾語」

以上は、あたかも一般的なザクセン2格から、その被修飾語の間に所有冠詞（代名詞）が入る形ができたかのように見えるが、実際にそうかどうかは疑問である。というのは、ザクセン2格の代わりに、3格（動詞にむすびついた「3格目的語」ではなく、動詞とは無関係に自由に使われる「所有の3格」）をおいた表現が、一部地域で一般的に使われているからである。

河崎靖氏によれば、南ドイツの方言では、この「所有の与格〔3格〕+所有冠詞〔代名詞〕」は、よく用いられるという。例えば en Guschtav seim Garta「グスターフの庭で」。これは南ドイツのシュヴァーベン方言だという。それを一般の Hochdeutsch で言えば in Gustavs Garten であるが（河崎 70, s.169）、所有冠詞（代名詞）を際立たせるために Hochdeutsch に直訳すれば、im Gustav seinem Garten である（im に含まれる dem は Gustav にかかってそれが3格であることを示し、また seinem は in に支配された3格である）。

こうした表現の存在は、他の関係書でも指摘されている。dem Peter sein Auto...（Autoは1格）；dem Peter seiner Mutter...（Mutterは3格）がそれだが、これは「特にドイツ南部の口語」での用法だという（成田他 138）。この記述は、河崎氏の「シュヴァーベン方言」いう上記の説明とほぼ合致する。（*）

（*）シュヴァーベン方言の使用地域の東に位置するバイエルンで使われるバイエルン方言にも、同じ表現法があるようである（河崎 174）。その他、オーストリアやスイスにもこれが使われる地域があるという（河野 15,100, 田中② 36）。

両者の関係——前者は後者から生まれた

さて、前々項で「ザクセン2格由来の独自の表現」である「ザクセン2格+所有冠詞+被修飾語」に関連して、前項で「3格+所有冠詞+被修飾語」について記したが、両者はいかなる関係に立つのであろうか。

分かりやすいように、前者を des Vaters sein Hut で、後者を dem Vater sein Hut で代表させるが（いずれも「父の帽子」の意）、前者は、後者が下になってできたのだという（相良② 145）。それは、前者のザクセン2格 des Vaters が、後者の3格 dem Vater に「混合し（た）」結果である、というのである（同前）。（*1）

要するに一般的な des Vaters Hut を用いる話者（ザクセン2格を口語として、しかも

Goethes Werke や Vaters geburtstag のように無冠詞ではなく、性数格に応じた冠詞を付して使う話者が、たしかにいた地域があったようである）が、**dem Vater sein Hut** という表現につられて、**des Vaters Hut** ではなく **des Vaters sein Hut** という表現を用いるようになったのだという。（*2）

ともあれ、この表現の作例を 1 つ引いてみる。

(4) **den Fluren** kommt^(*3) **ihr frisches Grün**,/ und **Wäldern** wächst **ihr Schatten** wie-
der. (*4) (Uz, *Gott im Frühling*)

野の 新鮮な緑は 目ざめ、森の 影は 再び育つ。

後半の **Wäldern** は、前半の **den Fluren** と異なり冠詞はないが、複数 3 格と解しうる。後半では要するに「森が成長する」という事態を「森の陰」を主語として表現したのであろう。

なお筆者は、寡聞にして、詩においてこれと同じ構造の表現に、他で出会った記憶はない。その事情の一つは、近年この表現の普及がかなり一般的だったのだとしても、それは「文章語とは縁遠い日用語」（ポーレンツ 145）のレベルだからかもしれない。とはいえ、今日なら日常語・生活語での詩作もまれなことではないとはいえ、**dem Vater...** という表現が定着したのは、早くとも戦後のこととされる。とすれば、マーラー、シュトラウス、せいぜいベルクあたりまでのリートの世界にこだわる私にとって、この種の表現にはほとんど出会わないのはけだし当然なのかもしれない。

(*1) その点は、田中氏の記述にも見られる。**des Vaters sein Hut** は、**des Vaters Hut** と **dem Vater sein Hut** との「混同形」であると（田中① 21）。

(*2) では、そもそもここで問題にしている「所有の 3 格 + 所有冠詞〔代名詞〕 + 名詞」という表現法 (**dem Vater sein Hut**) は、どういう経緯で定着したのだろうか。桜井和市氏は「古い語法が口語に残ったもの」（桜井 420）と記すが、子細は不明である。一方相良守峯氏の説明はずつと詳しいが（相良② 144）、残念だが両者の説明はうまく統合できない。

(*3) **kommt** は中高ドイツ語系の別形であり、**kommt** の意である（杉田② 84）。

(*4) これも、所有の 3 格がかかる被修飾語が定冠詞をとらない作例である。

3, 第 3 格

3 格は 2 格以上に、多様な表現を可能とする。ここでは、〈1〉 利害の 3 格、〈2〉 関心の 3 格、〈3〉 所有の 3 格、〈4〉 分離の 3 格（奪格的 3 格）、〈5〉 具格的 3 格をとりあげる。

〈1〉利害の3格

3格としてもっともよく現れるのは、3格目的語である。ほとんどの場合、動詞・形容詞等と対になってその「目的語」（堂々巡りのようになつても、「最後の概念」については説明・言いかえはしない）として使われる。一方、大まかに言って、行為（自然の現象の場合もある）あるいはその対象が向けられる相手を示すのが、それである。

一方、それと似ているが（しばしば区別できないこともある）、その行為あるいは自然現象と何らかの深い「関係」を有する人や対象について使われる3格がある。この関係を「利害」と表現するのが一般的だが、「判断〔者〕」の場合もありうる（桜井433、塩谷332「判断・批評」）。利害より強い意味をこめて「獲得」（中島78）と、あるいは判断者を言いかえて「標準」（相良①190）という用語を用いる文献もある。

詩の作例から

一見、3格目的語と似ているが、意味上それと異なる使われ方をする「利害の3格」の実例を、詩からあげてみる。

(1) Wie herrlich leuchtet mir die Natur, /.../, wie lacht die Flur! (Goethe, *Mailed*)

これはふつうに読めば、「自然は私に対し〔向かって〕何と明るく輝いているか, /.../, 野原は〔私に対し（向かって）〕何と笑っているか!」のように解されるであろう。この場合、「私」が、自然現象がそれへと向けられる当事者と解釈される。当時者を示すのが、mirの3格目的語としての用法・意味である。

けれども(1)で作者ゲーテは「自然は〔単に広々と眼前に在るのではなく〕私にとっては〔私の判断によれば〕、何と明るく輝いているか, /.../, 野原は〔私にとっては・私の判断によれば〕いかに笑っているか!」という感慨をこめて、(1)のように書いたのである。この時、3格 mirは、自然現象が向けられる単なる当事者ではなく、自然や野原がそのようなものであると判断し、そのようなものとして享受する当事者をさすと解される。これが「利害の3格」である。

ちなみに、ゲーテ(1749-1832)による作例(1)と、似た作例がある。ゲーテに先立つシュヴァーベンの詩人ウツ(1720-96)のものである。(*)

(2) Noch heute seh' ich deinen Glanz: / mir lacht.../ noch heute die Natur. (Uz, *An die Sonne*)

今日、私はまだ汝〔=太陽〕の輝きを見ている: / 私には微笑んでいる.../ 今日まだ自然是。

ここで mirは、3格目的語なのか利害の3格なのかは解釈が別れるが、後者であれば、(1)と同様に、自然は、人一般に対してではなく、「私にとっては」微笑んでいる、そのように現れる、という意味であろう。3格目的語ならば、自然は「私に向かって・私に対して」微笑んでいる、という意味となるはずである。

(*) なお(1)に見られる「野が笑う」lacht die Flurという表現は有名だが、自然を主語にした

lachen は、(2) に見るように前例がある。もっともだからといってゲーテのこの詩の価値は何ら下るものではない。これはゲーテが、当時のそして自らの「アナクレオン風」の詩から脱皮するきっかけとなった、重要な詩である。

もう一例、leuchten, lachen と異なり 3 格をとるわけではないが、同様の意味内容を含意した動詞の作例をあげてみる。

(3)...da streichen die Wölkchen so zart uns dahin (Reil, *Das Lied im Grünen*)

... そこ〔緑の中〕では、私たちには雲はとても柔らかに流れ去る

この文は、uns が 3 格目的語ならば、雲がとてもやさしく私たちの方に向って流れてくるという意味だと解しうるが、あるいはこれは、他の人にはともあれ、「緑の中にいる」私たちには、雲が so zart 「とてもやさしく流れる」と感じられる、という意味とも解しうる。「緑の中の歌」としては、その方が自然であろう。

なおこれは、後述する「分離の 3 格」の作例と解してもあながち間違いではないと思うが、やはり文脈的には利害の 3 格と解するのがふさわしいと思われる。

3 格目的語 = 3 格名詞 / sein と 3 格目的語

以上の作例では、利害の 3 格はすべて人称代名詞であった。単純な「私」その他が登場するが、その主体の特性を明示しようとすれば、おのずと 3 格名詞を利害の 3 格として用いることになる。

関連して 3 格が名詞であり、したがって単に代名詞的な「私」ではなく、当時者の複雑な様相が名詞等で表された「利害の 3 格」の作例を 1 つあげてみる（動詞は sein）。

(4) Des Abendmahls/ göttliche Bedeutung/ ist den irdischen Sinnen Rätsel; (Novalis, *Hymne*)

夜の食事の/ 神的な意味は、/ 現世的な感覚には謎である；

ここでは、「現世的な感覚」とは、「現世的な感覚を有する私」という意味であると判断される。その限り、mir の特性を具体的に示したことになる。なおここで動詞は sein だが、sein (あるいは sein と類似した動詞) と利害の 3 格の作例は、以下の (7) ~ (9) でとり上げる。

sterben 次の作例もまた、利害の 3 格と解される。これは、(1)(2) と異なり、一般には 3 格目的語をとらない動詞の例である。

(5) Und ihrer Stimme Ton ist dunkelfarben/ wie Stimmen von Geliebten, die uns starben. (Hesse, *Mon Rêve familier*)

一般にはこれは、「彼女の声の調子は暗い、/ 恋人たちの声のように、つまり私たちにとつて亡くなった恋人たちの」、とでも訳されるだろう。

だが uns は sterben とともに使われることで、日本語について言う「迷惑の受け身」と似たニュアンスを、事態につけ加える。日本語に「死なれる」という言葉があるが、これ

がそのニュアンスを伝えている。ここでヘッセは、まさに「私たちは〔大事な〕恋人たちに死なれた。彼女の声の調子は、ちょうどその恋人たちの声のように暗い」と(5)で述べているのである。つまり、「私たちの死なれた恋人たちの声のように暗い」と。

なおこの詩で話題になっているのは、夢に登場するある見知らぬ女性（詩では「私」にとて周知であるため die Unbekannte と書かれる）である。ややこしいが、その女性とは別の、現在の恋人——詩では du として登場する——と「私」とが、それぞれかつて愛した亡き恋人たち Geliebte をここで思い起こして、uns starb（死なれてしまった）と言っていると解釈される。

schnitzen 「彫る・作る」 次は、一般に「作る」（ドイツ語には日本語のような汎用的な「作る」という言葉はなさそうである）という意味に包摂される語の作例である。

(6) Willst du Bess're besitzen, so laß dir sie [=Bess're] schnitzen. (*) (Goethe, *Liebhaber in...*)

もっといいものが欲しいんだったら、〔君のために〕〔誰かに〕作ってもらひなよ。

最初に記せば、ここで schnitzen 「彫る」「彫刻する」は、その行為を含む（包摂する）類としての行為、「作る・制作する」の意味（日本語の「作る」のような広い意味）で用いられている。文脈的にも、そう判断される。本稿を含む論考で扱う第3章「統語論」に続く第4章「意味論」（未公開）のうち「意味の拡大」を参照のこと。

dir はここでは、「あなたのために」という意味である。「作る」ことで利益を得る当事者が、3格で記されている。これは、3格目的語というより利害の3格と見なす方が、適切であろう。

(*) lassen にかかる不定詞 schnitzen の主語は示されていない。これは lassen の目的語（schnitzen の主語）として、漠然と人・関係者を指しているからである。ただし「神に」という意味をこめる解釈もある（三浦 26）。

sein と利害の3格 動詞のなかでも最も基本的で、多様な表現の際に使われる sein の場合は、微妙である。「……にとって」とでも訳しうる、形容詞の3格目的語としての使用例（桜井 430-2）が非常に多いからである。

だが、次のような例は、単に3格目的語と言うだけではすまないニュアンスがこめられている。

(7) Mein armer Kopf ist mir verrückt, / mein armer Sinn ist mir zerstückt. (Goethe, *Gretchen am Spinnrade*)

私の哀れな頭は狂ってしまった。/ 私の哀れな思いはちぢに乱れてしまった。

これは、一見次々項で論じる「所有の3格」に近い表現と思われるが、所有の3格の場合は、被修飾語（ここでは armer Kopf）に定冠詞を付けるとされている（全く例外がないわけではないが）。だがここでは定冠詞ではなく、所有冠詞がついている。しかも、3格と同

じ人称を示す所有冠詞である。すでにその所有冠詞で所有者が明らかである以上、あえて「所有の3格」を付ける必要はおそらくない（強調のための冗語という可能性はゼロではないが、違和感のない表現とは言えない）。

またここで形容詞 *verrückt*, *zerstückt* が、何等かの形で行為・現象がそれへと向けられる当事者の明示を要求するとは思われない。つまりここでも *mir* は、3格目的語とは考えにくい。

とすると3格に関する代表的なカテゴリー中では、「利害の3格」もしくは「関心の3格」(次項)へと可能性を絞り込むのがよいが、関心の3格の場合、主語や話題(レーマ)に、3格と同じ人称の所有冠詞がつくのは、少々不自然に感じられる。mirを置かなくても、私についての何か(ärmer Kopf, ärmer Sinn)について語る以上、すでにそれだけでichはおのずとその事態に関心をよせているのであるから。

ただし「関心の3格」が何らかの想いを強調するかぎり、やはりこのmirには意味があるかもしれない。後に引用する作例では事柄を切に願う気持ちがmirに込められているが(122p, Herrosee, *Zärtliche Liebe*)、ここでは、頭が狂い心が乱れた事実に対する困惑と悲しみの想いを表現するかぎりで、「関心の3格」という解釈も可能であろう。先に「……してしまった」と訳したのは、その意味をこめたからである。「……(して)しまう」は、「もはやどうにもならない、とりかえしのつかないことになるの意を表す」というが(広辞苑)、さらにその事実に対する後悔の想いが込められている、と言うべきであろう。

sein 類の動詞 **sein** と類似した意味で用いられる動詞がいくつもある。例えば **bleiben**, **stehen**。これが用いられた作例でも、利害の 3 格としての用例を見ることができる。

(8) Und sein kleiner Teller/ bleibt ihm immer leer.....seine Leier/ steht ihm nimmer still. (Müller, *Der Leiermann*)

でもライア一回し〔辻音楽師〕の小さな皿は/いつも空っぽのままだ.……ライアは/いつも黙ったままだ.

この作例の構造も(7)と同じである。sein...ihm に見るように、(7)の mein...mir と同様のつながりが認められる。そして一般には 3 格をとりそうもない形容詞 (leer, still) とともに、ihm が置かれている。ここでは、(7) と同様に、ihm は利害の 3 格と読むのがふさわしいと感じられる。

次の文の骨格は、*werden* によって導かれた受動態である。これもまた、(6)~(8)同様の構造をとりうる動詞の作例である。

(9) Von trauen Himmelskindern/ wird ihm sein Herz bewacht. (Novalis, *Nacht-hymne*)

誠実な天の子たち [=天使] によって/彼 [=愛を信ずる者] の心は [彼のために] 守られる。

ここで ihm を私は利害の 3 格と解しているが、「彼の心は守られる」という重要な表現の後に、それを「彼のため」とあえて記す(訳す)としたら、それは確かに冗語的である。そ

れゆえ、上の訳では「彼のために」を括弧に入れたが、ドイツ語においても利害の3格は、そのようなニュアンスをもつことがある（明示されるべき明確な「利害」の意味までは暗示されない）と理解してよいであろう。

なお、「愛を信ずる者」と訳した原文は、*wer liebend glaubt* である。*liebend* すなわち現在分詞は能動・未完了を示すが、とすればこれは文字通りには「愛しながら〔愛を〕信ずる者」という意味であろうか。

利害の3格＝再帰代名詞

なお、利害の3格が再帰代名詞の場合ももちろんあります。最後にその作例を1つだけあげる。

(10) O, er [=ein Kaufmann] kriegt gewiß nicht meins! —/ Kauf' er **sich** woanders eins! (Bürger, *Muttertändelei*)

ああ、商人などには絶対私の子を手に入れられないよ！ —/ 商人は〔自分のために〕どこか別の場所で1人〔子どもを〕買いなさいよ！

〈2〉 関心の3格

関心の3格は、詩にもあまり登場しないが、独自な含みをもつ用法であるため、ぜひとも知っておく必要がある。例えば——

関心の3格 **mir**

(1) Gott schütze dich, erhalt' dich **mir**... (Herrosee, *Zärtliche Liebe*)

神があなたをお守り下さるように、あなたを保護して下さるように…

ここで話し手 (ich) は、神の恵みが「あなた」にあることに、強い関心を抱いているが、もっと言えば、そうなるよう心から願っている、というニュアンスが込められていると言つてよい。地の文自体が要求話法であるため、それだけで「……になりますように」「……となるよう願っている」という意味が含まれるが、それを強めるために、さらにこの **mir** が付け加えられている。

私がこれまで接した限りで言えば、口語体の詩文においてこれに出会うことが比較的多かったと感じる。(1)も、以下の(2)(3)ほどに顕著ではないが、やはり口語的な要素を含む詩である。

(2) Feinsliebchen, du sollst **mir** nicht barfuß geh'n. (Volkslied, *Feinsliebchen...*)

かわいい子、はだしで歩いちゃだめだよ。

(3) Seht **mir** doch mein schönes Kind,/ mit den gold'nen Zottellöckchen, (Bürger, *Muttertänderei*)

とにかく私のかわいい子を見ておくれよ、/ 金の房飾りの巻き毛の子を、

ただし後者は微妙である。利害の3格の含みも感じられる。母親が、目に入れても痛くないわが子を周囲の人に見せたく見せたくてしょうがない、という心理状況にいるからである。

以上はいずれも、私にとっての「関心の3格」であった。つまり、第3者（例えば神）あるいは相手 *du* がとるべき行動に、話し手である私 *ich* が特別な関心をもつことを示していた。

関心の3格 *dir*

だが関心の3格は、逆に、私 *ich* が述べることに、私がとるべき行動に、相手 *du* の関心を求める時にも、*dir* という形で使われる場合もある。桜井和市氏は、*Ich war dir ein Soldat…私は兵士でしたよ…* という例文を上げる（桜井 433）。ここには、よく聞きなさい、よく注意して理解しないさい、というニュアンスが感じられる。

詩の作例をあげてみる。

(4) *Du sagtest mir es, Mutter:/ er ist ein Springinsfeld!/ ich würd' es dir nicht glauben,...* (Seidl, *Die Männer...*)

お母さん、私に言ったわね:/ 彼は青二才だって!/ 私はそれを信じないわ,...

これもまた、(2)(3) と同様に口語的な詩文である。娘が自らの恋人について、母親に反論する場面で関心の3格が使われている。母親の認識——恋人は青二才だという——が間違っていることを、娘は母親に向って、‘*dir*’の1語によって念を押していると解しうる。この例を見ると、関心の3格はなかなか含蓄に富んだ表現法である。

次の例は——内容的に少々微妙だが——かならずしも口語的詩文にかぎらない作例である。

(5) *Und was ich gewesen, und was ich dir bin,/ das flutet in ewigem Wechsel dahin.*

(Busse, *Stimme der Sehnsucht*)

そして私がそうだったもの、私がそうであるもの,/ それは永遠の移ろいにあって流れ去る。

ここで相手 *du* は憧憬の対象である。自らがそうであったもの、現にそうであるものについての関心を、私は相手に求めている。

ここでは *dir* は後半の現在形についてだけおかげ、前半の現在完了形は裸のままになっているが、過去と現在の対比上、この *dir* は前半の現在完了形にもかかると解しうると思われる。

ただしこの詩で詩人は、自己自身を振り返るというより、自分を相手との関係において見つめているようにも思われ、その限りでは *dir* は、3格目的語（桜井 431-2）とも解しうる。その場合には、(5) は「あなたにとって何であったか、そして今何であるか」、とでも訳さざるをえない。

なお詩の作者はカール・ブッセである。日本では「山のあなたの空遠く／『幸』住むとひとのいふ……」という、上田敏の訳詩（Busse, *Über den Bergen*）で知られている。

〈3〉 所有の3格

所有の3格は、詩ではしばしば目にする。3格目的語をのぞけば、利害の3格と並んで使用頻度が高いと感じられる。だが同じ3格として、他の意味の3格と区別が困難な場合がある。微妙な作例にふれることから始める(以下では所有の3格には下線を引いた上で太字とし、所有の3格がかかる被修飾語は下線を引いた上でイタリック体で表す)。

(1) Horch, o Sennin, wie dein Sang/ in *die Brust den Bergen* drang,(*1) (Lenau, *Die Sennin*)

牛飼いの娘さん(*2), 聞いて, あなたの歌が/ どんなに山々の胸〔山ふところ〕に迫ったかを,

この3格は、一見したところ3格目的語と解してよいように見える。ただし動詞 *dringen* は、in+4格 *dringen* 「…に迫る」(ア)のように前置詞格を支配する傾向はあるとはいえ、同時に3格を支配するかどうかは不明である。

むしろこの3格 *den Bergen* は、*Brust* を被修飾語とする「所有の3格」であると解するのがよいように思われる。牛飼いの娘は、平原で牛を追いつつ歌い、それが周辺の「山々の胸〔山ふところ〕(*3)」に迫った、というのであろう。詩の文脈からしても、これが最も自然な解釈と思われる(羊飼いならば、山々を主たる職業的な場とすることが多いため、*den Bergen* を「山々から」と、言いかえればこれを分離の3格〔次項〕と解する可能性が残るが、牛飼いの場合は、それはありそうもない)。

ただし、*den Bergen* を所有の3格と解した時、ではなぜ、in *die Brust der Bergen* のように、所有を表す2格(所有の3格ではなく一般的な2格=所有の2格)を使わないのかという問題が残るが、詩人 Lenau にとって、ここでは所有の3格による表現がより詩的であり、自らの表現としてふさわしいと感じられたのであろう。

だが Lenau は、その違いによって何を求めたのであろう。

例えはリルケの『旧詩集』*Die frühen Gedichte* (1909) は、当初公刊された際、『私に祝いを(私を祝って)』*Mir zur Feier* (1899) と題されていたが、この意味を表現する一般的な熟語は *Zur meinen Feier* である。だがリルケがこれを *Mir zur Feier* としたのは、所有の3格の独自なニュアンスを重んじたがためであろう。

zur Feier は一般に「…を祝って」という乾杯の合図などでとして使われるが(大‘Feier’)、*Zur meinen Feier* という表題自体が、上拍つきの *Trochäus* (言いかえれば *Jambus*) であるのに対して、*Mir zur Feier* は純然たる *Trochäus* のためか力強く感じられる(なお私はこれを *Jambus/Trochäus* 全般の特質であると一般化する意図はない)。また *mir* はその他の3格の多様なニュアンスを含意をしてもいる。利害の3格ととれば、「自分のために」という意味が前面に出る。また「私の祝い *meine Feier*」だと主観的・個別的な営みの印象が強いが、これに対し *mir zur Feier* 「私に祝いを」では、むしろ客観的・一般的な「祝い」に焦点があてられ、ひいては「私」が際立たせられるように感じられる。レーナウが(1)においてとった表現の違いは、このように説明できないだろうか。

また所有の3格を用いた場合でも、語順としては *den Bergen in die Brust* の方が自然である（後述するように所有の3格は被修飾語に先行するのが一般的である）。だがけつきよく語順は、詩脚（この詩では *Trochäus*、ただし2行目冒頭の *in* は軽強に読んで可）の影響を受けざるをえない。

いずれにせよ以上の結果、作例(1)に見る語順と意味(3格の)がレーナウによって自覚的に選ばれたのであろう。

(*1) 最初に名詞の例、しかも後置の例をあげるが、その点にはこだわらないでもらいたい。

(*2) 「牛飼いの娘」と訳したが、*Müllerin* 「水車屋の娘」と同様にとればそう訳しうる。けれども(1)では娘自身が牛飼いである。「牛飼いの」は所有ではなく「牛飼いである」という性格を示す語である。また「娘」はもともと親族呼称だが、若い女性を表す言葉として、ドイツ語でも日本語でも用いられる。

(*3) 日本語では、「山懐（やまふところ）」は、「山々に囲まれた奥深い土地」を意味する（大辞泉）。ドイツ語でどうなのかは分からぬが、内容的に見て、*die Brust den Bergen* が「山ふところ」の意味をもつと解しても大過はないのではないかと判断した。(1)ではおそらく「私」は、谷（この言葉が先立つ詩節に出る）および山ふところとよびうる地域に住むか、そこで活動しているのであろう。

所有の3格と被修飾語の定冠詞

本論（→ 126p）に進む前に、関連して一言記す。

所有の3格の被修飾語は、縮約の形をとる場合を含めて（後述）、ふつうは定冠詞をとる。だがこの点で私は、以前の章で解釈を間違ったかもしれない。

第2章で引用したヘルティの「至福」*Seligkeit* では（杉田③ 290p）、被修飾語が定冠詞以外の文法要素をとる可能性は否定できないと判断して、*mir einen Blick* の *mir* を所有の3格と解したが、その後可能なかぎり調べてみた結果、定冠詞以外をとる例はほとんど見当たらなかつたことを報告する。

今、私は「ほとんど」と書いた。確かに詩においては見たことはないが、詩に限定しなければ、次のような作例にであったことがある。Mir ist ein Knopf abgegangen。「私のボタンが一つとれた」がそれである（ア‘*abgehen*’）。ここで *mir* は分離の3格と解しうるが、一方で所有の3格とも解しうるのではないか。アクセスの例文としては「私のボタン」という訳がつけられていたとしても、これが分離の3格と解されている可能性も残るが、「私の」という訳をつけたからには、この *mir* が所有の3格である可能性をも筆者は示唆しているのではないか。そもそも「私のボタンが一つ」という意味をドイツ語で、しかも所有の3格を用いて記すなら、Mir ist ein ... という言い方が確かにふさわしいように思える。

だから少なくとも現時点では、所有の3格の被修飾語に付くのは定冠詞でなければならぬとは断定できない。

詩に多い所有の3格

閑話休題。さて、「所有の3格」は詩でしばしばみられる。

これは、非常にドイツ語らしい表現である。ドイツ語としては、もちろん一般的・日常的には所有代名詞 (sein Koffer) や所有の2格 (die Koffer des Mannes) が使われるが、所有の3格 (dem Mann die Koffer) の方が「好まし」く、さらに「[より] よい」「深い味がある」(塩谷 331) とされ(日本語の終助詞などの場合もそうだが、微妙なニュアンスはなかなか言葉で表せないものである)、いろいろなタイプの言語表現でたしかに使われる。だが私が見るところ、詩では一般的・日常的な場合以上に、所有の3格が好まれるようである。

また、総じて3格について言えば、詩で最も多く登場するのは、一般的な3格支配の動詞・形容詞・前置詞等とともに用いられる3格(3格目的語)を別とすれば、すなわち、動詞・形容詞等に拘束されない「無拘束 frei の3格」(桜井 432)のうちでは、所有の3格であろう。

以下、まず A, 所有の3格とされる頻度の高い代名詞(ことに人称代名詞の)について論ずる。その際、所有の3格が被修飾語に対して [1] 先置される場合と、[2] 後置される場合を、分けて扱う。その後に、B, 所有の3格として扱われる頻度は低いとはいえ、詩に時に登場する所有の3格=名詞の例を論ずる。

A, 所有の3格=代名詞

所有の3格として使われる代名詞は、一般には人称代名詞であるが、時に、後述するように、疑問代名詞、指示代名詞、関係代名詞、不定代名詞、再帰代名詞等が用いられる。

[1] 所有の3格の先置

所有の3格は、一般に、「身体の部分を表す名詞とともに用いられることが多い」という(中島 78, 強調杉田)。辞典にその旨が記されることもある(ア‘der’)。詩でも、身体部位を示す名詞とともに使われる例は多く見られる。(*)

(*) 先に見た Rilke の題は別として、Lenau の例では、山々についての表現だったとはいえ、身体部位を表す Brust が使われていた。

1) 身体部位の例

(1) Mir ist das Herz so bang und schwer,/ von Sehnsucht mir so heiß (Rellstab, *Kriegers Ahnung*) (*)

僕の 心は不安に満ちていて重い,/ [それは] 憧れのために僕にはとても熱い

ここに見るように、所有の3格はかならずしも、mir das Herz のように語として続けて書かれる(発音される)とは限らない。構文上の都合から間に別の語が置かれて、この例に見るように、所有の3格とその被修飾語が離れるのは、一般的である。少し複雑な内容の

文になると、両者の間に入る語も多くなる。

(2)Du [=Bächlein] hast mit deinem Rauschen/ mir ganz berauscht den Sinn.
(Rellstab, *Wohin?*)

お前〔小川〕は… その〔さらさらいう〕流れで/ 僕の 感覚をすっかり魅了した。

この作例は、現在完了時制によるため少々構造が複雑である。本来なら、Du hast mir mit deinem Rauschen den Sinn ganz berauscht(ないしそれに近い形)となるが、枠外配置をとることで den Sinn が強調されている。

(*)ここでは、第2行にも mir が出る。これは第1行の場合と同様に、von Sehnsucht にかかる所有の3格と読みなくはないが（その場合は「僕の憧れによって」という意味になる）、前記のように、所有の3格は定冠詞付き名詞にかかるのが普通である。それゆえここでは所有の3格というより、むしろ利害の3格と解する。

所有の3格との縮約

以上の構造はまだしも比較的単純だが、以下に見るように、被修飾語の前に前置詞が入る（言いかえれば被修飾語が前置詞格の一部である）という例も多い。

(3)Man sieht dir's an den Augen an,... (Goethe, *Trost in Tränen*)

君の 旦で、そのこと〔君がとても悲しんでいること〕がわかる!...

ここでは所有の3格に、人称代名詞 es が、「縮約」(*)によって 's の形で用いられている（ただしアポストロフを記さず dir's とした版もある）。それだけ文は複雑になるが、前置詞句は3格の後に来る多いため、慣れればこの種の表現にも煩雑さを感じなくなるであろう。所有の3格と被修飾語の位置はまだしも比較的近いおかげで、理解もしやすい。

ここには、et.(4) an... ansehen 「…で…がわかる」という熟語が出るが、これは興味深い表現である。一般にはこの熟語は、jm. et.(4) ansehen という形をとる（大‘ansehen’5）。つまり、前者の an et.(3)...（この an は「手段・手掛かり」を意味する〔ア‘an’5〕）が、後者では3格だけあらわされている。ということは、この含意で用いられる3格目的語——かりに「きっかけの3格」と呼んでおく——では、その前に an が略されている、と言つても同じことである（後述→142p）。

縮約について一言述べる。ここに見るように、3,4格がともに人称代名詞(dir, es)の場合には、「比重の原則」に基づいて語形が短いものを先に置くのがふつうである（藤田57）。したがってここでは、どちらを前においても差し支えない。4格を前置して Man sieht's dir an den Augen an とすることも可能である。だが、前接型の縮約としては、動詞につくよりも人称代名詞のにつく方が分かりやすい。動詞に付く場合でも、3人称現在形では、war's, kam's（杉田③268以下）などと異なり、-'s が発音上 明瞭さを欠くため（sieht → siehts, 特にその後に d- という歯音がならぶとよけいに）ため、避けられる傾向が高いであろう。

(*) 縮約については杉田①149-51, ③268-70を参照のこと。

前置詞格の縮約定冠詞の例

以下では、所有の3格がかかる被修飾語につく定冠詞自体が、縮約によって前置詞と一体化し、ひいては意味上の重みは軽くなるが、それでも定冠詞は所有の3格表現における重要な要素となっている。

(4)...Ich schau'dich an, und Wehmut/ schleicht mir ins Herz hinein. (Heine, *Du bist wie...*)

僕が君を見つめると、憂愁が/僕の心に忍び入る。

(5)Das Herz mir im Leib entbrennte(*) (Eichendorff, *Sehnsucht*)

心が僕の肉体の内で燃え上がった

次は同じく被修飾語の前に前置詞がついた例（前置詞格が使われる例）だが、それと所有の3格が今まで以上に離れた位置におかれている。

(6)Setze mir nicht, du Grobian,/ mir den Krug so derb vor die Nase! (Goethe, *Setze mir nicht*)

無骨者、私の鼻先に！そんな不作法に酒つぼをおくな！

少々分かりにくいが、1行目に出るmirは利害の3格である。2行目冒頭のmirが問題の所有の3格である。そしてこの語は、意味上、直後のden Krug「酒つぼ・ジョッキ」ではなく、2行目末尾のdie Naseにかかる。

(*)動詞entbrennenは、後述する「分離の3格」をしばしば導くent-という前綴りをもつ動詞だが、ここでent-は「分離」よりは「開始」を意味すると判断される（大‘ent. .1’）。

「行またがり」によって離れる例 一般的に、3格と被修飾語が若干離れただけならさほど意味が不明になることは多くないと思われる。だが、それが「行またがり」によって別々の行に現れる場合には、不分明さが増す。

(7).../ daß ich dir ins ewig neue, .../ 私が、汝 [=希望] の永遠に新しく,
mondenhelle Angesicht 月のごとく明るい顔を
einmal schaue,... いつか見られるように,...

(Mörike, *Der Genesene...*)

行またがりで、所有の3格の被修飾語が前置詞格に現れる点をのぞけば、特に難しい点はないが、ここに出る語句についていくつかつけ加える。短いながら、詩の典型的な語法（詩の文法）がここには凝縮して見られる。

ewigは一般に「非常に長い時間」を示すが、これはしばしばauf ewig「永遠に」の意味で使われる（杉田②156-7）。メリケはここで、病から癒えた者が抱く希望について歌うが、「汝」=希望の長からんことを祈って月の比喩を用いるために、その永遠の相に言及するために、ewigを用いたのである。わずか1音節の違いただが、詩人は一般に語を縮小して用いる傾向が高い。

2行目に出る *Angesicht* にも、詩人としての論理が働いている。語を縮小して用いる反面、詩人はしばしば語を拡大して用いる。いずれの場合にも、韻律上の必要に由来するのが一般的だが、ここでは同じ事情から、「顔」を意味する語として *Gesicht* ではなく、それより 1 音節長い *Angesicht* を用いたのである（杉田② 153-4）。こうして詩人は、*auf ewig* を *ewig* と表現するのと逆に、音節数を増やすために語を拡大して用いる傾向がある。

3行目に見られる *schauen* は、詩人が古語（主に Mhd.）や同時代の方言を、自らの詩語の宝庫として用いようとする傾向をよく示している。*schauen* は、大ざっぱに言って南ドイツ・オーストリア・スイスの言葉である。シュヴァーベン（南ドイツの一部）の詩人であるメリケにとって、この語は一般のドイツ人以上に慣れ親しんだ言葉だったのであろう。もっともこの語は今日、上記地域に限ることなく、*Hochdeutsch* のふつうの語として、よく用いられるようになっている（杉田③ 253-4）。

メリケの詩に関して詩の文法の一面にふれたが、(6)に見られる所有の3格と前置詞格の形をとった被修飾語のつながり等々が読めれば、有名なウーラント「日曜日」*Sonntag*の一節も難なく読めるだろう。

ただしこの作例では **mir** を利害の3格とも解しうる。可愛いあの子 **mein feines Liebchen** を知るあれこれの人にとってではなく、「僕」にとっての判断が示されていると。内容的にそう解しても、あながち間違いとは言えないであろう。しかも **mir** と **das Lachen** が行またがりで離れているため、そう解される余地はたしかにある。

なおこの作例には、事柄を主語にした *wollen...nicht* が出るが、それは強い傾向を意味する。直訳すれば、(8)は、「僕の笑いは…消え去ろうとしない [だろう]」といった意味である。詩節冒頭の *so* は総じて難しいが(杉田③ 216 以下,特に 217 以下)、ここではそれ以前の詩節の内容を受けて「可愛いあの子とずっといられたら」という意味と解した。

2) 身体部位以外の例

前記のように、一般に所有の3格は定冠詞つきの身体部位にかかると言われる（ア‘der’⑧）。だがそうではない例も多い。桜井では「精神の状態」、「〔人の〕附属物の所有者」（*）をあげるが（桜井432）、詩ではそうした制約はほとんどない。

(*) 「身体部位」「精神の状態」と「附属物の所有者」とでは論理的水準が異なる。したがって以下、氏の言う意味を、人（ないし所有者）にとっての「身体部位」「精神の状態」そして「付属物」と解する。

精神的活動 精神的活動を所有の3格で受けた例をあげてみる。前項末尾の作例(7)を、再度見てもらいたい。

そこでは「笑い」 das Lachen が、所有の 3 格がかかる被修飾語となっている。笑いは肉体的活動とも言えるが、笑いの気持ちは笑いがあることで理解され、また笑い自体は笑いの気持ちによって引き起こされるという点で、ひとまず笑いは「精神的活動」と見なしてよいであろう。次の例もほぼ同様に解しうる。die Tränen は das Tränen ではないが、後者を引き起こし、また後者によって存在が理解されるという点で、先の例と同様に解しえよう。

(9) Auch der Küsse Duft mich wie nie berückte, / ... / doch auch dir, bewegt im Gemüt
..., / tauten die Tränen. (H.Schmidt, *Sapphische Ode*)

口づけの芳香もまた、かつてないほどに私を魅了した, / ... / でも ... 心で悲しんだ あなたの, [...] 心の内で流した] / 涙も、露となつ〔て流れ〕た。

ただしこの dir は、3 行目の文の勢いからすると、また die Tränen との間隔からすると、次項で論ずる分離の 3 格とも解しうるかもしれない。(9) は、所有の 3 格に関係節がついた例としても論じうるであろう (→ 138p)。

なおこの詩は、内容的には「バラと恋」を讃える詩だが (ただし失恋をも歌う)、「サッポー韻律」と呼ばれる形式に基づくために、「サッポー頌歌」*Die sapphische Ode* と題されている。同韻律の詩脚は、— | — | — | — | — (第 1 ~ 3 行) / — | — | — (第 4 行) である。(*)

(*) サッポーの有名な詩を引用する。サッポーはレズビアンであったが、この詩で熟れたリンゴは愛する女性の隠喩と思われる (杉田③ 154-5)。

So wie ein reifender Apfel sich rötet am oberen Aste' oben am oberesten hoch, / den die Apfelpflücker vergaßen, / nein, sie vergaßen ihn nicht, / nur konnten sie nicht ihn erreichen, ... (sic) (Sappho, *Roter Apfel*)

うれたリンゴは/赤くなる,高い枝で,/その上のさらに高い枝で;/そのリンゴを,リンゴ摘みは忘れてしまった,/いや,それを忘れたのではない,/ただそれを〔心理的に〕手にすることはできなかつたのである;/ちょうどそのように,...

付属物 肉体部位・精神活動とは別に、当時者の付属物を所有の 3 格で修飾することがある。

(10) Und die Birken streu'n mit Neigen/ ihr [=Luna] den süßten Weihrauch auf.
(Goethe, *Die schöne Nacht*)

そして白樺は頭をたれ/ 彼女 [=月] の甘い香煙をふりまいている。

付属物といつても、その所有者は「月」Luna である。あるいは Luna は「月の女神」を指しているかもしれない。アナクレオン風の詩にはよくあることだが、ギリシャ・ローマ神話の神や妖精 (Nymphe → 杉田③ 299) を登場させつつ、それによってあるタイプの人々を指すことがある。例えば次の例――

(11) Sing mir den Amor nicht wach! (Claudius, *An die Nachtigall*)

歌を歌って私のアモールを起こしたりしないで!

これは利害の3格ともとれるが、所有の3格という解釈も十分可能である。4格 + 4格補語+singen は「歌って […⁴を…に] する」という意味だが (ア'singen')、この語は一般に4格はとっても3格はとらない。だから上の mir は3格目的語ではなく3格の他の用法と解しうるが、単に「～を私のために起こさないで」というより「私の～を起こさないで」の方が、感情吐露の詩文としては好感がもてる。その限り、関心の3格とも解しうる。それに、この詩の出だしは Er liegt und schläft an meinem Herzen 「彼は私の胸に横たわり眠っている」であるし、「彼」と「私」との関係は明瞭である。

なお定冠詞 den は、一般に所有の3格につく定冠詞なのか、「アモール〔クピドー〕のような人」という意味でのそれなのかは、判然としない (アモールについては杉田③ 287p)。だがおそらく後者の意味であろう。格を明示する必要があつても、著名な名前にはあえて冠詞をつけないことも多い上に (*), den Amor は「[アモールのような] 恋人」という意味では、一般名詞扱いして使われるからである。シーベルトがハイネの詩に付曲した「アトラス」*Der Atlas* は有名だが、これは実際は「アトラスのようないい人」を含意する。

(*) シラーについて Schiller³ seine Mutter という例文を見たことがある (桜井 420)。なおこれは、「3格+所有冠詞〔代名詞〕+被修飾語」という所有表現である (→ 116-117p)。

[2] 所有の3格の後置

所有の3格は、被修飾語の後に置かれることもある。桜井和市氏が『ドイツ広文典』で上げている5例ではすべて3格は前置されており、この点では少し問題を残している (桜井 432)。

1) 後置——身体部位にかかる例

被修飾名詞の直後に所有の3格が置かれることもあるが、そこから離れた箇所に置かれる場合もある。後者の場合は、なかなかまとまりある意味がつかみにくい。ここでは、被修飾語が一般の格 (ここでは1格) の場合と、前置詞格の一部となつた例をあげてみる。

(1) Da gingen die Augen mir über,/ da ward es im Spiegel so kraus, (Müller, *Tränenregen*)

そこで僕の 目から涙があふれ出,/ そこで鏡〔水面〕にさざ波が立った,

(2) Wann, o lächelndes Bild, welches wie Morgenrot/ durch die Seele mir strahlt,

find' ich auf Erden dich? (Hölty, *Die Mainacht*)

ああ朝焼けのように僕の 魂を通じて光り輝く, 微笑んだ姿〔絵のようないい君〕よ, 僕は地上でいつ君に出会える?

いずれも、所有の3格が被修飾語の直後に置かれる作例だが、所有の3格が立て続けに3つ並ぶ例を次にあげる。3つとも所有の3格は前置詞格にかかる。第2,3例(原文第3,4行目)

では、所有の3格と前置詞が前置されるため、所有の3格と被修飾語は離れている。また第1, 2例（原文第2,3行目）は、前置にせよ後置にせよ被修飾語として「身体部位」（Herz, Hand）が使われているが、次の第3例（原文第4行目）は、身体部位とともに前述した「付属物」（Degen）の例である。

(3) Das Ehrenkreuz am roten Band/ sollst du auf s Herz mir legen;/ die Flinte gib mir in die Hand,/ und gürt' mir um den Degen. (Heine, *Die beide Grenadier*)
 赤いリボンのついた十字勲章を/ 俺の 心臓の上に置いてくれ;/火打石銃を俺の 手にもたせ,/ 俺の 剣のまわりにくくりつけてくれ。

若干離れた例 以上いずれも所有の3格は、後置の場合には、被修飾語の直後に置かれていたが、文法的な他の要素のために両者が若干離れることもある（いずれも身体部位の例）。

(4) Die Augen täten ihm [=Königl] sinken, / ... (Goethe, *Es war...*) (*1)
王の 眼は沈んだ, / ...
 (5) Tränen in den Wimpern gar so oft ihr [=der alten Mutter] hingen. (Heyduk, *Als die alte Mutter...*)
 涙がしばしば老いた母のまつ毛にかかった [流れた] .

ところで後者では、今まで特に言及しなかったが、所有の3格と被修飾語とが若干離れていようと、それが Kolon（同じ意味のまとまり）内にあれば比較的容易に結びつけうる。だが、両者が Kolon の外にある、言いかえれば Zäsur（「！」, Kolon を区別する記号）(*2) によって区切られると、にわかに両者を結びつけられない可能性がある。

前者(4)では、文全体が同じ Kolon に属している。だが後者(5)ではそうではない。Tränen in den Wimpern が一つの Kolon となり（その右に Zäsur を置く）、その後に gar so oft ihr hingen が、別の Kolon としてまとまりをなしている。つまり――

(5) Tränen in den Wimpern ! gar so oft ihr hingen.

なお後者(5)では ihr は den Wimpern にかかるが、それは自ずと Tränen との結びつきも示唆するであろう。文法的に言えば、Tränen は定冠詞を欠くため、仮に結び付けられてもそれは弱いものにならざるをえない。

(*1) ここでは tun が助動詞的に使われている。また tätan は、接続法ではなく直説法である（杉田② 98-100）。

(*2) Zäsur とは「詩行内部の句切れ」、Kolon とは「Zäsur により区切られた語集団」（山口 192-3, 183）である。

行またがり(1) 被修飾語が所有の3格の比較的近くに置かれる傾向のある後置の場合も、両者が単に離れるのみか「行またがり」で現れると、戸惑うことが多いであろう（行またがりに関わるため、実際に改行して示す。訳はその下におくが、ドイツ語とは正確には対応しない）。

(6) Wir lieben uns, sie [=die Unbekannte] streicht das wirre Haar
mir aus der Stirn mit Händen wunderbar. (Hesse, *Mon Rêve familier*)

彼らは互いに愛し合っており、彼女〔=その見知らぬ女性〕は乱れた髪を、
僕の〔乱れた髪〕を、手で額から上手にかき上げてくれる。

mir はひとまず das wirre Haar にかかると解してよいが、同時にこれが der Stern にもかかると見てもさしつかえないだろう。文字として書き下ろす場合もふくめて、人は数式のような厳密な観念の流れに身をひたしているのではないから。

行またがり(2) 今見た行またがりの作例(6)では、後置された所有の3格は、改行の直後に置かれていた。だからまだしもつながりが眼・意識に残りやすい。だがそれがあるて离れると、理解は困難になる。

ここでは *mir* は、前行の *den berauschten Blick* にかかっている。あるいは *mir* は同行の *eine düst're Wolke* (1格 = 主語) にかかるのだろうか。所有の3格が定冠詞をもたない語句にかかるのは不可能ではないと思われるが、第一義的にはやはり定冠詞つき名詞との対を考えるべきであろう。また意味上不可能とは言えないとしても、「私の暗い雲」という実体があるわけではないため、*eine...* にかけるのには違和感が残る。

とはいっても、形式上、「所有の3格」が定冠詞のつかない被修飾語にかかる作例が、確かに見られる。

(8) Niemand ahnet, daß von Schmerzen Herz im Herzen/ grimmig mir zerrissen ist.
(Goethe, *An Mignon*)

誰も感じていない、痛みのために私の心のうちの心が激しく引き裂かれていることを。

この *mir* の被修飾語が何かは、むずかしい。所有の 3 格の被修飾語が一般に定冠詞をとるものなら、これは *im Herzen* の *Herz(e)* にかかると判断されるが、内容上はその前の（冠詞類のつかない）*Herz* にかけたい。三浦鞠郎氏はここを「胸のなかが」と訳すが、注記はない（三浦 83）。あるいは「なか」とは、‘*im Herzen*’の *im* ではなく、その前の *Herz* の訳のつもりだろうか？

「私にとって」と利害の3格で訳すこともできる。その場合でも、全体として実質的な意味は変わらない。

2) 後置——身体部位ではない例

(9) Ich blick' in mein Herz und ich blick' in die Welt, / bis vom schwimmenden Auge
die Träne **mir** fällt.... (Geibel, *Die Sehnsucht*)

僕は僕の心をのぞき 世界をのぞく。/[悲しみに] ひたる目から、僕の涙が落ちるまで....

(10) Träume... von der heiligen Nacht, / da die Blume seiner Liebe / diese Welt zum Himmel mir gemacht. (Dehmel, *Wiegenliedchen*)

夢をご覧... お前のお父さんの愛の花が/ この世を私の天国にしてくれたあの聖なる夜の夢を。

前者(9)では、先の例と同様に、mirは内容的にも文法的にもAuge/ Träneのいずれにもかかりうる。だが私は、所有の3格を「涙」にこそかけて読みたい。人の悲しみを表す兆表となるのは、「目」であるより涙であろうから。それを通じて「僕」の悲しみも、よりクローズアップされるはずである。もちろん涙は目から出るのであるが、涙に言及するだけで当事者の悲しみは十分に伝わる。

しかもここで目Augeは、「[悲しみに] ひたる目」 das schwimmende Augeとされるが、原詩——ここにはシューマンの手が入っている——ではただの das Auge（前置詞格 vom Auge）であり、一方涙は die brennende Träne「燃える涙」だったのであるから、少なくとも詩人にとっては、mirはそうした涙にこそかかるであろう（ただしこれに付曲したシューマンが語を書き変えたという事実を見ると、彼はmirをAugeにかけたのかもしれない）。

後者(10)では、mirを diese Weltにもかけてみたくなるが、やはり dem Himmelにかけるのが内容的にもまっとうであろう。なお seinは、「子守歌」Wiegenliedchenの聞き手である子どもにとっての父親をさす（ちなみに破線を引いたdaは関係副詞である）。（10）は、性的モラルに非常に開放的だったデーメルのものである。（10）のような言い回しが子守歌に出るところが、19世紀末に起きた性認識の転換を象徴的に示している。

所有代名詞との対比 特に論ずることはないが、ためしに、所有の3格が所有代名詞（所有冠詞）による一般的な所有表現と対比されている例を、あげてみたい。

(11) Die Augen starrten ihm, die meinen wurden klein; (Weisse, *Der Zauberer*)

彼の目がじっと見た、私の目は小さくなつた;

* * *

人称代名詞の以外の代名詞の例

以上の例では、冒頭のレーナウの作例をのぞけば、3格はすべて人称代名詞であったが、それ以外の代名詞が使われる場合がある。疑問代名詞、指示代名詞、関係代名詞、不定代名詞、再帰代名詞がそれである。所有代名詞（所有冠詞）の例もあるが、これについては後述する（→ 137p）。

疑問代名詞

(12) Ich weiß nicht wem(*)/ löst es [=etwas zu klein] die Seele los... (sic) (Rilke, *Da neigt sich...*)

とても小さな物によって、誰の/魂が解き放たれるのか、分からぬ...

(*)wemは不定代名詞の可能性もある。その場合は、「とても小さな物によって、誰かの魂が解き放たれるものなのか、分からぬ」といった意味である。

指示代名詞（関係節+指示代名詞）

(13) Und **wem** sie [=eine alte Geschichtel just passieret, / **dem** bricht das Herz entzwei. (Heine, *Ein Jüngling liebt...*)

こうした物語がふりかかる男の心は、真っ二つに裂けてしまう。

この例では所有の3格である指示代名詞 dem にかかる関係節全体が、動詞 passieren の目的語たる3格の wem で導かれるため、口調が良い（wem のみ下線なしの太字で示す）。この種の関係代名詞・所有代名詞のつながりは、ことわざで見られることがある。（14）がそれである。次の（15）に見るような民謡調の詩にも、類例が見られることがある。

(14) **Wem** das Herz voll ist, **dem** geht der Mund über. (野本 128)

心が一杯な人の口はあふれ出す。

(15) **wem** die Strahlen scheinen, / **dem** trocknen Tränen schnell! (H.Schmidt, *Sommerabend*)

〔月の〕光を受ける人の涙はすぐ乾いてしまうのよ！

以上3例とも wem..., dem... の形をとるが、所有の3格は dem およびそれにかかる関係節であって、関係節が wem から始まる必要はない。次のように wer..., dem... の例文も、（関係節+）指示代名詞の作例として取り上げうる（wer のみ下線なしの太字で示す）。

(16) **Wer** die Wahrheit geigt, **dem** schlägt man die Fiedel auf den Kopf. (野本 136)

バイオリンで真実を語る人の頭はバイオリンで打たれる。

ここで所有の3格 dem は den Kopf にかかると解したが、これを収録したことわざ集編者の野本祥治氏は、die Fiedel にかけているようである。「そのバイオリンで」と訳している（同前）。いずれがよりふさわしいかは、このことわざの解釈と関連する。

（16）の意味が、「何らかの方法で真実を語ると、同じ方法で報復を受ける」ということなら、主文に die Fiedel はなくともよいように思われる。だがあえてこの語が置かれたということは、主文でこの語が重要であることを意味しており、そのかぎり、所有の3格をこれにかけることに意味があると言えるかもしれない。

だが副文にはこの語はない。そこでは geigen と言う言葉が使われるだけである。だが geigen には、比喩的に「忌憚なく言う」の意とされ（岩波）、geigen の代わりに sagen を用いることもできると記した辞書もある（相良大）。だとすれば、主文で、頭に打ちつけられるとされる die Fiedel も比喩と考えるべきであろう。その場合は、主文で語られるのは「同じ方法で報復を受ける」ということであって、手段が当事者の所有物であるかどうかは関係ないと判断すべきであろう。

こうした意味で、所有の3格はあくまで den Kopf にかかるのであって、die Fiedel にかかるとする根拠は薄いと感じられる。

関係代名詞

(17) Aber ist's ein Müder... **dem** ein treues Tier/ einzig ließ den Glauben an die Welt

nicht rauben... (Seidl, *Das Zügenglöcklein*)

でもそれ〔敬虔な者〕が... たった1匹の忠実な動物のおかげで、世の中への〔その〕信頼を／奪われなかつた苦難者なら...

ひとまずこの3格を「利害の3格」として扱つたが、内容的にこれを「分離の3格」とすることも十分に可能である。所有の3格と分離の3格との相違は、前述のように、けつときよくは相対的なものである。

この詩は、世の人々に対するザイドルの暖かい想いがこもつたすばらしい詩である。この詩については、次項の「分離の3格」の項であらためてとりあげる（→ 141p(5)）。

不定代名詞

(18) Ach, meine Sonnen seid ihr nicht! Schaut Ander'n doch ins Angesicht! (Müller, *Die Nebenonne*)

ああ、お前たちは私の太陽ではない！何しろお前たちは別人の顔に目をやっているから！

ここで太陽 Sonne には、ihrとともに複数形が使われている。それは、恋人とその母親の顔を、本来の太陽とともに、幻日 Nebenonne のように、空中に見ているからである。ちなみにこの詩では、その幻日が消え去ったと述べており、「私」の絶望感を示している。しかもついでに本来の太陽も消えてしまえばいい、とまで言うのである。

後半の第2行を筆者は理由の意味で訳したが、定動詞倒置 + doch はしばしばそうした意味をもつ。第2行を素直に命令形と見なす人もいる。その可能性もないとは言えないが、それでは第1行と第2行とのつながりが切れてしまう。

Ander'n は、正確には名詞化不定代名詞である。「別人」云々とは、恋人とその母親の意識が他の男性に向いていることを指しているのであろう。

再帰代名詞

再帰代名詞が所有の3格として使われる場合もありうる。寡聞にして詩からの的確な作例を提示できないため、文献・辞書類から例をあげるにとどめる。

(参) Ich putze mir die Zähne. (成田他 134)

私は〔自分の〕歯を磨く。

ただしそうも *putzen* が3格の再帰代名詞を取る例をあげていない辞書もあり、解釈は別れるかもしれない。ある辞書には、再帰代名詞 *sich* の用法として、「1 ② 〔3格で〕（所有・利害・関心を表して）自分自身の；自分自身のために」という項目で、

(参) Er wäscht sich die Hände. (ア‘*sich*’)

彼は〔自分の〕手を洗う

をあげる。これは当記述のように、状況によっては利害の3格と解して「彼は自分のために手を洗う」という意味にとるべき場合もあろうが、一般には「彼は自分の手を洗う」の意であり、*sich* は所有の3格と解すべきだろう。

B, 所有の 3 格 = 名詞

3 格が名詞の場合

以上の例では所有の 3 格は、本節冒頭の Lenau の作例を別にすれば、前置・後置の例を問わず代名詞だったが、これが名詞の場合も見ておく価値がある。人称代名詞のなどの場合と比べて、名詞だとそれと気づきにくいようである。ここでも、[1] 先置される場合と、[2] 後置される場合を分けて扱う。所有の 3 格が被修飾語に先置される例をまずあげる。

[1] 所有の 3 格の先置

(1) ihr [Bächlein(pl.)] macht meinem Schläfer die Träume so schwer. (Müller, *Des Baches Wiegenlied*)

お前 [= 小川] たちは私の眠る友人 [眠る人] (*)の夢を ひどく重苦しいものにしてしまう。

mir や dir などは、見なれると割合たやすく「所有の 3 格」であることが分かるが、名詞による表現は数多いため、にわかにその文法的性格が判断できないことがある。

以下の 2 例では、被修飾語は前置詞格の一部である。それも手伝い、また文の構造上の事情からも、所有の 3 格と被修飾語との間に他の語が入り込んで間隔が広がるが、前置詞格の場合 (中でも in + 4 格) は、むしろ 3 格名詞を所有の 3 格と理解しやすいとも言える。

(2) Die Klänge schleichen der Schönsten/ sacht in den Traum hinein (Kugler, *Ständchen*)

その調べは [一番] きれいな子の/ 夢に そっと入りこむ

(3) Doch kaum das grause Wort verklang, / dem König ward's heimlich im Busen bang. (Heine, *Belsatzar*)

だが恐ろしい言葉が響き渡るとたちまち / 王の 胸 の内で密かに不安が生じた。

(*) Die schöne Müllerin の主人公は恋に破れて入水自殺をする。そのために、その友である小川が当人のことを「[永遠の眠りを] 眠る人」と呼んだのである。

所有冠詞が使われる例

なお先にザクセン 2 格との関連で、dem Vater sein Hut という独特の表現を紹介したが (116-117p)、その例では、冒頭の名詞が所有の 3 格として用いられる。次の作例は先に引用した Uz の詩だが (117p)、ここであらためて引く。

(4) den Fluren kommt ihr frisches Grün, / und Wäldern wächst ihr Schatten wieder. (Uz, *Gott im Frühling*)

野の 新鮮な緑は 目ざめ, / 森の 影は 再び育つ。

所有の3格が2つ並んだ例 「前置」のケースをあげる最後に、所有の3格が2つ並んだ例と、所有の3格に分詞構文がついた例をとりあげてみる。

(5) Sie [=die Quellen] singen der Mutter, der Nacht, ins Ohr, / vom Tage, / vom heute gewesenen Tage. (Mörike, *Um Mitternacht*)

泉は母の, 夜の [夜である母の；母である夜の] 耳へと歌っている, / その日のことを, / 今日過ぎ去った日のことを.

ここでは、後の名詞 *Nacht* が前の名詞 *Mutter* に対して同格——これは通常の意味である——で置かれている。いずれも3格である。詩人は「夜」について述べ、それが与える安らぎを「母」という比喩で表現しているのだが、一見すると構造は逆である。「母」の方を「夜」という同格名詞を置くことで説明しているように見える。だが何の前提もなしに「母」に言及することで、けっきょく「夜」の暗喩を提示しているのであろう。

語のならびには一瞬とまどうが、そうした意味のつながりは比較的分かりやすいと判断される。だからこの2語の「所有の3格」としての役割も、*ins Ohr* とあいまって、分明である。なお、*ins Ohr* の前のカンマは、*der Nacht* が *der Mutter* と同格であることを示すために、*der Nacht* の前後にカンマが置かれた結果である。

所有の3格に分詞構文がついた作例は、すでにとりあげた。130pの(9)がそれだが、念のためその一部を再度引用する。

(6) ... doch auch dir, bewegt im Gemüt..., / tauten die Tränen. (H.Schmidt, *Sapphische Ode*)

... でも ... 心で悲しんだ [流した] あなたの涙も, / 露となって流れた.

ここで、*dir* の後の *bewegt im Gemüt...* は、*dir* にかかる分詞構文である。*bewegt* から始まるという語順も含めて分かりにくいが、前記のように、この分詞構文が次の関係節に由来すると分かれば、文の構造は比較的よく理解できるであろう。すなわち、...dir, die du im Gemüt...bewegt wurde, / tauten die Tränen. がそれである。

[2] 所有の3格の後置

以上は所有の3格=名詞が先置された例である。そう多くはないようだが、後置の例も時に見られる。私が出会った1例をあげてみる。

(7) Ach, der Flügel brennt dem Kind! (Brentano, *An dem Feuer...*)

ああ羽が, / 子どもの [羽] が燃えている!

〈4〉 分離の3格

短い詩句の中に出る名詞(句)の3格は、意味が多義的でわかりにくいことが少なくない。作例を目にすると機会が少ないと、特にそうである。これまで見たうち、例えば「関心の3

格」の作例はそう多くはなかったが、「分離の3格」（剥奪あるいは脱離の3格と言う研究者もいる）もまた同様である。

そもそも日本で出回るドイツ文典では、分離の3格は特別に扱われていない（s. 桜井、塩谷）。扱われたとしても、例文に見られる動詞自体が分離の意味を含んでいて、その限りで3格を「3格目的語」扱いするだけのことも多い（*）。

（*）3格支配と明示する文献も少なくない（s. 中島 78, et. (3) *abnehmen* 「～(3)から取り去る・奪い取る」）。

3格の「奪格」的な機能

こうした傾向は、やむをえない部分がある。私たちは3格というと「間接目的語」である、つまり日本語の「…に」にほぼ妥当する、といった説明ですませることが多い。ドイツ文典にも同様の傾向が見られることがある。もちろん、限られたスペースで、しかも導入的な箇所で、3格全般について抽象的に論じることは難しいし、また読者の理解を困難にするととも言えるが、いわば、インド・ヨーロッパ語の「奪格」的な意味が、奪格そのものではないが（ここでは通時的な認識が問題なのではない）、奪格が担った多様な意味・機能のうち「…から」という意味が、Nhd.の3格に見られると解してもよいのではないだろうか。

以下の「分離の3格」の作例を見ればわかるが、あえてこうしたカテゴリーを設けなかったとしても、やはり動詞と結びついた「3格目的語」のうちに、奪格的な意味は含めうるのではないか（*）。だが、あいまいに理解されがちな「3格目的語」の何であるかを理解するためにも、こうした概括はなされてもよいように私には思われる。

以下少しく、私の眼から見て「分離の3格」と呼びうる3格についての作例をあげる。

（*）塩谷饒氏は3格についての導入部で、3格目的語について、簡単に、「〈…から〉と訳せることもある」と記すが（塩谷 327）、こうした理解はドイツ語理解そのものにとって重要である。

3格の奪格的意味：ausの省略

3格目的語が奪格的な意味を有するということは、換言すれば3格が、aus+3格の意味をもちうる、ということである。実際詩を見ていると、そのように解すべき作例に出会うことがある（以下、分離の3格は下線を引いて太字で示し、分離するものを表す語には下線を引いた。後者は、その語が所有の3格では被修飾語となる点も考慮した）。

（1）…Vogelsang und Silberquell, / ist auch manches Lied entsprungen/ meinem Busen, frisch und hell. (Kerner, *Sehnsucht...*)
… 鳥のさえずり、銀の泉、/ また多くの歌が生じた、/ 私の胸から、新鮮に明るく。

ここで使われた動詞 *entspringen* は、3格をとることがある（ア）。その3格は、「…から」という意味を有すると判断される。アクセスには *Die Geschichte entsprung [aus] ihrer Fantasie*、「その話は彼女の空想から出たものだ」という例文がのるが（ア‘*entspringen*’）、

言いかえれば、3格+entspringnと、aus 3格+entspringenのどちらの表現も、可能だというのである。その限り、(1)の *meinem Busen* は、不明瞭とはいえ「…から」の意を内在的にもつとするか、あるいは（その意味が不明瞭なだけに）ausが略されたと見なしてそれを補うとするか、そのいずれかによって解釈されるべきであろう。

(2) *So hab' ich wirklich dich verloren? / Bist du, o Schöne, mir entflohn?* (Goethe, *An die Entfremde*)

それでは実際僕はあなたを失かったのか？！ あなたは、ああ美しい人よ、私から 去ってしまったのか？

これは後述するように興味深い例である。分離の3格と見るにせよ所有の3格と見るにせよ（ただし所有の3格ととて「私のあなた」と読むのは、少々無茶であると感ずる）、3格と被修飾語とが、ともに代名詞（ここでは人称代名詞）である。

ところで、3格+entfliehenはふつうの表現である。fliehenだけでもそうだが、ent-がつぐためにさらに「逃れる」の意味が強められ、その場合3格目的語をとる（ア）。例えば独和大では、この形の例文がいくつものるが、他方で同辞書には、aus dem Gefängnis～「脱獄する」（捕らわれから逃れる）という文例も見られる（大‘entfliehen’）。

これを見る限り、少なくとも entfliehenについては、3格と、aus+3格は、同一もしくは類似した意味を担っていると、判断しうると思われる。つまり、entfliehenに結びつく3格には、ausの意味が備わっていると言えよう。

ちなみに、このmirには、利害の3格のニュアンスもあるように感じられる。去って「しまった」と訳したのはそのためである。

なおこの詩は3連よりなるが、それぞれの冒頭に so が置かれている。それぞれ含みが異なるが、(2)では、起きた事態をばくぜんと受けて余韻を感じさせる（→杉田③ 217-8p）。

ent-という前綴りをもたない語

以上に ent-という非分離前綴りをもつ動詞との関連で使われ、奪格的な意味を有する「3格目的語」（3格）の作例を見た。だが ent-という前綴りをもたなくとも、「…から」という意味の3格を伴うことの多い語もある。

1, nehmen

(3) *Nimm ihr nicht der Tage Frieden, und der Nächte Schlummer nicht!* (Gotter, *Pflicht und Liebe*)

彼女から 日々の平和を奪わないでください！ また夜ごとのまどろみを〔も〕！

nehmenは多様な意味をもつ語だが、そこには「…から…を奪い取る」という意味が含まれる。ここでは nehmenはむしろ、abnehmenの代替語と解してさしつかえない。詩人は韻律等の必要上、語を短縮させて用いる（特に分離・非分離前綴りを略すことで）ことがある（→杉田② 134以下）。

さて、剥奪するの意での *nehmen* (abnehmen) は、3格目的語をとるが、これはこうした用法における3格は分離の3格とも称しうる。なお(3)では、ザクセン2格が2度登場する (*der Tage, der Nächte*)。

2, *rauben*

以下の2例で使われているのは、*nehmen* 以上に明確に剥奪の意味を有する *rauben* である。

(4)...der Liebe süße Habe/ wird keinem nicht geraubt—— (Novalis, *Nachthymne*)

… 愛の甘い賜物は / 誰からも 奪われない ——

(5)Aber ist's ein Müder...,dem ein treues Tier/ einzig ließ den Glauben/ an die Welt nicht rauben... (Seidl, *Das Zügenglöcklein*)

でもそれ [= 敬虔な者] が… たった1匹の忠実な動物のおかげで [... が その者から], / 世の中への信頼を / 奪われなかつた苦難者なら...

直訳：でも、それ [敬虔な者] が苦難者なら、たった1匹の忠実な動物が、その者から、世の中に対する信頼〔心〕を奪わなかつた苦難者なら… [たった1匹の忠実な動物のおかげで、世間にに対する信頼を失わなかつた苦難者なら]

前者(4)では、不定数詞 (あるいは不定冠詞類) たる *kein* が、不定代名詞の形で、分離の3格として用いられている。あるいはこの3格は、受動態における行為者の主体を示すために、いわば *von...* のニュアンスで使われた可能性もないとは言えない (→ 147p 以下, 3格の具格的機能)。だが、内容的にはやはり「誰からも」という含意の3格目的語あるいは分離の3格と捉えるべきであろう。*kein* が含意するのは、先にも論及したが (→ 91p)、*wer liebend glauben* 「愛しつつ [愛を] 信する」者だとすれば、それは *rauben* の主体ではなく、*rauben* される者ととらえるべきであろう。

なお、第1行では、被修飾語に形容詞のついたザクセン2格が使われている。

後者(5)では、関係代名詞が分離の3格として使われている。それだけに、しかも関係節が長いために、解釈に困難を覚える学習者も少なくないかもしれないが、(5)は含蓄の深い詩文であるため、ぜひともその含意を理解してもらいたい。

以上で使われている動詞は、*rauben* である。なるほどこれは、3格目的語をとる例が多い。だが、*rauben* は相手から「奪う」「強奪する」という意である以上——ばくぜんと「3格目的語」と言ってすませるのではなく——明確に分離の3格 (ここでの文脈からすると「剥奪の3格」) と規定した方が、ドイツ語の理解がすすむと私には思われる。

ところで後者(5)で作者のザイドルが念頭においているのは、どういう事態であろうか。この「苦難者」が、1匹の動物 (例えば病に苦しんでいる犬) をかいがいしく看病したのか、危機に瀕した動物の命を救ったのか、あるいはむしろ『フランダースの犬』に見るように、動物 (犬) が示してくれる情愛に心うたれて、ひいては人間 (世間) への信頼を失わなかつたということなのか。いずれにもとりうるが、いずれの場合でも、この3格は、「分離の3

格」と、あるいはよりはっきりと「喪失の3格」「剥奪の3格」等と呼ぶべきであろう。なおもちろん、ここでもこの3格を、所有の3格と捉えることも可能である（→136p）。

3, sterben

(6)denn wirklich bin ich gestorben der Welt.// Ich bin gestorben dem Weltgetüm-
mel,/ und ruh' in einem stillen Gebiet! (Rückert, *Ich bin der Welt...*)
 なぜなら私は実際世の中から 死んだのだから.// 私は世の雑踏から 死んだ [=死んで雑踏から消えた],/ そして静かな領域で安らいでいる！

sterbenには、「利害の3格」や「関心の3格」などを別とすれば、一般に3格をとる用法はなさそうだが、(6)に出る3格 *der Welt* および *dem Weltgetümmel*は、ひとまず「分離の3格」と解しうるよう見える。私はいま、**sterben**という語を意識して文のつながりを想定しているが、だが3格にこめうる意味は多様でありうる。

「世の雑踏」という語句自体いろいろな含みをもちうるが、それと「死」との関係も多様でありうる。総じて格および前置詞は語と語の関係を示すが、そうだとすれば、格（ここでは3格）の用法と結びつきうる限りで、各種前置詞の配置可能性を考慮してみる価値がある。つまり詩を読む際、独特な関係を示す前置詞が省略されていないか、と考えてみる価値はある。詩人は、韻律等に配慮しつつ、ギリギリのところでそうした作法をとる場合がある。

これまでも3格目的語に *aus* を補った例があったが(139-140p)、ここではむしろ *an* を補って読む誘惑にかられる。*an* は原因を示す前置詞である（これとの3格との関連はすぐ述べる）。そうとれば、2行目の [an] *dem W. sterben* は「世の雑踏で〔が原因で〕死ぬ」という意になるはずである。

Ahd.では、「与格 [=3格] 形の用法」のうちに、「因由の状況語」としての働きがあつた（高橋95-7）。問題は、詩人ははたして *dem Weltgetümmel*を、例えばそうした意味をこめて用いていいかどうかである。

ここでは、通時的な推移・変遷を通じて Ahd.のそうした用法が Nhd.に残ったかどうか（多分そういうことはない）を問題にしているのではない。そうではなくここで問題は、Ahd.における格の含意が、Nhd.を用いる詩人によって、固有の表現にこめられていないかどうか、である。

あるいは、ここでは *auf* の意味をこめることもできる。すると、[auf] *dem Weltgetümmel sterben* は、「世の雑踏中で〔にいて・において〕」という意味と解しうる。後者の *auf* は、*auf dem Schlachtfeld sterben* 「戦場で死ぬ」（大‘sterben’）などに見られるように、場所を示す *auf* である。Ahd.では、「与格形の用法」のうちに「空間の状況語」の意味が含まれていたが（高橋96）、その事実をはたして詩人が重視しなかったであろうか。安易にこの回路で詩を理解することに慎重でなければならないが、そうした作法が取られる可能性は知っておいてよいであろう。

だがそれでも、一般的な3格目的語の用法からすれば、*der Welt* にも、*dem Weltgetüm-mel* にも比較的無難にこめうる意味は、やはり「奪格的」意味、「分離の3格」としての意味であろう。内容的にも問題はない。「死ぬ」*sterben* という語と、「世から」「世の離踏から」という言葉は、コロケーション的にも問題なく結びつく。*Ich bin der Welt abhanden gekommen* 「私はこの世からなくなった・失われた」というこの詩の題とも、それなら整合的である。またこの題の *der Welt* もまた、分離の3格と見なしうる。

分離の3格と所有の3格の相違（1）

ところが分離の3格は、前項で論じた「所有の3格」との区別がむずかしい場合がある。分離する以前に、所有されていたものが——「所有」は廣義において、つまり偶然共存していたものが、明確な根拠なしに自分のものと観念されていただけのもの等もふくめ——「分離」する場合も、少なくないからである。

いくつかの動詞について見ることにする。*entschwinden*, *fallen*, *vergehen* がそれである（以下、所有の3格の場合を考慮して、3格には下線を引き太字で示した。所有の3格と解した場合の被修飾語にあたる語句には下線を引いた）。

1, *entschwinden*——これは *ent-* が示唆するように、分離（消失）の意味を含んでおり、その際、何らかのものが失われる当事者は、しばしば3格で示されるようである。その限り、3格は漠然と「3格目的語」と呼ばれるが、この術語の意味は、これまで論じたように多義的であって誤解が生じる可能性があるため、内容に応じて「所有の3格」、あるいはむしろ「分離の3格」と呼ぶ方が無難と思われる。

(7)Ach, es entschwindet .../ mir...die Zeit (Stolberg, *Auf dem Wasser...*)

ああ、消え失せる .../ 時が 私から

ここで消え失せるのは時間であるが（es は仮主語）（*）、es schwindet mir die Zeit は、「僕の時間が消え失せる」（所有の3格）なのか、「僕から時間が消え失せる」（分離の3格）なのか？——ニュアンスの相違はあるとはいえ、どちらの解釈も可能である。

ただしこの詩は「時間」とは言いながら、夕日が赤く染める湖・池で小舟に乗って水面をすべり行くと、時間感覚が喪失すると記しているので、「僕の時間」というより、「僕から時間〔感覚〕が」云々と語られていると解した方が自然だと、私には思われる。

「僕の時間」とは、与えられた主観的な時間感覚のことだが、「僕から時間が」と言う場合の「時間」は、客観的な実在としての時間、あるいはカント風に言えば人間に共有されている認識上の座標軸・枠組みとしてのそれが含意されており、私には後者の方が、したがって *mir...die Zeit* を「僕から時間が」と読むほうが、この詩の脈絡にふさわしいようと思われる。

(*)一般的には「文法上の主語」と言うようである（桜井143）。だがこの用語は案外分かりにくい。むしろ、英文法で言う「仮主語」を用いる方が理解が容易になるだろう。そう

呼んでもいくつかの表現形式を含みうるが、es の後に、動詞＋本来の主語（名詞）を置いて、事態をいわば脱主観的・客観的に記述する場合に、冒頭の es を特にこの語で呼ぶ。

2, fallen——次の例（これはすでに1度とりあげた）は一見それと同様であるが、内容はもう少し複雑である。

(8) Ich blick' in mein Herz und ich blick' in die Welt,/ bis vom Auge die brennenden
Träne mir fällt,... (Geibel, *Die Sehnsucht*)

僕は僕の心をのぞき世界をのぞく、僕の目から燃える涙が落ちるまで...

最初に記せば、この作例はすでに取り上げた（→133-134p）。だがその際とりあげた詩は、シューマンによって書き換えられた詩である。その場合の解釈はそこで述べたが、ここで詩を原詩に戻した。すると、mirは異なる意味を帯びてくる。

まず記せば、ここで使われた動詞は fallen である。一般に fallen は3格目的語をとる動詞ではない。とはいって、fallen の「落ちる」という意味からすれば、多かれ少なかれ分離あるいは喪失が含意されているため、構文上、「...から」を含意する3格目的語をとる可能性は高い。(8)の例もそう解しうる。

だがここで mir は、訳に見るよう、奪格的な3格というより「所有の3格」ととり、それは die Träne にかかるととる方が自然に見える（前項134pではすでにその観点から論じた）。それは、「僕」が有する、vom Auge「[悲しみに]ひたる目」という涙の源泉（涙が流れ出る器官）のことが、明確に記されており、その限り奪格的な意味を3格に求める必要はないからである。「僕の涙」が、そこから流れ落ちる。

だが(8)は別様にも解しうる。訳に記したように、(8)では mir という所有の3格が、直前の die Tränen ではなくて、その前の dem Auge「目」にかかる、と見ることも不可能ではない。シューマンによる書き換えのように、Augeには特別な修飾語はついておらず、単に身体部位として語られただけだからである。（*）

そしてこの語には von「...から」という前置詞がついている。したがって vom Auge は、(8)においてほとんど冗語とさえ解しうる。mir はそれだけでも「私から」と解せるが、vom Auge がつけば所有の3格としてこれにかかり「僕の目から」と解しうる。そして両者の意味はほとんど変わらない。こうして、mir は所有の3格だったとしても、意味上は分離の3格に近くなる。

独和大には、Der Name ist mir [aus dem Gedächtnis] entchwunden「その名前を私は失念した」という例文がのる（大‘entchwinden’）。直訳すれば、「その名前は私から〔（私の）記憶から〕消えた」という意味である。ここで〔〕内は、mirの代替表現ではなく、この例文から省略可もしくは付加可と見なされた前置詞格である。簡明な表現のために〔〕内が省略されれば、mirは分離の3格であり、この文は「その名前は私から消えてしまった」という意味である。だが、〔〕内が付加されれば、mirは所有の3格であって、それは前置詞格中の dem Gedächtnis にかかっている。つまりこの文は、「その名前は

私の記憶から消えてしまった という意味である。

(8)の mir もまたそのような両様の意味を担っているように思われる。

(*) この見方を前記のか所 (→ 134p) では否定的に扱ったが、ここではむしろ分離の 3 格に 関する理解のために、あえて肯定的に論じた。

3, vergehen——だが次の作例では、3 格 (ihr) はやはり外見的には「分離の 3 格」とも 「所有の 3 格」とも読める。だがむしろ内容的には、「分離の 3 格」とこそ読むべきだと思われる。

(10)...Sie sagt's; da küßt der Zwerg die bleichen Wangen,/d'rauf also bald vergehen ihr die Sinnen (Collin, *Der Zwerg*) (*)

... 王妃はそう言う；そして小人は蒼白の頬にキスをする。/ その後ほどなく、感覚が彼女から [彼女の感覚は] 消え失せる

この詩は、道ならぬ恋に陥った王妃と（宮廷付）小人のことを主題とするバラードであり、以下は、王に命じられ、小人が王妃を船で沖につれだし、そこで毒を服用させるというクライマックスを描いた部分である。それだけに、王妃から「感覚」が、つまり人間的な生を可能にした証する、最も基本的な機能である「感覚」が失われて行くという、生々しい事態こそ、物語の命である。だからこそ、分離の 3 格として読みたいのである。3 格を所有の 3 格と解し「王妃の感覚が ...」としたのでは、生きた人間としてのそうした普遍的機能の喪失という悲劇的な面が、見えてこないのではないか。

(*) ihr は die...Wangen にもかかる可能性がある。だがそれでは内容的に見て、すなわち王妃の青白い頬への口づけと、王妃への服毒によって感覚が失われるという事態は、時間的な段階を追ったものである点を考慮すれば、ihr は Wangen から離れすぎていると感ずる。

分離の 3 格と所有の 3 格の相違（2）

先に分離の 3 格と所有の 3 格とが区別しにくい点にふれたが、両者が明瞭に区別される場合も少なくない。一般に「所有の 3 格」では、被修飾語は定冠詞をとる名詞である（代名詞のこともあるが、そうした例はここではとり上げない）。一方、「分離の 3 格」では、被修飾語はかならずしも定冠詞をとるとは限らない。被修飾語は、定冠詞ではなく、他の語(句)をとる可能性がある。それは（以下、①～③と記す）――

①不定冠詞の場合

(11) Oft hat ein Seufzer deiner Harfe entfloßsen, (Schober, *An die Musik*)

しばしば溜息が/ お前 [= 音楽] のハープから流れ出た、

この 3 格をもし所有の 3 格と解しうるなら、(11) はその被修飾語が定冠詞以外の冠詞類をとる例として記憶に値する。だがその場合、これは「お前のハープのため息が」という意味になるが、それだとコロケーション的な不自然さを感じざるをえない。こうした不自然

さをなくすためには、(11)は「分離の3格」と読むのがふさわしい。

なおここで Seufzer に不定冠詞がつけられたのは、性質強調のためであろう。「音楽のハープ」とは分かりにくい言葉だが、ここで「音楽」は音楽的な観念・美意識であり、「そのハープ」は、その観念・美意識に基づく、形を成した音のつらなりを指すのであろう。その音（一般的な用法ではこれが音楽であろうか）が引き起こす多様な印象・観念のうち、詩人は特に「ため息」を強調したかったようである。詩人は音楽のうちに、ため息ないしそれにつらなる想いを聞きとることで、音楽から最も深く安らぎ・慰めを得てきたようである。

②不定数詞の場合

(12)...Vogelsang und Silberquell,/ ist auch manches Lied entsprungen/ meinem Busen, frisch und hell. (Kerner, *Sehnsucht...*)

…鳥のさえずり、銀の泉、また多くの歌が生じた、/私の胸から、新鮮に明るく。

この作例については前に、3格目的語に、ausの意味が含まれることがあるという点を指摘した際に論じた（→139p）。この作例中の3格を、その機能の点から「分離」の3格と呼ぶのは、少し不自然かもしれない。ここでは、一面では分離ではあるが、むしろ「発生」と呼びたい事態が念頭におかれているからである。先に（同上）、meinem Busenの前に aus をおく、もしくはこの3格自体に aus...が含意されていると解する、のいずれかを採用するよう提案したが（→139-140p）、前置詞 aus の辞書的意味からすれば、「誕生」「由来」「起因」等を含意していると解してもよいかもしれない。

なおここでは定冠詞に代わってとりうる修飾語を「不定数詞」と記したが、近年の研究では、それを「定冠詞類」と見なすことが少なくないようである（ア‘manch’）。それは主に格変化を意識した場合のことだが、意味論上、問題が残らないのかどうか。manchは定冠詞とは同時に用いないとはいえ、不定冠詞とはむしろしばしば同時に用いられる点への配慮が、どの程度になされているかは、検討を要するように思われる。

③所有冠詞（代名詞）の場合

被修飾語に、定冠詞ではなく、③所有冠詞（代名詞）——「所有の3格」の観点からすれば同じ所有主体を指示する、3格のそれ——がつく例について若干記す。

(13) *Mein' Freud' ist mir genommen* (Volkslied, *Innsbruck...*)

私の喜びは 私から 奪われた

ここで「私の喜び」とは、その出典である民謡の題 *Innsbruck, ich muß dich lassen* 「インスブルックよ、私はお前から去らなければならない」が示唆するように、オーストリアの都市「インスブルック」を指す。

ところでこの場合3格mirは、「所有の3格」のように見えたとしても（ただし一般には所有の3倍の場合、被修飾語は定冠詞をとる）、所有関係はあらかじめ *mein* によって明示さ

れているため、特殊な効果を狙ったのでなければ、むしろ「利害の3格」と解すべきであろうか。インスブルックを立ち去る人皆が「喜びが奪われた」という思いにかられるのではなく、インスブルックをこよなく愛する「私」こそが、そうなのであるから。

あるいは「分離の3格」だったとしても、mirは、強調や韻律への配慮等のために置かれた冗語と見なすべきと感じられる。もちろん冗語であろうと、強調のためのレトリックとして用いられるもするから、それ自体に固有の意味があるとは言えるのだが。つまり、全体として私の置かれた立場（この場合はインスブルックからの退去、喜びの喪失）、ひいては私の想い（絶望・無念さ）を際立たせていると言えるかもしれない。

他に作例を2つあげてみる。

(14) ihr [=Vögelein] wollt' meinen Kummer mir stehlen, (Heine, *Ich wandelte...*)

お前たち〔鳥たち〕は僕の悲しみを僕から盗もうとした,

(15) Wenn wir zwei zusammen wären,/ möcht' mein Singen mir vergeh'n. (Eichendorff, *Der Musikant*)

私たち二人がともにいられるなら、私の歌は私から消え去るだろう.

前者の(14)では、自分とその思い=悲しみが、次の(15)では反対に喜びが、際立たされていくように思われる。(14)は恋が成就しないことの悲しみを嘆き、(15)は恋（あるいはもっと広い愛）の成就を喜んでいる。

〈5〉 具格的3格

ここで具格とは、「手段・方法・道具・材料などを表す格」（大‘Instrumentalis’）の意である。つまりその意味は、「ある物をもって」「ある物によって」等々と表現できる（相良②140）。（*）

Ahd.（古高ドイツ語）にはこれがあったが（高橋101-2に古期ドイツ語での実例）、中高ドイツ語では語尾母音の減少にともなってこれが消滅したという（ポーレンツ58）。相良守峯氏の説明では力点が少し異なる。具格は、「古代のゲルマン語に存在して Mhd.〔中高ドイツ語〕ごろまで痕跡を残している」（相良②140）、と。

さて問題は、具格的な意味の通時的な由来・変遷ではない。それに筆者は不案内である。そうではなく、Nhd.における3格の用法には、具格的な意味が含まれる場合があると思われるため、ある種の3格表現の性格づけのためにこの語を用いただけである。ここでは、「具格的」と言う場合の意味の確認のために、Ahd.等の具格に言及し、その用法を参照したにとどまる。

以下、3つの作例をとりあげる。いずれにおいても、登場する3格には具格的な意味が含まれていると筆者は考えるが、言葉を変えれば、手段を示す mit、あるいは（受動態を作る際の用法を考えれば）同じく手段を示す von が省略されている、と表現することも可能であろう（→本章第3節「語の省略」で再度ふれる機会があるはずである）。

(*) 実際には、高橋輝和氏によれば、具格 Instrumentalis は、「時間」「材料」「手段」「引由」「共同」「関係」「比較差」等の状況語になるという、より豊富な意味を担ったようだが、相良守峯氏はこのうち、主に「手段」の意味に着目する。

グロートの「雨の歌」から

(1) welche Wonne,... // oder mit den heißen Wangen/ kalte Tropfen aufzufangen, / und [mit] den neuerwachten Düften/ seine Kinderbrust zu lüften!! (Groth, *Regenlied*)
何という喜びか,...// あるいは熱い頬で! 冷たいしづくを受け止め, / 新しく目覚めた芳香で, / 子どもに帰った私の胸に風をあてるのは!

この詩では、2行目（=本稿での）冒頭に手段を示す *mit* が略されていると私は判断する。1行目冒頭の *welche Wonne,...* の省略箇所にも、同様の *mit* が2度出る（*mit nackten Füßen*「ぬれた足で」, *mit Händen*「手で」）のだが、上に見るように、1行目に三たび *mit* が出る（*mit den heißen Wangen*「熱い頬で」）。

そして2行目の、問題の *mit* は、こうして3度続けて *mit* が出ることから、略しても了解されると見なされたのであろうか。いずれにせよここでは、3格 *den neuerwachten Düften* が *mit* を伴わずに「...で」という手段を示していると見ることができるようと思われる。

ただしそもそもなぜここでは und den... としたのであろう。むしろ全体を支配する詩脚 *Trochäus*（強弱格）からすれば *und* をはさまずに始めから *mit* としてもよかつたのではないか。そう思われるが、ここは *mit* ではなく *und* でなければならなかつたのである。むし暑い夏に、雨とともに暑さをしのぐ方法が書かれているが、その4つの方法の第1-2と、第3-4が対になっていて、第1, 2と第3, 4はそれぞれ *und* で、一方、性格の異なる第1-2と第3-4はそれぞれひとまとめにして、*oder* で結び付けられているのである。つまり、..., und..., oder..., und... という構造の文になっている（左に下線を引いた部分が、第3, 4の方法について記した(1)に該当する）。

なお第4番目の *mit* を確かに略したことは、他の語のケースによって納得できる。上の第1～第4の手段によってそれぞれ「何々をする」という意味で *zu* 不定詞が並べられるが——(1)では *seine Kinderbrust zu lüften*——第2番目は韻律の都合で省略されている。こうした省略を可とする作法が *mit* にも及んだのであろう。

だがそれなら結局この例文は *mit* が略されたのであって、3格の具格的意味とは関係がないと評価すべきであろうか。筆者はそうではないと考える。それは次のような作例が確かにあるからである。

レーナウ「牛飼いの少女」から

(2) Schöne Sennin, noch einmal/ singe deinen Ruf ins Tal, / daß die frohe Felsen-sprache/ [von od. mit] deinem hellen Ruf erwache!! (Lenau, *Die Sennin*)

牛飼いのきれいな娘さん,再びいつか! あなたの叫びを谷に向かって歌っておくれ! 楽しい岩のこだまが! あなたの明るい叫び声で目覚めるように!

ここでの *deinem hellen Ruf* の意味は、3格のどの用法を考えても不自然である。唯一可能なのは、ここに、手段を示す前置詞 (*von* あるいは *mit*) が略されていると解することである。前置詞が略されたのはおそらく、詩脚 (Trochäus) の都合上、頭に前置詞 (弱音) を置けないからである。

ただし(2)に引き続く第2連には——(2)は第1連である——前置詞 *in* が強勢部分に置かれている (*in die Brust den Bergen drang*)。とすると上の例でも、3格名詞句の前に *von* をおくことは、不可能ではない。ただしそのためには、*von* に引き続く *deinem* を *dein'* のように発音するといった、操作が必要となる。それもまた不可能ではないが、これは一般に行われる操作ではない。念のために言えば 114-115p(2)、156p(8) に出るが、これは例外的な作例である。

とすると、ここで *von* ないし *mit* を省略したとしても、あたかもそれがあるかのような意味を上の3格名詞句がもちうる、という理解が詩人にあったと考えるしかないであろう。すなわち Nhd.において、3格には具格的な意味をもつことがある、あるいは少なくともそのような意味を詩人がこめても、決して不自然ではない、さらに少なくとも一定の言語的な背景の下にそれが許される、と詩人が感じていた(*)——それが私の結論である。

なお(2)では、先の(1)と異なり、略されたのは *mit* ではなく、*von* あるいは *mit* であると見なしたのは、次のような作例があるからである：Die Kinder sind von der Musik erwacht 「子どもたちは音楽で目をさました」(大‘erwachen’)。

(*) 私が思いつく典型的な例をあげれば、例えば *Was ich such', hab' ich funden...* (Müller, *Danksagung*) 「求めてきたものを、僕は見つけた、...」; Mai ist kommen, der Winter ist aus! (Müller, *Trockne Blumen*) 「5月〔春〕が来て、冬は去った!」——この過去分詞 *fund*en, *kommen* は *gefunden*, *gekommen* でなければならないが、これはミュラーが、Mhd. の伝統から、*finden*, *kommen* のような、すでに完了的な意味をもちうる語においては、*ge-* (これが完了を示す) を略した形 (要するに *fund*en, *kommen*) を、Nhd. においても過去分詞として用いてよい、少なくともそれは理解されかつ許される、という理解を持っていたということである (杉田① 146, 杉田② 89-90)。

リュッケルト「あいさつを受けよ」から

もう一つ作例を引く。これはかなり有名な例だし、そもそもここに記された表現は、現実のドイツ語として、しかもある程度日常的場面でも使われている (この詩が影響を与えたというより、詩人は単に実際に使われている表現を詩で用いただけなのであろう)。

(3) *Sei [von] mir gegrüßt, sei [von] mir geküßt.* (Rückert, *Sei mir gegrüßt*)

私の〔私によって〕挨拶を受けよ, 私の〔私によって〕口づけを受けよ。

この *mir* は難しい。利害の3格とそれなくはないが、3格が von mir 「私によって」とい

った具格的な意味をもつと解した方が明瞭になる、と言ってもよいように思われる。一般にドイツ語では基本的に、受動態での「行為の主体」は *von* によって、「媒体、手段」は *durch* あるいは *mit* によって示されるとされるが（中島 44）、挨拶をする主体が「私」（私たち）であるとすれば、ここで備わる具格的な意味は、手段というよりは行為の遂行者=主体を含意するものと言うべきであり、その意味で具格という言葉を用いるのは不適切に感じられるが、3格は、ある動作の媒介となるもの（物・者）を広く示す際に用いられるという意味では依然として「具格」的機能〔意味〕を有すると解してよいように思われる（「ある者をもって」「ある者によって」）。（*1）

なお *Sei(d) mir gebrüßt!* は特に詩的表現とは言えない。現在でも口語として使われている。とはいえた場合でも、この熟語は雅語の印象が強いと判断される（大‘grüßen’）。（*2）

(*1) Ahd. には、与格（3格）の機能として、「行為主体の状況語」となる用法があったという（高橋 98）。これが、私がここで想定した *von mir* の意味とどれだけ重なるか不明であるが、またこれが Nhd. の詩人たちにどれだけ理解され、どれだけ類似表現が試みられたかは残念ながら不明だが、なんらかの形での Nhd. 3格への影響を見ることは、不可能ではないように思われる。詩人は、あらゆる「語彙の宝庫」（そこには古風な語・古語も入る→杉田③ 227 以下）から、自らの表現にふさわしい語彙や意味や造語法・構文法（統語法）を吸收しようとするものである。一般的な規範文法が提示する知識だけを下に、詩の意味を理解しようとするのは、おそらく基本的な誤りの一つである。

(*2) *Sei mir gebrüßt!* が「挨拶を受けよ」の意味だとしたら、これに *sein* が使われているのは奇妙ではあるが、命令形の受動ではほとんど *sein* によって表現されるという（桜井 271）。

難題の3格：*auf* の省略？

具格的な意味を3格にこめたとしても、依然として私には不分明な作例がある。以下は具格的な意味をかもし出す作例ではないが、3格の他の何らかの用法を暗示していないだろうか。

(4) *Kein Lorbeer grünte [auf] meinem Scheitel*, (Seidl, *Irisches Glück*)

月桂樹〔の冠〕は僕の頭〔頭頂〕にのらなかつた、

この3格もよく分からぬ。ここでもテキストに補つておいたが、意味上は *auf* があるとぴったりの感じがするのだが。だが *auf* を欠いてたとしも、それがある時と同じような意味をここから汲むためには、要するに *meinem Scheitel* は、「緑の葉を私の頭頂に茂らせる」、その意味で「私の頭頂に緑を与える」といった意味の3格目的語と解すべきなのだろうか。

具格と結びつけると Ahd. の与格（3格）との関連に目をつぶることになるが、高橋輝和によれば、Ahd. の与格には、「空間の状況語」としての用法があったという（高橋 96）。この(4)においてその用法が、自覺的にせよ無自覺的にせよ、詩人の言語使用に影響を与えた

てはいないのだろうか。

問題なのは、少なくとも、客観的にそれが今日の Nhd. にあるかどうかではなく、Nhd. の詩人たちが、Mhd., Ahd. にさかのぼるドイツ語から、何らかの靈感を得た表現法を用いていないのをどうかである。

4, 第4格

4格は、3格に比べると分かりやすい格である。動詞・形容詞に対する4格目的語やその補語としての用法もだが、いわゆる「状況語」(桜井 437) として用いられる各種用法も、分明なものが多い。

状況語のなかでよく出会うのは、場所および時間を表す用法であろうか。ここではそれらの状況語としての用法について、いくらか述べる。

〈1〉 場所の状況語

場所の多様さ

詩では、一般には「場所」と理解されにくい語についても、4格で表現される。ふつう「場所」とは、人がいる場所である。『ドイツ広文典』は、Wege「道」, Pfad「小道」, Berg「山」等々を、また Treppe「階段」などを用いた例文をあげる(桜井 438)。

これは主に人を主体として考えた場合の語である。だが人以外の主体も、直接的にあるいは比喩的な意味で主体(主語)であり、しばしばある場所との関わりで語られる。例えば「涙」にとって、それが流れる「頬」Wange も、「苦しみ」にとって、それが猛威をふるう「胸・心」Brust も、それだけで場所の4格になりうる(以下、主語には下線をほどこし、場所の4格は太字・下線で示した)。

(1)Es fließen heiße Tropfen/ die Wange stets herab, (Platen, *Die Liebe...*)

熱いしづくが流れる/いつも頬を,

(2)Ob auch die herbste Todesqual/ die Brust durchwüte, wonnevoll! (Daumer, *Wie bist du...*)

たとえつらい死の苦しみが/胸で猛威をふるったとしても、喜びにあふれています!

比喩的な意味の場所

純然たる「場所」もまた比喩的な意味で使われる。人が歩むべき「わが道」などとして、しばしば所有冠詞(代名詞)とともに。次の2例は、4格語が Bahn であり、かつ所有冠詞(代名詞)が使われている。

(3)er [=jener Stern] an meinem Himmel,...// Wand'le, wand'le deine Bahnen; (Cha-

misso, *Er, der...*)

私の天にある彼〔かの星〕, ... // 歩んで下さい, 歩んで下さい あなたの道を;

(4) wie seine Sonnen(*1) fliegen, ... / laufet, Brüder, eure Bahn / ... (Schiller, *An die Freude*)

太陽が飛行するように, ... / 行け〔走れ〕兄弟よ, 汝らの道を / ...

前者(3)で「私」は星に向って語っているが、それとは別の「私の天なる星」(恋人)に意識が向かう。それゆえここで「道」は星の軌道としての *Bahn* ではなく、比喩的な意味で用いられている。

後者(4)は、くしくも同じく天体=太陽の比喩が出た後につづく部分である。そのため *Bahn* は同じく直接的には太陽の軌道を意味しているが、それが、作者が「兄弟たち」と呼ぶ人々の歩むべき道の比喩となっている。

なお申し合せたかのようだが、(4)の作者シラーは、3行目冒頭の *laufet* 「〔堂々と〕行け」「走れ」(*2)を、フランス革命後に改定版を出した際、勇ましい雰囲気を和らげようとしたのか、(3)と同様の *wandelt* に変えている(ベートーヴェンはこれを *laufet* に戻した)。(*3)

ところでこの2つのテキストでは、4格語 (deine Bahnen, eure Bahn) には、場所を表す4格の後にしばしば副詞を欠いている。作例(1)では、*die Wange...herab* とあったが、この *herab* がそれである(もちろん文法的にはこれは動詞にかかる)。『ドイツ広文典』では、場所を表す4格6例中の4例に、この種の副詞がつくが、上の(3)(4)では、その種の副詞を欠くために、ここでの4格は、場所を示す4格ではなく、むしろ4格目的語のように見えさえする。

だが、(3)(4)に見られる *wandeln* も *laufen* も基本的には自動詞である故、こここの4格語は4格目的語ではなく、あくまで場所の4格である。いま「基本的には」と書いたが、*laufen*の場合には、自動詞としての「走る・歩く」と同様の意味をもつ他動詞が、知られている。この場合には、*laufen* につく4格語は4格目的語と解されている。通時的には、一般の自動詞につく場所の4格が、*laufen*の場合には4格目的語のように感じられるようになった、ということなのであろう。(*4)

wandeln の場合にも独和大には、(3)(4)を思わせるような、*Die Sonne wandelt ihre Bahn*。「太陽がその軌道をめぐる」という作例がのるが(大‘wandeln’II-1)、同辞典はこれをあくまで自動詞と解している。すなわち *ihre Bahn* は、場所の4格という理解なのである。要するに、場所の4格として多様な表現がなされているが、4格の後に副詞がつかない形の自動詞の場合には、4格目的語が多かれ少なかれ場所の4格のように理解されている可能性があるということである。

(*1) ここで太陽 *Sonnen* は複数形である。一見奇妙であるが、これはシラーが当時の天文学の知識(太陽=恒星)を身につけていたからではない。これは脚韻をふむための便宜である。この行は *fliegen* で終わるが、これと押韻するのは *freudig*, wie ein Held zum

Siegen. 「勇ましく,英雄が勝利に向かうように」という詩行である。(4)を含む詩節は旧約聖書の表現が下になっているが(シラーは案外それに忠実に詩作した)、そこに出る Siegen をこの詩節でも利用し、これと押韻させるために *fliegen* という複数形動詞が必要であり、そのために太陽を複数形 Sonnen にしたのである。

(*2) シラーは旧約聖書を出典としてこの箇所を書いており(ヒルデプラント 195)、そのため *laufet* という語には、あたかも古代ギリシャのオリンピックの走者のように、「堂々と行く」「走る」という印象が与えられている。しかも、次の行頭に *freudig* 「勇ましく」という語が置かれて(4)に続くが、これがその印象を強めている。*wandelt* に変えた際も *freudig* をそのままにしたために、少々不自然になった。なお一般に誤解されているが、*freudig* は「うれしく」という意味ではない(杉田③ 234-5p を参照のこと)。

(*3) シラーは、*An die Freude* の改訂版(1803年)において、フランス革命の現状を意識しつつ、ところどころ表現を和らげた。*was der Mode Schwert geteilt* 「世の習いの剣が断ち切ったものを」を、*was die Mode streng geteilt* 「世の習いが厳しく分けたものを」に変え、また *Bettler werden Fürstenbrüder* 「物乞いは王侯の兄弟になる」を、*Alle Menschen werden Brüder* 「人はすべて兄弟になる」に変える、など。

(*4) だから、例えばアクセスでは、他動詞 *laufen* のか所に、*Die Strecke können wir laufen* 「その距離は歩いて行ける」, *einen Umweg laufen* 「回り道をする」という用例がのる(ア 'laufen' 2 ①)。

無冠詞の場合

以上の諸例では、いずれも場所を表す4格に、4格であることを明示する冠詞類(定冠詞もしくは所有冠詞)がついていたが、私は引用できないが、不定冠詞がつく例ももちろんあります(...*einen Hügel hinauf* 「丘の上へ」)、複数無冠詞の場合もある(*steinige Wege* 「石の多い道を」)。*Berg und Fels* のように連語の場合には、無冠詞であることが多い(以上桜井 438)。

(5) Am frischgeschnitt'nen Wanderstab,/ wenn ich in der Frühe/ so durch Wälder ziehe,/ Hügel auf und ab/ dann... (Mörike, *Fußreise*)
新品の杖について、私は朝早くに森を抜け、丘をあちこちと歩くと:/ すると...

この例では4格名詞 *Hügel* は、連語ではないのに無冠詞で用いられている。それは、第1行に見られる *Wälder* から推測できるように、また桜井氏があげる上記の *steinige Wege* と同じように、やはり複数形だからであろう。*auf und ab* には「上がり下がりして」という意味と同時に「あちらこちらを」という含みもある。そのかぎり、これは前行の *durch Wälder* にもかかっているかもしれない。

なお原詩3行目冒頭に *so* とあるが、これは「(特別に装わず) そのまま [のなりで]」といった意味と思われる(大 'so' I2b)。宮下健三氏はこの部分に「なんとなく」という訳を置いているが(宮下 29)、*so* のこの意味をふまえたものであろう。

場所の4格として使われた代名詞の例

上に無冠詞の例についての作例をあげたが、既述を元に戻す。その前項の主題である、自動詞の場合に使われた「場所を表す4格」として興味深いのは、単に名詞だけではなく、代名詞の例があるという点である。例えば関係代名詞が、場所の4格として使われた例をあげてみる。

(6) Und morgen wird die Sonne wieder scheinen, / und auf dem Wege, den ich gehen werde, / wird uns, die Glücklichen, sie wieder einen... (Mackay, *Morgen*)

そして明日、太陽が再び輝くだろう、/ すると、私が行こうとする道で/ 幸せな私たちを再び一つにするだろう...

ここではまず、前置詞格 auf dem Wege によって、問題の場所に言及されている。前置詞格中の主要語 Weg は、あくまで抽象的でその内実は不明だが、それに関係代名詞（関係副詞ではなく）による関係節を付すことによって、「道」の意味が具体化されている。

その際、Weg にかかる関係代名詞は4格であり、関係節における動詞は自動詞 gehen である。したがって関係節において、関係代名詞 den は、あくまで代名詞でありながら、場所の4格として機能していると判断される。その点で私には、(6) は興味深い作例であると思われる。

なおこの詩に、若い R. シュトラウスが曲を付けている。元はピアノ伴奏のリートであったが、後にオケ用に編曲された。その際、前奏のメロディをソロバイオリンが弾くよう指定されることになった。このソロパートは、他に類例がないほどに美しい（動画 #40）。

〈2〉 時間の状況語

時間の4格

4格は時間の状況語としても用いられる。『ドイツ広文典』は、この用法を1、「時間の距たりを示す」、2、「時間の継続を示す」、3、「ことの行なわれる時点を示す」場合の3つに分けている（桜井 437）。それぞれ典型的な作例をとりあげる。

1. 時間のへだたりを示す

(1) Nun bin ich manche Stunde/ entfernt von jenem Ort, (Müller, *Der Lindenbaum*)

いま僕は何時間も [の距離を] / その場所から離れた所にいる、

ここで4格は「時間のへだたりを示す」としたが、実質的に「場所の距たりを示す」（桜井 438）と言うべきか。

この現在完了時制による一文では、本来枠構造をとるべきだが、ミュラーはあえて von jenem Ort を枠外に出している。韻律上の都合も配慮されたであろうが、枠外に重要語を配置することで、語句が強調されている。「あの場所」とは、この詩で焦点を当てられて

る菩提樹が立つ場所のことである。それだけに、この枠外配置は効果的である。

なお、Lindenbaum はドイツリートにしばしば登場する（→杉田③ 164）。

2, 時間の継続を示す

(2) Das macht, es hat die Nachtigall/ die ganze Nacht gesungen; (Storm, *Die Nachtigall*)

そのせいだ、ナイチングールが / 夜通し 歌った [そのせいだ] ;

(3) Bei dir ist es traut: zage Uhren schlagen/ wie aus weiten Tagen. (Rilke, *Bei dir* ...)

あなたのそばは心地よい：内気な時計が / ずっと昔から 時を打つごとくに。

時間の継続を示す作例は非常に多い。前に、「所有の 3 格」に関連して引いたウーラントの詩でも、その作例が見られた（→ 129p）。(2)(3) を含めいずれも比較的分かりやすい作例だが、一方、時間の 4 格については、しばしば歌われる（詩として読まれる）にもかかわらず、実は、難問としか言いようがない作例がある（→ 156p）。

なお(3)では、コロン以下の文 zage... の途中に wie が置かれているが、これは本来この文の冒頭に置かれるべき語である。つまりこの文は、主文である *Bei dir ist es traut* に対する副文である。ここで zag (≂ zaghaft) 「内気な」という形容詞が「時計」にかかっているが、これは転移修飾語であろう。zag なのは「私」である（→本稿第 4 章「意味論」）。とすれば、wie による副文は類似性を示している。ドイツ語の句読法はニュアンスに富むが、ここに見られる「:」は、けつきよくそれを暗示する。

3, ことの行なわれる時点を示す

(4) O, die Nacht, mir bangt, sie stehle/ dich mir auch. (Gilm, *Die Nacht*)

ああ夜に、私は不安になる、夜が盗む [のではないか] と/ 私から君をも。

(5) Ich lebe bei Tage/ voll Glauben und Mut,/ und sterbe die Nächte/ in heiliger Glut. (Novalis, *Nachthymne*)

私は昼に生きる/ 信仰と勇気をいっぱいにして,/ だが [そして] 夜ごとに 死ぬ,/ 聖なる残り火のうちで。

前者は訳のように解したが、die Nacht の後のカンマが気になる。これにこだわれば、die Nacht を「提示の 1 格」（→ 80p）と解することも不可能ではない。その場合は、「夜、ああ私は不安になる、夜が盗むことが / 私から君をも」という意になる（この「夜」が提示の 1 格であっても、日本語では「夜に」という副詞的な意味に解される可能性が高いが、そうではないことに注意してもらいたい）。

なお、ここで用いられた stehle は接続法 I 式である。話者が抱く恐れ・懸念などの内容を示す副文では、同 I 式が使われる（桜井 403, 405；氏はこの種の接続法を「目的の接続法」として扱うが、この種の作例について見るかぎり、「目的」という規定には少々疑念がある）。

後者では、複数の die Nächte が使われている。「夜に」ではなく「夜ごとに」という意味だが、次の die Nächte は、3 「ことの行なわれる時点」というより、2 「時間の継続」を示すと解しうる。

(6) Sie [=viel liebliche Blüten] flüstern von einem Mägd'lein,/ das dächte/ die Nächte/ und Tage lang, wußte, ach, selber nicht was. (Mosen, *Der Nußbaum*)

彼女ら [=かわいらしい一杯の花] は、ある少女のことをささやいている,/ 少女は思いにふけった,/ 夜も/ 昼もずっと、でもああ、自ら考えたことが自分では分からなかった。

この詩は、おとぎ話を読むような錯覚を起こす魅力的な詩だが、詩行の強音数が揺れ動く（少ない行はわずか2音）ことも手伝い、詩 자체はやさしいとは言えない。末尾の was は関係代名詞であり、was es (=Mägglein) dächte「自ら思いにふけったこと」の意であろう。要するに、少女に何かあることについて考え始めたが（その後の詩行からすると、その想いとは、少々少女についてのステロタイプに近いが、来年に予定された婚姻で祝われる自分の婿 Bräut'gam は誰なのか、という想いのようである）、自分が発したその問い合わせには答えられなかつた、と言っているのである。

なお、ここで dächte は接続法のように見えるが、直説法である（杉田② 100-1）。

時間の4格に関する難問

次は、有名なミュラー『美しき水車小屋の娘』（シューベルト）の冒頭の詩である。ほぼ以下のような訳がつけられるのが一般的(*1)である。問題はないと思われるが、この「日がな」と訳した熟語 mein Tag は、厳密にはいったいどう解すべきなのか。

(7) Die [=Räder] gar nicht gerne stille steh'n,/ die sich mein Tag nicht müde geh'n,/ die Räder. (Müller, *Das Wandern*)

水車は立ち止まるのをとても嫌い、/ 日がな一日飽きずに回り続ける、/ 水車は。

これは独自な表現である。「一日中」（副詞）を意味する den ganzen Tag を踏まえつゝも、「一生涯」（同前）を意味する sein Leben lang の lang を韻律の都合上省略した上で、sein (mein) Leben の代わりに sein (mein) Tag としたものと思われる。そしてやはり、(7) での mein Tag は文脈上 meinen Tag の省略形なのである(*2)。この種の、冠詞や所有代名詞における語末音省失 Apokope は、詩において見られることがある（杉田② 80, 165, 杉田③ 271）。一例だけ上げれば――

(8) Sie hat mir Treu' versprochen,/ gab mir ein' Ring dabei,... (Eichendorff, *In einem kühlen Grunde*)

彼女は誠実を約束し、/ その際私に指輪をくれたが、...(*3)

ただし主語が Räder「水車」であれば、mein[en] Tag よりも ihr[en] Tag の方が自然だと思われる。だがよく考えれば、Räder にとっての Tag は、自然的な 24 時間 Stunden の時間 Zeit であろうが、水車小屋職人（粉屋）にとては、みずからが職人として作業する時間が Tag であろう。ちょうど、労働者が働く一日、つまり「労働日」（それは 19 世紀のように

12時間だったこともあれば、ロシア革命以降普及した作業場では8時間、あるいは今日ではそれよりも短い時間のこともある）の場合と同様に。

だから、水車小屋職人にとって、彼の働いている時間に、その意味で「彼の一日」sein[en] Tag に、直接話法なら「私の一日」mein[en] Tag に、水車はずっと動き続けるのである。

(*1) 「一日中ずっと」 the whole day long (OISF)、「終日」 all day (SST)、「昼の間」 pendant la journée (Musixmatch)、「一日中」（梅岡）（いずれもインターネット上のサイト名）。

(*2) mein' Tag' (meine Tage) という省略形の可能性もないとは言えないが、一般的なドイツ語としては meinen Tag の方が意味が通りやすいように思われる。

(*3) この詩は民謡的な印象の詩として曲もつけられ、若者の歌として歌われることがある (Mainerts 63)。Friedrich Glück による歌は、確かに民謡的な素朴な曲に仕上がっている。

時間・場所の4格 最後に、特に項は分けないが、興味深いと感じた作例を1つ紹介する。時間と空間の両者を暗示する4格がある。

(9)er [=König] leert' ihn [=Becher] jeden Schmaus (Goethe, *Es war...*)

王はどの宴会でも杯を空にした

時間の、また場所の4格では、多様性に富むとはいえ、基本的に時間・場所との関わりが明確な語が選ばれていたが、この作例はそう言い切れない。「宴会」Schmausは、宴会会場と同時に宴会での時の流れを暗示する。これは、Schmausという語をもって、それと近接関係(*)がある時・場所を暗示するという、詩に見られる「意味の転移」の作例であろう（→本稿第4章意味論「意味の転移」）。

(*)ただしこの関係をどう範ちゅう化するかはむずかしい。こうした関係を池上嘉彦氏なら「近接の関係」と呼ぶと推測するが（池上 85）、よりふさわしい語がないかどうか。

動画「ドイツリートの花束」について

「まえがき」に記した通り、2024年10月から、動画「ドイツリートの花束」*Der deutschen Lieder Strauß* の公開を開始した。これまでほぼ毎週1本を公開してきたが、公開分は以下のとおりである（2025年12月現在）。ぜひ参考に供していただきたい。

動画をご覧いただくために、前号で、URLを「必要に応じて次号に記載する」と書いたが（杉田③327）、検索エンジンの、あるいはむしろ YouTube の検索欄に、「ドイツリートの花束」と入力する方がやはり簡単であるため、URLの記載は省略する。

動画の公開実績

- 0, 「ドイツリートの花束」の紹介動画
- 1, ゲーテ「野ばら」*Heidenröslein* (シューベルト, ヴェルナー) #1-4
- 2, ギルム「万靈節」*Allerseelen* (R. シュトラウス) #5
- 3, ハイネ「ローレライ」*Ich weiß nicht, was soll es bedeuten* (ジルヒヤー他) #6-9
- 4, レルシュタープ「セレナーデ」*Ständchen* (シューベルト) #10-12
- 5, ハイネ「歌の翼に乗って」*Auf dem Flügel des Gesanges* (メンデルスゾーン) #13-14
- 6, ショーバー「音楽に寄せて」*An die Musik* (シューベルト) #15
- 7, シラー「喜びに寄せて」*An die Freude* (ベートーヴェン, シューベルト) #16-19
- 8, スコット「アヴェ・マリア」*Ave Maria* (シューベルト) #20-22
- 9, ヘルティ「至福」*Seligkeit* (シューベルト) #23
- 10, アイヒェンドルフ「異郷にて」*In der Fremde* (シューマン) #24
- 11, ゲーテ「魔王」*Erlkönig* (シューベルト) #25-27
- 12, アイヒェンドルフ「月の夜」*Mondnacht* (シューマン) #28
- 13, ヘロゼー「優しい愛」*Zärtliche Liebe* (ベートーヴェン) #29
- 14, ツッカルマリヨ「甲斐なきセレナーデ」*Vergebliches Ständchen* (ブラームス) #30
- 15, ミュラー「菩提樹」*Der Lindenbaum* (シューベルト) #31-33
- 16, リュッケルト「ジャスミンの木」*Jasminenstrauch* (シューマン) #34
- 17, ウーラント「春の信仰」*Frühlingsglaube* (シューベルト, メンデルスゾーン) #35
- 18, メーリケ「春だ！」*Er ist's!* (ヴォルフ, シューマン) #36
- 19, ゲーテ「すみれ」*Das Veilchen* (モーツアルト) #37-38
- 20, ハイネ「こよなく美しい季節5月に」*Im wunderschönen Monat Mai* (シューマン)
#39
- 21, マッケー「あした」*Morgen* (R. シュトラウス) #40-41
- 22, ハイネ「ハスの花」*Die Lotosblume* (シューマン) #42
- 23, コリン「夜と夢」*Nacht und Träume* (シューベルト) #43
- 24, ゲーテ「糸をつむぐグレートヒエン」*Gretchen am Spinnrade* (シューベルト) #44-45
- 25, リュッケルト「捧げることば（献呈）」*Widmung* (シューマン) #46
- 26, クラウディウス「死と乙女」*Der Tod und das Mädchen* (シューベルト) #47
- 27, ゲーテ「さすらい人の夜の歌」*Wanderers Nachtlied* (シューベルト) #48
- 28, 民謡「ラインの小さな伝説」*Rheinslegendchen* (マーラー) #49-50
- 29, ヴィレマー「お前のぬれた翼を」*Ach, um deine feuchten Schwingen* (メンデルスゾーン, シューベルト他) #51-52

30, マティソン「アデライーデ」*Adelaide* (ベートーヴェン, シューベルト) #53-54

31, シュトルム「ナイチンゲール」*Nachtigall* (ベルク) #55

32, シュトールベルク「水の上で歌う」*Auf dem Wasser zu singen* (シューベルト) #56-57

33, シューベルト「ます」*Die Forelle* (シューベルト) #58-59

34, モーゼン「クルミの木」*Der Nußbaum* (シューマン) #60

35, ゲーテ「ご存じですかあの国を」*Kennst du das Land* (シューベルト 他) #61

36, ヴェーゼンドンク「天使」*Der Engel* (ヴァーグナー) #62

37, ブルッフマン「妹のあいさつ」*Schwestergruß* (シューベルト) #63

以下つづく

文献一覧

1) 一般的な和書・洋書

生野幸吉等編『ドイツ名詩選』岩波書店（文庫）, 1993

河崎 靖『ドイツ方言学——ことばの日常に迫る』現代書館, 2008

河野純一『ウィーンのドイツ語』八潮出版社, 2006

相良守峯①『ドイツ文法』岩波書店（岩波全書）, 1951

—— ②『ドイツ語学概論』博友社, 1965

桜井和市『ドイツ広文典』第三書房（改訂版）, 1968

佐々木庸一訳編『ドイツ・リート名詩百選』音楽之友社, 1964

塩谷 饒『新編ドイツ文典（普及版）』三修社, 1973

下宮忠雄編著『ドイツ・西欧 ことわざ・名句小辞典』同学者（小辞典シリーズ）, 1994

杉田 聰「ドイツリーの花束 *Der deutschen Lieder Strauß*」→「動画」

杉田 聰①「ドイツ詩の文法 *Des deutschen Gedichtes Grammatik*」(1)：音韻論（『帯広畜産大学学術研究報告』第41巻所収）2020

—— ② 同上(2)：形態論（同上第43巻所収）2022

—— ③ 同上(3)：語彙論（同上第44巻所収）2023

高橋輝和『古期ドイツ語文法』大学書林, 1994

田中泰三①『ドイツ語方言』郁文堂, 1956

—— ②『スイスのドイツ語』クロノス, 1985

手塚富雄『ドイツ文学案内』岩波書店（文庫別冊）, 1963

- デュル, W.『19世紀のドイツ・リート——その詩と音楽』音楽之友社（喜多尾道冬訳）, 1987
動画——杉田聰「ドイツリートの花束 *Der deutschen Lieder Strauß*」（158-9pに公開分の一覧あり）, 2024~
- 中島悠爾他『必携 ドイツ文法総まとめ（改訂版）』白水社, 2003
- 成田 節他『冠詞・前置詞・格——〈ドイツ語文法シリーズ〉③』大学書林, 2004
- 野入長寿他『ドイツ語文法研究概論——〈ドイツ語文法シリーズ〉①』大学書林, 2000
- 野本祥治『ドイツの諺』郁文堂, 1961
- ヒルデプラント, D.『第九——世界的讃歌となった交響曲の物語』法政大学出版局（山之内克子訳）, 2007
- 藤田五郎『演習本位 新和文独訳』第三書房, 1951
- ヘルダー, J.G.『オシアン論』養徳社（再版, 若林光夫訳）, 1948
- ポーレンツ, P.『ドイツ語史』白水社（岩崎英二郎他訳）, 1974
- Mainerts, E.(hrsg.), *Das Liederbuch der Jugend, Unsere schönsten Volkslieder*, C.Bertelsmann Verlag, 1979
- 三浦鞠郎訳注『ゲーテ詩集』郁文堂（独和対訳叢書）, 1970
- 宮下健三訳註『メリケ名詩集』大学書林（語学文庫）, 1964
- 山口四郎『ドイツ詩を読む人のために——韻律論的ドイツ詩鑑賞』郁文堂, 1882

2) インターネット・サイト（略号）

URL は略す

- Musixmatch
- OISF——Oxford International Songs Festival
- SST——Schubert Song Texts
- Taubenpost——Taubenpost～歌曲雑感
- 梅岡——梅丘歌曲会館 詩と音楽

3) 辞典（略号）

以下、冒頭に略号を記す。日本語辞書の行頭の略号は主に（ ）内で用いるが、「/」印右の略号は本文でも使う。

- ア/アクセス——『アクセス独和辞典（第3版）』三修社（電子辞書）
- 岩波——『岩波独和辞典（増補版）』（小牧健夫他編, 岩波書店, 1971）
- 相良大——『相良大独和辞典』（相良守峯編, 博友社, 1958）
- 大/独和大——『独和大辞典（第2版）』（国松孝二他編, 小学館, 2000）（電子辞書）
- 大辞泉——『大辞泉（第2版）』（松村明監修, 小学館, 2012）（電子辞書）

引用・言及詩一覧

表記は作者名のアルファベット順による。詩人の名前は簡略化している場合がある。

作者名の右の()内に置いたのは訳者名である。本文中を含め、詩の題はイタリック体にした。題は、詩人によってつけられていない場合は、一般の慣例にしたがい、出だしの1行を題代わりにした。また例えば Schiller, *Amalia* (この詩自体は戯曲『群盗』Die Räuber 第3幕の冒頭でアマーリアによって歌われる) のように、作曲者が仮につけた題もある。題の右の「→」は、本文中で用いた短縮形を示す。題が2種類知られている場合には、‘od.’をおいて2つ並べた(例えば *Ave Maria od. Ellens Gesang III*)。

さらに右の()内は、作曲家による付曲がある場合に、作曲家の名や収録歌曲集名などを示す(ただし私が作曲家を把握できていない場合もある。また歌曲集名等の記載は、著名なものに限った)。近年『白鳥の歌』Schwanengesang (シューベルト) という名称は用いないことが多いが、ここでは便宜上それを採用した。

anonym, *Wiegenlied* (Schubert)

Anakreon(Bruchmann,F.), *An die Leier* (Schubert)

Arnim,A/ Brentano,C), *Des Antonius von Padua Fischpredigt*→*Des Antonius...* (G.Mahler “Des Knaben Wunderhorn”)

— , *Rheinslegendchen* (ebenda)

— , *Wer hat das Liedlein erdacht?* → *Wer hat...* (ebenda)

Brentano,C., *An dem Feuer saß das Kind* → *An dem Feuer...*

Bruchmann,F., *Am See* (Schubert)

— , *Im Haine* (Schubert)

Bürger,G.A., *Muttertänderei* (Strauss)

Busse,K., *Stimme der Sehnsucht* (Pfitzner)

— , *Über den Bergen*

Chamisso,A., *Du Ring an meinem Finger* → *Du Ring...* (Schumann “Frauenliebe und -leben”)

— , *Er, der Herrlichste von allen* → *Er, der...* (ebenda)

Chézy,H., *Romanze* (Schubert)

Claudius,M., *An die Nachtigall* (Schubert)

— , *Der Tod und das Mädchen* (Schubert)

Collin,H.J., *Der Zwerg* (Schubert)

— , *Nacht und Träume* (Schubert)

Daumer,G.F., *Wie bist du, meine Königin* → *Wie bist du...* (Brahms)

Dehmel,R., *Befreit* (Strauss)

— , *Wiegenliedchen* (Strauss)

Eichendorff,J., *Der Musikant* (Wolf)

- , *In der Fremde* (Schumann "Liederkreis" op.39)
- , *In einem kühlen Grunde* (Friedrich Glück)
- , *Mondnacht* (Schumann "Liederkreis" op.39)

Flaischlen,C., *Hab' Sonne im Herzen*

Freiligrath,F., *O lieb, solang du lieben kannst!* → *O lieb...* (Liszt)

Geibel,E., *Die Sehnsucht* (Schumann)

Gilm,H., *Allerseelen* (Strauss)

- , *Die Nacht* (Strauss)

Goethe,J.W., *An den Mond* (Schubert)

- , *An die Entfremde* (Schubert)

- , *An Mignon* (Schubert)

- , *Das Veilchen* (Mozart)

- , *Die schöne Nacht*

- , *Erlkönig* (Loewe, Schubert)

- , *Es war ein König in Thule* → *Es war...* (Reichardt, Schubert, Schumann)

- , *Ganyumed* (Schubert)

- , *Gretchen am Spinnenrad* (Schubert)

- , *Heidenröslein* (Schubert, Werner usw.)

- , *Hoffnung* (Schubert)

- , *Liebhaber in allen Gestalten* → *Liebhaber in...* (Schubert)

- , *Lynkeus der Türmer* (Loewe)

- , *Mailied* (Beethoven)

- , *Musensohn* (Schubert)

- , *Nähe des Geliebten* (Beethoven, Schubert, Tomášek)

- , *Prometheus* (Schubert, Wolf)

- , *Setze mir nicht* (Schumann "Myrten")

- , *Trost im Tränen* (Schubert)

- , *Vorspiel auf dem Theater* (aus "Faust")

- , *Wandrers Nachtlied* (Schubert)

- , *Wonne der Wehmut* (Beethoven, Franz)

Gotter,F.W., *Pflicht und Liebe* (Schubert)

Groth,K., *Regenlied* (Brahms)

Heine,H., *Auf Flügeln des Gesanges* → *Auf Flügeln...* (F.Mendelssohn)

- , *Balsazar* (Schumann)

- , *Der Atlas* (Schubert "Schwanengesang")

- , *Die beide Grenadier* (Schumann)
- , *Die Lotosblume* (Schumann "Myrten")
- , *Du bist wie eine Blume* → *Du bist...* (ebenda)
- , *Ein Jüngling liebt ein Mädchen* → *Ein Jüngling* (Schumann "Dichterliebe")
- , *Ich wandelte unter den Bäumen* → *Ich wandelte...* (Schumann)
- , *Ich weiß nicht, was es soll bedeuten* (Silcher usw.)
- , *Und wüßtens die Blumen, die kleinen* → *Und wüßtens...* (Schumann "Dichterliebe")

- Herder,J.G., *Herr Oluf* (Loewe, Schubert 'Eine altscottische Ballade')
- Herrosee,K., *Zärtliche Liebe* od. *Ich liebe dich* → *Zärtliche Liebe* (Beethoven)
- Hesse,H., *Mon rêve familier*
- , *Weiße Wolken*
- Heyduk,A., *Als die alte Mutter mich lehrte singen* (訳) → *Als die alte Mutter...* (Dvořák)
- Hölty,L., *Die Mainacht* (Brahms, Fanny Mendelssohn=Hensel)
- , *Seligkeit* (Schubert)
- Jacobi,J.G., *An Chlöe* (Mozart)
- , *Litanei* (Schubert)
- Kerner,J., *Sehnsucht nach der Waldgegend* → *Sehnsucht...* (Schumann)
- Kosegarten,L.G., *Luisens Antwort* (Schubert)
- Kugler,F., *Ständchen* (Brahms)
- Leitner,K.G., *Drang in die Ferne* (Schubert)
- Lenau,N., *Die Sennin* (Schumann)
- Lorenz,A.W., *Loreley* (Schumann)
- Lutheraner, Joseph, *lieber Joseph mein* → *Joseph...* (anonym)
- Mackay,J.H., *Morgen* (Strauss)
- Matthisson,F., *Adelaide* (Beethoven, Schubert)
- Meyer,C.F., *Der römische Brunnen*
- Moore,Th.(Freiligrath,F.), *Venezianisches Gondellied* (F.Mendelssohn)
- Mörike,E., *An eine Äolsharfe* (Brahms, Wolf)
- , *Auf ein alten Bild* (Wolf)
- , *Auf eine Lampe* (Schoeck)
- , *Bei einer Trauung* (Wolf)
- , *Der Genesene an die Hoffnung* → *Der Genesene...* (Wolf)
- , *Er ist's!* (Wolf)
- , *Fußreise* (Wolf)
- , *Gesang Weylas* (Wolf)

- , *Im Frühling* (Wolf)
- , *Nixe Binsefuß* (Wolf)
- , *Peregrina I* (Wolf)
- , *Schlafendes Jesuskind* (Wolf)
- , *Selbstverständnis* (Wolf)
- , *Um Mitternacht* (Wolf)

Mosen,J., *Der Nußbaum* (Schumann "Myrten")

Müller,W., *Dangsagung* (Schubert "Die schöne Müllerin")

- , *Das Wandern* (ebenda, Glück)
- , *Der Leiermann* (Schubert "Winterreise")
- , *Der Lindenbaum* (ebenda)
- , *Des Baches Wiegenlied* (Schubert "Die schöne Müllerin")
- , *Die liebe Farbe* (ebenda)
- , *Die Nebensonnen* (Schubert "Winterreise")
- , *Tränenregen* (Schubert "Die schöne Müllerin")
- , *Trockne Blumen* (ebenda)

Novalis, *Hymne* (Schubert, Alma Schindler=Mahler)

- , *Hymne an die Nacht* → *Nachthymne* (Schubert)

Overbeck,Ch.A., *Sehnsucht nach dem Frühling* → *Sehnsucht...* (Mozart)

Platen,A., *Die Liebe hat gelogen* → *Die Liebe...* (Schubert)

Reil,F., *Lied im Grünen* (Schubert)

Rellstab,L., *Abschied* (Schubert "Schwanengesang")

- , *Frühlingssehnsucht* (ebenda)
- , *In der Ferne* (ebenda)
- , *Kriegers Ahnung* (ebenda)
- , *Ständchen* (ebenda)
- , *Wohin?* (ebenda)

Rilke,R.M., *Bei dir ist es traut* → *Bei dir...* (Alma Schindler=Mahler)

- , *Da neigt sich die Stunde* → *Da neigt sich...*
- , *Mittelböhmische Landschaft*

Rochlitz,J.F., *An die Laute* (Schubert)

Rückert,F., *Du bist die Ruh* (Schubert)

- , *Grün ist der Jasminenstrauch* → *Jasminenstrauch* (Schumann)
- , *Ich bin der Welt abhanden gekommen* → *Ich bin der Welt...* (G.Mahler)
- , *Sei mir gegrüßt* (Schubert)
- , *Wenn dein Mütterlein* (G.Mahler "Kindertotenlieder")

- , *Widmung* (Schumann "Myrten")
Sappho(Rupé,H.), *Roter Apfel*
Schiller,F., *An die Freude* (Beethoven, Schubert)
—, *Des Mädchens Klage* (Schubert)
Schlegel,A., *Wiedersehen* (Schubert)
Schlegel,F., *Im Walde* (Schubert)
Schmidt,H., *Sapphische Ode* (Brahms)
—, *Sommerabend* (Brahms)
Schmidt,K., *Lied der Trennung* (Mozart)
Schober,F., *An die Misik* (Schubert)
Schubart,Ch., *Die Forelle* (Schubert)
Scott,W.,(Storck,A.), *Ave Maria* od. *Ellens Gesang III* → *Ave Maria* (Schubert)
Seidl,J.K., *Bei dir allein* (Schubert)
—, *Das Zügenglöcklein* (Schubert)
—, *Die Männer sind méchant* → *Die Männer...* (Schubert)
—, *Irdisches Glück* (Schubert)
—, *Sehnsucht* (Schubert)
Spee,F., *In heiliger Nacht* (Brahms)
Stolberg,F.L., *Auf dem Wasser zu singen* → *Auf dem...* (Schubert)
Storm,Th., *Die Nachtigall* (Berg)
Tieck,J.L., *Wie soll ich die Freude* (Brahms "Romanzen aus Magelone")
Uhland,J.L., *Die Nonne* (Fanny Mendelssohn=Hensel)
—, *Frühlingsglaube* (Schubert)
—, *Sonntag* (Brahms)
Uz, J.P., *An die Sonne* (Schubert)
—, *Gott der Weltschöpfer* (Schubert)
—, *Gott im Frühling* (Schubert)
Volkslied, *Die Regensburger Schneiderversammlung* → *Die Regensburger...*
—, *Es blies ein Jäger wohl in sein Horn* → *Es blies ein Jäger...*
—, *Feinsliebchen, du sollst mir nicht barfuß geh'n* → *Feinsliebchen...* (Brahms)
—, *Innsbruck, ich muß dich lassen* → *Innsbruck...* (Isaac)
—, *Mir ist ein fein's braun's Maidelein* → *Mir ist...* (Brahms)
—, *Muss i denn*
—, *O Tannenbaum*
—, *Vergebliches Ständchen* (Brahms) (*1)
Weisse,Ch.F., *Der Zauberer* (Mozart)

Wenzig,J., *Von ewiger Liebe* (Brahms)

Willemer,M., *Was bedeutet diese Bewegung → Was bedeutet...* (*2) (Fanny Mendelssohn=Hensel, F.Mendelssohn, Schubert)

Zuccalmaglio,A., *Vergebliches Ständchen* (Brahms)

(*1) *Vergebliches Ständchen* はもともとツッカルマリョ (Zuccalmaglio) 編集による民謡集に収められており、一般には低地ライン民謡とされてきたが (OISF)、今日ではツッカルマリョ自身の手になると考えられている (デュル 72)。

(*2) ゲーテが晩年の『西東詩集』West-östlicher Divan にかかげたいくつかの詩の原作者と考えられる。かなりの詩作能力があったと思われるが、公表前にゲーテが手を入れた可能性が指摘されている。

令和6年度
帯広畜産大学大学院畜産学研究科
修士学位論文題目

The 2024 Academic Year
Index of Master's Theses for
the Graduate School of Obihiro
University of Agriculture and
Veterinary Medicine

畜産科学専攻（博士前期課程）

Master's Program

1. 新規発酵飲料の開発と生化学的分析
(桑島 千絃, 食品科学)
2. パラグアイの牛に感染しているタイレリアとアナプラズマの分子疫学調査
(ギイギイ ノエル ムトニ ムービイ, 動物医学)
3. 日本在来馬の腸内細菌叢の特性解析
(幾橋 ほまれ, 家畜生産科学)
4. 大雪山国立公園東ヌプカウシヌブリの岩塊地におけるエゾナキウサギと観光客の関係
(池山 慧, 環境生態学)
5. カイコサナギ, イエバエがラーメン内消化率, 発酵特性に与える影響
(石川 達志, 家畜生産科学)
6. マッハコムギの草型および穂形態に関する遺伝解析
(井下 空馬, 植物生産科学)
7. 食品由来乳酸菌を用いた発酵によるおからの保存性向上と機能性増強に関する検討
(上島 慧子, 食品科学)
8. 北海道帯広市の市街地における‘都市ギツネ’のエキノコックス感染対策に関する基礎研究
(上田 莉帆, 環境生態学)
9. 胆汁酸性非肥満型NAFLDモデルマウスへのペクチン, キトサン投与における胆汁酸吸収抑制及びNAFLD改善の検証
(宇土 直宏, 食品科学)
10. 植物由来グリセロ糖脂質の化学特性並びに機能性に関する研究
(大内 魁人, 食品科学)

1. Development and biochemical analysis of novel fermented beverages
(Chihiro Kuwajima,Food Science)
2. Molecular epidemiology of Theileria and Anaplasma species infecting cattle in Paraguay
(Ngigi Noel Muthoni Mumbi,Veterinary Life Science)
3. Analysis of gut microbiome characteristics of Japanese native horses
(Homare Ikuhashi,Animal Production Science)
4. The relationship between the northern pika and tourists in the rocky terrain area of the Mt. Hugashi-Nupukaushinupuri, Daisetsuzan National Park
(Satoshi Ikeyama,Ecology and Environmental Science)
5. Effect of Silkworm Pupae, Housefly Digestibility in the rumen, and fermentation characteristics
(Tatsushi Ishikawa,Animal Production Science)
6. Genetic analysis of plant and spike architectures in macha wheat
(Kuma Inoshita,Plant Production Science)
7. Study of Enhancement of Preservation and Physiological Functions of Okara Fermentation with Food-derived Lactic Acid Bacteria
(Akiko Uejima,Food Science)
8. Basic study on control over echinococcus infection in urban red foxes in Obihiro, Hokkaido, Japan
(Riho Ueda, Ecology and Environmental Science)
9. Verification of inhibition of bile acid absorption and improvement of NAFLD by administration of pectin and chitosan to bile acidic non-obese NAFLD model mice
(Naohiro Udo,Food Science)
10. Studies on the Chemical Properties and Functionality of Glyceroglycolipids from Plants
(Kaito Ohuchi,Food Science)

11. 採草地のリモートセンシング：ドローンから衛星へのスケールアップ
(大越 証路, 環境生態学)
12. 北海道上士幌町に生息するキタサンショウウオの食性と採餌戦略
(大山 優一, 環境生態学)
13. マンガリツツアにおける季節に伴った脂肪形成に関する分子機構の解明
(岡崎 樹生, 家畜生産科学)
14. ヒトおよび豚糞便培養試験における農水産物や難消化性物質の大豆イソフラボン代謝への影響
(小川 靖史, 食品科学)
15. 日本産ゴマフアブ属（ハエ目：アブ科）の分類学的研究
(奥野 雄太, 環境生態学)
16. 高脂肪食摂取マウスにおけるフラボノイドと迷走神経肝分枝の関連性の検証
(尾山 大誠, 食品科学)
17. 気象観測所, メッシュ農業気象データおよび牛舎内温湿度計の記録を用いた4農場のホルスタイン種における暑熱ストレス耐性の遺伝的能力評価に関する研究
(梶川 和輝, 家畜生産科学)
18. ゾウ科動物における測定法によるジェスターージエン濃度差の検証と液体クロマトグラフィー質量分析法による雌アジアゾウ (*Elephas maximus*) における発情周期中のジェスターージエンの血中濃度および動態の解明
(片桐 有乃, 動物医科学)
19. *Compost bedded pack barn* における堆肥敷料および攪拌作業が初妊牛の行動と飼養環境に及ぼす影響
(北川 翠, 農業環境工学)
20. 北海道帯広市街地の公園緑地におけるカラス類と人の共存に向けての研究
(木村 太紀, 環境生態学)
11. Remote sensing of grasslands: Scaling up from drones to satellites
(Shoji Okoshi, Ecology and Environmental Science)
12. Food habits and foraging strategies of Siberian salamander *Salamandrella keyserlingii* in Kamishihoro, Hokkaido
(Yuichi Oyama, Ecology and Environmental Science)
13. Molecular Mechanisms of Seasonal Fat Development in Managalica Pigs
(Tatsuki Okazaki, Animal Production Science)
14. Effects of agricultural products and non-digestible substances on soy isoflavone metabolism in human and swine fecal culture studies
(Yasufumi Ogawa, Food Science)
15. Taxonomic Study of the Genus *Haematopota* (Diptera: Tabanidae) in Japan
(Yuta Okuno, Ecology and Environmental Science)
16. Study of the association between flavonoids and the hepatic branch of the vagus nerve in mice fed a high-fat diet.
(Taisei Oyama, Food Science)
17. Study on the genetic evaluation of heat tolerance using records from weather stations, Agro-Meteorological Grid Square Data and thermo-hygrometers on 4 farms
(Kazuki Kajikawa, Animal Production Science)
18. Validation of differences in gestagen concentrations in Elephantidae by measurement method and clarification of plasma concentration and dynamics of gestagens in Asian elephants (*Elephas maximus*) during estrous cycle by liquid chromatography mass spectrometry
(Tomono Katagiri, Veterinary Life Science)
19. The Effects of Compost Bedding and Cow Bed Mixing on the Behavior of Cows and the Environment of Cow Beds in Compost-Bedded Pack Barn
(Midori Kitagawa, Engineering for Agriculture)
20. Studies on coexistence between crows and people in park green areas of Obihiro City, Hokkaido, Japan.
(Hiroki Kimura, Ecology and Environmental Science)

21. ペンギン排泄物がアスペルギルス症原因真菌の生育に与える影響の検討
(熊谷 杏夢, 動物医科学)
22. サッポロフキバッタの異類交配が接触帶雌の再交尾に及ぼす影響
(糸井 詩帆, 環境生態学)
23. 2倍体栽培バレイショの純系間F2実生集団における農業形質のQTL解析
(小浦 璃子, 植物生産科学)
24. 北海道十勝地方におけるヒロズコガ亜科の生態学的研究
(小嶋 さくら, 環境生態学)
25. *Aspergillus fumigatus UbcD* およびユビキチンリガーゼE3の結合解析方法の開発
(今 佐恵子, 動物医科学)
26. アズキの耐倒伏性に関する遺伝子座の検出および候補遺伝子の特定
(坂井 瑞基, 植物生産科学)
27. 肥育前期における酒粕の給与がホルスタイン種去勢牛の産肉形質、経済性に与える影響の調査および地域副産物利用によるブランド牛肉生産への可能性に関する研究
(柴崎 智也, 家畜生産科学)
28. タヌキの糞が種子の発芽に与える影響
(清水 俊輔, 環境生態学)
29. ドライ熟成肉のクラスト微生物叢が肉の表層と内部に与える影響
(庄司 陽織, 食品科学)
30. 極寒の楽園 一ヒートアイランドに対するシティバードの分布の変化ー
(神力 仁樹, 環境生態学)
31. 人獣共通感染症の経済疫学研究-マダガスカルの牛結核の広がりと農家行動-
(高木 みほろ, 農業経済学)
32. 砂浜生態系における保全候補地の検討 一ウミガメ上科をモデルケースとして-
(武田 千花, 環境生態学)
21. Investigation of the effect of penguin excrement on the growth of the causative fungi of aspergillosis
(Amu Kumagai, Veterinary Life Science)
22. Effect of disassortative on remating in contact zone female in the grasshopper *Podisma sapporensis* (Orthoptera: Acrididae)
(Shiho Kumei, Ecology and Environmental Science)
23. QTL analysis of agronomic traits in the pure line-based F2 seedling population of the cultivated diploid potato
(Riko Koura, Plant Production Science)
24. Ecological study of the subfamily Tineinae (Lepidoptera: Tineidae) in the Tokachi region, Hokkaido, Japan
(Sakura Kojima, Ecology and Environmental Science)
25. Development of binding assay for UbcD and ubiquitin ligase E3 in *Aspergillus fumigatus*
(Saeko Kon, Veterinary Life Science)
26. Detection of loci and identification of candidate genes for lodging tolerance in Adzuki bean.
(Mizuki Sakai, Plant Production Science)
27. Research on the effects of feeding sake lees to holstein steers in the early stage of feeding on carcass quality and economic performance, and on the potential of using local by-products to produce branded beef
(Tomoya Shibasaki, Animal Production Science)
28. The effect of raccoon dog's feces for seed germination
(Shunsuke Shimizu, Ecology and Environmental Science)
29. The effects of crust microflora on the surface and interior of dry-aged beef
(Hiori Shoji, Food Science)
30. Frozen Paradise -Changes in distribution of urban birds response to the heat island-
(Masaki Shinriki, Ecology and Environmental Science)
31. Spreda of Bovine tuberculosis and Farmer behavior in Madagascar-
(Mihoro Takagi, Ecology and Environmental Science)
32. Examination of conservation candidate sites in sandy beach ecosystems -the sea turtle superfamily (Chelonioidea) as a model case-
(Chika Takeda, Ecology and Environmental Science)

33. LPS投与による子宮内膜炎マウスモデルの確立と炎症メカニズム解明
(富田 綺咲, 家畜生産科学)
34. アズキ (*Vigna angularis*) の上胚軸伸長制御に関わる候補遺伝子の探索と選定
(鳥居 志帆, 植物生産科学)
35. ドライ熟成中の環境条件が牛肉の微生物学的品質に与える影響
(鳥丸 碧里, 食品科学)
36. 北海道におけるブドウベと病多発下での高品質の醸造用ブドウ生産の試み
(中山 瞳美, 植物生産科学)
37. 広葉樹落葉の分解は担子菌類と子囊菌類の相互作用によって促進される
(鍋島 広海, 環境生態学)
38. フクロウ類盲腸内細菌の機能解明
(福島 真意, 家畜生産科学)
39. 微生物によるウレタン分解の効率化とウレタンの植物栽培への利用
(星 美空, 食品科学)
40. 胆汁酸とアルコール摂取による肝障害モデルおよび胆石症モデル動物作成の検討
(松添 航太, 食品科学)
41. 中種法製パンにおける国産小麦のパンの味に関わる要因分析と味改善方法の検討
(宮地 舞, 食品科学)
42. 碧雲藏で製造された清酒の成分分析に基づいた特徴づけ
(六鹿 南美, 食品科学)
43. 酿造用ブドウ品種‘山幸’の冬芽における越冬メカニズムの解明
(村上 未葉, 植物生産科学)
33. Establishment of Endometritis Mouse Models Induced by LPS Administration and Elucidation of Inflammatory Mechanisms
(Kisaki Tomita, Animal Production Science)
34. Identification of candidate genes controlling epicotyl elongation in adzuki bean (*Vigna angularis*)
(Shiho Torii, Plant Production Science)
35. The effects of aging conditions on microbiota and meat qualities in dry-aged beef
(Midori Torimaru, Food Science)
36. Investigation of the possibility of producing quality wine grapes under occurrences of grape downy mildew in Hokkaido.
(Mutsumi Nakayama, Plant Production Science)
37. Decomposition of oak leaf litter is promoted by interactions between basidiomycetes and ascomycetes
(Hiromi Nabeshima, Ecology and Environmental Science)
38. Exploring the role of cecal microbiota in Owls (Strigiformes)
(Mahiro Fukushima, Animal Production Science)
39. Improvement of the efficiency of urethane degradation by microorganisms and utilization of urethane in plant cultivation
(Miku Hoshi, Food Science)
40. Study on the creation of animal models of hepatic injury and gallstone disease caused by bile acid and alcohol intake
(Kota Matsuzoe, Food Science)
41. Analysis of factors related to the taste of bread made with Japanese wheat varieties using the sponge dough method and study of taste improvement
(Mai Miyachi, Food Science)
42. Characterization of sake made of Hekiungura based on component analysis
(Minami Mutsuga, Food Science)
43. Overwintering mechanisms in winter buds of a wine grape variety 'Yamasachi'
(Miyo Murakami, Plant Production Science)

44. 酵素や乳化剤の製パン改良剤が製パン性に与える影響に関する研究
(森 純希, 食品科学)
45. 微生物処理海藻が有する反芻胃メタン低減効果の要因探索
(山家 千尋, 家畜生産科学)
46. ガリウムイオンおよび鉛イオンが*Aspergillus fumigatus* に及ぼす影響と鉄イオンキレーターの干渉についての研究
(由宇 安月, 動物医科学)
47. 食餌性植物由来複合脂質並びに未利用成分の消化器官への機能に関する研究
(横田 優輝, 食品科学)
48. ロボットトラクタによる無人防除を実現するためのブーム高さ自動制御システムの開発
(吉田 涼, 農業環境工学)
49. 木質粗飼料の給与がホルスタイン種去勢育成牛の後腸内発酵性状に及ぼす影響
(渡邊 莉麗, 家畜生産科学)
50. 浸漬法によるマダニの遺伝子サイレンシング
(アジャラ ペラルタ ハビエル アレハンドロ, 動物医科学)
51. 極寒の環境下で飼養される重種馬において妊娠が体温の熱画像に与える影響
(王 璩, 動物医科学)
52. アズキ (*Vigna angularis*) におけるシート再生能力の量的形質遺伝子座の同定
(グエン トロン ミン ニヤット, 植物生産科学)
53. 日本在来鶏の形態形質に関連するゲノム領域のマッピング
(ニリマーナ プルダンス, 家畜生産科学)
54. インゲンマメ (*Phaseolus vulgaris L.*) の根系構造の形態学的、解剖学的および遺伝学的解析
(パウリーノ クロティウデス インソニア アニタ, 植物生産科学)
44. Effect of quality improver enzymes and emulsifier on bread making quality
(Junki Mori,Food Science)
45. Exploring the factors contributing to the ruminal methane reduction effect of fermented seaweed liquid
(Chihiro Yamaga,Animal Production Science)
46. Study of the effects of gallium and lead ions on *Aspergillus fumigatus* and the interference of iron ion chelators
(Azuki Yu,Veterinary Life Science)
47. Studies on Functions of Dietary Plant-Derived Complex Lipids and Unutilized Components in the Digestive System
(Yuki Yokota,Food Science)
48. Development of an Automatic Boom Height Control System for Unmanned Spraying with a Robotic Tractor
(Ryo Yoshida,Engineering for Agriculture)
49. Effect of feeding woody feed on the hindgut fermentation characteristics of Holstein growing steer
(Rika Watanabe Macharia,Animal Production Science)
50. Gene silencing by the soaking method in ticks
(Ayala Peralta Javier Alejandro,Veterinary Life Science)
51. Effect of Pregnancy on Thermographic Images of Body Surface Temperature under an extremely Cold Environment in Heavy Draft Mares
(Wang Meng,Veterinary Life Science)
52. Identification of quantitative trait loci regulating shoot regeneration ability in azuki bean (*Vigna angularis*)
(Nguyen Trong Minh Nhat,Plant Production Science)
53. Mapping genomic regions associated with morphological traits of Japanese indigenous chickens.
(Nyirimana Prudence,Animal Production Science)
54. Morphological, anatomical, and genetic analyses of root system architecture in common bean (*Phaseolus vulgaris L.*)
(Paulino Clotildes Insonia Anita,Plant Production Science)

55. イナゴ, バッタ, スーパーワームの化学組成と栄養成分および反芻動物用添加飼料と代替飼料としての可能性
(バンサリト ホンサイ, 家畜生産科学)
56. 3-ニトロプロピオン酸は試験管内ルーメン発酵において水素利用微生物群集を増強する
(ムランディ マーシー ムエニ, 家畜生産科学)
57. 高リン鉄鋼スラグの施用がコムギの生育と収量に及ぼす影響
(ムリウキ ジャクリーン ムカミ, 植物生産科学)
58. トキソプラズマ・ゴンディの増殖に対するHSP90阻害剤の抑制効果の評価
(劉 経緯, 動物医学科)
55. Locust, Grasshopper, and Superworm Chemical composition and Nutrition for Ruminant additive and replacement feed
(Bansalith Hongxay,Animal Production Science)
56. 3-Nitropropionic Acid Enhances Hydrogen-Utilizing Microbial Communities in In Vitro Rumen Fermentation
(Mulandi Mercy Mueni,Animal Production Science)
57. Effect of high phosphate steel slag on growth and yield of wheat
(Muriuki Jackline Mukami,Plant Production Science)
58. Evaluating the inhibitory effects of HSP90 inhibitors on the growth of Toxoplasma gondii
(Liu Jingwei,Veterinary Life Science)

令和6年度
帯広畜産大学大学院畜産学研究科
博士学位論文題目

- 妊娠牛に認められる副黄体の退行における胎盤の関与に関する研究
(ブワイ バン ズイ)
- 国内ホルスタイン種の暑熱ストレス耐性改良のための代謝関連形質データ応用に関する研究
(石田 恵香)
- 昆虫寄生菌による感染症媒介蚊の微生物防除
(フーサイン シカン ダー)
- ウシ凍結精液の希釀液がin vitroでの子宮の自然免疫系に及ぼす影響
(ワンニナヤカ ムディヤンセラゲ マリンダ プラシャド フルガラ)
- ラットにおけるウコンデンプンの腸内発酵の役割に関する研究
(エーカナーヤカ ムチヤンゼーラーゲ アサンカチーマラ エーカナーヤカ)
- アンデス高地原産のラクダ科動物における家畜生産効率改善に関する研究
(恵木 徹)
- ベトナムにおける犬のマダニ媒介性病原体に関する疫学的研究
(ドウ タン トム)
- トキソプラズマ・ゴンディ由来エフェクター分子 TgGRA7、TgGRA14、TgGRA15を基盤としたサブユニットワクチンの開発によるトキソプラズマ感染の制御
(ハッサン タンジラ)
- Babesia bovis* スフェリカルボディータンパク質の機能に関する研究
(ファトヒ アテフェ)
- バベシア症に対する治療・予防法の開発に関する研究
(李 航)
- ラットの胸腺増殖性病変に関する病理組織学的研究
(友成 由紀)

The 2024 Academic Year, Index of
Dissertation for the Graduate School of
Obihiro University of Agriculture and
Veterinary Medicine

- Involvement of the placenta in the regression of the accessory corpus luteum in pregnant cows
(Bui Van Dung)
- Study on Metabolism-related Data for Genetic Evaluation of Heat Tolerance of Holstein Cows in Japan
(Satoka Ishida)
- Microbial control of disease vector mosquitoes by entomopathogenic fungi
(HUSSAIN Sikandar)
- Impact of cryopreserved bull semen extender on uterine innate immune system in vitro
(WANNINAYAKA MUDIYANSELAGE Malinda Prashad Hulugalla)
- Study on the role of intestinal fermentation of turmeric starch in rats
(EKANAYAKE MUDIYANSELAGE Asanka Chamara Ekanayake)
- Study on the improvement of domestic animal production efficiency in South American Camelids
(Tooru Egi)
- Epidemiological studies on tick-borne pathogens of dogs in Vietnam
(Do Thanh Thom)
- Development of subunit vaccine based on *Toxoplasma gondii*-derived effector molecules TgGRA7, TgGRA14, and TgGRA15 to control *T. gondii* infection
(HASAN Tanjila)
- Study on the function of spherical body proteins in *Babesia bovis*
(FATHI Atefeh)
- Studies on the development of therapeutic and preventive measures for babesiosis
(Ri Han)
- Histopathological studies on thymic proliferative lesions in rats
(Yuki Tomonari)

帯 大 研 報
RES. BULL. OBIHIRO UNIV.

編 集 委 員(※委員長)

上 村 曜 子 大 平 依理子 ※マーシャルスマス
松 長 延 吉 山 内 健 生

(五十音順)

令和7年12月 発行

編 集 国立大学法人 帯広畜産大学
発 行 〒080-8555 北海道帯広市稻田町西2線11番地
TEL : 0155-49-5336
E-mail : libsoumu@obihiro.ac.jp
